

奇譚クラス

● 新しい風俗文獻誌



3



奇譚クラス

1970.3

THE KITAS CLUB

Published by the KITAS CLUB

Volume 3



3月号 ¥350

作・六・鬼・団

花と蛇 特集号

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

定価 五〇〇円 略号 「花」

団鬼六作長篇サディズム小説「花と蛇」は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気を博した傑作でありました。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、累計三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい洗滌の末排泄を強要される美女
- 二、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 三、剥毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 四、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 五、股間縛りの全裸責めにさらされる美女
- 六、足吊りで強制洗滌を施される全裸の美女

本文内容見出し

第一章 清纯な令嬢の屈辱

第二章 人身御供の令夫人

第三章 深窓の美少女とズベ公

第四章 小夜子への執拗な調教

第五章 変性色事師の登場

第六章 生れかわるスター京子

第七章 激しいスターへの訓練

第八章 低脳男と令夫人の結婚

第九章 果てしなく調教する静子夫人

第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

第十一章 悪魔たちの哄笑

第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

第十三章 珍芸を開陳する令夫人

第十四章 淫靡な時代劇ショー

第十五章 華々しきショーの展開

第十六章 野卑な妻二人のいたぶり

第十七章 ズベ公達の邪悪な責め

第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

第十九章 悪党の執拗ないたぶり

第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

第二十一章 勝ち誇る悪党一味

第二十二章 中国伝来の秘法

第二十三章 緊縛された美女の涕泣

第二十四章 新しい餌食への触手

第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

第二十六章 恐怖の責め続く

第二十七章 結末なき責めの結末

【最新版】美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印刷紙(9×13釐) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

郵購番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

- 1 正面強烈亀甲縛(大島 照代)
- 2 美貌は難に泣く(関谷富佐子)
- 3 緊う影に裸のく(佐々木真弓)
- 4 弾む裸身に細目(佐々木真弓)
- 5 柱縛りで鞭打ち(関谷富佐子)
- 6 縛られて困るわ(金原奈加子)
- 7 私を縛わないで(左近麻里子)
- 8 縛られて嬉しい(中河 恵子)
- 9 麗しの縛女体(中河 恵子)
- 10 蒲団の上に狂う(関谷富佐子)
- 11 豊満女体の眼目(大島 照代)

- 12 二つ折りの裸身(川越美佐子)
- 13 痛打に哭く美貌(関谷富佐子)
- 14 長身の脚を伸す(佐々木真弓)
- 15 若肌は細に美し(長井葉津子)
- 16 恥らひの女体(中河 恵子)
- 17 何故私を縛るの(金原奈加子)
- 18 感泣する縛り(ローズ秋山)
- 19 鎖ぐつわの悦楽(関谷富佐子)
- 20 荷造り縛りの女(中河 恵子)
- 21 足指はくの字に(佐々木真弓)
- 22 麻痺の柔肌責め(金原奈加子)
- 23 美しき亀甲縛(左近麻里子)
- 24 柱縛りの顔見(長井葉津子)
- 25 緊縛全裸の極美(左近麻里子)
- 26 海老責めの苦悶(佐々木真弓)
- 27 全裸の裸は難く(佐々木真弓)
- 28 鎖骨と鎖に泣く(川越美佐子)
- 29 細に喘いだ重顔(長井葉津子)
- 30 出所を晒す縛り(佐々木真弓)
- 31 後手吊りの全裸(長井葉津子)
- 32 首膝屈にあえぐ(長井葉津子)
- 33 太の字で晒す裸(関谷富佐子)
- 34 全裸緊縛の哀愁(佐々木真弓)
- 35 高小手の全裸(佐々木真弓)
- 36 真迫の縛プレイ(ローズ秋山)
- 37 豊満な裸身縛り(左近麻里子)

- 38 竹棒責めに悩む(大島 照代)
- 39 亀甲縛りで寝る(左近麻里子)
- 40 眼目に喘ぐ表情(中河 恵子)
- 41 開股縛りの正面(中河 恵子)
- 42 鎖骨に喘ぐ緊縛(左近麻里子)
- 43 縛りの肌を見て(金原奈加子)
- 44 私は縛りが好き(金原奈加子)
- 45 強烈縛りを味う(金原奈加子)
- 46 裸身を横たえて(左近麻里子)
- 47 二つ折に弾む胸(佐々木真弓)
- 48 柔肌に細は難く(長井葉津子)
- 49 全裸の女体引通(中河 恵子)
- 50 開股縛りを露出(左近麻里子)
- 51 突き出したお尻(中河 恵子)
- 52 あどけなき緊縛(金原奈加子)
- 53 首屈股間縛の女(長井葉津子)
- 54 強烈後手で括る(佐々木真弓)
- 55 恥しい縛り初め(金原奈加子)
- 56 海老縛りで悶ゆ(関谷富佐子)
- 57 縛られる緊縛女(長井葉津子)
- 58 豆絞りの鎖骨で(金原奈加子)
- 59 もう虐めないで(金原奈加子)
- 60 豊かに乳房誇示(佐々木真弓)
- 61 美しい女の縛り(佐々木真弓)
- 62 股間縛りに着う(長井葉津子)
- 63 ホステスの緊縛(佐々木真弓)
- 64 椅子坐開股縛り(中河 恵子)
- 65 無防備な両手吊(関谷富佐子)
- 66 息づまる鎖骨(川越美佐子)
- 67 人身御供の乙女(長井葉津子)
- 68 両手吊で晒す肌(金原奈加子)
- 69 爪先立つ強烈縛(ローズ秋山)

九月のカメラ・ハン
ト一飼育
の愉しみ
で始めて
登場した
小池

美空ひばり十一月月号のカメナ・ハント
「悦庵の昼と夜」で初登場した松
山真樹子の二人の美女の写真をマ
ニアの方々に紹介します。十二月
号のカメナ・ハントハミキとマキ
の華麗なる戯れでは小池美喜、
松山真樹子二嬢のピチピチとした
肢体の躍動を描写しています。

大手札三枚組 四〇〇円
小池・松山二嬢 略号入とそ

と若結の肢体に小麦色の肌のミキ
と対照的な二人の美女を後手に縛
り上げたマニア好みの資料。

大手札三枚組 四〇〇円
小池・松山二嬢 路号△とれ▽
若き日の益丸 子△子△とれ△全

裸の美肌を惜しむが、ゆだねて性的な美しさを

大手札三枚一組 四〇〇円
松山真樹子 略号△とわV

は皮下脂肪がいかにも多そうである。これは、埋没してしまふのである。

大手札三枚一組
四〇〇円
松山真樹子
略号人
高々と愛手と博の
上ガら丸無王

抗のまま全裸の肌をさらしたまま
その無防備感だけで異常なまで
昂奮を味ったと告白している。

大平山松
手山山
作真樹
三樹子
巻一
つた
たバ
ラ
の
花
の
上
う
な
は
底

かまの肢体は、洗禮を受
て一段と美しさを増し、微細な肌
の皺に至るまで鮮鋭に描出する。

松山真樹子 略号△とえ

のボーカーフェイスが全裸に緊
急という非常事態に至っても、そ
のまま平静を保てるだろうか。

大手札三枚一組
四〇〇円
略号人とき

真白の肌のまに、二人共若やい、
 色の肌のミキ。二人共若やい、
 衣を誇らかに一糸まとわぬ、
 縛られるマキの表情が凄い。

大手札三枚一組 四〇〇円

た途端、マキの表情には極めて美しい被慮の表情が現れた。

△美女レスポス風景▽

抱擁する美女二人

大手札三枚一組
小池・松山二嬢
金栗・木を香して
略号△とや▽
四〇〇円

柔肌と柔肌の狂態

大手札三枚一組 四〇〇円
小池・松山二嬢 略号入とよV

相愛の極致を描く

大手札三枚一組 四〇〇円
小池・松山二嬢 略号△とな▽

△塚本鉄三▽

狂乱の一夜の記録

狂乱の一夜の記録

十一月号で塚本氏が久方ぶりにマゾの女王関谷富佐さんを責めた記事を『狂乱の一夜』と題して掲載したところ大変な評判で、その時のフォトを譲ってほしいとい

大手札三枚一組 四〇〇円

関谷富佐子 略号八らて
全裸で後手に緊縛された女体

腎部を力一杯鞭打てば自由にな

狂う顔と肢体の表情の美しさ。

定評のある彼女の表情はマソ
極致として、S人土にとつては垂

のものである。強烈なムチの連に依つて絶妙の肢體を開陳する

両足を逆さに吊つても腎部を跟
に病して、さあいづでも機打つ

下さいという被虐ポーズに炸烈するムチ。感泣にむせぶ妙な表情

後手に縛られた全裸のまままで

打ち笑ひのまじりたる髪ふり

打ち好み
して悦の
虚にマ
むせゾ
び泣性
いては
る。髪
ふり

「申込先」ここに発表した分譲
真は総て直接印刷紙に焼付けた
鮮明なものばかりです。お申込
は大阪市の倍野私書箱第14号
星社宛前金にてお願いします。



奇譚クラブ

（昭和四十五年） 三月号 目次

〈本 文〉

扉で一言「恋の奴隷のM女性」	中西 通夫	(9)
四十四年度刊回顧 奇々惑惑の書	元西 弘明	(10)
「……とお耳を」 狼書の収獲	井上 雅人	(17)
奇譚御伽草紙 新・天路歷程	高杉 慈郎	(20)
史実研究 切腹百年史	中東 弘道	(30)
連載小説『大噴火』	千枝 實鬼	(38)
サディック・レス 夢魔に似て	木暮加奈子	(40)
連載小説『飼育の難しさ』	史 一朗	(57)
女斗美小説『ふたり妻』	西村 舞夫	(62)
男社通河快楽術 最終回	生 辰 保	(70)
「古莊彩子の私設美容室」	小早川 友子	(81)
「……と願望」 甘美などろ沼に	藤 見 龍	(84)
連載第三回『地獄ホテル』	栗山 孝志	(88)
懸賞入選 妖艶白「活路」		

徹底の自誌本

「本誌は特殊な風俗文藝を研究する平和で健全な社会生活を営む真面目な成人を対象として編集しておりますが、青少年の保護育成に關する条例には抵触しないよう、十分な配慮を今後更に徹底いたします。

「本誌では従来巻頭を飾っておりましたタラピア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順次整えて参りましたが、更に挿入写真の減少及び見出し、キャッチフレーズの改訂などによって寧ろ情性を排除してゆきます。

「本文の内容についても、刺激の強いものは極力掲載しないようにするのは勿論、掲載した文章は十二分に検討を加え、いやしくも青少年の健全なる育成に支障を与えないよう努力いたします。尚、本誌の発行部数は最低限度にとどめ、その増大を企図するための努力はいたしません。

奇クサロン

(232)

人妻の浮気と売春	山崎 良子
「……を愛する」 「雑 感」	山崎 良子
サロン業我記（第六十九回）	山崎 良子
「……」 「由に聞える」	山崎 良子
六〇歳の願望	山崎 良子
「……」 「揺れる花」	山崎 良子
「……」 「私の引越し」	山崎 良子
「……」 「処刑近し」	山崎 良子
「……」 「S.M.S.の確認」	山崎 良子
「……」 「SMの確認」	山崎 良子
「……」 「Mのエンジェル」	山崎 良子
「……」 「やったぜベイビー」	山崎 良子
「……」 「ドレイ犬の一夜」	山崎 良子
「……」 「英、苦木両氏へ」	山崎 良子
「……」 「どうすりゃ治るの？」	山崎 良子
「……」 「令嬢権限」	山崎 良子
「……」 「映画の、混濁シーン」	山崎 良子
「……」 「Sコレクション」	山崎 良子
「……」 「私の探点」	山崎 良子
「……」 「私の夫がアレイ」	山崎 良子
「……」 「素肌をコート」	山崎 良子
「……」 「宣貞散華の想い出」	山崎 良子
「……」 「イメージ画」	山崎 良子
「……」 「仏賞か？」	山崎 良子

「……」 「新妻の秘密」	芳野 眉美	(10)
「……」 「私のイタ、セクスアリス」	朝見 良明	(11)
「……」 「天使とブタ」	虎頭やすし	(12)
「……」 「SMカメラ・ハント」	虎頭やすし	(13)
「……」 「悦虐に憑かれて」	小 村 隆	(14)
「……」 「被虐鼻」	大橋美代子	(15)
「……」 「M派交遊録」	鬼山 純策	(16)
「……」 「マンガ「マゾミちゃん」	九 美 淳	(17)
「……」 「人妻の話」	田 鬼六	(18)
「……」 「告白小説「いたずら」」	小 村 千恵	(19)
「……」 「セックスレス・ファッショ」	松山 佳吉	(20)
「……」 「珍書探訪「夜這奇譚」」	斎藤 夜房	(21)
「……」 「テレビとSM」	千世 瑞良	(22)
「……」 「調教師たちの昼寝どき」	宇 光 仙	(23)
「……」 「連載小説「花と蛇」」	鬼六	(24)
「……」 「告白？とエッセイ？」	セトヨシヤ	(25)
「……」 「創作「奴隷志願」」	天 平	(26)
「……」 「読者 通 信」	編 集 部	(27)

目次・原カット……室井亜砂路

編集部特写初産婦若妻臨月の資料案内

昭和四十三年三月の奇クサロ

昭和四十三年三月の奇クサロ
誌上で「或る願望に托して」と
いう告白を發表したM女性と
その本心を明らかにした金原奈
加子。その後の希望通りに村氏
山本氏のカメラの前を通り、緊
態を開陳した。そのカメラは、
記事に於ける八月の「カメラ」
娠した若妻の女体を、満天の
さすこととなつた。その「カメ
マニアの方々にも、貴重資料と
すると考へ、ここに希望の部
試みたので、御希望の大阪市
りにならぬ、御希望の大阪市
野局封箱第十四号、大阪市宛
代金同封の上お申込み願ひたい。

妊婦緊縛の部

逆吊りの臨月妊婦

大手札三枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 逆吊り試みられた
初産婦の完全なる逆吊り写真
女性としての完全なる逆吊り
の協力があつて、金原奈加子の
出来た稀有の妊婦資料。

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 両手吊り試みられた
大きなお腹を前面にさらして
手を高く吊られた無防備な姿
はM女性奈加子のマゾ心をこ

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 初妊娠の哀歎
後手高小手に、厳しく縛られ
顔に、豆粒の涙が、頬を、可憐な
顔に、哀愁の表情が、にじみ出

妊婦全裸縛り全身

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 全裸縛り全身
全身像を、均整のとれた、全裸
太股を、突き出した、今、その
全身像を、一種異様な、エキセ

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 妊婦腹の緊縛側面
今、その腹を、ちきれそうに、便
るお腹を、締めつけ、さうな、甘
りきりと、肌を、喰ひ、くわ、甘
した若妻は、淋しく、うつつ、甘

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 強烈縛り妊婦責め
沢山の縄を用いて、皮下脂肪の
富な肌を、縛り、皮を、一杯、縛

て鮮やかなレンズの目は産毛一本も
余まきじとばかり執拗に妊婦の神
秘をあばきだしてゆく。

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 若妻の緊縛妊孕美
裸の全身に、その肉を、明らかな
は、更なる、女体の、その肉を、明

膨満妊婦乳房責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 膨満妊婦乳房責め
授乳の準備を、乳の周りを、更
す、膨満した乳房を、乳の周りを、

妊婦全裸姿態の部

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 妊婦全裸姿態の部
二十才の若妻に、美を宿した女
妊婦と、若妻に、美を宿した女

臨月腹全裸晒人形

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 臨月腹全裸晒人形
裸の腹を、晒し、その肉を、明

躍動する妊婦裸像

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 躍動する妊婦裸像
新鮮な魅力は、薄いだらう。や
妊婦のヌードを、好む人がある
妊婦のヌードを、好む人がある



恋の奴隷のM女性

「たとえ貴方が私を愛していなくとも、私は貴方を愛している」といった女性が、
 △貴方好みの女になりたい▽と身体を投げかけたとしても、私はそういった△貴方まかせ▽の女性には好まない。

M女性の中には、自分では何もしないが、貴方のすることなら、どんなことでも、お気の召すままといった△貴方まかせの女▽がよくある。こうした女性と仲良くなったが最後、男性たるもの彼女を楽しませるため、あらゆる努力を最大限に強いられることになる。

△貴方好みの女になりたい▽としおらしいことを言っているが自分では何ら積極的に動かないので、こうしたM女性を飼育する側にとっては全責任を負担して、努力に努力を重ねなければならない。

『恋の奴隷』である可愛いM女性を、自分好みに飼育できるという薔薇色の虹を夢みていると、思わぬ陥穽に脛を噛むことになりかねないものである。

(中西通夫)

……昭和四十四年度刊を回顧して……



奇ク誌惑溺の記

大西弘明

四十四年度の、愛する奇クを振り返り、本誌が特殊限定版月刊誌としての斬新な企画の基に、勇気ある編集をおし進め、華麗なるSMの世界を求めつつ、耽美への一途をたどりいくことを望む。数年前より毎月の発行日を楽しみにしているファンとして、貴重な風俗文献誌としてのその資料の豊富さに驚き、更に個性あるモデルの充実に耽溺しております。

早速ながら、号を追って、その惑溺の跡を振り返りつつ、将来に対する奇クの成長に願望を捧げたい。

私事を例に挙げて甚だ失礼と存じますが、この途を経たる者、私一人にあらざるとの信

念を持ち、申し述べさせて戴きますならば、花と蛇の増刊旧号をたまたま入手し、その極美に圧倒されて、奇クを読み始め、やがてはSMの耽美さを理解するようになったのであり、同好同感の文章を見出す時に私は胸騒ぐ想いが致す次第です。

……一月号……

一月号においては、この意味における同好者の投稿が多く、本文に二編、読者通信に四カ所も「花と蛇」讃美が見出せ、私を歎ばせた。特に本文に希望を述べられた東関隠士氏の「花と蛇」が無くなれば購読の気持の大半は失われるとの赤裸々な言葉は、大いに同感と呼び、多忙なる団鬼六氏のために取材スタ

ッフを揃えよとか「花と蛇」への挿絵の話とかは、東関氏の熱烈さをうかがえ、うれしく思った。

ファンの言葉を裏付けるが如くに、静子夫人が、心は羞恥に悶え苦しみつつも、調教の成果を、ねっとりとした牀で露わし始め、顕著さを加えてきたのは一月号であり、鬼源の眼前に堂々とミルク色の太腿を晒して、情熱的な瞳を川田に注ぎ、柔らかな微笑さえ浮かべて相対するようになった。

……二月号……

SMカメラ・ハントの辻村氏が東映「元禄女系図」を撮る。辻村氏にとってはプラスに違いないが、氏が明るみになることによって

素人女性の縛りを望んでいる私の願いが壊れるのではないかと危惧する。マニヤ達の中には、こっそりと、辻村氏の巧妙なレンズによって、素人の人妻の妊娠美や娘の排尿ショートを望んでいる者も多い筈。これらが、世に出た辻村氏には無理なことになるのでは、と案ずる。

またゾロ「花と蛇」でおそれいるが、やはりこれに勝るものなし。

最高潮の「花と蛇」に対する賛否両論の沸く中へ快打を放ったのは千草忠夫氏の「花と蛇とポルノグラフィ」であり「花と蛇」の読者で、ストーリーの展開だけを楽しんでいる人が何人いるであろうかと述べた千草氏の疑問符は、「快」の一字に尽きた。

……三月号……

辻村氏が女子大生・志摩桜子を縛る。映画の縛りと違って羞恥があり、この方がずっと美しい。

春川ナミオ氏のトイレものの名画有り。誰かも云っていたが、春川氏のトイレものは実に素晴らしい。

あいも変わらず読者通信に「花と蛇」へのフラストレーションの願望が渦を巻く。津山年夫氏の美沙江の期待、静子ファンの夫人の

排泄に対する憧憬、「花と蛇」大ファンと称する方の要望。更に東京・大宮氏の、静子夫人と巨犬、京子と青大将等の卓抜せる願ひ……。「花と蛇」の愛読者、多し。

……四月号……

懸賞入選作品、原薫氏の「色彩画の記憶」

が近頃でない秀作。具体性がマニヤの感動を呼び覚ます。山登り同伴の女の子の排泄、B Gを伴ったフィルム見学でかなりの大きな反応があったとか。更に塩原温泉で芸者のパステイを戴いて、ほのかに臭う女の移り香を楽しんだとか。マニヤならではの感が深い。

責場SM場面見聞録、金剛敏三氏——例の写真やフィルムを通じて、女の羞恥美を求めた、迫真の描写力ある筆跡が痛快である。しかし、金剛氏も述べていられるが、せっかく縛りをいれてあるのに、女が笑ったり、自分の手で跡始末をしたりして、がっかりさせられるのが多いので、この面からの耽美を齎ることは困難であると私も思う。しかし、私はかつて一度だけ真に迫ったものを鑑賞したことがあったが、女が素人だったのか賢明だったのか知らぬが、真剣な表情が私のSM心を充たしてくれたものであった。金剛氏は再度の研究の成果を期待せよと述べておられたが

今だに以後の健筆を拝見出来ず残念に思っている。私も好きな方で、願わくば美しい女が浣腸され、排尿排便ショウを見物される羞恥責めフィルムが見たいものと念願しているが萬人向きでないためか全然見当たらない。

……五月号……

辻村氏のカメラは私の心配をよそに、本号あたりより冴えを増し始める。先ず私は妊娠7カ月の飯田カオルの蛙腹に満足し、可愛い顔と妊婦独得の大きな乳暈とを見較べて、嗜虐の血を煮えたぎらせ、椅子に固定された彼女のポーズから、そこに至るまでの状況を想像う。

カメラ・ハントもサービス時代なのか、この号は二本立の映画並み。滑川幾代の成熟した肉体と和式水洗トイレが同居。もう少し後ろへ退いて、白い便器と幾代さんの美しい双丘を撮って頂きたかったがこれが限度か？

「私の冷徹なカメラは低いアングルから、それを捕えて光る」——同じ男に生まれて辻村氏は何と幸福なことよ。私なら、トイレから暖かいのを掬いあげるのに。

被虐の中にあっても離れられない女の業と悦びを知った美しい滑川幾代さんの顔を、私は長い間、フォトの上とはいいつつも、じっ

と見詰めさせられる一編であった。

……六月号……

この号で「花と蛇」は美沙江、珠江の美花二輪を載せて新しい筋書を計画したが、甚だ力量不足の感まぬがれず、新人登場は不成功とみたのは私の僻目か。

多少の京子ファンは存在しているらしいが全体的に考察するに、殆どが静子夫人に注目している模様を感じられる。静子夫人は鬼六氏の作りあげた女性であると同時に、長年の間に培われて来た愛読者の思考の象型でもある。そこへ持って来て、千草氏が以前に述べられた如く、筋書を喜び、ストーリーの展開を読んでいるマニヤは少ないだろう。

新人を登場させるまでもなく、団先生の妖艶な筆にかかれれば、読者をして恍惚に導くべき素材が多く残っていると私は考える。既に読者通信で叫ばれ続けたことながら黒人、廻し、銭拾い、蛇、巨犬等々、モチーフにはこと欠かない筈。西野正一氏のこの号にての提案であるところの、題名通りの実演は、ぜひ実現して戴きたいもの。

しかし、もはや新人を登場せしめたからには、面倒臭いが早々と丸裸にして、かたづけしてしまうことです。ここで一言申し添えて置

くことは、必ず静子夫人を介添えに登場させ黒人と取組む珠江の指導介添えをやらせたり巨具に泣く美沙江をコーチするべく、自らが手本となって方法を教えるなどの肢態を晒すべきです。

この号における「花と蛇」の力無さに比較し、幸崎健治氏の告白体験は全ファンを悦ばせたのではないかと思う。生理バンドと二枚のパンティのフォトは秀逸で、どっしりと重味を感じさせるパンティが凄かったし、そのあとの椅子に縛りつけられた奥さんの顔が、とっても美しく感激させられた。プレイ中の微妙な点は、私の如く実地の経験者で無くば分からぬこと、いやはや立派でした。幸崎氏よ、Sに徹して、愛妻を辻村氏に貸与して、カメラ・ハントさせては如何が？

辻村氏のカメラは愈々冴えて、臀部の美しい左近麻里子の登場であり、結婚式を真近かに控えた女体の美しさを不断に捕えている。故に辻村氏のパイプが躍る時、美しき貴殿の妻は悪徳の媚態を、心ならずして固定灼付けられることと思う。

……七月号……

映画カメラ・ハント「責め地獄」に大量の頁をとられたためか、本号では余りに感動す

ることなし。あえて述べるならば芳野眉美氏の「濡れにぞ濡れし」が私の趣向に合い、それを飾った春川ナミオ氏のトイレ絵が快作。「花と蛇」では、静子夫人が遂に浣腸羞恥責めの軍門に降り、我身を落花微塵に打碎いたが、小夜子の手を受け止めさせたのは耽美さに於いては行き過ぎと思う。

……八月号……

四十四年度最高のカメラ・ハントが現出した。金原奈加子の童女受胎譜。事実上の夫に強制されて発表した、四十三年三月号の告白「或る願望に托して」が、止むことなき夫の強制を更にエスカレートしたと云う。

妊娠前の可愛い童女の緊縛と生み月も近い彼女の緊縛とを、同時掲載したのは大成功であった。強制されたと告白するだけあって、その羞恥美は何とも云えぬ程、素敵だった。妊婦特有の膀胱圧迫が、氏のパイプによって度を加え、ついに限界を越えて洩らしたとのこと。幼な妻を衆目に晒す快感に夫は酔い痴れたことだろう。

私は奇くに望み、提案したい。もっと妊婦を、どしどし登場させてほしい、と。但し、金原奈加子の如く逆さ吊りは冒険すぎる故に妊婦を数人の未経験女によって取り巻き、詳

しく研究と称して身体検査されるシーンや、西洋便器を使ってフォトして欲しい。

「花と蛇」も、ハントにまけずに耽美性を取り戻し、春太郎によって刺身を食べさせられ「おいしい」と云う静子夫人の何ものをも溶かすような悩ましさを。加えて媚めかしい双唇の動きが目に見えるが如く表現されている。

水田耕作氏の告白「パンティに憑かれて」も短いがよくまとめられており、だれもの共感と呼んだと思う。かく云う私も、去年の夏に妻以外の女性、いや、まちがいに処女の脱ぎたての白いパンティを心ゆくまで匂わせで貰った（勿論、内緒であり、愛してる女性のものである）こんな恵まれた機会は少ないと思うが、あのスルメの様な甘い匂いは一生忘れられないと思っている。それ以来、私もパンティに、異常な興味を持ち続けている。

読者通信で富山市の曾根葉子さんが自称ベビードールと称して投稿し、私の心が躍ったのも八月号だった。

……九月号……

医学博士弓削達人先生のS・C・R「女性のオナニーについて」は、妻を責める上での参考になった。コールドクリームよりイチジク浣腸やベビーオイルの方が適するとは知ら

なかったし、牛乳の件も安心できた。責具の方は三鞭位で先ずは問題もない。もっぱら、愛妻と共に愉しんでいる。

山本八郎氏の常連作家を批評するは、実に氏の熟読ぶりがうかがえると共に、大いに同感を覚えた。団先生に讃辞を送られたが、願わくば、あれだけの素晴らしい文を書ける方故に、ぜひ、山本八郎氏の羞恥責め小説が読める時が来ることを望む。

座頭孝司氏の「水圧」も実感がこもって良い作品だった。

読者論稿の新宿町人氏の「昇華の妙薬」も双手を挙げて賛成する。

カメラ・ハントが号を追って大成していくのが愉しみになって来た。この号では理髪店の小池美喜さんの登場。全く私好みの、小柄で肉付のよい可愛い妖精である。このように素晴らしい女性、何度もサロンあたりにポーズを変えて掲載して欲しいものだ。奇クは巷にあるヌード雑誌とは根本的に異なる。だから美しい素材が現われれば何度も出て戴いて

我々の女になって貰いたいのだ。かつては同人会として塚本鉄三氏あたりを中心にして、モデル撮影会があったと聞き及ぶが美喜さんは明るい娘さんで正に適材と思う。読者をし

て身震いせしめるだけの魅力の持主である。可愛く美しく大胆奔放にして、プリンプリンした牀の持主である。

サロン告白「甘い空想」の続きによって、有田久美子さんを再び知り、奇クが益々充実していくのに女性読者の投稿の必要なることを思う。女性独自の細やかな筆運びが奇クを更に甘きものにしていくのだ。

新田英雄氏の愛妻ゆう子さんを見て垂涎の気持がする。

女性上位の世相を反映してか、サロンや読者通信に女性の投稿が増えてきた。緒方則子小杉千恵の常連にまじって、岡本嬰子、左根敏子両嬢の投稿をうれしく読んだ。

同人誌に近い奇クは常に読者と共に存在するべきであり、常に慎み深い態度で彼女等に接すべきである。

……十月号……

最近号では珍しい女囚懲罰房、高橋順子さんを読む。課長夫人の全裸フラダンスに快美を思う。

千葉青鬼氏の連載「大噴火」は、見事なイラストに以前より魅かれていたが、ダイヤモンド排泄の件りのイラストいりの物語が群を抜いた。白いパットの中に羞恥と屈辱がひろ

がる描写は立派だった。

木崎進氏の「SMプレイに関する告白」も良い。清水さんの美しさを表現するには、やや写真技術が甘いようであったが、両手を万才の形に挙げて背面を見せているフォトと、佐野氏の流腸実施のフォトは、マニヤにとっては何にも勝る宝物である。誰が通りかかるかも知れない屋外プレーのこと故、ピントの甘さも仕方が無いと思わざるを得ない。クライマックスシーンもご秘蔵とか、羨ましい限りである。

先月号で読者通信女性が気にかかったのは虫が知らせたとでもいうのだろうか。早速に岡本嬰子さんがデビューしていた。読者通信欄よりの出身緊縛モデルも多い。「花と蛇」に憧れたと云う美しき中河恵子。強制されたとは云え、やはり金原奈加子も、その一人。そして再び、岡本嬰子の登場である。

岡本嬰子さんは美しかった。上半身縛りのよく似合う女性で、特に腹部の美しい娘さんである。彼女の云うおじさんたる男も幸福な方だが、願わくは掌中の珠である嬰子さんにもっと羞恥責めを加えてフォトを撮りサロンに発表願いたいと思う。悦楽と快美感にのたうつ彼女のフォトと羞恥に染まる彼女のフォ

トをお願いしたい。ベテラン女史と一緒に悦虐の境地に失神せしめたり、洗面器を前に随喜の被虐を露わにせしめてはいかが。このままでは、惜しい、美しい花である。

SM的オナニーに飽き果てた読者通信女性達が、耐え切れず次々と姿を現わすことを祈りたい。

早木夢二氏の縄に対する憧憬は、その作品よりいつもにじみ出ている。一度、彼にびちびちした娘を縛らせたなら、最高の作品が生まれるのではないかと思うが、いかが。

……十一月号……

久方振りに、中河恵子さんの美体に見はれる。高野原美氏の文の良さとあいまって、さすがに静子夫人に心酔したと云う恵子さんの姿は、洗練された成熟さが見受けられた。豊かな乳房を上下から圧迫するように縛られ、横坐りの膝に日本手ぬぐいを一筋置かれた姿は美の極地だった。おそらく彼女は静子夫人の甘美な被虐を味わったことだろう。

塚本鉄三氏の「関谷富佐子を責める」もまけず劣らず溺美を刳った。関谷さんの牀の美しさは娘達にない成熟さが存在する。

カメラ・ハントは美喜さんの友達と云う松山真樹子さんの出番である。どうやら美喜さ

んとレズ関係らしいが、美喜さんに較べて、おとなしそうな娘さんである。美人だ。締めあげられた姿態が痛々しいほどに優しい感じの娘さんである。美しいの一語に尽きる。

風流極道軒氏の「演習拷問」は、辻泉太郎氏の美しいカット付きで得はしたが、内容も立派だった。

……十二月号……

香川泳三氏の「特製スープ」この気持はマニヤならよくわかる。ずばり書けるのが香川氏の恵まれた点だ。

女装の家「責めの部屋」は、内容も豊富だったが、井風呂秋於氏のフォトの美しさは、女に勝るの感あり。提案二つ、失礼なと怒り給うな。貴方？ の美しさに魅せられてのたわごと。一つ、縛られて横坐りのまま、ネックタールを流してスカートを汚す構図は？ 二つ、友人にスカートの中を覗かせては？ 私なら、女性と妄想しつつ責めてあげよう。そして責手に追われた秋於さんの表情と太腿をフォトすれば、最高級品ができよう。

「花と蛇」遂に静子夫人はM女に飼育成長する。読者みんなで育て調教した夫人が、私達の念願かなって、女のさかの業火を知り、被虐の底からわき出る快感と境地を、理屈抜き

に悦び始めたのだ。ズベ公達によって初めて裸にされ、火の様に泣いた夫人が、何度も排尿排便を宴にされ、京子達と共に調教され、千代の手によって賜られた挙句の果てに到達した悦びの世界なのである。川田を皮切りに田代、森田、悪徳弁護士、捨次郎に鬼源と教えられた男の数も限らない。おぞましい妙技も出来るようになった。次は春太郎と夏次郎にいたぶられながら逆に一気に攻め落とすことになるのではないかと。この号に現われた静子夫人の責めを求める如き言葉を自分から口にし始めた理由は肯ける。このように変化した夫人と新入りの珠江美沙江の恐怖と羞恥をからませることによって新人も生き、静子ファンにとっても、これから本当の幕明けを期待できると思う。

菅原敏夫氏のゴムへの愛着ぶりは、かねてより味読させていたのだが、「雨の昼下り」は、その菅原氏の身内から噴き出す惑溺の結果作品とみた。

女が感覚が生ゴムに鋭いことは、妻を手始めに、数人の女性によって私もよく知っているが、菅原氏がゴムを通じて特異な世界を築きあげられることを願う。

茂野礼氏の提案「お産について」も秀作で

あり、私も「花と蛇」で静子夫人が分娩に至るのを望んでいる。ブーヅを使って人工早産を鑑賞されることに決定し、それを多勢の環視の中央に仰臥させられた状態で耳うちされ屈辱と羞恥にのたうちながらの数時間を、好奇と嘲りの渦の中で過ごす。そして定められた時間が刻々と迫るのに悶えつつ、妊婦特有の羞しい体のいろいろな変化をお客人達に執拗に検視され、昔から云い伝えられている妊婦ホルモンを有志に強奪される等の、分娩を前にしての妖美極まる雰囲気、ねっとりとした甘く描いて欲しいと思っている。

再びカメラ・ハントでおそれいるが、長井葉津子さんの美しさに敬意を表さざるを得ないのでお許し願いたい。十八才にして既に男を知っているらしい娘の肌が、それ故にかえって若さと成熟の入りまじった美態を示していた。ハツコ嬢は被虐の幻想に耽り、喜悅の汗で縄目を濡らせたに違いない。私はハツコ嬢が再びハントに姿を現わし、美喜嬢（九月号ハント）あたりとの羞恥責めを演じることが夢見る。

奇クの性格上、新人モデルを続々と誕生させるよりは、美しい女型を選び出して、味読しつつ身近かな女として賞で続けたい。但し

そのためには、全読者のあこがれとなる美女が必要であり、且つ、美女と云えども映画俳優であってはならない。と同時に、その選ばれた読者の共有妻は種々のポーズを常に考えなければならぬ。ベッドを主軸としたハツコ嬢の悦虐が次回は野外に身を晒し、回を追うに従って、ある時は浴室に於いて、又或る時は陶器の便器を背景とした甘き被虐の幻想を歌いあげなければならない。更にそれを経たどおりつく耽美の極致は先程に述べた如く女同志の羞恥責めの華麗なる夢想の世界である。

尚、十二月号サロンに、勇氣ある惑溺の姿を晒した、犬畜生氏の驚くべく浅間しき美しさに、呆然とするともに、願わくば「追憶の甘き花びらの群れ」の項にて、増田喜代司みゆき両御夫婦が示されたSMの再現を祈ったのは私のみであつたらうか。

許され難きことにて、所詮、果たされぬ幻想のフォトと想うけれど犬畜生氏の前に裸身を晒す金原奈加子、小池美喜、岡本嬰子諸嬢（又は夫人）の羞恥美を、鑑賞したいものと夢見る。

「追憶の甘き花びらの群れ」の辻村隆氏のフォトを眺め、おそろく、現在、成熟しきった

年令に達したであろう彼女達を想い、再度の登場を要望する。特に心の琴線に触れた女性には竹野ひろ子嬢で、読者通信出身の女性としての親近感と、二度に亘ってハントに現われたという身近かな親しさを倍加する悦慮への陶酔ぶりに愛着を憶えた。読者通信で知りあった同好の某にハントされてのプレーを続け更に責め手を告白で見出したF氏に変えて、おしめカバーの感触を愉しみ続けたという昔ならではの現世の夢物語を聞くにつれ、だんだんとせち辛くなる現代の抑圧にゆううつを感じた。現在の読者にとっては、今様龍宮の乙姫の如きマゾの女王が、再度我々の目前に姿を現わすことを祈っている。まだまだ竹野ひろ子さんのために、おしめを変え天花粉を塗って呉れるマニヤは多い筈。私も彼女を惜しむ一人である。

追憶のカメラハントが未発表のフォトと共に私達の夢を呼んで呉れることを只々祈るのみである。

○

あまりにも走り書きの、短い回顧一年間の惑溺賦であったけれども、奇クは同好者によって、ひっそりと親しみ愉しまれる月刊誌であり、読者の声によって、前進も後進もする

雑誌であると信じ一言お送りした次第です。

最後にあたって一つだけ実現を願望しつつ表明する提案は、全裸風俗が既に風俗ではなくなり、良風美俗を変化さし得た現代を象徴するものは、着衣モデルによる羞恥の根源を求めることにあり、現代の風俗を捕えた上でこの点にあると考えるという私の信念であります。

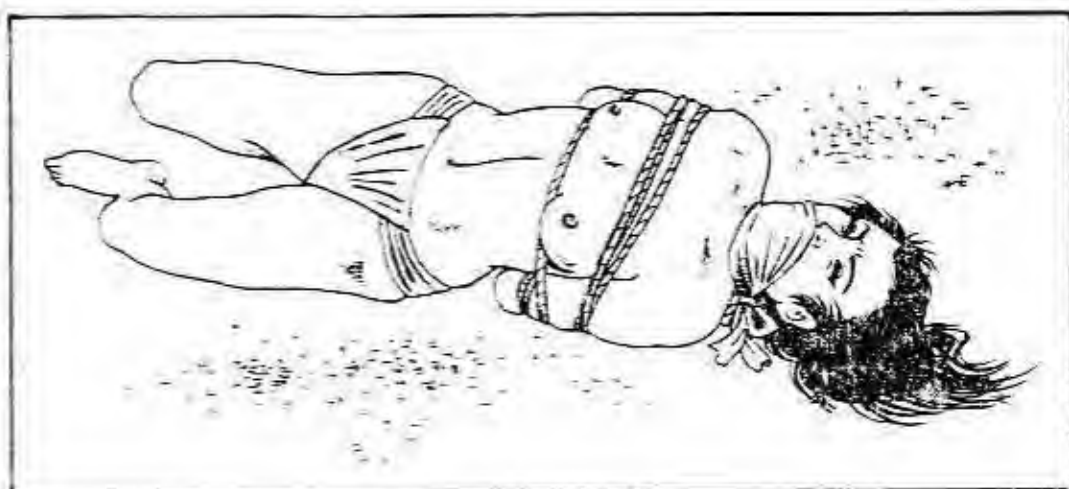
ミニスカートも、パンティーストッキングも膝下までの厚手の白いストッキングも現在の風俗の象徴であり、ミニスカートだけを纏った女の羞恥、パンティーストッキングのみの女性の羞恥を求めてこそ、風俗をとおしての女性羞恥美の極限に至り得ると考えます。全裸の女性に美を求めることは余程の女性でない限り困難なご時世になり変わっており我々マニヤの望んで止まない耽美を捕えるためにはストッキングとハイヒールのみを身につけた女体が醸し出す美しさしか残っていないと考えます。女性には中途半端な自分の姿に羞かしがり、我々マニヤはシームレスストッキングと靴を眺めて、美しく着飾った彼女を描き、又その反面、女達の足を眺めると同時に、何も纏わぬ彼女達を想う。考えただけで私の

Sの血は騒ぎたてる。私の望みが辻村氏によってかなえられることを祈っております。拙文の蛇足までに44年度の私好みの最優秀作品を挙げてみたい。お許し下さい。

第一位はやはり「花と蛇」の耽美さ。第二位は辻村氏のカメラ・ハント「童女受胎譜」第三位は芳野眉美氏の一連の濡れにぞ作品。読者関係では、妖美な妻を撮った作品、特に数人の妻女は美の限界とさえ思えたが他の比較も失礼かと存じ名をあげない。イメージ画では豪城二氏の浣腸ものが最高だった。辻鼻太郎氏の絵の美しさは豪氏に勝るが、主題性がいまにも優しすぎると思った。週刊漫画誌でも相当の極致を描いている今日のことであるから、もっともっと快美の奥を狙って欲しい。

奇ク誌に対して、耽美を求めての飛躍は期待しながらも望まない。じみちにそろそろと女の真の美しさを探求して貰いたいと思う。マニヤ誌として読者との断絶感なきように注意しつつ、変わりゆく時流の中に風俗と女の極美を求めて欲しいという言葉を結論として一読者のたわごとを終らせて戴きます。

(完)



カット・豪 城二

(序文)

最近、ますますS・Mがマスコミベースに乗ってきたようだ。一般大衆に対する、これでもかこれでもかという彼らの攻撃には、私のように、暗い孤独な世界で、世間の冷たい視線を背に感じながら、こっそりと楽しんでいた者にとって、ホッとする安堵の心持ちと驚きとで、ある種のとまどいを感じる。

映画や小説、雑誌、週刊誌、新聞はおろかテレビまでもがS・Mをひとつの流行である

ちよっとお耳を

獵書の収穫

井上雅人

かのように扱っているのは、どういうわけだろうか。

「悪書追放」だの、「低俗番組粉碎」だのとマスコミでさわぎたてるものだから、よけいに安易な形で、『何でも良いからブームにかこつけてS・Mに結びつけてしまえ』と、見ている私達にも、又かと感じさせるものが多すぎる。

三流のピンクチェーン専門館で、やっとこさ乳首をかくし、映倫を気にしながら、そお

っと縄をくりつけた女優を見せていた映画も、今や、全裸で堂々と豊かな胸のふくらみを、惜しげもなくスクリーン一杯にふるわせながら、単なる縛りだけではなく、エビ縛りや股間縛り、吊り、ムチ打ち、水責め、火責めといった一連の拷問から、果ては縛めを受けたまま犯されるなど、ヒイヒイ女の子を泣かせる見せ場を、一流の映画館でも、お目にかかることが出来る。

実演にしても、ヌード劇場その他のフロアシヨウでは、秋山夫妻を初め、この種のS・M劇を得々として行なっている所さえある。

つい先頃からは、今売れっ子の「オー・モウレツ」こと小川ローザまでが、P・Rにひと役買って、太いクサリを身につけて、等身大の身がわり看板を、あちこちの化粧品店の店先で晒している。これはテレビのコマーシャルでも同じことで、かのローザ君、ビシリビシリとクサリをまきつけられ、最後はその身を岩場に横たえる。捕われた彼女のうっとりした表情が大きくブラウン管に写し出される——K社の製品Hの宣伝である。

それにしても、較べてみれば御本家?の「奇ク」の何とおしとやかなことよ。思わず目がしらに涙がたまる。これでは、昭和三十年代、グラビアが全盛をきわめた時代をなつかしみ、今のおとなしい「奇ク」のあり方に多少なりとも不満を抱く好き者もあって当然

と言わねばなるまい。

(分 譲 写 真)

そうした歯がゆくて仕方のない人間にとって、分譲写真とは、いともありがたき宝物であろう。今でこそ、妻の情けを利用して実戦と写真を楽しめる私も、つい一年ほど前まではタバコ銭を少しずつ節約しながら、お金をためては分譲写真を買って求めたものである。

それも、一枚百円以上する高価なもの。うやうやしく封を切り、あれやこれやと、ひとり心の中で思いをめぐらし、悦に入っているがら、一方、お金と地位と名前と男まえの良さを元手に、一部のマニアのみが若い女性を次から次へと裸にし、縛りあげ、思う存分いたぶり喜んでいくかと思うと、しゃくにさわって仕方がなかった。

やさしい私と、恐ろしい私と、そのどちらもが好きだという妻には悪いが、ある意味において、未だに分譲写真は、実際の夫婦プレイとは、ちがった良さがある。

しかし、例えば(これは妻にはナイショであるが)手に入ったのが、ほんの一週間程前であったが、どうせ、くだらんものだろうとは思いつつながら注文した、某誌に載っていたS・M分譲写真販売広告からの買い物は、少々あやしげなものだったが期待に反して(?)「グー」なものばかり。

関西のものだが、五枚一組で確か六百円ぐ

らいだったと思う。責められているのは女学生だ。上半身はセーラー服を着ているが、下半身は生まれたままの姿。一枚はこの彼女が大胆にも両足にキリリと縛めを受けたまま、左右に大きく太ももを広げられている。自由な両の手がかくしてはいるが、開かれた足先からのカメラアングルでは、当然可愛い谷間が望められる。

残りの写真は、畳を背に、仰向けのまま大の字にされ、両手両足をそれぞれロープで引き裂かれているシーン。無論、大事な所は別のロープが覆っているが、いかにもカモフラージュしましたという無造作な置き方で、モデルの悲しい顔と同様、神秘的な世界がむなしく見えがくれ——とんだ拾いものという話。

話はそれるが、そう言えば「奇ク」では近頃、女学生ものの責め写真を、とんと見るこゝとが出来ないのが、私は大変、悲しい。何とかしてもらえないだろうか。梨花さんのような可憐なモデルさんを使って落花寸前の写真はイケると思うのだが。……

(穴 場)

十二月号で浅川一郎氏が触れていたが、私も、神田の古本屋街はよく歩く。当然、S・Mに関する書籍のある場所も目につく。

この神田界隈で一番足を運ぶのは、何と云っても駿河台下、すずらん通りの中程を裏通りに入った所を、神保町交叉点から水道橋方

面へ向かって——二分の表通りに面した所にある「S」という古本屋。

ここは二店とも同じ経営者がやっているのではないかと思われる。まず、S・Mに関する本や、ヌード、軟派本の大くいは殆ど揃っている。成人向き専門である。あたり一面、日本モノ・外国モノを問わず、ヌード雑誌やS・M雑誌の山で、一旦中に入ってしまうと店の人の語らう声以外は、何も聞こえない。皆、同じ穴の何とやらなので、お互い知らぬ顔で用を済ませることが出来る。

「奇ク」の昭和三十年代のもの等まだグラビア写真の載っているものもあり他に「裏窓」「風奇」「画報」と、よりどりみどりで、多少うす暗いので陰気な感じもするが、ヒマがあっても金のない人には見るだけで帰っても十分、楽しめる。(店主には失礼だが)

中にはビニール袋にキチンとおさまっていて、中を見ることが出来ないものが頭の上からブラ下っている。二千円から五千円。高い方では何冊かのセットもので一万円から二万円也、てなものもある。まあ、たいていの本なら千円札二枚あれば、昔なつかしいグラビア写真を手に入れられる。もっとも、定価二百円也なんて印刷されていると「ニャロメ」てな気持が起きないでもない。

時たま、「アラ、イヤダ。変な所へ来ちゃった」なんて、若い女の子が赤い顔して、せ

ま苦しい店の中を見わたしているのに出くわすこともあるそう。

清潔ムード一杯の店もある。同じ神保町交叉点ぎわで、前記の「S」とは表通りを挟んで真向いに近い所にある「T書店」は、新しい店で、構えも広く、中は、まぶしいほどに明かるい。客もマバラで、一般の本類が並んでいるから、安心できる。

私の目指すものは、店の一番のレジ近く綺麗に並べられて、まん中のブロックに置いてあるから、フーンてな顔をしながらサッと手に取り、お金を払えば、あとは知らんふりして出てくるんだが、レジはおとなしいおやじさん（時に若い娘の時あり）だ。ここは新刊のみである。

（新刊物）

「T書店」の場合、新刊ばかりなので、真新しいグラビア写真集が案々と手に入る。まず浅川氏のひとり言にある『SM写真集・薔薇の鏡——8人のプレイメイトたち』

同氏は初心者向きと指定されたが、A5判の大きさで、百二十頁近くが写真集であり、中には二ページ分の見開きカラー写真も入っている。千円（定価千二百円）なら、安い買物だと思った。

あまり小道具は用いず、ほとんどが乳房の上下を二重三重にくくるだけのパンティ姿の緊縛女性たちだが、八人八様におもむきを変

えて縛めを受けた女性の写真だけに、彼女もそつと覗き見たくなるのでは……と思う。

最近トンと御無沙汰しているグラビア特集の特大号のようなものにぶつかった。監修・団鬼六、写真・賀山茂、制作鬼プロなる所の『緊縛写真第1集・第2集』がそれ。百頁ちよつと、大きさA5判、ビニール張りの黒表紙には般若のお面が金（第一集）と銀（第二集）で浮きぼりされているのがニクイ！

第一集は昨年十月、第二集は十二月というから、まだ手に入りやすかったのだろう。「奇ク」でもおなじみの、氏の手によるものだけに、一・二集にわたり、八人のモデル女性（かなりM度強と思われる）を心ゆくまで縛りあげ、その柔肌を燃やしている。

グラビア写真の鮮明さに加え、ただロープでギュウギュウ縛っていじめている写真とはちがひ、一つの芸術と見るのはマニア故の慾目か。

団氏が巻頭で賀山氏について一言のべている。

（賀山茂——ある会社の社長さんである。女を縛ることが飯より好きな人だ。といえば、サジストめき、容貌魁異な異常性格者といった感がするが、本人は長谷川一夫ばりの、いい男。たえず満面に……（中略）女性を虐待するなんてことは到底出来るものではなく、

むしろ、大変なフェミニストなのだ。彼の場合は、サジスティックなエロチシズムを好むのである。緊縛され、羞恥に悶え、苦痛にのたうつ美女の肢態に濃厚なエロチシズムと芸術的な匂いを感じとるのである）

廃墟と化した工場の中、そして華やかな部屋の中でと、バックにも気をつけているのがわかる。

最初から最後まで責め写真オンパレードであるから、それを手にした私の心中は御想像頂けることと思う。

全裸エビ責め、逆エビ責め、磔、亀甲股間縛り、そして、逆さ足吊り、と多彩である。真湖道代さん等、すでに「奇ク」で紹介されたこともあるM女性がきびしい縛めに、ある時は悲鳴をあげ、ある時は露わな自分の姿に恥じらいを見せ、又、じわりじわりと潮が満ちてくるように、素肌に喰い込んだ縄目のきつさが、女体をいつしか甘い悪夢の世界に押しやる様が、ひしひしと写真を通して感じられる。やはり逸品である。

自分の妻に同じような責めをしてみるが、この感じだけは、どうにも出て来ない。やはり縛りの名人のなすが故であろう。

だいぶ宣伝してしまったようだが、感激した品なのだから仕方がない。



引首 (はしがき)

○ 愁郎 修育するSMの華
奇ク 飛翔する宇宙の果

詩に明らかなる如く、愛読者諸先輩の根強い支持と、出版者各位の熱意、努力とが相俟って、本誌益々発展、向上の途にあり。愛好者として誠に欣快にたえぬところ。

新しい時代の性倫理開放への尖兵として、本誌の有つ役割は非常に重、かつ大であり、

|| 奇譚御伽草紙 (1) ||

新・天路歷程

高杉愁郎

私はこの橋頭堡に拠り精神の記録を公にするという恵まれた場を与えられ、そこに知友を求め、欲望を昇華し、それを心の糧とし、貧しい魂の安息所として、最高の愛情を注いでおります。

毎号、新しい告白や創作に、寄稿者、モデル嬢の登場に弾む心を抑えかねている反面、脳中に溢れんばかりに渦巻いている思考の苦しみを表出する術も持たず、本誌を唯一の友として生きている微細な存在の我が身を顧みる時、苛立たい想いに輾転反側する私は、本誌に対する冒瀆者以外の何物でもないと考え

えていました。得ることのあまりに多く、還すことの少ない有様に――。

さて、四四年十一月号に於ける拙作掲載を契機に、私は自らの夢想の産物を作品とし、発表してゆこうと決意しました。それは就眠儀式の具象化であり、私の告白となるかも知れませんが、純然たる虚構となるかも知れません。飽くまでも意識の記録になる筈であります。もとより乏しい経験と、加えて拙ない筆力から、掲載に耐え得るものとなりますかどうか、それは諸兄の冷静な判断に俟つべき事柄でありましょう。

時は現在より数世紀の未来。
所は新世界の首都とだけ……。

* * *

ケンとレイの二人が新世界より追放を宣告されること

喧々囂々――

怒号――

罵声――

ありとあらゆる罵詈雑言の沸き立つ渦の中から、槌音が高く澄んだエコーを流して、果てしなく思われたその混乱に少しずつ秩序が戻って静けさが訪れ、人々は息づまる無言の緊張を抑えて議長に注意を向け直した。

議長にして裁判長なる異端審問官、キョウは優しい眼と、多少肥り気味の体から、穏やかな初老の紳士という印象を人に与えていたが、彼を識る人はその糖衣に包まれた内側に烈しく強い意志が潜んでいるのを幾度も体験していた。

彼は爆発寸前にまで膨張した昂奮をガツツリと受け止めて、傍聴者を見廻した。

「静粛に！ 静粛に願います。いいですか、皆さん？ 貴方がたは学識、経験ゆたかな良

識人として、各界を代表して当法廷に特別参加を許されているのですぞ！ 只今までの審理によって、被告がこの世界と相容れることの出来ぬ存在であり、反逆が明白となりました。しかし、だからと云って我々が冷静さを失い、各人が勝手な行動をとってもよい理由は何もない。貴方がたのその発言や態度は、現に裁かれている被告達の計画に比べて程度の差こそあれ、法に対する反抗という点で全く同種の行為と考えられるのです。……こののち規則を無視して、この神聖な法廷の秩序を乱す者があれば、貴方がたとて容赦なく、厳罰を以って臨みますから、その心算で、いて戴きましよう！」

裁判長の激しい怒りを知って良識人達は恐ろしく静まりかえってしまった。空調機の微かな響きすら聴き取れる程に――。居心地の急に悪くなった椅子にもじもじと坐り直す。「参考までに、法廷侮辱罪は三カ月の隔離、もしくは電気鞭による鞭打ちになります」

とどめの一言を発しておいてキョウは笑顔になった。これで暫くは保つだろう――。

燃え立つような緋の法衣の襟にキラキラと輝いているS一級を表わす金バッジを撫でながらシユウを促す。

「続けなさい、検事殿」

未だ三十前の若さながら、首都の次席検察官という重要な職にあり、有能、明敏を以って知られるシユウは、助手のユリと協議をしていたが、この審理を一気に終結に導くべく口を開いた。

「お許しを戴きまして、閣下、本官は以下のことを指摘いたします。本事件は社会理念に対する異端倫理と、社会への反逆行為を審理しており、通常、この種の事件に於いては被告側の弁明は一切許されず、市民による証拠審理のみで有罪を決定するのであります。すでに証拠提出は終り反逆行為は明らかにになりました」

「その通りです。すでに法務局、情報局のコンピュータにデータが投入され、解答は参考資料として先程手許に届いております」

「次に、被告兩名は本官の友人であり、本官自身で逮捕、告発したのであります」

「承知しています。我々は検事が友誼よりも社会の一員として職を賭して法に忠実であったことを感謝しています」

「有難いお褒めを戴きました。本官は本件に関しその発端より関係しており、検事として担当し、他の誰よりも精通していることを認

めて戴けると確信いたしております。そして審議は尽されたと確信します。故に、ここで判決を下されるよう提案いたします」

「同意します」

「裁判長閣下、ならびに参考人として陪席の代表者紳士諸嬢。本検事は被告、ケンおよびレイの両名に対し、反逆罪を適用し、現在の最も重い刑を要求いたします。その……」

検事の言葉は聴こえなくなった。ザワザワザワと、うち寄せる波に似たどよめきが満員の五十の傍聴席に湧きあがり、憎悪と憤怒に燃える熱気の渦が被告席の男女を押し包んだからである。

ケンは、その逞しい身体で恋人を守り抜こうとするようにレイの肩を強く抱き、昂然と敵意の群れを見廻していた。レイは、その厚い胸により縋って、小さく慄えながらも必死に試練に耐えていた。

敗北の後の潔い諦めが見苦しくなく、かえって雄々しくすら思えるのに裁判長は驚嘆した。——結局、これは誤った理想を持った不幸な男女なのだ。

突然、参考人の中から、興奮に駆られたらしい一人の女が椅子の上に立ちあがると、レイを指さして叫んだ。

「追放だわ！ 彼女を追放刑に！」

「そうだ、そうだ！」

「隔離だっ！」

「ひとでなし！」

グワーン！ 抑圧されていた沈黙を女の絶叫が破ると、一瞬、連鎖反応のように怒号が爆発し、全体に広がっていった。

司政局をはじめとする首都行政府の高官、学者、主婦、軍人、芸能人、各界を代表して集められた参考人達は、口々に被告を弾劾し極刑を要求して一斉に起立してしまった。

「反逆者」

「悪魔、外道！」

「隔離、死ぬ迄隔離してやる」

「裏切り者めが」

「殺してっ！」

叫びは怒りを呼び、罵りは悲鳴を誘い、ヒステリーと憎悪の奇妙な混交のうちに、たちまち秩序を失い、検事や廷吏の制止の声も燃え盛る炎に油を注ぎかけるだけの効果になりついに数名のSクラスの男女が、境の低い柵を乗り越えて被告席に突進しようと飛び出して来た。ケンはレイを後ろにかばい、キッと歯を喰いしばって身構えた。

今や神聖であるべき裁きの庭は狂乱の地獄

の様相を呈し、私刑の場に化すかの如く思われて……。

キーン、キーン！

壇上、キョウの手の槌から機械的に合成された、高い鋭い響きが二度、三度、騒音をつんざいて流れた。人々は動きを失い、その場に凍りついたように静止して、嘘のような静寂が甦ってきた。ここは法廷なのだ。集会所ではない。法がある、裁判長がいる。S一級の裁判長、異端審問官キョウ。先程の警告……恐ろしい程の静寂が戻ってきた。

この際、自席に小さくなっている方が賢明らしい——皆、キョウの眼を逃れるように、こそこそ着席する。

さて、威令が充分ゆきわたったのを認めたキョウは満足の面持ちで、ゆっくりと傍聴人を眺めまわし、

「すでに警告してあるにもかかわらず、またしても混乱を惹き起こしたのは誠に遺憾としか申し上げられない。許されるべき沙汰とは思えません」

——なにとぞ、こちらを見ませんように……。隔離刑など真ッ平だ。

裁判長の視線が移るにつれて、人々は皆、身体を縮め、顔を伏せてしまう。ただし、数

人のMバッジ着用者だけは、電気鞭を味わいたくて、まっすぐキョウに面を向け、期待して待っていたが。

「その御婦人！ F二級の貴女！」

鋭い声に、ハッと喘ぎが洩れ、火付け役になった若い女が、おずおずと顔を上げた。五十人の眼が、いちどに集まって、彼女はふらふら立ちあがる。

「廷吏！」

S三の銅バッジの廷吏が二名、足早に近づいてゆき、両腕をとる。

「おお、裁判長、お許しください。私が悪うございました」

腕を振りほどこうと身をよじりながら女は叫んだ。金髪の、まだうら若い、整った顔と肢体の娘だ。

「お許し、お許しを……」

とうとう泣き出してしまった。しかし、キョウの気持は女の涙ぐらいで溶けるものではない。なにしろS一級なのだ。

「検事、執行の指揮を……。諸君、審議は暫く休憩とし、我々は検事の処置を愉しむことにしましょう」

賛同の声に彼は壇上にくつろぎ、議長の権限、責任はその間、担当検事シュウの手に移

ることになった。この場はシュウに委せておけばよいのだ。その峻厳さと才能は充分認められているし、法務局を背負って立つ若手の俊秀、キョウと同じく数少ないS一級——。助手の検事補ユリはキョウの末娘である。銀バッジを襟裏に隠して着けているのでユリがS二級と知る者は少ない。

「かしこまりました、閣下」

新世界に唯一つ設けられた異端審問の秘密

法廷は、首都中心部に建つ記念館の四階議場——長方の会場は中央の低い柵によって二個の正方形に分けられ、一方が各界代表参考人の並ぶ傍聴席、他方が審問の場、すなわち法廷となっている。裁判長は北側壁前、一際高い壇の上、南面して席を有ち、被告人二名は東、手摺りに囲まれ、その真向かいにユリを助手にして検事シュウ。ここまでは小法廷通常配置だが、一般に証人席と呼ばれる中央空間に半径が三メートルあまり、高さ膝ぐらいの円形の低い壇が設けられている。これが有名な処刑台であり、鞭打ちのような簡単な即決刑は、ここで行なわれるのだ。陪審制度はサイバネティックスの発達により四世紀程前に廃止され、この事件は一般公開されないの

で、^{キニー・ツイ}立体TV等の通信器械も持ち込まれていない。

いま、処刑台上に立たされた娘は廷吏によって左右から支えられなければ崩れ落ちそうになる膝を踏みしめて、ひきつった蒼白の顔で検事と相対していた。

刑執行官としてのシュウの質問、これは形式だけのもの。(記録器より採録)

氏名、年令、職業をどうぞ。

あ、あの……。

(ユリ補佐官) 確か、「フラワーズ・アンド・スネイクス」誌の記者でしたか？

は、はい、そうです。

(検事) 御自身でどうぞ。

あの、名前はチエ、23才、F二級です。

——いけませんね。貴女は快樂自由のための三原則のうち、自制を失った行動をとったのです。今、それを学んでもらいます。

——か、隔離刑！

——三カ月ぐらいですね。

——ゆ、ゆるして！ もう決して三原則を忘れるは致しません！ ど、どうか……。

——当法廷に出席を許可された資格は？

——はい、代理で……。

——それは、「フラワーズ・アンド・スネイクス」

クス』誌のキ・6氏の代理ということでしょうか？

——そうです。あの、どうか隔離だけはお許し下さい。検事さん、裁判長様！

（ここで裁判長より検事に対し、何らかのサジェスションがあったと考えられる）

——判りました。では今回にかぎり、隔離刑は適用しません。

——ああ……有難うございます。

——電気鞭八回に決定します。

人々は息を呑んだ。電気鞭——不毛の植民地、火星への隔離（通称、惑星流し）に比べると数等軽いものであるが、普通の笞打ちより何倍も烈しいものだ。電気鞭は市販されておらず、市民の使用も禁じられ、法廷に於いても滅多に公開されたことがない。

傍聴席のSクラスはこの思いがけぬ幸運に酔いしれ、Mは自分自身が受けたい痛苦の快楽を他人に奪られた口惜しさと羨ましさに齒がみした。——F級の小娘なんかに電気鞭なんて。我々Mを無視しているではないか？

哀れな小娘は、恐ろしさに慄えあがった。

検事の指示に従って、二人の廷吏がチエの衣服を剥ぎとってゆく。近頃大流行の『ブチ

ツクの魔女』ルックと呼ばれるワンピース型の単純な上衣——場所によって七通りに色彩が変わるもの。勿論、温度調整装置内蔵——が、すっぽり脱がされると、丸い健康そうな肩を抱くように両腕を交叉させて娘は台上に蹲ってしまった。見物する男女の間から感嘆の溜息が洩れる。珍しい高価な天然繊維、ゴムの小さな下着が胸と腰を覆っている。

S三級の廷吏は、いかにも慣れた手つきで必死に身体を縮めるチエを転がし、靴を脱がせ、靴下を引き抜いてしまう。

「アッ、アーツ」と、押しつぶした悲鳴を朱い唇からあげながら、娘は処刑台を転って逃げようとした。胸を隠す薄い柔いゴムのB・C（ブラジャー）に男の手がかかったのだ。

——エキジビショニズムの傾向は少しもないらしいな。と、裁判長は思った。

——あのB・Cは後で競売されるのだろう。是非、手に入れよう。と、F一級の大学教授は心に誓った。

無情な手がB・Cを奪った。プリンと可愛らしい双つの乳房が五十の会衆の眼の前で、恥ずかしげに、ゆっくりと顔えつづける。

「赦して……あつ、ああつ！」

こういう任務を行なう廷吏にSクラスをつ

けてあるとは、何と賢明なことか。検事や判事がS一級であるのは、何とも素晴らしいことではないか。

「あつ、いやっ！」

最後の下着まで取られそうになって、罪人は叫んだ。被告席で、じっと凝視（みつ）めていたケンは、もう我慢が出来なかった。

「検事！」

ケンは抱いていたレイの肩から腕を放し、真ッ直にシユウを指した。

「止め給え、こんな馬鹿げたことは」

「……？」

「鞭打ちなら、鞭で打てば良いのだ。何も裸にすることもなからう、可哀想に……」

「君は、また変なことを云い出したね。可哀想なのは君達の方だよ」

「女を痛い目に合わせて喜ぶなんて……しかも、必要もないのに裸にして……神聖な法廷があきれるよ」

「必要はあるさ。電気鞭は直接、肌当たらないと効果がないのだ」

「皆の見ている前ですか？ 観衆がいないと効果がないのか？」

「そうだ。君には解るまい」

「解らないとも、解ろうとも思わないよ。君

達は皆、狂っているんだ。この世界全体が狂っているんだよ」

「その議論の相手にはならないよ。君は囚人なんだぜ、自分の心配をし給え。この婦人より、ずっと酷い立場にいるのだ」

「知っているよ。それだからこんな事を許しておけないんだ。裁判長、やめさせて戴きたい！ その阿呆な検事に任せておくと何をするか判ったもんじゃない」

「残念ながら、私は検事が少しく手ぬるいのではないかと考えている位ですから、御希望には添いかねますな」

「氣違い！ 皆、氣違いだ！」

検事は新しい廷吏を呼び入れ、被告が暴れたりなどしないよう監視を命じた。

——全く、この馬鹿は何を考えているのか知れたものじゃない。服を着せたままで鞭打ちして何処が面白いものか。第一、君を追放にしろと叫び出した、云うなれば敵だ。馬鹿らしいいったら……。

「関係者以外の発言を禁じます。廷吏、続行しろ！」

釘をさしておいて、シュウはケンに笑いかけた。

「君が彼女を庇うのなら、鞭打ちは六回に減

らし、その分は君達二人に引き受けて貰うことにしよう」

「フン！」

ケンはそっぽを向き、レイは反抗する恋人を頼もしそうに見上げた。

「ア、アアッ！」

ついにチエの最後の下着が取り去られ、台上、検事席に向けて、まっすぐ立たされた。

普通、Fクラスの者は多少にかかわらずM傾向を有すとされているが、現実には例外の方が多。

MでもEでもない若い女にとって、大勢の人々の前に裸身を晒すこと程、辛い悲しいことはあるまい。次には恐ろしい苦痛が待っているのだ。羞恥と恐怖に全身総毛立ち、白くなった唇を血の出る程噛みしめ、腰から膝をわずかに曲げて顫え怯えている。

法廷付きの医師が簡単な診察を行なって異状なしを告げると、チエは処刑台に俯伏せに倒された。両の手首と踝を埋めこまれてある四個の金具に留められると、四肢は大の字に開いたまま自由を失ってしまう。恐怖の喘ぎが、はつきりと聞こえる。会場は静まりかえった。

廷吏が小さな電源を内蔵した、細い長い鞭

を手に、この哀れな釘づけの犠牲者の足許に立った。

「四千サイクル、出力は1/4でいいだろう」

「かしこまりました」

軽く一礼して、廷吏は鞭についた装置を調節し、検事の命令を待った。

「よし、打て！」

力一杯、振りかぶる。

「アアッ！」

女は顔をあげ、身を捻って必死に逃れようとしながら、来たるべき痛み、恐怖に金色の髪を振り乱し、悲鳴を絞り出した。

しなやかな鞭は大きく弧を描き、ゆっくりとチエの小麦色の左肩から右の内腿に、鈍い音とともに振り降ろされた。

「キヤーツ！……」

一瞬、女体が小さく縮まったかに見えた。

汗と涙が飛沫になって散った。

「次っ！」

「あ、いや、いやっ！」

第二撃は左膝裏から右脇下に至る線上に炸裂した。

「ギャッ！」

頸をのけぞらせ、乳房を堅い台に摺りつけて、自由になる範囲で反り返える。鞭の跡が

×型に臀部で交叉して、長い赤い線が浮き出してきた。尤も直ぐ消えてしまうのだが。

柔い肌に三番目の打撃が加えられた。首すじから背をまっすぐ通り、ふくよかな臀部、そして大きく割られた股間に消えてゆく激しい一打。

「グアッ！」

全身の筋肉が休息と開放を求めて痙攣し続ける。

にっこり笑ったシュウの合図で手足の枷が外される。チエは喘ぎながら声を吐き出して「も、もう、ゆるして……か、かんにん……して」

「あと三回、残っていますよ」

女は項垂れた。電気鞭は恐ろしいものだ。

彼女は学生時代に通常の答で打たれたのを憶い出した。それよりも何倍も痛く、何倍も苦しい。こいつに比べると唯の答打ちなど、子供の遊びに過ぎない。

打撃自体は、それ程痛覚を与えない。なにしろ、そっと鞭を肌に当てるだけなのだ。だが、その鞭に恐ろしい牙がある——機械的に調整された電気による刺激が——その牙が肌を至る所で、小さく強く噛むのである（二十世紀後葉の皆さんは海水浴場の性悪な水母を

憶い出して下さい）

医師が脈を診、強心剤のチューブを腕に押しつけて中の液を高圧で注入した。

次は仰向けに固定されるのだが、女は激痛と喘ぎに全く無抵抗。人魚のような肢体の美しい胸が慌しく空気を求め、突き出した乳房がゆっくり揺れ動き、羞恥も屈辱も隠すことを忘れては呆然とされるままに四肢を委ねている。廷吏の手が膝頭にかかり、力まかせにその下肢を開いてゆき、がっちり固定してしまった。

先刻より一層酷い。身体の前面の方が背部よりも苦痛に対して鋭敏であり、鞭をふるう男の姿と、迫り来る鞭が眼に入るからだ。

「よし、始めっ！」

茫然と天井を見上げていたチエに恐怖と苦痛の記憶が蘇った。いちどきに汗が吹き出し筋肉が収縮する。緩慢に鞭が降りてくる。彼女は堅く眼を閉じた。永遠とも思われる長い時間が過ぎ……。

パチッ——！

平手で水面を叩く様な音が響きわたった。

「キャーッ！」

乳房から腹、下腹をぬけて太腿へ焼火箸で貫かれた痛みと痺れが走って、悲鳴すら体中

から絞り出さねばならない。

「次っ」

「ヒィーッ！ヒッ……！」

これは効果観面だった。見事、桜桃のような乳首に命中し、女体は台に固定されながら可能なかぎり弓の如く反った。床と尻の間に大きな空間が出来た。

「ゆっ、ゆる……して！」

鞭を振る廷吏はS三級とは云え、二級以上の素質が有ったに違いない。最後のひと振りを検事の命令よりもタイミングに賭けた。

素早くチエの頭の方に移動すると、丁度、女体が橋のように丸く高く反り返った瞬間をとらえて、柔らかな腹部にそれを打ちつけたのである。

鞭は生き物のように胴を縦に走り、その先端は開かれた股間を通して臀部にまでも届いた。

「……！」

悲鳴も絶叫もなかった。チエは失神した。傍聴席でもMの銀バッジを着けた主婦が一人気絶した。

予期しなかった豪華で幸運なアトラクションの感激の余韻が一段落するのを待ってから

キョウは裁判長席に威儀を正し、審理の再開を宣した。

神聖、厳肅な雰囲気が会場の隅々まで支配し、寂として声もない中を、シュウは席から進み出、法廷中央、裁判長キョウに向かい合って、すらりと立った。

「判決例によって、市民側は被告に対し、終身隔離刑を課することが出来ますが、兩名の過去の業績、才能等を考慮の結果、再教育により有能な社会人としての復帰が可能であると思われる所から、本官は——（詩）

被告ケン、レイ兩名に

反逆罪を適用し、

暗黒時代に追放を——求刑致します」

ケンはず思わず跳び出した。

「抗議します。何の権利があつて人間を……人間の性格を……」

キョウの前に走り寄ると、拳をかためて机を叩く。シュウが跳びかかる。二人は纏れあつて転がった。

「終身隔離にしてくれっ！一人にしておいてくれっ！」

廷吏が駆けつけて取りおさえると、被告席に連れ戻し、手錠を左手と手摺にかけ渡してしまう。

レイは傍に力無く腰を下ろし、絶望的に彼を見上げる。その眸に光る粒が二ツ、三ツ。

「性格を変えられるのは厭だっ！再教育など厭だっ！汚れた腐った世界で生きてゆくのは厭なんだ。隔離にしてくれっ！」

自由になる右手を聴衆に振り廻して彼は怒鳴った。

「皆、聞け。君達は人間じゃない。獣だ！

君も、君も……皆、いかさまだ」

廷吏が電気鞭を振りあげる。キョウは軽く手を振ってそれを制した。

「人の皮を被った悪魔共の寄合世帯、この世は地獄だ。裁判長、貴方はその親玉なのさ。

へッ、検事。おお、親愛なる一の子分よ。悪魔のサバトなんだ！」

参考人は全員声もたてず、叫び続ける男を

まるで別世界から来た生物であるかの如く注視していた。

「人非人め。お前こそ生きたまま皮を剥がれるがいい」

と、宇宙軍の中将が呟いた。

「狂っている、狂っている。皆、それに気が付いていないだけだ。ハ、ハハハハ」

ケンは笑い出した。笑いながら涙が溢れてくる。その涙が心理の暴発を防ぐヒューズの

役を果たしたらしく、やがて彼は落ち着き、咽をぜいぜい云わせながらも椅子に腰を落とした。その彼の胸にレイが顔をうずめ、小さく嗚咽する。

キョウは穏やかに

「判決を申し渡します。被告は起立して下さい」

ガチャリ——ケンの手首の手錠が鳴った。

レイはケンにぴったり寄りそって立った。

検事シュウと検事補、ミス法務局のユリも姿勢を正した。

「判決！」

ピシリとキョウの声が飛んだ。

「本法廷は——（詩）

被告ケン、レイを

有罪と認め

法の名に於いて

追放に処す——」

最後の希みが絶たれてしまった。

二人は追放され、正しい精神（と彼等は考えている）を歪められ、この卑しい醜い世界に戻って再出発しなければならぬのだ。この決して理解出来ず、理解しようとも思わぬ世界……そうなのだ。二人には理解出来な

ったのだ——。

ここは平和な自由の世界であった。戦争も貧困もない。文明は宇宙へ進出し、科学は頂を究め、芸術は花と咲き、国境も人種の差もない……新世界は健康で完全な自由を謳歌している。

それらは総て、偉大な先駆者による性の開放の賜物であった。「性が文化を創る」の旗印の下、彼等は幾多の偏見、因習、弾圧と戦い、世紀を以って数える永い年月の末、科学と倫理偏重の暗黒時代（権威ある研究では二十一世紀前半まで）を打ち破り、人間の精神——特に性に関する——に対する枷を破壊して、ついにこの繁栄の新世界をもたらしたのである。

人間は快楽を求めるために努力を続け、それに伴って進歩してゆく。過去の歴史がそれを証明している。ホモ・ルーデンスと呼ばれる所以だ。

奔放な心理を規制するものは次の言葉——
快楽自由の三原則

自知、自恃、自制。

これだけである。人々はこの原則によってのみ縛られている。

成人は全てバッジを着けている。かつては

異常と蔑まれ卑まれた性の傾向、S、M、F等十六種。各々を一級（金）、二級（銀）、三級（銅）に分けて、職業、階層の適所でその傾向を活かし、正しい進歩を目指しているのだ。性は開放されているのである。

ケンとレイは不幸だった。幼い頃から周囲とは異った性格を有しているのを感じしながら成長し、環境に従ってFバッジ着用を登録した。F、即ちフェチズムは最も一般的なものだったからだ。

二人は公職に就き、僅かな間にケンは次席調査官、レイは司政秘書官として将来を嘱望される才能をふるい出した。しかし彼等は不満だった。自由奔放な性を異常と感じた。F章を恥じた。性のパリエーションを卑しい物と考えた。

そんな時、ケンは調査官としての任務に従事中、暗黒時代の古い印刷記録を入手した。電算機による翻訳の結果、彼はその中に二人の求めている物を発見したのである。男女の性が神によって厳しく支配されている樂園、極く狭い範囲の中での性の享楽。二人はそれを人間本来の性、枠の中での性のかたちだと考えたのである。

ケンとレイは反乱を計画した。要職を利し

て人々を誘いこみ、思想を広め、行政府内部からの崩壊を策して着々と実行に移った。

破綻が来た。二人の共通の友人、法務局のシユウとユリは友情から注意深い眼でこの思想的に異なるケン達を見守っていたのだが、些細な不審の積み重なりが疑問に変わり、検事は反乱を察知したのである。それで終りだった。

現在、最も重刑とされているのは終身隔離である。不毛の惑星に機械だけを相手に唯一人、死ぬまで暮らすのだ。発狂せずに生涯を全うした者はいない。

追放刑は再出発可能と認められる者にのみ課せられる。

ケンもレイも追放より隔離を希んでいた。この理解出来ぬ異常な社会で再び生き続けるよりも、死ぬ方が良かった——。

裁判長席の背後の壁に掲げられた旗——緊縛女体と鞭とを組み合わせた白いマークが真紅の地に映えている——が、空調器から流れる微風に、はたはたと揺れて……。

「これを以って本件の審理を終了し、法廷は解散致します」

追放機——正式名RA型異次元時空旅行機

マークⅡ^{ツク}、俗称タイム・マシン——は附属諸機器に保護されて、ここ記念館の中央に、完全に外界と遮断され、冷たく空しく息づいていた。

今や、それは甦った。種々のスイッチが入られ、コントロール・パネルに指示灯が点き、地下の発電所からは膨大な電力が送られて来た。簡単なテストが繰返され、追放室に白光が充ち溢れる。

追放室の隣、処理室と呼ばれる小部屋にはキョウを中心とする首都行政府の首脳が数人——厚生長官、司政官、情報官、歴史アカデミー代表など——執行官として、追放者に対する再教育カリキュラムを協議していて観察官に任命され、二人に同行することになったシュウとユリが緊張した表情を隠そうとせず、決定を待っていた。

ケンとレイはその傍の椅子で、両手錠をかけられ、希望を失った者に特有の輝きのない瞳で、じっと見つめ合っていた。

再教育はM型と決定し、主調整室の技師達はコンピューターにデータを投与し、プログラミングの作製を開始した。

ケンは、シュウの手を握った。

「いろいろ有難う。むこうへ行ったら君が判

らないだろうから、今のうちに礼を云っておくよ」

「検察官としては、こうするほか無かった。今度は観察官として出来るかぎり手伝うつもりだ」

「君にだけは判って貰いたかったな、僕の気持をさ。こんな世界は間違っているんだよ。歪んでいる。暗黒時代の考えの方が正常で、現代が異常と云うべきなんだ」

「それはもう云うな。誰にも本当の事は判りやしないのだ。現在生きているかぎりね。これは後世の人々の決めることだよ。ただ、これだけは云える」

「……？」

「盲目の国では眼の見える者は王様だ、片目でもね。だが片目の国、一ツ目の世界では……」

「一ツ目の世界では？」

「両目を持っている奴は片輪なんだ」

「……」

「かたわなんだよ、化物なのさ。判るかい、ケン？」

「僕らを片輪だと……」

「そうさ。僕は別に、現代人が一ツ目で、君達が二ツ目だと思っている訳じゃないが、譬

えればそうなる。レイ、ケン、君達はこの世界では怪物だ、心理的にね。だから現在のままではお互いに気まずいし、不利益だ。そこで少数派の君達を改造する、社会に適応できるように」

「僕の考えは変わらないよ、決して」

「あたくしもそう。Mクラスにはなれそうにないわ、どうしても……」

レイは悲しそうに眼を伏せて、手首に重く鈍く光っている手錠を見た。

「レイ、貴方とケンはこの社会で必要な人材よ。努力しなけりゃいけないわ」

「ユリ、有難う。大変お世話になったわね。」

その上、貴方がたと一緒に来てくれるので嬉しいわ。でも、ケンもあたくしもMにはなれなくてよ」

「それはこれからの君達の再教育のやり方次第だ、レイ。むこうで何世紀かかるかは判らないが……」

そうなのだ。彼等は過去の暗黒時代へ時間を溯って旅行し、古い時代の中で他人の肉体を借りて生きてゆくのだ。幾世代も、幾世代も……慎重に計画されたカリキュラムに従って、二人が完全なマゾヒストに変貌してしまうまで……。

プログラムが完成し、「追放機準備よし」が伝えられた。

「刑を執行せよ」キョウは厳かに命じた。

二人の手錠が外され、一同は揃って追放室に這入ってゆく。

真四角な部屋である。追放者を固定する寝台と、同行観察官のための椅子があり、一方の壁には各種計器、主制御室からの覗き窓、天井は主機械の一部が露出してその反射が冷たく奇異な印象を与えている。

「追放者は裸に……」と、キョウは無表情に命じた。

二人は顔を見つめ合った。

「服を脱ぎなさい。慣例により衣類の着用は禁じられているのだ」

この日、二人は逮捕された時のままの服装——制服を着ており、ただ襟章のみは外されていた。

シュウはケンの前に立った。

「ケン、君からだ」

ケンは男らしくこの屈辱を受け止めることを決意し、青色の制服を脱ぎ、スラックスをとり、手早く下着を脱ぎ捨てて全裸に——遅く均整のとれた赤銅色の肌を露わにした。

厚生長官は中年の婦人——医博、S一級——

——で、その細い指でケンの身体を丹念に診察して、よろしいという風にキョウにうなずいて見せた。

指示されるままに寝台の上に登り、大の字に仰臥すると、カチリ、カチリ！ 身動き出来ぬように手首、足首に金属枷が冷たく緊くかけられる。

「レイ……」

シュウに促されて、レイはためらいながらも上着に手をかけた。淡いモオブ色の柔らかな金属繊維で、タフタに似た感触をもったジャケット風の制服——指はのろのろと動いていたが、やがて諦めを見せて両腕から床に落ちた。パンプスを脱ぎすてるケンの眼に励まされ同色のスカートから脚を抜いた。首都近郊で少量だけ生産されている、最高の贅沢品——純絹のストッキングを丸めて抜き取り床に置くと、その黒曜の瞳でユリを見た、問いかけるように……。

ユリは金髪で明かるい空の色をした眼を有っている。もつと、という風に顎を振った。

Mでも露出症でもなく、またそういう観念を嫌悪して、反乱にまで踏み切った若い女にとって、自らの手で衣類を脱ぎ去り全裸の姿態を晒さねばならないこの皮肉な事態は悲痛

なまでの苦しみをレイに与えた。黒髪がはらりと長く、まろやかな肩に散った。

「レイ、我慢するんだ」と、横臥したままのケンが鋭く、力づける。

下唇を強く噛んでレイは胸に手を近づけ、B・Cを取った。

「……」

恐らくケンにすら見せたこともあるまい双つの胸の隆起、優しい愛のふくよかな丘が明かるい光の下に露わになった。羞かしさと抑えた怒りで紅く染まってゆく。呼吸が大きくなり、乳房はそのたびに激しく上下する。頬が、唇が小さく震える。

ユリの碧い瞳が射るようにレイを促がし、レイは腰をわずかに蔽っている純白の金属繊維に指をかけた。悲しい決意とともに指に力が加わり、パンティは膝の下まで下げられ、左足、右足を抜きとってレイは身を覆う最後の衣装を棄て、全裸になってその均整のとれた美しい肢体をまっすぐ立てた。

膝が、がくがくする。思わず身体を締めようとする羞恥心を誇りで叱咤して、皆の視線に耐えながら四肢を固定する台に近づく。悲鳴が洩れそうになる。

「もう少しの辛抱だ、レイ」

必死の想いで寝台に上がると仰向けに手足を伸ばした。厚生長官が素早く触診を進めてゆく。

「大丈夫、異常なし、ですよ」と、女医。

「貴女、立派なMクラスになれるわよ」と、ユリが覗きこみながらいった。

「手を横に伸ばして……そう。レイ、綺麗だわ、貴女の身体、羨ましい……脚を開いて頂戴、もっと……」

レイは眼を閉じた。焼きつくような視線の感触……男達の息づかい……その中で彼女は死ぬよりも辛い試練と戦い……少しずつ、そのすらりと伸びた脚を拡げて……。

「もう少し……」

レイは喘いだ。歯を喰いしばった。

カチッ！ 枷が踝にかかった。

「ああ……」

シュウの浅黒い顔が笑みを湛えて覗きこんだ。

「よくやった、レイ。ところで君達、追放の準備は出来た訳だが、先刻の電気鞭を二つ預かっているのをどうしようか」

検察官の言葉に全員忘れていたことを思い出した。

「そうだったな。だがここには鞭はないぞ」

と、キョウ。

「取って来ましようか？」と、情報官。

「いや、結構。キョウ、判例で追放者は身に糸もまとわれない、となってますね」

「だから二人とも裸にしたのではないか」

「いや、僕がいうのは」と、シュウは寝台に腰をちゃんとかけ、左手をレイの腹部に置いた。

ピクツと女体が痙攣する。

ユリは嬉しそうに手を拍った。

シュウの手がゆっくりと肌を伝って動いてゆく。レイは顔をそむけた。

「これですよ」

「うむ、成程。判った。わしも年令だな。若い者はいいい所に目をつける。

「クリームを使うの？」と、女医が訊く。

「違いますよ、長官。こんな物を見たことがありますか？」

シュウはスラックスから何か取り出して、全員に見せた。

「剃刀じゃないか」

「そうだよ、皆さんに説明して上げてくれなにか、情報官」

それはかみそり——ずっと昔、髭を剃るのに用いられた金属の刃物、西洋剃刀と呼ばれ

るもの、であった。

「馬鹿っ！ やめろっ、そんなこと。僕達はおとなしく刑を受けようとしているんだ。これ以上、恥かしめることはない筈だ！」

ケン是不自由な軀を振って怒鳴った。厚生長官が剃刀を手に近づいてゆく。

「動くぞ怪我するわよ」

「うっ……」

「せんせい、始めて下さい」

「よせっ、ユリッ！ おっ……！」

女医はケンの足の間に膝をつき、科学者の熟練した手捌きで刃物を動かした。

「くっ……馬鹿っ！」

「ほらほら……じっとして……」

「昔、虫垂炎アツバの手術にこんなことをしたと記録に残っているのよ、意味がよく判らなかつたのだけど……」

「畜生！」

ケンはギリギリと歯を喰いしばった。

四人の男は興味深く剃刀を注視していた。

「はい、一丁あがり」

「流石に鮮かなものですな、せんせい」

「いい経験をしたわ。ユリ、上の方は貴女に任せるよ」

「はい……」

「ユリッ、やめてくれっ！ いたっ！」

「あっ、ごめん。力がはいりすぎたわ」

「なんだい、男のくせに。しっかりしろよ」

と、シュウはケンの肩をつついた。

「ふむ、うまく出来たな……次は我々の手際を見てもらおう」

刃物がユリの手からキョウに移った。

「やめろっ！ レイに触るなっ！」

ケンが叫ぶ。

「アッ……いやっ、やめてっ！」

レイは身体を硬くした。

「わしは老人だから細かい仕事は無理じゃろう。シュウ、君にやってもらおうか」

情報官はEクラス。変装嗜好で、アカデミ

ー代表はN、ナルシストなのでS一級のシュウとキョウがレイの寝台に上がった。残りの

者は、その周りを取り巻いて立った。

「アッ……アアッ！」

レイは必死になってこの恐ろしい羞恥の責め苦から遁れようと出来るだけ身体を動かしたり捻ったりしてみたが、大の字なりに臥かされて四肢を固定された女体の自由は知れている。羞恥と屈辱とで全身が燃える。

「うっ！」

キョウがその肥った体を柔らかな胸に乗せ

たので、彼女は息が詰まりそうになった。

「さア、動かないで……そうそう」

「ああ……アッ……アア……」

しっかりと閉じた両眼の瞼をおし上げて熱い涙が溢れてきた。長い黒い睫が揺れる。

「アッ、アン……い、いやアン……アウ」

シュウは憑かれたように熱中していた。

「あら、シュウったら、汗かいてる」

ユリの声に皆、シュウを見た。彼は面映なく顔をあげた。

「没我の境地なんだね、きつ」と、情報官が笑いだした。

「法務局のホープだからね。骨の髄までS一級だよ」

「もうやめた。親爺さん、譲りますよ」

シュウは台から降りてしまった。

「わしには刃物は使えないよ、傷つけるかもしれない」

「じゃ、筆ったら……」と、娘が提案した。

「ふふ、それなら出来るな」

レイは空ろな眸を開けて悲しく天井の機械を見上げた。わずかに開いた唇から小さな鳴咽がしゃくりあげるように続く。こんな目に会って、追放されて……それから……。

「アッ！」

痛みが全身を駆けぬけた。キョウが娘の提案を実行に移したのだ。

「アウッ、ヒッ、やっ、やめてっ！」

噎れた悲鳴が口をついた。

熱気のこもった追放室でレイはMになる為の再教育の一端を思い知らされながら、ぐぐもった悲痛な叫びを洩らし続けた。

「制御室準備よし」「調整室よし」

エネルギーは逆圧を示していた。

追放室には二人の囚人と、その同行者だけが残っていた。ケンとレイは屈辱の後の呆然とした身体を寝台に横たえ、傍の椅子にシュウとユリが深く身を沈め安全ベルトを掛けている。検査官はマイクに向かって怒鳴った。

「追放室、準備よし」

主制御室に数人の技師と執行官が集まってキョウの命令を待っていた。

閉回路T・Vを見守っていたキョウは力強く命令した。

「スイッチを入ろ！」

技師の手によって、主スイッチがオンになった。追放室に、めくるめく光のエネルギーが満ち溢れた。

(未完)

カット・室井亜砂路

史実研究

切腹百年史

女性篇

—(その三)—

中 康 弘 通



六、女の鎌腹

狂言の歌舞伎に鎌腹ということがあり、また井原西鶴の「本朝二十不孝」には左鎌という語があつて、小野晋氏の註(岩波文庫版)によると、

「鎌で腹を切る時、左手に持つをいう」とある。

しかし実際に鎌で腹を切る、ということとはむづかしいと思われる。日本刀は鋭利だが長

いと重くなるので、女の力ではとても腹へ突き立てて引き廻せるものではない、ということとだが、と云つて、出刃包丁などはよく使われてはいるが、柄が短くて刃が厚いから、やはりまたなかなか腹を切れるものではない。

終戦のころ、濡れ手拭いを出刃包丁の柄に巻いて割腹した娘さんがあった、ということこそ本誌への投書で眼にしたが、なるほど血すべりを止めるためには、是くらい周到な用意が必要で、それにはよほどの覚悟が平素から

出来ていないと、いざというときにはむづかしいだろうと思われ、当時は、若い女性でもよく日ごろから、日本人は日本人らしく、と思いつめていた度合いのほどが偲ばれた。

ましてや鎌となると、なるほど刃は薄いがその刃と柄とが直線になっていないのだから男の力まかせならいざ知らず、女の非力で腹を切るというのは、はなはだ困難と思われる。ところがその例があるのだから不思議なくらいである。

明治四十二年五月二十六日、群馬県で宮〇よしの(三十七才)という農家の主婦が切腹した、それが鎌腹であった。平素から家庭の不和を苦にしていた彼女は、その日も夫と口論した末、夕方納屋に入って間もなく、呻き声がかきこえる。驚いて立入った家人の眼に映ったものは、紺緋の野良着を双肌ぬいで、草刈鎌の柄を右手に、左手は刃もとを手拭いで握りさえ、苦悶しているよしのの姿である。見れば腹の中心を横一文字にかき切り、右脇へ少し切りあげたのち、のどを突いていた。その夜半、あえなく絶命。

同じ年の、八月四日にも同県で、坂〇ヨネ(二十四才)が、やはり家庭の事情を苦に家人の出かけた留守中、緋の着物に一旦着かえ

屋根裏部屋に入って、あらためて帯をとき腹をくつろげて、桑切り鎌で左から右へ腹を五寸以上かき切ったのち、のどを突いて果てている。家人が帰宅したのは絶命後であった。

わずかな日数で、しかも同じ県内に鎌腹二例というのは、後者が前者を模倣したものであろうか。そののち長く鎌腹の例を聞かなかったが、戦時中、内地（十九才）満洲（二十才）各一例の鎌腹、それも十文字の切腹があった、という投書を得ている。しかし確認出来ないので詳述は控えておく。

鎌腹は農婦の切腹にのみ見られていたが、戦後は殆ど跡を絶ったようである。

七、腹切、割腹、切腹

新聞の見出しに切腹がどう表わされているかを見ると、明治中期ごろは

本所緑町の娘腹切（東日・明3659）

などという古めかしい言葉が使われている

が、のち次第に

赤坂娘腹切り（東日・明441224）

日光芸者腹切り（東日・明45214）

と仮名まじりに軟らげられている。

一方、他紙では

老婆腹を切る（東朝・明42827）

女房割腹す（東朝・42816）

と動詞形が使われているのは面白い。

割腹の文字は比較的多く使われ、

金簪を盗んで割腹

露頭を恐れた悔悟の下女

（時事新報・明44715）

芸妓割腹

＝原因は失恋＝

（東京日日・大7414）

情人の熱さめて

美声芸妓 剃刃で割腹す

（東京日日・昭9418）

芸妓割腹

壁一杯に遺書

（読売新聞・昭9418）

未亡人が割腹自殺

神経衰弱が高じ

（佐賀新聞・昭34117）

なぜ起きた 割腹事件

女子大生 過度のノイローゼ

（夕刊新広島・昭3531）

などと比較的切腹の文字は少ない。その珍しい用例で、

カフエのマダム 一文字に切腹

美容術失敗を苦し

というのがある。

（大阪朝日・昭1347）

昭和十三年四月六日の夕方、神戸市湊東区

の某カフエで、主人の安○茂さんが帰宅して

みると、二階奥六畳の間で、マダムのと見え

さん（三十七才）が血だるまになって苦悶し

ている。見れば刃わたり一尺八寸の日本刀で

双肌ぬいだ腹を文字どおり真一文字に、一尺

ほど、かき切り、頸を突き刺している。すぐ

手当を加えたがその宵のうちに彼女は絶命し

た。職業がら容貌を気にする彼女が、美容術

を受けた結果かえって悪化し、悶悶としてつ

いに死を選ぶに至ったものである。

しかし、一文字の切腹はよくあるにしても

一尺もかき切ったというのは、女の腕では珍

しい。重い日本刀をよく引き廻せたものであ

る。一念凝って執念とも云えようか。

もっとも、長く切った例では、同じ年の年

末、大阪の城東区で畠○千代野（三十九才）

が難産で苦しんだ揚句、日本剃刃で腹を一尺

二寸もかき切った。帝王切開術を、みずから

施したわけだが、経過不良で死亡した。

また珍しいものとしてハサミを用いたのが

女性にはチヨイチヨイある。たとえば昭和三

十二年六月二十四日朝の東京で、松○やえさ

ん(四十九才)は、病苦から発作的に、ハサミで腹を七寸ばかり切りさいて、重体、という事件が起きている。

八、女子大生の切腹

前回にも記したように、農婦、芸娼妓などの切腹が戦前は多かった。戦後は芸娼妓、あるいはそれに代わるべきバー、キャバレーのホステスが切腹した、なんて事件は、起っていない。それだけ昔の女性には、水商売でも純情だったのかも知れない。

インテリアと見られる女子学生、あるいはその他の職業婦人では、戦前は切腹なんてなかった。切腹が野蛮だと思われたのかも知れない。明治四十一年五月二十二日、東京の駒込で山○兼子(二十九才)が腹を切りのどを突いたのち井戸に投身して死んでいるが、この人は小説家であったというから、まず当時としてはインテリと云えよう。ところが戦後は、二人までも女子大生が切腹した。

一人は京都の女子大生近○正美さん(二十才)で、昭和三十五年二月二十四日八時ごろ、下宿先で出刃包丁を以って腹十文字にかき切った。さいわい手当てが早く、助かったのだが、病院で手術後にも舌をかみ切ろうと

したりして、その悩みの深さが察せられる。

一時は失恋が原因などと書き立てられたがそんな浮いたことでなく、家庭、就職その他で、悩み抜いた末らしく、内気で真面目な女子学生だったというが、それだけに一層思いつめたものと見える。

助かったのが不幸中の幸いである。

昭和三十八年九月十一日の昼少し前、福岡の大学寮で独り部屋に残って、木○美美子さん(十九才)も、腹を十文字に切って、あたらしい命を散らせた。まず用意の肉切包丁で深深と、鳩尾から臍下へ五寸も切り下げ、更に右脇腹へ二の刃を突き刺したとき力尽きて倒れたという。志望どおりの学科へ進めなかったのが原因だったとか――。

その男まさりで壮烈な最期のさまに、烈しい気性が偲ばれて、

「死なすには惜しい女丈夫」という声もある

と、週刊現代(昭和38年10月10日号)が評している。

十九才の少女の例に触れたついでに、年少例を見てみると、昭和四十年十二月一日夜、東京は渋谷の旅館で、親の許さぬ仲ゆえ情死をとげた、白○美重子さん(十六才)は、ナ

イフで腹を切り頸脈を断って果てている。

情死の目的で切腹した女性には、昭和十八年六月十四日、栃木県下の炭焼小屋で、どうせ死ぬ身なら腹を切って死にたい、と云い遺し、農家の娘野○よし(十九才)は男の持参した短刀で、腹一文字に六寸余りかき切って果てたという。

右の二例とも、男性は重体で発見されているので、女性の方がいざとなったら思い切った行動に出る。ということを示しているのかも知れない。

九、計数的に見た女の切腹

「十八娘出刃で切腹」という見出しが昭和二十五年十二月二十七日の西日本新聞に出た。

二十六日午前二時ごろ、下関市で立○節子さん(十八才)が、出刃包丁で切腹し畳を朱に染めて苦しんでいたのだ。

なぜこんなことを……と歎く家人に、何もわかりませんと応えた彼女は、縁者の話ではタンスの差押えを苦しめてのこととあった。

花なら盛りの十八乙女が、あたら世を短うする悼ましさは、本当に何ともたえようがないと思う。

そう思って、今まで集録した例を年令別に

見ると、最年少は十三才、十四才、十六才各一例で、あと三十二才までは各年令に分布している。三十二才をすぎると激減する。次の如くである。戦前の年令は一才減算して、ほぼ同じ年令となるようにしてある。

一九五例中の百分率をも併記する。

十六才—二十才	十八例	九%
二十一才—二十五才	五十五例	二十八%
二十六才—三十才	四十一例	二十一%
三十一才—三十五才	十七例	九%
三十六才—四十才	十九例	十%
四十六才—五十才	六例	三%
五十一才—五十五才	十一例	六%

他は略するが、大体こういう分布になる。
特に多い年令を見ると、

二十才	十二例	六%
二十二才	十三例	七%
二十三才	十二例	六%
二十四才	十二例	六%
二十九才	十二例	六%

が特に多い。百分率は概数である。

結局、十八才—三十二才の十五年間をとってみると、百十八例、つまり六十一%となっている。更に三年間で区切ってみると、

十九才—二十一才	二十六例
----------	------

二十二才—二十四才	三十七例
二十五才—二十七才	十九例
二十八才—三十才	二十七例

足を一年移動してみると

十八才—二十才	二十五例
二十一才—二十三才	三十一例
二十四才—二十六才	二十五例
二十七才—二十九才	二十八例

つまり二十才、二十二才、二十九才という

三つのピークをそれぞれ中心に、年令が相関係数的移動を示している。是は一般の自殺者（女性）の年令傾向とも合致するかも知れないが、一応女性が結婚適齢期に入る二十才から最適期の二十四才までが多く、それをすぎると一応減じて、二十九才という女性の年令的な一つの曲り角に増加を示しているのは、かなり示唆的である。

より精密にしようと思えば各人の生年月日を調べられないまでも、戦前の例では六月までに事件の発生した女性は一才を減じ、七月以降はそのまま、とでもすればやや実態に近づくかも知れない。

序に用器を百分率で調べてみると、戦前は用器の明らかな百十二例中

刀剣	三十七%
----	------

剃刀	二十九%
包丁	六十八%

是に果物ナイフ等を加えると八十%が台所用の刃ものを使っていることになる。是は家庭の主婦などの切腹死が増えたことにもよるし、反面当然刀剣の所持禁止に基ずくところが多いであろう。また切腹という行為が戦前ほど儀式ばった死に方とは見なされなくなっただからであろう。

戦前の特殊な用器に、サーベル一例あり、戦後の特殊な用器に、氷かき一例がある。

剃刀もまた激減したものの一つで、戦後はわずか四例、5%にすぎない。

原因別に統計をとると、また意義のあるデータも出ようが、是以上無味乾燥な数字で悲痛な動機をまとめてしまうには忍びない思いがするので、一応計数的なものはここでおくことにしよう。

× × ×

是は余談になるが、古い新聞を検索していると、ラジオの普及初期に、娘義太夫の放送がずいぶん多い。

たとえば昭和三年五月三日の読売新聞によると、

義太夫 Ⅱ午後八時廿分ごろ

はなのくもさくらのあけぼの
花 雲 佐倉 曙

Ⅱ儀作切腹の段Ⅱ

浄るり 竹本 弥昭

三味線 豊沢 猿女

の見出しで、

“「儀作の切腹」で泣かせる竹本弥昭さん”

と詞書きがついて、竹本弥昭太夫が嬌然と微笑している写真が見える。紹介記事として

浄るりの弥昭さんは弥玉さんの弟子で女義界の中堅で腕達者の定評ある人の由。

彼女に限らず、ずいぶん、数多くの娘義太夫達が、たとえば仮名手本忠臣蔵、あるいは菅原伝授手習鑑と幾多の腹切り場を語りものにしていた様子である。このころのレコードやプロマイドを入手できないものかと古書録など当たっているが、なかなかむづかしい。もしお持ちの方は拝借して複製させて頂けると幸いである。

琵琶でも同様で同じ日の新聞に、岡部瑞蘭弹奏の筑前琵琶放送の記事が見える。他にも豊田旭穂、柳田旭笏など女流琵琶があり、演目も、「白虎隊」「常陸丸」「村上義光」な

どにわたっていたことと思われる。

浪曲では京山小円その他、多数の女流浪曲があり、詩吟また然り。

いずれもレコードが入手出来ればテープに採取しておきたいものである。

× × ×

本誌一月号の読者通信で、名古屋の齊藤浩氏の投稿を拝見した。その中に、

「かなり前の号に、切腹マニアの少年と美しい召使の切腹プレイ、そして最後に倉の中で切腹の絵図を見ながら切腹して果てるという小説がありました。あのような作はもう出ないのでしょうか」とある。

恐らく、法谷四郎氏の「切腹曼荼羅図絵」(本誌昭和28年8月号)と思われる。

筆者は後年「清谷四郎論」(本誌昭和37年7月号)で、この作品に触れたことがあるがマニアなどという単純な登場人物ではなく、かなり心理学的に見て重要な素材を含む作品であった。△愛▽と△死▽を△切腹▽でつなぐというテーマであった。

恐らく、風俗文献誌とてスタートし、いよ二十周年を迎えた本誌の、通巻二百冊を超え、およそ三千篇を超える作品の中で切腹

を採りあげて、この小説くらい示唆的なものは、類い稀であろう。

いわゆる武士道的解釈のみからみたそれでもなければ、ヒロイズムの構図のみを以ってする藤山秀緒氏らの傾向とも異なる独自性があり、多分△切腹▽そのものを素材として、この作品を超えるものは今後も出ないのではないかと思われる。

つまり日本人にだけ伝わっている△切腹▽という、壮烈とも無残とも云える行為が、自発的に遂行される場合の真実を、かくも精神的に的確に捉えた作家が、法谷四郎氏以外にはないのであるまいかと思われる。

それほど独自のものがあったことを、筆者は記憶している。法谷氏はその後、二、三作のち本誌上から姿を消してしまわれたが、残念でならない。

今日、本誌のみならず幾つかの雑誌に△切腹▽を素材とする小説は、毎月幾つか発表されているが、この作品に迫るものさえほとんどない。わずかにいま一人だけ、筆者が最近注目している作家があるのみであることを附記しておこう。

カット・桐原紫門

金 の 糸

野沢洋子、といえは記憶のよい読者は忽ち思ひ出されるであらう。この物語の第一回で新津がパリのピエール警部に示されたリストにある名前だった。四年前に事故死したことになる。

戦災で夫を亡くしてから、たった一人の娘を手塩にかけて育てあげて、新進デザイナーとして漸く開けはじめた未来を楽しみにしていた母親トシ子の悲歎は端の見る目にも涙をさそう程だった。一カ月ほど泣き暮していた

が不意にどこへ行くとも知れず行方不明になってしまった。つましい生活の母子家庭では残された家財とて知れたもので、大家がアパートを更改するときに倉庫へ移され、二年三年と経つうちに消えて行ってしまった。身よりの知られていない母娘は、次第に隣近所の人々から忘れ去られて行った。

その野沢洋子が今有明の隣に坐っている。ホンコンを出発して羽田に向かうBA八五〇便の機内である。機体前部、ソファを配した特別席は飛行機の中とは思えない程ゆったりと豪華だった。料金もツーリストの三倍はするだろう。しかし、ガボン共和国の蔭の実力



第十八回

前号まで——有明を首領とする秘密組織は原子力潜水艦ネプチューン号を駆使して世界各地から数多の美女を巧妙な手口で誘拐していた。一方では彼等は麻薬シンジケートと根本的に対立し各所で決闘を繰返すのであった。数奇な運命に巻き込まれた混血の少女、イーラは一旦は麻薬組織に捕えられて苛酷な拷問を受けたが、結局、有明の手に救われる。山本百合子を追ってホンコンへ飛んだ捜査官新津は奇妙な事件に巻き込まれて捕えられ有明の友人蔡樹理の手に渡された。舞台は東京、麻薬側の怪美女十五号と有明との対決が近づく。

者、コングロマリットの絶対君主である彼にしてみれば、むしろチャーター機を持たないのが不思議なくらいだ、というべきかも知れぬ。

秘書の星恵美子がミス・アジアの美女達と一緒に遭難して以来、有明は代わりの秘書を探していた。たまたま、ホンコンを観光で訪ねていた日本人女性、小林敦子（実は野沢洋子）と知り合っただけでホレこみ採用することになったのである。というのは表向きの話で、真相は星が地上の生命を消して原子力潜水艦ネプチューン号に戻ったのと入れちがいに、艦から地上に派遣され、生命を与えられたのが野沢洋子であって、二人ともに生きてピンピンしていたのである。

「早いものだ。もう四年にもなるのか」

機窓にひらける雲海をみつめながら、有明がポツンと言った。

「はい、さようでございます、マスター」

うやうやしく小林敦子の野沢が答えた。

「いかな。マスターと呼んではいけない。

ここでは、おまえは私の女秘書だよ。世間の人が不自然でない程度の話し方をしなくてはいけない」

「でも……」

パツと頬を染めた彼女は、消え入るようにささやいた。

「私は、あなた様の奴隷として飼育していただきました。地上の洋子は今の洋子ではございません。久しい間のお恵みで、ようやく自分でも安定してまいりました。いやしい身分にふさわしい言葉づかいがもう身についてしまったのでございましょう。地上の言葉に戻りにくくなってまいりました」

恥かしげにうなだれる横顔に視線を廻した有明がキビシク

「そういうことでは、まだ調教が十分だったとはいえない。おまえは私の自由奴隷なのだから、あらゆる努力をつくして私の欲する女にならなければならぬ。そうだろう」

「はい」

「それならば、今、私はおまえが私の秘書になりすますことを望んでいるのだから、おまえはそれに、なり切らなければならない。いいね」

「でも……」

「又、でも……か。でも、何だというのだ」「お許し下さいませ。私は、お足もとに跪くのに馴らされてまいりました。それで、それ

でも、おそれ多うございます。いえ、おそろしいのです。せめて……」

と言いかけたところへ、スチュアーデスが来て申告書の提示を求めた。野沢洋子は、すでに「小林敦子」名義のパスポートを持っている。有明がガボン政府の公用旅券だから外交官と同じ扱いになる。

野沢洋子はアタッシェケースの中から、予めタイプしてサインのある書類をスチュアーデスに渡した。

もう一人の若いスチュアーデスがコニャックを運んで来た。二人のクルーが去って行く、もうグラスを半分程カラにしていた有明が、さりげなく

「せめて……？」

と、うながした。

「はい、せめて」

ますます赧くなり、口ごもりながら

「せめて奴隷のシルシを身につけさせていだいていたら——と思うのでございます。けれども、おお、お許し下さいませ。こんなことを申し上げることすら、大それたことです。よかれ悪しかれ、お心のままに従うことが私どもが、お誓い申し上げたことだったのですのに」

「そうか成程、私としたことが」
 恬然と微笑む有明は

「馴らされた奴隷は、自由がかえって不安となり、怖ろしく覚えるのかも知れぬ。よし、東京へ行ったなら、美しい黄金の鎖をつけてやろう」

はじめてホッとしたように野沢洋子が礼をいう。

「有難うございます。やっとそれで心にやすらぎが生まれてまいりました。ほんとうに、マスターのお恵みのおかげでございます」
 「いかなね。またマスターといってしまったではないか」

苦笑しながら有明がいうのにもう彼女は涙ぐんでいる。それをこらえようとするかのように幽かにふるえる紅唇がいつそ、コケティッシュだった。

「お恵みは、私ばかりではございませんでした。あなた様は母の命をお許し下さったのでございます。はい、あとで洩れ承りました。おろかな私はどんな罰でも償うことの

できない程の反抗罪を重ねてまいりました」
 「それで、見せしめのためにおまえの母親まで囚えたのだ」

有明が口をはさんだ。

「さようでございます。でも、私は——申しわけございません。——そのときの私は、まだおろかにも、あなた様の仕打ちを恨み憤る心しか持っておりませんでした」

「おまえの前で母親が拷問や凌辱を受けようとしたとき、さすがのおまえも屈服した。いや、それも心からではない。ただ降参したように見せかけただけだった」



「おっしゃる通りでございます。私が犠牲になれば、母の苦しみが救われるだろうという計算だけだったのです」

「いつわりの屈服を、私は承知の上でおまえを受け容れた」

依然としてやさしく微笑みながら有明は話をつづけた。

「そのようなおまえが、いつ、どうして心から私に服従するようになったのか」

「それは……」

と絶句して、ふたたび耳まで、まっかに染める野沢洋子だった。

思えば四年前の事だった。彼女ほど有明に抵抗した女はいなかったと記録されている。大抵の女達は、数十に段階づけられた硬軟強弱を巧みに組み合わせた教程におしながされると、いつの間にか洗脳されて、組織に忠実な人間に変容してしまう。勿論、その教程段階は与えられる職階や責任の軽重によって様々である。簡単にいえば高い位になる程、教程は重く、又そのチェックも厳重とならざるを得ない。野沢洋子は所謂「材質」がよかったから、相当な高位が最初から約束されていた。ところが彼女は容易に屈従しない。次々に加えられる拷問を耐えに耐え抜いてしまっ

た。手を焼いた有明は遂に母のトシ子を攫ってくることによって、ようやく目的を果たした。高位にランクされた場合に、いろいろ厄介な儀式があった。その中に「含頭礼」というものがある。いずれ後に詳しく触れなければならぬが、要するに、有明に対する完全畜従の誓願をあらわす意味で、膝行して有明の足下に到り、その規定のものを口中に柔合することと規定されている。下位の者には精巧な模型が使われるが野沢洋子の場合は前者だった。

彼女は秘かに、噛み切ってしまったおうと決心していた。高橋お伝そのままである。

玉座に坐る有明の足下に進んだとき、暖い掌が彼女の頭部や脊中をやさしく愛撫してくれたのである。

不思議な感覚だった。電気のような感動が全身を貫いて行った。催眠術にかけられたように、彼女はそれから有明に心から服従することになってしまったのである。

今、それを思い出すと消えてしまいたい程はずかしかった。

まっかになつてうつむいた野沢洋子を見て有明は一切を察した。そして、黙ったまま彼女の手に自分の手をやさしく重ねるのであつた。

た。

BA八五〇便は、予定より十分ばかり早く丁度、十五時に羽田へ着いた。

重要人物というので外務省からも、又、ガボン公館員も出迎えて、何のこともなく入国手続きが済んでしまった。

有明は疲労を口実にして最小限の打合わせをそそくさとすませて、待たせてあった車に乗る。宿舎は四谷の高台に聳えるOホテルの特別室。従者の客室を包含する広いコンパートメントである。

チェックインすると、キーを野沢洋子に渡して、身をひるがえしてタクシーへ乗る。三十分ほどして帰ってくると、もう部屋では野沢洋子の手で荷物が整理され、いつでも必要なものが出せるようになっていた。

有明が呼ぶと、彼女は喜々としてその足下に跪くのだった。縛ってなくても、手は自然と後に組み合わせている。

「裸になれ」

無造作に命令される。ギクリと肩を慄わせながら、彼女は立ち上って、はずかしそうにスーツを脱ぎはじめた。

やがて、一糸も身につけない野沢洋子のギ

リシア彫刻のようにホリの深い裸体が有明の眼前に曝される。

「約束通り鎖をかけてやろう。十八金の鎖だ濡らしても錆びはしない。そして……」

Tデパートの包装紙の中からとり出したのは何と水洗便所の把手だった。プラスチックのネジをはずして中空に何かを入れ、再び厳重に封印する。

「ただ鎖で縛っただけでは面白くないと思つてね。コイツを保持しておけ」

否も応もないのである。いきなりかがみ込む。保持とはどういうことかは、無論、彼女はよく知っている。

「イ、イタッ、ア」

思わず苦痛のウメキ声が洩れる。それに細い金鎖を通して素早くウエストからヒップからめて行く。最後に針金でグルグル結びあげ、熱したハンダで封印してしまう。

「さあ、これでいい。私の秘書でいる間は、この即席貞操帯を着けているのだ。この刺戟が、常におまえが私の奴隷であることを思い出させてくれるだろう」

苦痛と満足、羞恥と安心が交錯した世にも複雑な表情を示しながら、野沢洋子は豪華なカーペットの上に真っ白な裸身を丸めて平伏

する。下半身をT字型に割った金の糸は、その真摯な隷従を象徴するかのようキラキラ輝いていた。そして、柔肌をしめ上げるタテの鎖は、張りのある双丘を、一層豊かに見せる。それは、痛々しいというより、何かいじらしさをそそるアクセサリーであった。

和製ジャンヌ

スチュデント・パワーは世界中に荒れ狂っている。沈滞した体制社会では若さの持つあまり余るエネルギーを、吸収することが出来ない。

活火山というハケ口でもあれば熔岩はそこから噴き出したであろう。なまじ出口を閉ざれた若い力はアングラにドロドロとよどんでいつ、どこで爆発するかわからなかった。その意味で、中国やベトナムの青年の方が、日本やアメリカのそれより、かえって幸せなのかも知れない。

外見に比べて、パワーの内側は案外お粗末なものである。そこには思想もなければイデオロギーもない。ちがった表現での頹廢と安逸が麻薬のように彼等を爛れさせている。彼等の破壊欲は稚拙な衝動に過ぎぬ。幼児にと

って紙幣は只の紙でしかあるまい。その幼児が紙幣を破り棄てたからといって異とするのではない筈である。

しかし同時に、彼等は肉体的にいうと大人になりつつある。本能的なものが彼等の行動を支配するのを避けることは出来ない。運動家たちの性格をかたちづくる底流として、M的要素を否定することは困難である。自由とか個性とかを自ら圧殺してヘルメットをかぶりマスクで素顔をかくす。その上、リーダーの命ずるままに暴走する牛馬の集団よろしく馳け廻るのは、彼等がマゾヒズムの快楽に身を委ねているとしか思えないからである。

いささか理窟に走ってしまったが、キャンパスを支配するゲバの内側は現実としてこのような評価しか与えられない。

ある大学は学生運動の発生地であった。度重なる体験から、学生たちも体制側も、共に要領を覚えて、無駄な暴発をしなくなっている。若者たちの指向は、むしろ、学園を離れた活動に変わりつつあった。

殊に、その傾向が活撥になってきた理由としては、所謂平和をめぐる政治問題が考えられるが、実際は大学のジャンヌ・ダルクとい

われる謎の一女性の暗躍によって左右されているというのが真相らしい。昨年卒業したある有名な女優が、ひそかにこのグループを作ったものだともいわれているが、演劇研究部がそのアジトになっているのから見ても、決して根も葉もないことではないかも知れない。この謎の女性、ジャンヌの周りには十数名のそれも頭のいい娘たちがガッチリとスクラムを組んでいた。しかも半数は十人並以上の美人である。就中、ジャンヌはすぐれた美貌の持主だった。チャンとした名前もあるのだから、誰も本名でなくてジャンヌと呼びならわしていた。とに角、伝統的な英国演劇を専攻するということには間違いのないらしいのである。

ジャンヌの活躍ぶりは目ざましかった。内偵する警察当局が吃驚する程である。それもその筈、一時に数カ所でジャンヌが出現するから無理もない。ジャンヌをはじめ一団の女闘士たちは目まぐるしく服装を交換する。ヘルメットをつけタオルで覆面すると誰が誰だかわからなくなる。ジャンヌは無数の影武者を持つことになった。一つ目的のために集まり起居を共にすると言葉つきや態度はオソロシク指導者のそれに似て行くものだ。まして

声を潤らして早口でまくし立てるアジ演説はそれ自体没個性的なものだから、これも殆ど区別をつけ難くなる。

彼女たちはヤタラに「連帯」という用語を使う。これがまた、おそろしく広い意味に解されている。意見の異なるセクトが共同して闘う時にも使われるし、学校が文部省の指令に同調したときにも使う。あまつさえ、肉体同志のソレのときも同じである。後者の意味するところでは、自らの肉体を提供することを恥としない者もいるらしい。タルミ切った娼婦のそれとは違う。男子学生が夢中になるのも、これでは当然といわざるを得まい。

どこかの大学が閉鎖され籠城があったとする。彼女等の一人が潜入して行って同居生活に入る。俄然トリデは活気づいて行く。「処刑室」が作られ、セックスがきわめて公平に処理されるからである。警官隊が導入されても、彼等が抵抗をやめないのは、この「内助の功」が大きく影響しているといわれる。学生同志の内ゲバで死人まで出した騒ぎの背景にも、こうした黒十字隊をめぐるサヤ当てが指摘されている。

彼女たちが、自らの肉体を捧げることに躊躇しないのは、それがグループの士気をたか



めたり、その他共通の利益を図る目的のある場合に限られているからであって、個人的な欲望の充足は、たとえそれが恋愛という感情に根ざす場合であっても厳しく制限されている。それに違背すれば仲間からリンチを受けなければならぬ。そこに彼等のオキテがあり、秩序があるらしい。

さて、よく晴れた晩秋の午後、ジャンヌはめずらしく私服(?)で並木通りを歩いていった。チェックのショートスカートの、白いトックリセーター、赤い皮コートに赤ベレー。質素な服装だけれども、持前の美貌に助けら

れて、この女斗士は容易に銀座のムードに溶け込んでいた。道行く人は誰一人、この少女がキャンパスのヒロインであることを想像できなかった。所詮、はたちの娘は、はたちの娘である。

不思議なことに、同じブロックを何遍も何遍もグルグル歩き廻っ

ていることだった。そして、ほとんど三十分近くたった頃、一人のホッソリした娘が近づいて来て、彼女と並んだ。

「大丈夫。尾行はいないよ」

その女は聞きとれない位の早口でいった。

「Dホテルのフロント、八三五」

それだけいうと、ツと離れて行く。

ジャンヌは、そのままブラブラ歩いてガード下を通過して指示されたDホテルのフロントに立つと

「八三五号室」

という。フロントマンが無造作に鍵を渡してくれる。エレベーターで八階にあがると、

右手廊下の突き当たりが八三五号室である。

秋の日はツルベ落としに早い。五時といえどももうトツプリ暗くなっていた。うすぐらい室内で、もう二時間近く待っただろうか、ジャンヌは廊下を迂るような足音を聞いた。

トン、トン、トトトト。

合図めいた調子でドアがノックされた。

それでも注意深くチェンロックして扉を細目に開いた。

「私だよ。開けておくれ」

さっきの声がいった。

一度閉じた扉からチェンを抜いて、再びドアを開く。DON'T・DISTURBの札を表に返しながら、細っそりした女が素早く室内に入ってきた。二人は、ドアをロックするのももどかし気にピツタリ抱き合って口を吸い合うのである。そうした間にも細い女の手が器用に動くと、みるみるジャンヌのスカートが落ち、パンティがおろされて行く。下半身が裸にされると、今度はセーターをまくりあげて、ブラジャーが外される。そこではじめて抱擁が解かれ、セーターを首から抜かれたジャンヌの全裸がベッドカバーの上に投げ出された。荒い息使いをしながら細い女は、

自分も衣服をカナグリ棄てた。

二人はレズ仲間らしい。一時間近くの激しい秘戯のあとで、スパークした二人は息も絶え絶えだった。

しばらくして、やっと平静に戻った二人は代る代るシャワーを浴び、欲情の痕を洗い流すと、着物をつけ、サテという様子で向かい合った。

細っそりした女は、ボーイッシュな態度でジャンヌにいった。

「活動報告書と収支計算書は持ってきたらうね」

「はい、ここに」

打って変わったように女らしくなったジャンヌは、ハンドバッグの中から幾重にも折畳んだレポート用紙を差出した。

「よろしい」

サッと目を通した女が、

「もういくらも残金がないね。又、百万円ばかりアンタの当座に振込んでおくよ」

言葉の訛りから、ジャンヌにも相手の女が日本人ではあるまいと想像できた。しかし、学生運動の資金源は秘中の秘である。好奇心を持つことは許されなかった。ジャンヌがレズ係りになってからでも相手は頻繁に変わっ

た。細っそりした女とペアになってからまだ一カ月ほどにしかならないけれど、今度はアプローチからして違っていた。ホテルに呼び込まれたジャンヌは無理無体な女のレズに屈服させられてしまったのである。それどころか、どこをどうしたのか、二度三度と逢う瀬を重ねる毎に、ジャンヌの方がかえって夢中になってしまった。かくされた異常性のヴェールがムシリとられてしまったというような感じだった。仕事の上でも肉体の上でも、女はジャンヌを完全に支配することとなった。ジャンヌには思いもよらぬことだったが、この女こそ麻薬シンジゲートのヒロイン、イーラがあれ程苦しめられた、第十五号なのである。中共系のシンジゲートが吸い上げた膨大な資金を政治に投入することは寧ろ当然だといっている。ジャンヌが運動家たちから重要視されるのは単に彼女の行動力や美貌からではなくて、彼女が覆面資金のキーガールだからでもある。

話題を変えた十五号は

「ところで、学生運動とはちがうけど、一つ頼みたいことがあるんだが」

レズっている今のジャンヌには否も応もあ

る筈がない。

「どんなことですか」

「Oホテルに泊って、特別室に陣どっているアリアケという男を見張って欲しいんだ。出来れば色仕掛けで彼に近づけたらもったいいんだが。彼は元日本人だが今じゃガボンというアフリカにある国の人間になっていて今度の訪問も非公式乍ら政府の公用できている」

「それで、私はどうしたらいいんですか。学校へも行かなくなっちゃならないし……」

新発足 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千円
佳作	一篇につき	三千円

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

「いいんだよ。四六時中見張っていてくれと行ってやあしない。あたしは顔を知られたくないから、代ってもらいたいだけさ。必要なときには、いつもの方法で連絡するから、その指図通りに動いてくれればいい。そのほかは、せめて夜の間だけでも彼に近づく努力をしておくれよ」

「私にできるかしら」

「できるともさ。ただ、こんな安っぽい恰好じゃダメだ。アシタ、一緒にデパートへ行っ

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

てあげるから、思いきりドレスアップするんだ。小遣いも別に要るだけあげるよ。運動資金を使うわけには行かないから、とりあえず十万ほどここにある」

自分のハンドバッグからジャンヌのそれへ手の切れるような一万円札の束が移しかえられた。

「そうそう」

忘れていたという風に十五号がいう。

「アリアケは一人じゃない。女の秘書を連れて来ている。けど、あたしの見るところじゃ彼のスケじゃあないね。そんならあんなにオドオドする筈がない。召使っていうより、まるで奴隷といったような感じなんだ。どのみち、アンタの邪魔にはならないだろう」

「その人は何ていう名前ですか」

「エート、たしかコバヤシ、コバヤシアツコといったかしら」

「エッ」

突然、ジャンヌの顔が蒼白になった。

「どうしたんだい。知った名前なのかい」

「ええ」

茫莫としたまなざしでジャンヌが答える。

「同名の人も多いんでしょうが、その名は死んだ私の姉と同じなんです」 (未完)



A

春になって、或る日、町のお風呂屋はのれんを掛け替えた。真新しい水色ののれんで、鶴の絵柄が白く染めぬかれている。

すっきりした感じだった。

屋号が「鶴の湯」という銭湯である。

この湯に、きまって終い湯頃に、ひっそりとひとりでやって来る婦人が居た。

私は、難かしい言葉は知らないけれど、中年増としまというのだろうか、やや若さを過ぎた、落着いた美しいひとだった。

女の私でさえ、魅き込まれるようにそれはよく整った美貌の持主で、とりわけ黒く潤んだ眸めが、何か語りかけるように、一種神秘的な魅力を宿していた。

偶然そのひとの眼と眼が合って、束の間、瞬まばたきもなく見つめられると、私はなぜとばかり顔を赧はにからめて、胸が妖しく弾んで、口惜しくくらい感情が波立つのだった。

板の間で、そのひとは匂うような色白な、みごとな裸身をさらすと、広い湯殿へ身を入れて来るのだが、しまい際で、浴場はがらんとしており、先客は私を含めて大概二、三人ぐらいで、それも上り湯をつかったり、駄を

サディック・レズ

夢魔に似て

木暮 加奈子

拭いたりしている。

私は別だ。

私はこの美婦人が現われるのを辛抱強く待っていたのだから。

私は湯舟の中に、とっぷり身を沈めて、さりげないふうに構えて、彼女を観察する。

彼女は二、三度、肌を湯を掛けると、おもむろに立上って、片肢がつつましく湯舟のふちをまたいで、すーっと湯に身を沈める。

湯の中でやや四肢をくつろげて、それからふっと眼をみひらいて私の眼と眼が合うそのとき、私は思わず赧はにかくなって、くやしいくらい感情が波だつのだ。

私の胸のときめきが相手の胸に伝わるのだらう、彼女は重そうに美しい顔をそらして、じいっとしているが、程なく湯舟から外に出る。

そのとき、私の視線は彼女のうしろ姿にそそがれるのだが、その白桃のような恰好のよいおしりに、いたいたしい折檻の痕を、私は毎度、この目ではっきりと見た。

B

春の或る日、町の銭湯「鶴の湯」は真新しい水色ののれんを掛けた。

私が始めて、裸に痛々しい折檻の痕を有する美婦人と言葉をかわし合ったのは、その日のことだ。

湯舟の中で、彼女が私にむかって示したやさしい微笑から、自然と私たちの口が、ほぐれた。

もっとも、語りかけたのは彼女の方で、「学生さん？」

と、微笑をたたえて、彼女は訊ねた。風呂場での声は、妙に甲高くひびく。それとも声が高いのは地声なのだろうか。

「ええ」

私は疼くようなうれしさで、答えた。

「そう、やっぱり。学生さんらしいと思っていたわ。高校生なのね」

美婦人は抑えた低い声を出した。

「ちがいます」

「中学？」

「いいえ」

私は、つい笑って、大学二年生であることを言い、学校の名前まで喋ってしまった。名門校であることを誇る気持が、私の心の中にあつたようだ。

彼女は感心したふうの小首をかしげて、その神秘的な黒いうるんだ眸で絶対逃すまいとするように執拗に私の眼をみつめた。

私の裸は突然、泳ぎ出した。神秘的な眼の力に引き寄せられたように裸が寄って行っているのだが、事実上彼女から手をつかまれて引っ張られているのだった。

手を握られたのが夢のようだと思う間もなく、次には湯の中で乳ぶさと乳ぶさが触れ合っており、私は、思わず悲鳴に似た声を挙げた。

「静かになさい」

やさしく、なだめるように、そのひとは言った、憎いくらい落着いた声で。

「いつも私が来るのを待っているくせに」

「そ、そんな……」

「あら、違う、というの？」

彼女は不意に、邪慳に、私の裸を突き放した。

「正直じゃないのね、貴女ってひと——」

何か哀れむようなまなざしを私の顔に送って、彼女は立ちあがった。みごとに裸身が湯をはじいてつややかに輝き、彼女は背を向けて、湯舟のふちをまたいだ。

今夜もやはり、臀部に青づいた折檻の痕がなまなましく、私の眼を撲った。

彼女は私を黙殺して裸を洗い始めた。香りのいいシャボンの匂いととともに、そのひとの裸身は白いゆたかな泡にくるまって、私は、雪を、連想した。綿雪か何かにいろどられたように。

今夜も私たちふたりが最後の客だった。

彼女が裸を拭うとき、私もまた裸を拭っていた。服を着るとき、私も同じく服を着ていた。履物を履いたのも一緒だ。

そうして、殆ど並ぶようにして外へ出たのだが、美しいひとは依然私を黙殺したまま、軽やかな足どりで道を辿り、ふりむこうともしなかった。

二丁程も私は彼女のあとにしたがつて黙々と歩いたことだった。そのうちに、悲しくなつて、私は往來の中で立ちどまった。悲しみと同時に、自分自身に嫌悪と腹立ちも覚え、私は夢魔を払うような思いで、夜道に佇立した。

春のなまぬくい夜気の底にそのひとの姿は溶けるように消えるかと思えた。すると、私はそのひとをなお追いかけたい俄かな衝動に襲われて、その場に蹲まってその衝動をけんめいに抑えた。

突如、背後から私はヘッド・ライトに照らし出され、お尻の寸前で、けたたましいブレーキ音がひびいた。

「馬鹿。轢き殺されたいのか」

車から降りて来た運転手は、泡を喰った声で、私を呶鳴りつけた。

ブレーキ音が凄まじかったので、少し向こうの交番から警官が飛び出して来て、私は不本意にも、いらざる騒動をひき起こした。

交番で二十分ほど説諭された。ひととおり注意で済む筈なのを、私は生意気にも理屈をこね、自分でも何を言っているのか分からなかった。湯の中での乳房と乳房の感触をそんなときに熱い感覚で思い出したりしていた

のだ。

「それでも大学生か」

という車の持主の罵声を背中に聴いて、交番から道へ出たとき、あのひとの白い美しい顔が目の前にあった。

「あなたって、へんな人ね」

と、美婦人は齒切れよく言った。齒切れのいい口調が妙な感じだった。

「さあ、一しよに歩きましょう。私のおうちへ招待するわ」

割と近くなのよ、と彼女は言い、やわらかな腕を私の肩にまわした。私は素直に肩を抱かれていた。

C

私は下宿を変わった。

F台地に近い場所に恰好の学生下宿があった。そこをみつけたのは通子夫人だった。移るように、私にすすめた。すでに敷金も払込んだという。

「少しでも近い処に居て欲しいの……」

汗ばむほどにあたかな午後、古風な庭に面したテラスの椅子に真裸で掛けて、美しいひとは媚びる口調で私に言った。つやつやと

した裸の太腿を二本とも私は鎖で縛りつけていたので、彼女はたとえ椅子から立上ってもひと足も歩けなかった。椅子はただの丸い木椅子なので、私は背後から彼女のおしりを鞭で打つことも容易だった。

長さ一メートル程の褐色の皮鞭を少し短かめに持って、私は気高い美女の、むざんとも見える裸の臀部を思うさま打擲して、そのソプラノ調の悲鳴を愉しんだ。

引越しいって、私の財産は殆どスーツケース二箇におさまってしまい、旅行に行くよりも、もっと手軽だった。

鳥のように身軽に私は果を変えて、まだ日のあるうちにF台地の高みの洋館に立ちもどった。この洋館の玄関には、男名前の表札はなく、「千原寓」としるした陶製の表札が出ているだけだ。

その玄関の前を迂回して庭へ出ると、この館の美貌のあるじはテラスの椅子に真裸で掛けたまま、美しい重い首を垂れて、嗚咽していた。

私の足音を聞きつけてから、俄に泣き出したのかもしれない。泣き方がふと芝居めいてもいた。

「引越し、もう済んだわよ」

近くなつたわ、と私は彼女の耳に囁き、そして、その白い可愛らしい耳朵を噛んだ。

「うっ……痛い……」

うめきながら、うれしい……と通子夫人は言う。

「なにがうれしいの？　こうされるのがうれしいの!？」

私は二本の編み棒を残忍な槍にして彼女のまごとな美しい乳ぶさを責め苛んだ。

「ああッ——ああッ……」

たえまなくソプラノ調の悲鳴がひびいて、庭木の梢に飛来した野鳥たちも、もの怯じしたふうに、めったに鳴かなかった。

「ああ、どうしてやりましょう……」

私は額の汗を袖口で拭いながら、恰も私自身に責められているように喘いだ声で、

「この美しいマゾッホを——どうしてやりましょう！」

「鞭で、もっとこらしめて！　ねえ、もっと打って、順子！」

ヒマラヤ杉の枝越しに洩れ落ちる夕陽の逆光が、通子夫人の顔を照らして、汗ともなみだともつかぬ雫が、その頬をしとど濡らしている。

「もっと打たれたい？」

鞭打ちに私はつい力がはいり過ぎて、夫人の絹のように白い膚が裂けて斑らに血がにじんでいた。

夫人は黒々と濡れた眼で私の眼をみつめ、おもむろに唇を開いた。私はその首を抱き、絞めるように強く力をこめながら唇をむさばった。むさぼる、というにふさわしい私の口づけに、彼女の唇も動物的にこたえた。

D

君は冷たくなったネ、急に。

校門に沿った石塀の途中で私を待受けていた学生は、そう言うと同時に、大きな靴で、石を蹴った。石は途方もなく長い距離を飛んだ。

学生はラグビー部の副将である。

くだらない言いがかりに似ていた。

弁解するのも億劫な気持だったが、強いて私は言った。

「近頃ね、私、何か夢を見ているような気持ちなのよ。目ざめていて、ずうっと夢魔に襲われているような……でも——」

私は一度口をつぐんで、また口を開いた。

「貴男とは関係のないことだわ」

「信じていたんだがネ」

私が歩き出したので、彼もののろろと歩きだした。

「何を？」

「おたがいの愛情を、サ」

ゴーゴー喫茶に一度つきあっただけで、おたがいの愛情をサ、もないものだろう。

たまったものじゃないと私は胸の中で苦笑しながら、駅で、振り切るように彼とわかれた。

電車の吊皮につかまって家路を運ばれて行きながら、私は通子夫人のなめらかな白いおとがいを眼にうかべた。少女のようにやさしく可愛らしいおとがいを想ったのは、いまの男学生の不精ひげのむさくるしい角張った顎からの、反動的な連想だろうか。

ひげをのばした男性にセックス・アピール云々と、ひとは言うが、私にはそんな感覚はない。

なめらかな白いおとがい、こんもりとした柔らかな乳房、白桃のようなお尻……私は通子夫人の裸形の全体を臉に描いて、はや陶酔を覚えていた。

（やはりレズか、私は!!　そしてサドティツクな傾向が濃いのか!!）

私は胸の底で、おののくような思いで、その問いを自分にむかって発した。

そしてその答え方に、私は悩んだ。

電車を降りると、小雨が降り出していた。ぬくい、春の雨だ。私は肌着が汗ばんでいるのを、ふっと意識した。

「もう来まいと思うんだけど……」

鞆をさげたまま千原邸の玄関に立って、

「やっぱり来ちゃう……」

私は言った。

通子夫人はあきらかに聞えないふりをして

「今日、学校あったの？」

「ええ、ゼミで」

「はやく、お上りなさいよ」

今日は純白のナイトドレスを、この美しいひとは着ていた。胸衿が広く割れてブラジャーもなんにもしていないから胸の隆起が殆ど見え、おしりの線もまた露わで、パンティをつけていないことが私に分かる。

茶の間ではなく、ホームバーに私を導いて器用にシェーカーを振ってカクテルをつくりながら、

「何も悩むことないじゃない」

歯切れよく夫人は言い、いまものを言ったその唇を突きだした。

カウンターをへだてて、私たちは下手なキスをした。なぜなら高い音をたてたからだ。

カウンターをくぐって出て来ると、夫人はブルーの絨氈を敷いた床に、崩れるように臥て、私の唇から口うつしにカクテルを飲むことを希った。私はそれをかなえてやり、私もまた一息にグラスを乾した。

「順子、いじめて……」

「ああ、どうしてやりましょう！」

私はすでに、熱にうかされているのと同然で、うわずった声で叫んでいた。

気高い美女を真裸に剥き、みごとな双つの乳ぶさを鎖で緊縛した。

私は足の先で責め廻った。

さらに胸の上で、柔肌を踏みつけて私はタップダンスを踊った。

ロウソクを燃やして、鎖の環の中に立て、熱いロウルイが乳くびにしたるように仕掛けた。

夫人が身をよじってうめくと、私は脚を押えつけて太腿に齒型を印した。

夫人は泪を流して苦痛にうめいた。

ロウソクが半ばまで燃えたところで、私はその責めを許した。鎖を解いてやると、通子夫人は用意した薬箱の中から何かの塗薬を取

って、乳ぶさになすりつけた。乳くびの周辺が赤くただれている。

「マダム、貴女の情夫は誰なのよ！ どの誰なのよ！ 今夜こそ正直に白状なさい！」

私は、やにわに彼女の肩に鞭を浴びせた。不意打ちだったので、通子夫人は一瞬、叫びもあげず、蛙のように、ぶざまに這いつくばって、ひくくうめいた。

ぶざまだが、また一種妖美な姿態だった。

そのままじっと動かず、二の鞭のおとずれを、待っている。

私は思いきり力一ぱい鞭を叩き込んだ。

その一撃で絹のような白い膚が裂けて血が噴き出たかのように、鮮紅の斜線が奔った。

「あ、——ううむ！」

「白状おし！」

「言えないわ……言えないわ……」

「まだそんな強情張るんだったら、もう許さないわよ！」

私は、めちやくちやに皮鞭を振って、美女の裸の腰を、文字どおり完膚なきまでに、まっかに染めあげた。

お芝居ではなく、真実、私は悪魔のような残忍さで打ちに打った。

「ゆるして！ ゆるして！」

庭のテラスへ連れ出されながら通子夫人は哀願した。白いふくらはぎまで斑らに血がしたたたって、凄惨な姿で、許しを乞うのは本音だと分かったが、私は容赦しなかった。

テラスの丸柱に鎖で胴を縛りつけて、頭から小雨に打たせながら、私はさらにその裸形に鞭打ちを加えつづけた。

「白状おし！ 白状するのよ！」

「ああッ！ ゆるして、もう——」

打たれるたびに美女の黒髪から雨しぶきが立ちはじめていた。

E

ほの暗い中で私はベッドを降りてスリッパを着る。スリッパの清潔な白さが、いやに目にしみた。着ると、まだ火照りのひかない肌にそれは冷たく沁みて、私の胸に幾ばくかの落着きをもたらした。

私は、あかりをつけた。

さっとしたすばやい動作で、通子夫人は毛布をひきあげて眼の位置まで顔を隠した。

「いきなり電気点けて……意地悪ね、順子は……照れるじゃないの」

つい今までの痴態を恥じる思いがするのは

夫人ばかりではなく、私もまた同様だった。

私は声もなく黙って牀に衣服をまといつた。

「帰るわ」

言うど、通子夫人は毛布をずりさげて黒い美しい眼をあらわした。

「そんなに見つめないで……帰りたくなくなるから」

眼をそむけて私は言った。

「泊っていったらいいじゃないの」

貴女は何を悩むの？ とこの妖美なおんなは言うのだ。

「泊っていったよ、順子。今日の貴女は少し冷淡よ。責めも手をぬいているし」

「何をよ？」

「忘れてるの？ ホラ、あの責め——」

「流腸？」

私は、あっさりと言った。

「されたいの」

「はい、おねがい」

「いやだわ」

私は寢室の扉口まで歩み寄って、皮肉な笑いを頬にうかべた。

「マダムは白状しないから、ノーよ」

「情夫なんて誰もいないのよ。居ない男のこ

となんか白状しろったって無理じゃないの」

ねえ順子、信じて。と拝むように言う夫人の語氣に私は始めて、うそでないものを匂った。

すると、鶴の湯で、私の目に見せていたあの青づいたなまなましい責め痕は、やはり彼女が言うとおりの、彼女が自らの手で傷つけたものだろうか。

彼女の言葉を信じればそうなるのだった。

「ねえ、分かってよ」

追いうちをかけるように彼女は言い、流腸を希求して、牀の一部を露わに灯のしたにさらした。

「ねえ順子、早くう……」

私はブラウスの袖を捲り上げた。

「ようし、うんと苦しめてやるから」

黒い濡れた眸がひときわ妖しくひかって、私の所作を見つめている。苦痛の予感をその目の底にたたえながら、ガラス・シリンジの嘴管にワセリンを塗る私の手つきをジッと見つめて、戦慄を感じたのは、むしろ私の方だった。

「支度なさい。そんな姿勢では氣にいらないわ」用意を整えて私は言った。

二度三度と通子夫人はポーズをとり、やっと私の氣に召すポーズについた。

三百CCの薬液を私は残酷に一気に施術した。

ソプラノ調の悲鳴をあげ、つぎに腹の底から絞り出すようなうめき声に変じて、一匹の白い芋虫のように悶え苦しむ肢体に、私は鞭を見舞ってやり、五分やそこらでは仲々トイレを許したものではなかった。あぶら汗にひかって、全身うすいピンクいろにほてって、くねくねと身悶えるこの美しいひとの肢体のうごきは、膺美の極みであった。

F

銭湯、鶴の湯に至る道の両側に、桜並木がある。とうに花は過ぎて、今は葉桜が、したたるような濃いみどり、爪のいろまで青く染まるようだ。

私は赤い洗面器を抱えて、昼湯に行くのだった。

今日でちょうど一週間、あのひとと逢わないでいる。

逢うまい、と心に決めたために、私はくるしい。この心理は、一種の自縄自縛だ。逢い度くてたまらないくせに、抵抗している。

死物狂いといってもいい自分の心の中の抵抗

抗だった。

あのひとは、私の下宿をおとずれることはしない。電話をかけてもよこさない。

放ったらかしなのである。きっと、私が内心の抵抗に負けて、また私の方からあの西洋館の玄関に立つことを、十分な自信をもって待ち受けているのだろう。そうに違いないと私は思っている。

新鮮だったのれんも、日に晒されて、もうかなり、くたびれている。

昼間でも、女湯の方は、混んでいた。板の間で裸になって、私は何げなく番台の方を見たのだが、ふと、おや？ と思った。

似ているのだ。

あのひとの家の仏間に飾ってあるあのひとの夫の遺影の、その顔と、この番台の男の顔とが、ひどく似通っている。

瓜二つといてもいいほど相似していた。

千原家の仏間の遺影は大きく引伸ばされているので、生前、薬品会社の若手重役だったという通子夫人の夫の顔は、その顔立ちや、こまかな特徴がはっきりして、私のよく記憶しているものだった。(彼女の夫は社用で、ドイツ・西ベルリンへ向かう途中、飛行機事故のために死亡している)

私は、自分の姿が真裸であることも忘れたふう、いつとき、番台の男の顔を見つめつけた。男は客に釣銭を渡し、次に石鹸を売り、またカミソリを売り、なにかと忙しそうだった。

(ほんとに、よく似ているなあ……)

私は胸の中でそう呟きながら、仕切りのガラス戸をあけて、浴場へはいった。

お湯につかって、私は推理的な思考をめぐらした。

私は瞑目して、名探偵のような表情を泛かべていたことだろうが、話しかけられて、目をあけた。

妊娠腹を抱えた三十位の女が、あつかましく背中を流してくれないかと言う。私は不愛想にことわった。

『貴女は何を悩むの?』

あのひとの声が、心を蕩かすようなやわらかいひびきで、耳に甦った。乳房が疼くような甘やかな情感が身うちにはしって、私は湯の中で陶酔におちいりかけた。想えばこの湯舟の中であのひとに手をつかまれて始めて乳ぶさとお乳ぶさが触れ合ったのだ……。

『何も悩むことないじゃない』

あのひとの声音が、しつこく、耳の底に

漂っていた。

断ち切る感情で、私は勢いよく湯舟から上った。

板の間で服を着終って、私はふたたび番台の男の顔を眺めた。主人なのか、番頭なのかちよつと察しがつきかねたが、眉が濃く端正な顔立ちをしており、番台に坐らすには惜しいような上品な風貌だった。

土間でサンダルを履いて、私は必要でもないのに石鹼を一箇購った。そうして近くから男の顔をさらに眺めたのだった。

私は、ちよつと軽い失望のようなものを味わった。間近でみると少し似ていないように思えた。瓜二つとは、いえなかった。

けれど、あの仏間の遺影の顔と、この世で最も似通っている顔は、この風呂屋の番台の男の他にないだろう。

私はのれんをくぐって外に出た。

「もし、お嬢さん」

青い葉桜の並木の中程で、私はうしろから呼ばれた。ふりむくと、湯舟の中で狎々しく背中を流してくれといったあの妊婦が、急ぎ足に追い縋って来ているのだった。

妊婦は息を弾ませながら媚びるような笑顔を作って、

「一緒にどこかで休憩しないこと？」

狎々しくすり寄って、私の肩に手を置き、指先で私のうしろ衿を愛撫する。

「好きなのよ、貴女のようなタイプ……」

青葉の反映で女の顔は蒼く見え、唇は白っぽくうつった。女は興奮しており、そのために唇が白く乾いている感じだった。私はわずかに余裕を持ってこの奇体な女を観察していたが、女の手がいきなりスカートのうえからおしりを撫ぜると、私はちいさな叫びを挙げて、うしろへ飛び退った。

「逃げないで。お願いだから、逃げないでよう——」

「いやよ」

「なんて薄情な人——」

「なんてあつかましいひと」

おおむ返しに、私は言った。

女が迫って来ると、私は小石を拾って、女のふくらんだ腹部にむかって投げつけた。女はものともせず、豹みたいに目をひからせて私をとらえようとする。私が走り出せば、むしろこの孕み女は私の脚にかないっこない。女はそのハンディを心得ているために、そのけものように光る目の底には一抹の絶望的で哀切な色が宿っていた。

「頼むわ、逃げないで——」

女は血を吐くような切実な声音で言った。そのとき、私の脚は飛ぶように道を駆け出していた。

G

高台の洋館の門を潜って、負けた、と私は自分にむかって言った。

(やっぱり、負けた……)

私は赤い洗面器を抱えたままやって来ていた。

この家の美しいあるじは憎いばかり落着いて、私を招じ入れた。洗面器を抱えた姿を笑いもしなければ、この一週間の間、どうしていたのかと問い訊すこともしない。

「コーラ、ちょうだい」

私は、まるでふてくされてしまつて、茶の間で脚を投げ出して横柄に言った。

「早く、コーラ持って来てよ」

「荒れてるのね、どうしたの？」

コーラの栓をぬきながら通子夫人はわらった。なんとという美しい眸だ、と私は思う。世界中に比類のない宝石だ。

「ねえ、マダム。わたしは同性に好かれるタ

イブかしら？」

ひと口、コーラを飲んで私は言った。通子夫人は和服の帯を解く手を一寸休めた。それからまた帯を解きつづけながら、

「好かれるタイプだわ。とくに年上の女にはね……順子」

彼女は、にじり寄って白魚のような綺麗な手で私の手を握りしめた。

「いじめて、順子——貴女が来るのを待って下着はいつもつけていないわ。着物を剥がれたら、下は裸よ。いじめて、順子！」

私が着物を剥ぐと、明るい茶間に気高いばかりに美しい白い裸身が匂いたつ。

私は一切を忘れた。

心の中の懊悩も、あの奇体な妊婦のことも霧のように、かき消えた。

渡された皮鞭にぬくもりがあった。人肌のぬくもり……夫人は皮鞭を素肌に巻きつけていたのだろう。

私はその鞭で、絹のように白いなめらかな膚を打ち据えた。

「ああ！……ああ！……」

ソプラノ調の悲鳴が、妙なる音楽のように私の耳に快くひびいて、鞭を振う手は一そうふるいたって弾む。

乳房、背中、お尻と私は、まっかな鞭の痕を印していった。

水を飲ませて……と夫人は途中で嘆願したが、私は強くかぶりを振り、さらに烈しく鞭を与える。

「水、水を！……」

ふたたび彼女は嘆願し、

「貴女のもいいのよ」

ふるえる声で言った。

それで、私は通子夫人が何を所望しているかを知った。

「ほん気？」

「いいの、ちようだい。飲ませて」

「じゃあ、ほんとに飲むのよ」

私の与えた水はほとぼしって、彼女の美しい顔のみならず、座布団や畳まで濡らしてしまった。

それで、後仕末のために通子夫人はバス・ルームにはいつて行水をした。

「ねえ、マダム」

赤く鞭腫れしている夫人のおしりを見やりながら、

「このお風呂、こわれているというのは、うそね」

私は刑事のような口調で言った。

「私、推理したのよ」

「スイリ？」

「そう、推理したの。まず、このお風呂がこわれているというのは、絶対嘘だな」

私は夫人の臀部にびしっ！とひと鞭、浴びせた。

「ああ——」

「嘘でしょう」

「ハイ……」

通子夫人は、うなずいた。

「よし、あとは私の言うことをお聞き。お風呂がこわれてもいないのに、わざわざ銭湯へ行っていた訳は」

と不意に私は、夫人の乳ぶさに不意打ちの一撃を与える。ソプラノの悲鳴が白いタイル壁の浴室で、わあんとひびく。

この美しいひとの体に、マゾヒズムの血を濃くさせたのは、良人に相違ない。

良人を、彼女は愛していたことだろう。

良人が亡くなってもなお、深く未練を繋いでいたことだろう。

たまたま或る日、お風呂のガス装置が故障して、彼女はやむなく銭湯へ出かけて行き、その鶴の湯の番台で亡き主人とよく似た顔の男を、発見した。

以後、自宅の風呂は修繕されたにもかかわらず、彼女は鶴の湯へ赴いていた。

自ら鞭で、その美しい膚を責め苛んで、青ずいた責痕を歴然とさせて、亡夫に似た男の前でその裸体をさらしていた。

夫に責められているような法悦の心地が銭湯の板の間で、この美しいひとの胸にたゆと

うていたことだろう。

私の推理は殆ど狂いなく的中したといっ

てよいだろう。
通子夫人は幾分蒼ざめた神妙な表情で、その美しい重い首を、こっくりとさげていた。

「その……通りよ……」

彼女はうるんだ声で言ったが、次には、つ

きつめた口調で、

「でも、今はもう愛しているのは順子だけ。順子ひとりだけよ！」

夫の記憶は忘れ去ったと言う。

「ほんとうよ！」

「お這い」

と、私は女王の如く命令した。

「ハイ……」

市松模様のタイル床に蛙這いの妖美なフォームを取らせて、みっちり鞭打ちを加え、雪肌をまっかに彩りつくして、私はたんのうし、同時に通子夫人も鞭の味をたんのうして

H

「あら、雨じゃない？」

鏡台の前で、化粧を直しながら黒い濡れた目が庭を見やった。

狐雨というのだろうか、明るい陽差しの中にこまかい雨脚がきらめいていた。

「用意、出来て？」

今度は反対に首をねじって夫人は私を見返った。

「出来たわ」

●躍進記念● 百萬元懸賞 原稿募集

▽賞 金△

入選作品 一席 1篇	五万円	10篇
入選作品 二席 1篇	三万円	10篇
入選作品 三席 1篇	一万円	10篇
入選作品 四席 1篇	五千元	20篇

▽内 容△

一、特異な風俗文藝誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新し

▽規 定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品の中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。その上、二枚は四百字詰原稿用紙に換算して三十枚以上の原稿用紙を提出し、必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙を毎月十五日に入選作品は順次次の懸賞第一頁に原稿は、他の一般原稿と区別する。ため、投稿の原稿は原稿として返戻は致しません。の、送付先は、大阪市住吉郵便局私書函第41号、暁出版株式会社、奇巧編集部懸賞原稿募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によつて下さい。採否は誌上発表を以てご承知願います。

私はガラスシリンダーの嘴管に、たっぷりワセリンを塗りおえた。

この場で施術するつもりだったが、雨を見ると、庭へ連れ出して雨に濡らさせてやろうという残忍な意図が湧き、私は鞭を振って、家畜を追うように通子夫人を庭へ追い立てるのだった。

「ああ、順子、許してえ」

と彼女は甘え声を挙げながらテラスから青芝の庭へ走り出ると、誘うふうに悩ましく腰を振って見せた。

「さあ、行け！」

私は、びゅーと皮鞭を振る。

庭の奥には、ひょうたん池があつて、鯉や真鯉が、のどかに遊泳している。鮒や、めだかなども棲んでいるようだった。

びしっ！ 鞭が夫人の背肌に炸裂する。

「ああッ！」

通子夫人は真裸で石橋を渡って池の向こう岸へ追い立てられた。

「おとまり、そこでもいいの」

石のうめこみ灯籠の前で、私は夫人を立ちどまらせた。

私は鉄の鎖でもって、うめこみ灯籠に美しい裸形を縛りつけた。

石灯籠は池のふちにあるので、縛られた夫人の姿は水面に倒影した。

人が来たので鯉は喜色して騒ぎ出した。餌を貰えると思ったらしい。池に波が立って、白い裸形の倒影は碎けて揺れた。

あいにくと雨はやんでしまつて、空を見ると、ぬけるような青空だった。

「ほんとに狐雨だったわね……」

通子夫人は、つぶやいた。

「濡れながら責められたと思ったのに」

私よりも、むしろ彼女の方が残念そうだ。

「さあ、責めてちょうだい、順子」

「今日は十五分耐えるのよ。よくって。もし守らなかったら、眉を剃り落とすわよ」

私は厳粛に宣言した。

「はい……おいしいつけどおりにいたします。わたしの苦しむ姿をたっぷり観てください」

通子夫人も、また厳粛な声音で答えた。

「じっとして」

私はガラスシリンダーを近づけながら、縛られたこの艶麗な囚人の姿が、白昼夢のように想えた。

残酷な浣腸器も、そしてそれを操作する自分の所作も、夢のなかの出来事のように思えた。

石灯籠も、池の魚も……。

「あ、ううむ……」

という苦しい夫人のうめき声も……。夢の出来事、夢魔にも似た気分ひたされながら、私は施術を終了した。

そして、腕時計を眺めて刻を算^{タイム}え出しているのだった。

「あ、ううむ……ああううむ、ううむ！」

……五分……十分……。

通子夫人は凄艶な苦悶を示して、十五分間耐えぬいた。

全身の肌にはかる膏汗。

流れる膏汗が池の中に、したたり落ちるようだ。

「いいわ、許してあげる」

鎖を解かずに、私は言った。

「ああ、はずかしい……」

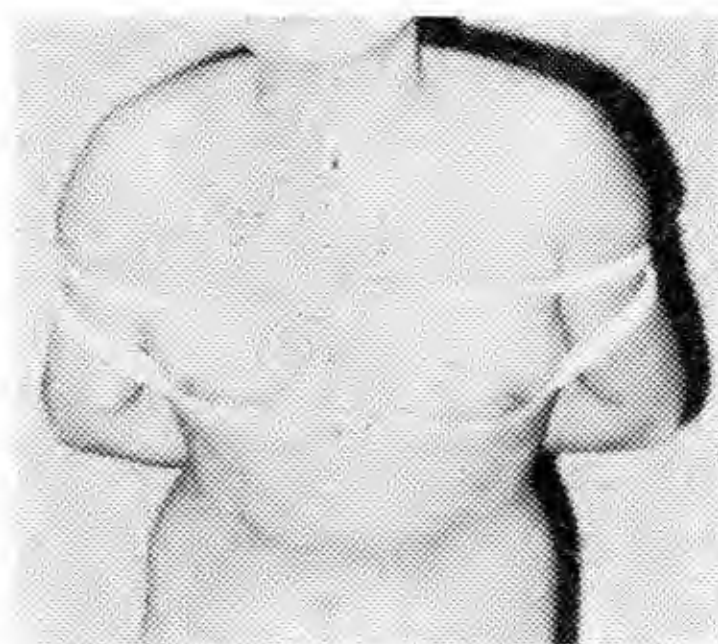
その呻き声とともに、夫人は忍耐を破らざるを得なかった。

池の鯉たちが躍り上り縄れあいながら、美しいひとの与えてくれたものを、その口で奪い合った。

——(おわり)——

カット・辻 梶太朗

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表



飼育の

難しさ

東 一 男

「苦は楽の種」の格言のとおり、いつかきつと愉しみとなるのでしょうか、飼育することは大変むずかしいものだ、やっと分かったので、現在の私の心境を纏めてみました。

二年前から本誌ファンとしてとりつかれてる愛読者ですが、投稿するのは、今回が初めてです。毎号先ず目を通すのが、辻村先生のカメラ・ハントで、今度はどんな可愛い子ちゃんを、どのように緊縛してプレイを進め

てゆくのか、興味深く楽しく読み、かつ研究しています。勿論フィクションの部分もあると思いますが、プレイをしてゆくプロセスが眼の辺りに浮かぶように、達者な筆運びで描かれてるので、いつもいつも感激しております。ついで奇クサロンやプレイ発表、体験告白なども、興味深く読ませてもらっているのが私の読み方です。

ゴム、浣腸責めなどは、今のところ余り興

味が湧きません（いずれは、やってみるかも知れませんが……）。やはり情け容赦なく、太い新しい縄目が柔肌に喰い込み、悦虐の表情に溢れる緊縛こそ、真の女性美が満ちあふれ、芳香の泉が湧いてくるのではないでしょうか。

毎号余すところなく読んでいるのですが、いろいろな責め言葉が出て来ても実際に、どのようにして責めているのかさっぱり分からないのが実情で、どのような物を使って良いのか、どのように責めて良いのか、全く分かりません。一方、責めたり責められたりする場合でも、相手が望むどんな責めをしたら良いかが分からないとプレイにまで達しないのではないかと思っております。でも、最近はやってみて相手をその気にならしてゆくのが、飼育ではないかとひとり合点してきましたが、未だ自分では半信半疑の状態です。

早くプレイをしたいと思いつつも、思うように先へ進めません。たまたまスチールとシネカメラは机身放さず、絶えず携帯している位のカメキチなので、本誌ファンになって以来、何とか傑作が出来ないものかと各種企画していたのですが、そうさらにモデルが居る訳じゃないので構想を練ってみるだけが

多いのですが、そのことだけでも結構楽しみのあることが分かってきました。しかし、それだけでは満足はできず、徒らに心ばかりが焦って一年も過ぎてしまった訳です。

私の性格からして、自分だけでものするよりも、一枚のフォトを第三者にみせた時に前後の物語が分かるような動きのある、そして相手を引きつけるようなシャッターチャンスがいいものを作ってみたいと、この頃考えるようになってきました。尤も私が、そこで演じられるプレイを第三者の立場で撮影するならば、生きたスナップフォトを焼付けることが出来るのですが、自分がその当事者で、しかもカメラマンですと、得てして思うようにゆかぬものであると痛感致します。ですから辻村先生、塚本先生などが言われているように、プレイの継続中はプレイが主となり、フォトがどうしても後廻しになり、いつも生きた表情を逃がしてしまうとは、全くそのとおりだと思っています。

特にこの道に半才の若輩では、カメラ技術があっても、こちらがオタオタしている間に、相手までおかしくなってしまう。責めの瞬間的な表情は絶対です。私は写真術、特にポートレートなどフォートテクニックに

は十分、自信があります。

去年の三月、一寸したチャンスから、丸顔の小麦色の肌の中肉中背でピチピチした若鮎のような二十三才のOLと知り合い、早速飼育してみようと思い、大人の世界の裏話や図書などを貸してみました。あまり強い反応はみられませんでした。それでも本誌ファンになって以来の夢が、実現できるかも知れないと、一つの希望が持てた時は、全身みの毛がよだつように震え、躍る心を抑えかねたものでした。彼女は未知の世界を知りたがる年令とはいいながら何ひとつ知らないのが本音で、急激に計画を進める訳には参りません。根気よくじっくりと誘導してゆくより仕方がないと、私自身に言い聞かせておりました。誘導のつもりで、機会ある毎に本誌や同種の雑誌類をいつも貸すのですが、果たして読んでくれているのか……と疑いを持つくらい、早くも翌日には返却してきます。

初めてヌードを撮った時も、どたん場になつて、いやだと言いだすのではないかと心配をしたことがありました。許可を得て、承知しているはずだったのですが、パンティもブラジャーも付けたままで、どうしても脱げないと言つて、彼女の方で困惑した表情で膝頭

を締め合わせて立っているのです。それでも、彼女は羞恥を全肢体に溢れさせ恍惚の世界へとけ込んで行くようでした。そのままのポーズから、アングルを変えてシャッターを切つて、カメラに慣らしで行きました。初めて、異性の前に晒す裸身、どうしても体の線やまるみが固くなってしまう。それでも止むを得ず、これも一つの飼育であると思い、徐々にポーズを変えてもらい、素早くファインダーをのぞいていったのでした。

「そこへ、上むいて寝てごらん……」

「膝を立てて……ハイ」

彼女は時間と共に従順になってくれるようになりました。飼主の私は、いつも主導権を握つて、総ての行動が運ばれてゆくようになったのです。

私が言うのは何ですが、顔はいいし、胸の膨みも二つのお碗を伏せたように盛り上り、ウエストは締り、引きしまったヒップ、太腿から足先への曲線は申し分なく、全く余分な肉のない、細い針でも刺せば、^ノプスツと音がして透きとおった水がほとばしるような気のある肢体で、特にお臍が可愛いので貴重なモデルとなることでしょう。

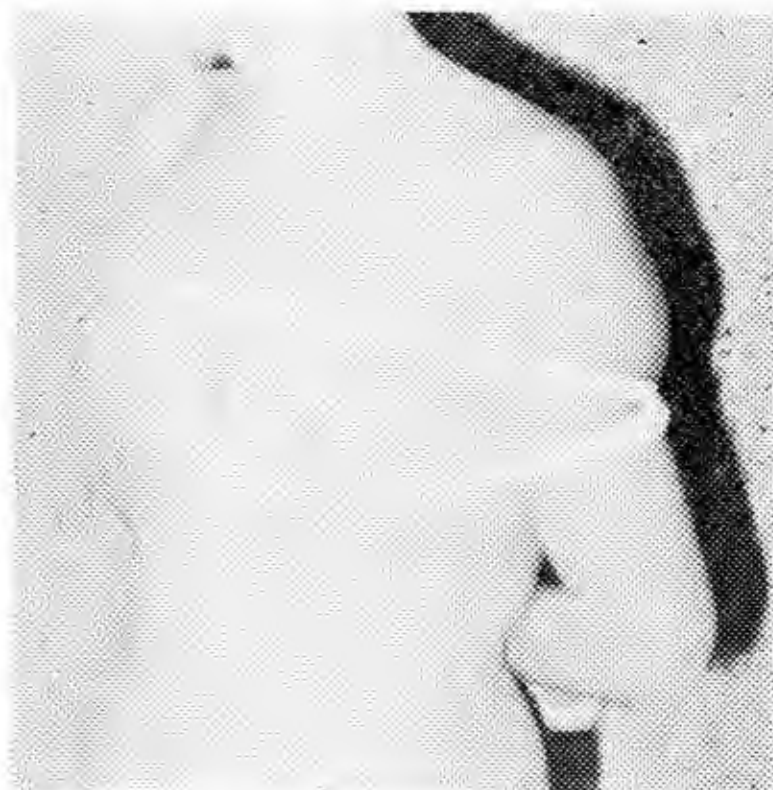
この柔肌に縄を喰い込ませて悶える腰、尻

そして、大きく息づく異常なまで突き出た乳房、恍惚の瞳 *etc* を想像していると、早くその日が来ないかと、柄にもなくワクワクしてしまいました。

いつ、どのようにして飼育したらよいのか随分と迷いましたし、考えました。しかしチャンスは必ずあると思い、分譲写真などを数枚ずつ出しては、徐々に視覚からの導入に専念しました。

だまって受取って、めくってゆく彼女を観察していると、ほのかに頬は紅くほてってきたようです。何かしら部屋中にしっとり汗ばむような熱気が漂い、全身を微かに羞恥の色で染めて眼を伏せ、うなだれたままだまって返してきたのです。私の眼には、その時の彼女は自分自身を強く抑えているような感じで、おののいているその姿は全くすばらしく世にも美しいものに思えたのでした。

私達のプレイ（とはいえないのですが）の場所は、もっぱらホテルを利用しておりました。月に二、三回でもその経費は馬鹿にならないので、時には彼女が払ってくれます。夏の暑い土曜日の午後、例のようにホテルを利用した時のことです。あれから五カ月、飼育進行状況テストの意味で



「洋服ダンスのズボンから、バンドを抜きとって持って来て……」

と、彼女に命令したら、余りに可哀想に思う位に従順で、いやがる素振りもなく取りに行きました。そのバックをみて、「これは脈があるかな」とひとりほくそ笑んで、彼女から受取るなり、ベルトを短かめに持ち、軽くなでるように鞭打ちの真似をやってみました。何回、打ってもだまっているので調子に乗り、少し力を入れてたたいてみたのです。

「ヒューッ」

とたんに呻き声が囁みしめた口から洩れて

弓なりに反った全身が、微かに震えていました。脚を、腰をくねらせています。しかし、「痛い、痛いワ——」

と言っているのに、いつしか声は全然痛がっているようになっています。この様子を見て、私はジキル化し、何故か狂暴に振るまってみたくなり、乱れた髪の毛を驚づかみにして頭を前後左右にゆすってみたのです。彼女の顔は苦痛にゆがみ、僅か汗ばんだ腹や胸の丘が若々しく光ってみえるようでした。その上、更にバンドがその肉塊に弾むたびに彼女の表情に悦虐の陶酔がありありと泛かんで来るように思えるのでした。

よし、何が何でも飼育してみよう。彼女にマゾ的な要素があるからこそ、こんなこともあえて拒まぬ態度をみせているに違いない。今すぐにでも緊縛責めをしてみたいと、衝動的に気持は高ぶったのですが、確かにそうだとも思えないフシもあったので、自ら「未だ早いぞ」と、たしなめたものです。

最近の本誌で、注文をつけさせて貰えるなら、どうもカットやイラストなどは鮮明ですがフォトとなると鮮明度がなく、折角の写真がおしくもボケたように見えたり、白っぽくなっています。もう少しなんとかできないも

のでしょうか。これは私一人だけの望みではないかと思えます。どうぞよろしく、御配慮の程を――。

扱て、横道にそれてしまいましたが、その後は、縛りたいのを無理におさえて、真似事の責めを臭わす程度のことと、彼女の反応を試すことにしました。私の考えとしては一方的なサディスティック・プレイを目的とするのならいざ知らず、SMプレイによって相互に悦びを分かち合うのが目的である以上、形は責めでも、その底には優しいいたわりと愛撫が必要だと思えます。ですから、いくらサド的な私に化しても、実際には本格的に縛ったりムチ打ちしたりすることは、強く長くできません。あく迄も二人の愛の効果を高める補助手段に過ぎないもので終りたいと思っております。

真似事の責めでも、彼女はぐったりと伸びきって、虚飾も羞恥も全部かなぐりすてて喘いでいました。眼は軽く閉じ、唇は半ば開けて大きく息使いを繰り返しています。

何回かのデートで、すっかり大胆になり、女の悦びを知ったのでしょうか――。

会うたびにバンド、パイプを組合わせての責めの真似事を繰り返してはしましたが、諸先

輩のように長くは続きません。それでも

「もっと、いじめて――」

いう言葉が聞けるようになりました。しかし私は腹八分目のように、彼女の要求をいつも少しずつ、はねのけておきました。そしてある日の別れ際に勇気を出して囁いてみたのでした。

「今度は一泊旅行にしよう。その時には縛ってみたいんだけど――。いいんだろう？」

彼女は急に頬を真赤に染めて、首をかすかに縦に振ったのです。いつの日か、そのことを期待していたかのように……。

顔を静かに上げた時、彼女のうつろな瞳がそれを物語っているのを私は目ざとく見抜いたのです。春に知り合って以来八カ月。一挙一動が、もぎたての果実のような新鮮味を増してきました。近頃、羞恥を忘れた女の子を良く見かけますが、彼女の場合の処女性は貴重なものだと思っております。

つるべが落ちるように、秋の夕暮は、すぐ闇にとざされてしまいます。彼女と約束した一泊旅行に明日出発という前夜のことです。彼女が夜遅くやってきて打合わせはしたのですが最後に

「お借りしていた本、返しますワ」

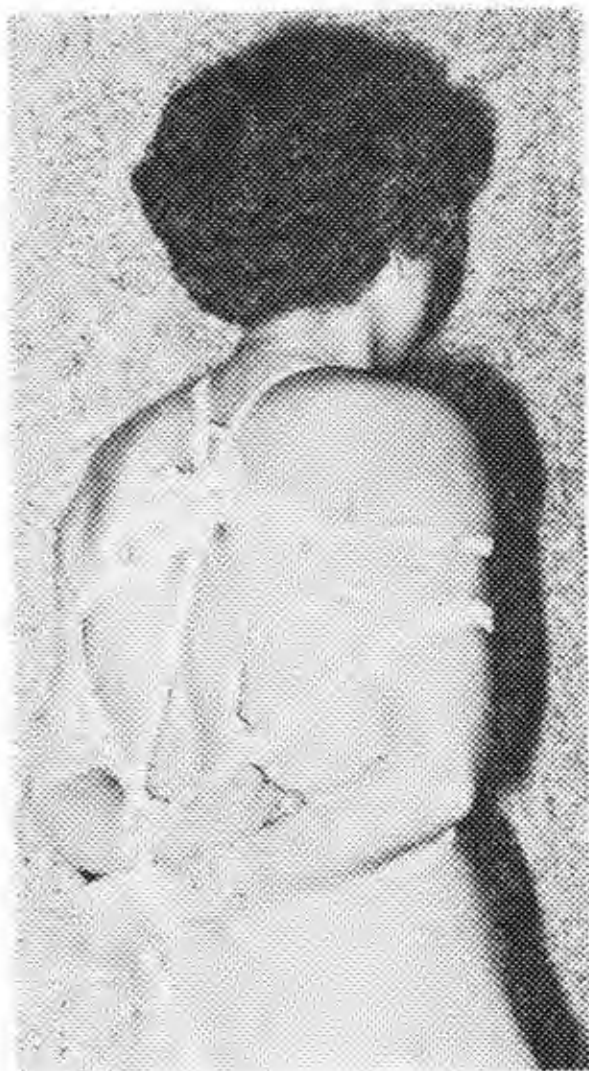
と言って、例によって貸しつけ？ てあった本誌を置いて帰った時には、吾ながらどのようなに解釈してよいやら、ずいぶんと迷いました。よし、とにかく準備だけはして行こうと決心したものでした。

木綿ロープをカメラの七つ道具のカバンに添えて翌日待ち合わせの駅へ向かいました。約束の時間を少し廻った頃、彼女があたりを見廻すようにして現われた時にはホッとしました。

同封のフォトは、この旅行で、吾が人生で初めて縄がけをした時のもので、彼女の抵抗はあったのですが、一応ストロボをたくことができましたので添えておきます。手始めの縛りですから、なるべく簡単にして、ゆるい方が良いと思ったものです。縛る私もそうでしたが、初めて縛られる娘の心の動揺を感じとりました。

こうして長い間の夢が実現したことはしたのですが、何しろ、私も彼女も初めてのことで、二人して夫々違った感情を抱き、私は吾を忘れて、実に情けない撮影となっていました。

彼女は、縄がけが終る頃には涙を流してしまい、白々とした空気が暖房のきいた部屋に



そのくせ、いきなり、その世界には飛び込めない。こんな時深追いつて執拗く迫ると、かえって逃げ腰になるだろう。チャンスはいつか必ずくるといふ漠然とした、それでいて、妙に確信めいた気持を抱いて、腰を上げた」と。

漂いだったので、軽く縛った白い縄をいそいで解き、謝るやらご機嫌をとるやらで、大わらわだった訳ですが、その時の彼女の真意がどうであつたか聞きただす勇氣もなく、普通の恋人同士の世界へ没入してしまいました。

結局プレイとカメラマンとは両立し難いものであると痛感した次第です。尤も夫婦間でのプレイなら、演技の上での協力があるから別だと思いますが……。

ですから、初めて会った女の子とあれだけのプレイとカメラマンの業を成し遂げている辻村先生や諸先輩を、改めて尊敬？ 致しました。辻村先生が「飼育の愉しみ」（小池美喜の巻）で、次のように述べておられます。「確かに興味を抱いているのを私は知った。

私の場合、あれだけ意気

込んでいながら、飼育の愉しみでなく苦しみとなつて現われ、結局ストロボをたいても、肌の死んだ一塊の物体と化したフォトとなつてしまいました。

痴夢か？ 悪夢か？ 昨夜のあの初めての縄目をケロリと忘れたかのように、私の肩にもたれるようにして、窓外の景色を見送っている彼女。総べてを与えたことに安心きつて、たよってくるのでしょうか。今更ながら近代女性の豹変の見事さに驚嘆しながら一路家路へと走りしました。

「でも、この次はいいんだらう、縛っても」「……………」

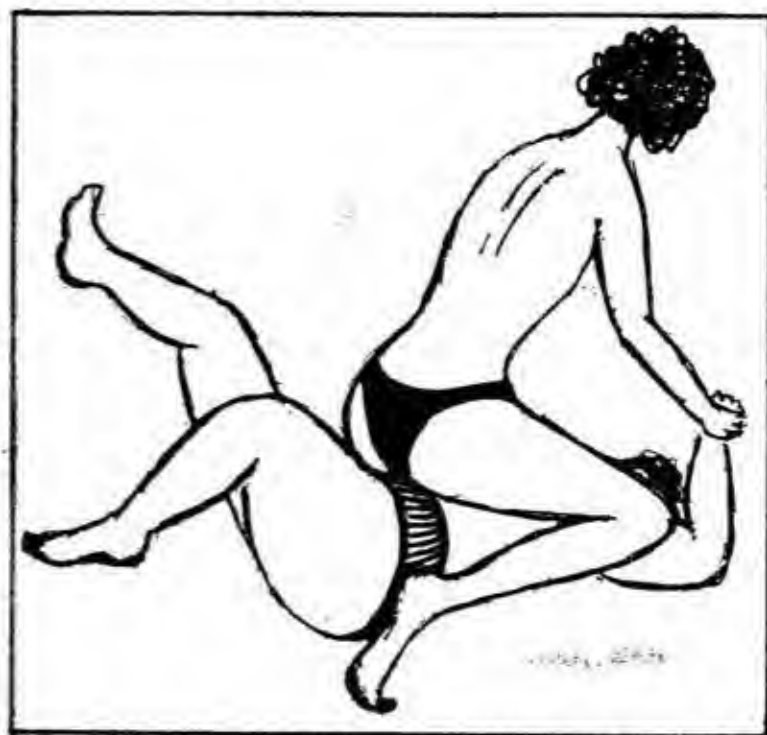
返事は返って来なかったが、上目使いで、ゆっくりこちらを見る彼女でありました。

この眸の中に、想いをこめた色があるのを読みとらねばならないのでしょうか、残念ながら私には判別出来ませんでした。

あんなに軽い縄掛けだけでも、あれほどの涙を流して嫌悪する彼女だから、まだそんなことをいうの？ という恨みがましい眼の色とも思えるし、総てを許した今では、そんなことぐらいあたりまえよ、といってくれていようにも思えるのでした。

しかしその後、それとなく話したSMに関する話題を嫌がる様子はなかったので後者の希望が持てると思つたことでした。

目下のところこの程度のことではありますが彼女もいくらかSMにめざめて来たようですので楽しみにしています。そのうち私の方がほどほどにしてくれと辞退する時が来るかも知れません。ま、それまでに又、発表して皆々様の御批判をいただきたいと思っております。誌上の先輩の方々のように、上手に書けなかったことを御許し願うと共に、同好の志のお便り、又は写真などを受けたく思っております。如何なものでしょうか、いやそれとも二人だけのプレイによって、愉しがるべき苦しみを味わって、育ててゆくべきでしょうか。



(十三)

好造は、どうせ彼女たちに女闘美をさせることが出来なくなるのなら、いっそのこと、ここで最後の決闘をさせてみようと思ひ、いっつになく神妙な口調で切り出した。

『そうか、……君たちの言うのも尤もだ。いや僕が悪かった。今まで君たちにむごい事ばかりさせて、本当に済まなかった。どうか許して呉れ給え……』

好造は、いかにも尤もらしく、彼女たちの前に深々と頭を下げた。

懸賞入選・女斗美小説

ふたり妻

(3)

芦 浦 素 舞 夫

(カ ッ ト も)

『……本当は君たち二人をどちらも手放したくないんだが……今となってはそれも叶うまい……せめて、どちらか一人を正式に妻にしたいと思う。だけど僕は、君たち二人とも同じように愛してるから、とても自分で選ぶことは出来ない。だから君たちの方で、それを決めて呉れないか』

ここで言葉を切ってわざと沈痛な表情で夫

人たちの顔を見較べた。彼女たちは一旦は強く出てみたものの、好造に意外に優しく言われると、やはり心が動揺した。何と言っても肉体的には惹かれていたのだ。それに、もし

彼の正式の妻になれるのなら……

夫人たちは、思わず眼を輝かせて好造の顔を見た。だが、話の続きを聞かされた途端、愕然として顔色を失った。それもその筈である、妻の座を獲得する条件として、もう一度最後の勝負をしろと言うのだ。しかもその方法たるや、今までとは全く比べものにならないハレンチ極まるものだった。

事もあろうに全裸でレスリングをやらされる上、相手が降参するか気絶するまで徹底的に闘わねばならないのだ。つまり無制限試合である。尤も、今までやらされてきた女相撲

もハレンチなものには違ひなかったが、それはそれなりにルールもあった。裸にはならされていたとは言え、ちゃんと痺は締めていたし、勝負の結果もハッキリしていた。だが今度の場合は違う。相手の息の根を止めるまで徹底的にやらねばならない文字通りの死闘でこれは試合と言うより明らかに決闘である。しかも、聞くだけに羞かしい姿で闘わねばならないのだ。

彼女たちが、羞かしさと恐ろしさで震え出したのも当然だった。だが好造にしてみればどうせこれが最後のだから、これくらいの事はやらせなくては引き合わないのだ。つまり「毒を喰らわば皿までも」である。

好造は、夫人たちに最後の決闘をするよう執拗に迫った。そして、もし命令に従わなかったら妻の座は絶対に与えないと言明した。

これには、夫人たちの心もさすがに動揺せざるを得なかった。何と言っても好造には何億という莫大な財産がある。ほんとうに彼の正妻になれるとしたら、それは正に玉の輿に乗ったようなものである。今日まで恥を忍んで好造の言いなりになってきたのも、いつの日かきっと彼の正式の妻になれると思えばこそだった。もしここで決闘を拒否すれば、相

手にムザムザと妻の座を譲ることになり、今までの苦勞が全く水泡に帰するわけである。

そんな馬鹿な話ってあるものか……。

『おい、どうした！ やるのか、やらないのか？ どっちなんだ、はっきりしろ！』

夫人たちの心の動揺を見抜いた好造は、わざと焦立たしげに大声で怒鳴りつけた。この一喝は、遂に夫人たちの心を決定させた。

『毬子さん！ やる？』

『勿論よ！ やるわ！』

それは、ほんの短かい言葉のやり取りだったが、その決意を明白に物語っていた。

『よし、決まった！ では早速準備し給え』

好造は、夫人たちの気が交わらない内にと直ちに決闘をするよう断乎命令した。

さて夫人たちは、遂に最後の決闘をやらされる破目に追い込まれたが、一体それは何処でやらされるのだろうか……。今まで毎日女相撲を取らされてきた土蔵の中か、或いは先日のように庭で闘わされるのか、否、それは意外にも室内でだった。

それは、レスリング形式でしかも裸で、のた打ち廻らせるのには、畳の上が最も適しているからである。しかも好造は、この屋敷にはもっと広い部屋が沢山あるにも拘らず、比

較的狭い八帖の間を選んだのだった。そしてこの暑いのに、わざわざ周囲のフスマを全部閉めてしまったのである。

これは夫人たちが、外部から覗き見されるのを気にすることなく、思いっきり闘えるように……との理由からだだったが、実は好造には、別に魂胆があつてのことだった。

その頃は、ちょうど梅雨が明けて一度に真夏がやって来た感じの毎日。暑い日が続いてきたが、その上フスマまで閉め切ったら、それこそ何もせずジツとしていても、汗がタラタラ流れるくらい暑いのは必定だった。好造は、わざとこのような悪条件の下で夫人たちにレスリングをさせようとしたのである。何という残酷な男だろうか……。

(十四)

庭の木立ちにジリジリと鳴く油蟬の音が、ひとしお暑さをかきたてる真夏の昼下り。ピタリと閉め切った暑苦しい部屋の中に、弓枝夫人と毬子夫人は一糸纏わぬ姿で対決するよう命じられた。それだけでも羞かしいのに事もあろうに好造が、さっさと真先に脱ぎ始めたのである。まったく何というハレンチな男であろうか。あまりの羞かしさに夫人たち

は、好造の姿を正視することが出来ず、顔を伏せ、部屋の隅に縮こまっている。だが好造は、一向に平気な様子だった。好造は、部屋の中央に進み出て大声を張り上げた。

『赤コーナー、弓枝！ 五フィート四インチ半、百十五ポンド！ 青コーナー、毬子！ 五フィート一インチ、百四十ポンド！』

好造は、すっかりレスリングのレフリー気取りである。まったくフザケた男だ。尤も、今まで夫人たちに相撲を取らせていた時でも呼出しや行司の声色を真似ては一人悦に入っていたが、今度の場合もやはり同じだったのだ。また好造は、夫人たちの身体の各部分のサイズを毎日のように計り、それを一々暗記していたが、現に、いま好造が手にしている一枚の紙片にも、今日現在の夫人たちのサイズが次のように、身長、体重、バスト、ウエスト、ヒップ、足サイズの順で記されていたのだった。

弓枝一六六 五二 八〇 六〇 九〇 二五
毬子一五五 六三 一〇〇 九〇 一〇〇 二二

この表を一見しただけで、いかに夫人たちが対照的な体格をしていたか分かる。つまり弓枝夫人は明らかに痩せ過ぎており、毬子夫人は完全に太り過ぎていたわけである。

さて好造は、決闘開始に先立って夫人たちを先ず手許に呼び寄せた。弓枝夫人も毬子夫人も「遂に来たるべきものが来た」と観念したが、膝頭がガクガクするのをどうしようもなかった。好造は、夫人たちの頭髮や手の爪などを一通り検査した後、試合についての細かいルールの説明をはじめた。

『いいかい君たち。いくら決闘だからと言ってもこれは喧嘩ではなく、あくまでもレスリングなんだから試合のルールはちゃんと守るんだぞ！ 例えば、相手の頭髮を掴んで引張ったり乳房などの急所を引っ掻いたりしてはいけない！ また、相手の首をヘッドロックで抱え込んで締めるのは構わないけれど、喉首を、手で抑えつけて締め上げるといふのはいけない！ これらは全て反則だぞ！ いいね？………』

レフリー気取りの好造はいちいち勿体振った口調で夫人たちに注意を与えた。尤も、夫人たちが決闘を始め、エキサイトしてからは全然守られなかったし好造もまた敢てそれを止めようとしなかったのだが……。

『さあ、君たち。いよいよ最後の勝負だぞ！ これに勝った方を、約束通り正式に僕の妻にしてやる！ だから、死力を尽してトコトン

まで闘うんだぞ！ いいね？』

好造は、もう一度念を押した。

夫人たちは、ゴクリと生唾を呑み込んで微かに頷く……。二人共、極度の緊張のため顔面蒼白、唇の色さえなかった。

『無制限一本勝負！ 始めっ！』

好造が大声で叫んだ。いよいよ決闘開始である。意を決した弓枝夫人と毬子夫人は、お互いに向い合って身構えたが、しかしそのポーズたるや、どう見てもレスリングの構えとは言えなかった。二人共、両腿をピッタリとくっつけ、尻っぱり腰で、ただ両手だけを前に出しており、お互いに相手に組付こうとする気配は一向になく、却って相手を近寄せまいとしている様子だった。だが、これは無理もなかった。何しろ、一糸纏わぬ姿で向かい合われているのだ。いくら覚悟の上とは言え、そこはやはり女性のことである。どうしても羞かしさの方が先に立つのは致し方なかった。

だが好造には、そんな夫人たちの態度がジレったくって仕様がな。

『おいっ！ いまさら何をモジモジしてるんだっ！ 早くやれっ！』

好造は、割れ鐘のような大声で怒鳴りつけ

た。この一喝は正に効果的だった。彼女たちは、まるで電流にでも打たれたかのように思わずハッ！として我に返った。

△そうだ、もはや羞かしがっている場合ではない。兎に角、相手を倒さないことには自分の幸せを掴むことは出来ないのだ▽

そう思うと夫人たちは、無我夢中で相手に掴み掛かっていった！

それは、つい先程まで羞かしさに身を震わせていた彼女たちではなかった。すでに彼女たちの頭の中には、ただ相手を倒すことだけしかなかった。それは正に、相手に対する凄まじい嫉妬と憎悪の念に燃えた、ふたり妻本来の姿にほかならなかった。かくして、好造を巡って正妻の座を賭けた弓枝夫人と毬子夫人の凄絶な死闘の幕が切って落とされたのである。

(十五)

お互いに、相手の両肩をムンズとばかり驚かして組み合った夫人たちは、相手を捻じ伏せようと激しく争い始めた！

押し合いでは、太って力の強い毬子夫人の方がやや優勢だが、相手の弓枝夫人が遥かに背が高くリーチが長いので、なかなか思うよ

うに押せない。確かにこうして組み合ったのを見ると、二人の身長之差が、歴然としている。何しろ十センチ以上も違うのだ。

毬子夫人が押し立てる！ だが弓枝夫人も押し返す！ 激しい押し合いだった……。

押し合いの最中、弓枝夫人は何回か引き落としを掛けるが太っている割に腰の良い毬子夫人は、なかなか前に落ちない……。と、今度は毬子夫人が引き落としを掛けた！ 弓枝夫人は、思わず前にのめりかけたが、これも足を送ってよく残す！ また激しい押し合いになった！……。と、弓枝夫人がまたもや強烈な引き落としを掛ける！ 虚を衝かれた毬子夫人は思わず畳に膝をつきかけたが今度も柔軟な足腰でよくこれを残す！ 弓枝夫人は立て続けに二度、三度と強引に毬子夫人を引き落とそうとするが、どうしても通じない。またもや激しい押し合いに変わった！……。

だが押し合いでは、やはり太っている毬子夫人の方に分があった。彼女は、長身の弓枝夫人をグイグイ押し立てる！ 力負けした弓枝夫人は、ズルズルと部屋の隅まで後退を余儀なくされる！……彼女が、頹勢挽回を図るべく、細長い両脚を踏ん張って必死に押し返そうとした！ と……この時毬子夫人は、相手

の押し返す力を利用して、いきなり力まかせに引き落としを掛けた！ この奇襲に弓枝夫人はたたたらを踏んで大きく前にのめり、思わず畳に膝をつく！

これを見て好造はハッ！ と息を呑んだがさすがに弓枝夫人も機敏だった。彼女は、畳を蹴って立ち上り素早く元の姿勢に戻った。

こうして夫人たちは、お互いに相手のバランスを崩して何とか倒そうと、盛んに押したり引いたりして激しく争ったが、お互い必死なだけに、なかなか勝負がつかない……。

さて、一旦離れた弓枝夫人と毬子夫人は、最初と同じように再び間隔を置いて睨み合った！ だがその構え方には、最初の時のようなギコチなさは全然なかった。習慣とは全く恐ろしいものである。毎日のように女闘美をやらされてきただけあって、すでに夫人たちはいつもの闘う女の姿に完全に戻っていたのだ。夫人たちは、お互い油断なく身構えながら、盛んに相手の隙を窺う！ お互いに自分に有利な体勢に組もうと、頻りに両手を動かして相手を牽制する！……。それは傍から見ていると、まるで猫の喧嘩のようで全く滑稽な姿だったが、当人たちにしてみればそれこそ必死だったのである。

毬子夫人が組み付こうとすると、弓枝夫人はこれを嫌って突き放し、また、弓枝夫人が掴み掛かろうとすれば、今度は毬子夫人がこれを嫌った！……。一度は、手四ツの体勢に組み合ったが、お互いに嫌って、また離れての睨み合いになった！……。

正妻の座が賭っているだけに、二人共さすがに慎重である。それはさながら剣豪の一騎討ちにも似て、静かな裡にもそれこそ息詰まるような場面だった。と、弓枝夫人と毬子夫人が再びガバツと組み合った！ 今度は、お互いに相手の両肩を驚掴みにしての凄まじい揉み合いになった！。夫人たちは、必死の形相凄まじく、お互いに力の限りを尽して何とか相手を倒そうと懸命だった。激しい押合い引き合いだった！

押し合いでは毬子夫人の力が優っているが何分にも相手の弓枝夫人が背が高く腕が長いので勝手が悪い。毬子夫人は、相手の両肩を掴むのが精一杯なのに比べて、弓枝夫人の方は、相手の髪を楽々と驚掴みすることが出来るのである。尤もこの事については、試合前に好造から反則だと一応注意されていたのだが、もともとこれは無理な話だったのだ何となれば、女同士の喧嘩を見ても分かる通

りそのほとんどが相手の髪を掴んで争うケースが多いのである。

余談はさておき、弓枝夫人から髪を掴まれた毬子夫人は、その痛さに思わず相手を突き放した！ 夫人たちは再び離れて睨み合う。そして数十秒経過、両夫人は、またもやガバツと組み合った！ 今度は、お互い右手で相手の首筋を掴んでの激しい押し合い引き合いになった！……。だがその争いも長続きしなかった。首を巻かれるのを嫌った弓枝夫人が相手を突き放したからである。両夫人は、再び離れて睨み合いに入った！……。

試合開始からここまで、かなり時間が経過したように感じられたが、実は、ほんの数分しか経っていなかった。だが、すでに夫人たちは全身それこそ汗みどろだった。無理もない、何もせずただジツとしていてさえ汗が滲み出てくるこの真夏の日に、わざわざ周囲の襖を閉め切って、それこそ蒸し風呂のような部屋の中でレスリングをやらされているのだ。現に室内の温度はウナギ上りにグングン高くなり、すでに三十七度を越している。そして、その水銀柱の目盛り按比例するかのよう、夫人たちの闘志もまたいやが上にも燃え上っていくのだった……。二人共、すでに

相当エキサイトしていたが、その度合は、どちらかと言えば毬子夫人よりも、弓枝夫人の方が激しかった。

弓枝夫人は柳眉を逆立てて毬子夫人に掴み掛かった！ 彼女は、その恵まれた上背にモノを言わせ上から毬子夫人の髪を驚掴みにして力まかせに引き摺り廻した！ あまりの痛さに毬子夫人は「ヒーツ」と悲鳴をあげる。何しろ十センチ以上も背の高い相手から、髪を掴んで引き摺り廻されたら全くだまったものではない。だが、弓枝夫人は容赦しなかった。両手で毬子夫人の髪を驚掴みにしたままなおも強引に引き摺り廻す！ この荒業の前にはさすがの毬子夫人も全く抵抗の術なく、ただ悲鳴を上げながらヨタヨタと相手に付いて廻るのが精一杯だった。

最初の内は黙って見ていた好造も、さすがにここで止めに入った。第一、これは反則である。それよりも、もしここで毬子夫人に本当に音を上げられでもしたら、それこそ大変だ。好造に注意されて弓枝夫人は、しぶしぶ毬子夫人の髪を手離した。

「よくもやったわネッ！」

毬子夫人は、憤然と弓枝夫人に掴み掛かっていこうとした。だが好造に制止された。

『まあ落着けよ。君たち、掴み合いの喧嘩をやっているじゃないぜ。あくまでもレスリングの試合なんだから！』

好造は、夫人たちを無理に引き離し、最初のようにスタンディング・ポジションをとらせた。どこまでも夫人たちを馬鹿にしたやり方である。

さて戦闘再開！ だが今度は毬子夫人の方が遥かにエキサイトしている。今、相手に髪を掴まれて散々引き摺廻されたのが余程腹に据えかねたらしい。案の定、今度は逆に彼女の方から、弓枝夫人に猛然と組み付いていった！ 毬子夫人は、自分より十センチ以上も背の高い弓枝夫人の首に右手を巻きつけるやうにむに投げ倒そうとした！ 不意を衝かれた弓枝夫人は、慌てて逃れようとしたが遅かった。毬子夫人の強引な首投げに腰を落として耐える暇もなく、ドツとばかり畳の上に投げ倒されてしまったのである！

はずみで毬子夫人も相手の上に重ね餅に倒れたが、すかさず抑え込んだ！ こうなると彼女の六三キロの体重がモノを言う。弓枝夫人は、長い両脚をバタつかせて懸命にモガいたが相手を容易に跳ね返すことが出来ない。好造は、しばらくは二人の組み討ちを見て

いたが、良い加減なところで止めに入った。もしここで、弓枝夫人がうっかり「参ッタ」とでも言ったらそれきりである。折角、彼女たちに最後の決闘をさせるのだから、そう簡単に勝負がついたら面白くないのだ。

好造から無理に引き離された毬子夫人は、仕方なく抑え込みを解いて起き上がったが、自分の方が優勢だっただけに、その表情にはさすがに不満の色を隠し切れなかった。

(十六)

さて立ち上った両夫人は、再び部屋の中央に睨み合って構えたが、彼女たちの表情はさらに険しいものになっていた。

今の抑え込みで自信をつけたのか、毬子夫人もなかなか積極的だった。彼女は、相手自分より十センチ以上も上背があるのをモノとせず、頻りに相手の首を巻きにいく！ だが今度は弓枝夫人の方も、そう易々とは相手に組ませなかった。彼女は、長い腕で相手の攻撃を防ぎ、二人は手四ツの体勢で睨み合っ……。そして、お互いに押したり引いたりして激しく揉み合ったが、どちらからともなく嫌って突き放し、再び離れての睨み合いになった！ と突然、弓枝夫人が猛然と攻勢

に出た！ 彼女は、長身を丸めるようにして相手の下に潜るや、その長い両腕を伸ばしてサッ！ と相手の右の太腿を拘った！

足取りつまりレスリングでいう片足タックルである。これは普通、背の低い者が自分より背の高い相手を攻めるのによく用いる手なのだが、今度の場合は全く逆だった。すなわち長身の弓枝夫人は、自分よりも遥かに背の低い毬子夫人に対して、この手を使ったのである。

もともと、足取りなどという手は、あまりカッコいいものではない。まして弓枝夫人は人一倍自尊心の強い女なのだ。それが敢てこんな手を使ったのは、彼女がよほど必死になっている証拠である。

だが、相手からいきなり足取りの奇襲を掛けられて毬子夫人の方は大いに慌てた。元来太っている者は、足を取られると案外とモロいものなのだ。毬子夫人は、両腕で弓枝夫人の首にしがみつき、辛うじて左脚一本で懸命に耐えようとしたが、弓枝夫人が頭で押すようにして強引に渡し込んだので遂にたまたま畳の上にドツとばかり仰向けに倒れてしまった。弓枝夫人は「得たり！」とばかり、すかさず抑え込みに掛る。

長身の弓枝夫人は、自分の十文半の大きな右足で毬子夫人の太い左足首を思いつき踏んづけておいて、両手で彼女の九文半のムツチリした右足を掴んで強引に外側に振じ曲げた！。

これは足取り固めと言うより、むしろ、股裂きと言ったほうがよかった。この技を掛けられると、その痛さもさることながら、こんな恰好をさせられるくらい羞かしいことはまたとあるまい。仰向けに寝かされた毬子夫人は一刻も早くこの体勢から逃がれようと、自分の足を掴んでいる相手の手を外そうと必死に右手を伸ばすが、腕が短いためになかなか届きそうにない。

一方、弓枝夫人は攻撃の手を緩めるどころか、ますます激しく攻め立てる！ 弓枝夫人は、相手の太い右脚をまるでテコでも倒すように力まかせに外側に振じ曲げた！ まったく強烈な股裂きである。

それこそ股が引き裂けるのではないかと思うほどの激痛に襲われた毬子夫人は、思わず「アアッ！ と絶叫した！ だが彼女の左右の大根脚は完全に弓枝夫人に捕えられている。この姿は毬子夫人にとって、それこそ死にも匹敵する辱かしめだった。彼女は死に物

狂いでこの体勢から逃れようとモガいたが、どうにもならない。

だが、毬子夫人のこんな苦しむ姿を見ても好造は敢て弓枝夫人を止めようとしめない。彼は唯ニヤニヤ笑いながら二人の格闘を見ているだけである。……と、勝ちに乗じた弓枝夫人は、さらにもう一つ残酷きまる攻撃を加えた！ 彼女は、事もあるうに自分の右足で毬子夫人を顔を力まかせに踏んづけたのである。

「他人に足で顔を踏まれる」こんな屈辱がまたあるだろうか。いくら弓枝夫人が瘦せていて体重がないとは言え顔を足で踏まれたら全くたまったものではない。第一、弓枝夫人の足は十文半の大足だ。現に彼女の細長い足の裏は、毬子夫人の顔よりも長いのだ。しかも、人並外れたひどい脂足ときている。その汗と脂でベツトリと汚れた大きな足の裏で顔を踏みつけられた毬子夫人は「ムウッ！」と呻き声を上げて必死にモガいた！

勝ち誇った弓枝夫人は毬子夫人の苦しがるのを冷やかに笑って見下ろしながら、さらに自分の細長い足指の部分で彼女の口と鼻をピツタリと塞いでしまった！ ここは、足の裏の中で一番汗と脂の滲み出る場所で、最も臭

い匂いを発散させるところである。

それこそ、鼻をつまみたくなるような臭い足指で口と鼻を塞がれた毬子夫人の苦痛は言語に絶するものがあつた。その彼女の苦しむのをせせら笑うように弓枝夫人は、わざと相手の顔を覗き込んで話し掛ける。

「毬子さん、どお？ とっても素敵なお匂いでしょう？ フフフフ……遠慮しないでうんと嗅ぐがいいわ！ フフフ……」

そして、好造と顔を見合わせて意味ありげに笑う。「ム、ムウッ！」 毬子夫人は呻き声を上げながら、顔を左右に打ち振って逃がれようと必死にモガく……。と、勝ち誇った弓枝夫人は、これでもか！ とばかり、さらに足指で相手の鼻と口を力まかせに踏み蹴った！ もはや呼吸することも出来ず毬子夫人は「ウ、ウッ！」と悲痛な呻き声を洩らしその肥満体をのた打たせてモガく！

しかし、傍で見ている好造には、毬子夫人が羨ましくてならなかった。足フエチの好造に言わせると、弓枝夫人の足の裏から逃げるなど全く勿体ない話で、出来れば毬子夫人の身替りになって、弓枝夫人の十文半の脂足で顔を踏みつけられ、汗と脂で素晴らしい匂いを発散させているその細長い足指に、シャブ

S.C.R. (性問題相談室) 案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

りつきたいくらいだった。

と、その時である。突然、「キャーッ！」

と悲鳴を上げて弓枝夫人が飛び退いた。相手から足指を噛まれたのだ。毬子夫人にとっては弓枝夫人の足指は、それこそ吐き気を催すほど気持の悪いベトベトして塩辛い味ではあったが、窮余の一策、苦しさの余りつい無我夢中で噛み付いたのだった。

さて、毬子夫人から歯型の残るほど強く足指を噛まれた弓枝夫人は、あまりの痛さに畳の上に蹲り、涙をポロポロ流しながら頻りに自分の右足指をさすっている。

一方、毬子夫人もようやく上半身を起したものの、さすがに直ぐには立ち上れない。彼女の可愛い鼻や唇は、弓枝夫人の、足の裏の汗と脂がついて光っており、先程までの苦闘の跡が偲ばれた。以上のようにこのラウンドは、長身の弓枝夫人が強烈な股裂きに続いて、十文半の大足を利用しての脂足攻めと、肥満の毬子夫人を徹底的に苦しめたが、毬子夫人は捨身の反撃でよく窮地を脱し、彼女たちの決闘は、またまた振り出しに戻ったのである。



男性虐待快樂術……………(第十二話)

第一部最終回

古莊彩子の

私設美容室

馬族 保

柿の枝を折る女

青島永大は、二十六歳。まだ童貞である。

二十六歳の童貞——まず、十人が十人、信用しないだろう。信用しなくとも、青島永大は、真正正銘の童貞であった。

不潔だ。というものがある。

不感症だろう。

いや、女性恐怖症にちがいない。

失恋したのではないか。

彼を取りまく世評は、ざっとこんなものであった。不潔に、君は女嫌いかね？ 面と向

かって質問する者もいた。しかし永大は黙して答えなかった。いつも冴えない顔色をしている。ゆううつそうに、同僚から離れて、文学書を読み耽っているのだった。

永大はいつも孤独だ。

青島永大はロマンチストだった。星や堇にあこがれた少年時代から理想の女性像は一つのタイプに限られていた。ただ違っていたのは、年齢相応に、女性像も少女から成熟した女性に生長していったのだ。

永大は女性に対して、異常なほど潔癖であった。

水商売の女が、身震いの出るほど嫌いである。キャバレーのホステスは勿論、喫茶店のウェイトレスに至るまで、サービス業の女が嫌いである。そのかわり、デパートの売りや会社のBG、矛盾するようだけれど、ファッション・モデル、映画女優には、無条件で好意をもつ傾向がある。

面白いのは子持ちの、人妻にはとくべつの嫌悪感を抱くくせがあった。

永大には悪癖の習慣があった。彼は臆病な性格であったから、好きな女性の前に出てもおどおどして、碌に口さえ利けない男だ

った。偶々好きなタイプの女性に出会った、すぐラブレターを書いた。綿々と情熱をこめた長文のものであった。一度も返辞を貰ったためしが無いのは、女の方で辟易するらしい。文学書の古今東西の恋文を抜粋して、永大自身の想いのたけを述べているのがつねで、美の女神に対する礼讃であった。

永大は熊本市でも一番大きい家具商事の会計事務を担当している。さばけている方ではないが、仕事は真面目であるし、第一、金銭に一度も間違いがないという実績と短大出身を買われて、部下三人を使い、会計主任の地位にあった。

三国家具商事の独身寮は水前寺公園の南側にある。六畳の間一室を独占し、平凡な毎日を送り迎えているだけに、彼の空想の生活には、果てしなく広がる虹への憧れが、色彩を濃くするのだ。

月に三回、公休を取る。

九月の下旬であった。

青島永大はその日公休を取った。朝食をすまし、もう一度寢床にもぐり込み、うつうつとしていると眼がさめた。

彼には、一つの特技がある。たばこの煙を口中にふくみ、唇を丸めて吐き出すと、ドウ

ナツの形になってクルクル空中で回転する。その煙の輪に、もう一つのドウナツの輪を繋ぐ技術だ。

ドウナツの輪つくりにも飽きると、読みのこしの新聞記事に眼をとおし、さて外出でもしようかなと思う。ヒゲを剃る。剃りあとにクリームを擦りこみ、ワイシャツを着て、ネクタイを結んでいると、窓の下で女の声が出た。

「大丈夫かしら。やせっぽちだから、ポキンと骨が折れそう。彩子、五十七キロあるわよ重い？」

「たかが女一びき、何ほどのことやある」

男の声が答える。

「啓ちゃん、しゃがんでよ。ハイヒールを脱いでと。竜ちゃん、わたしの足首持っているのよ」

「よっしゃ」

永大は、硝子窓をソッと開いて、下を覗いてみた。

朱と黄と緑の派手な模様のワンピースを着た女が、男の両肩を踏台にし、よいしょと掛声を出しながら踏台になっている男は立ちあがる。寮の塀を越えて枝を張っている柿の実へ、女の白い手がスルスルと伸びてゆく。女

の両足を、うしろからもう一人の男がしっかりと支えている。

こらっ、……一喝してやろうかと茶目っ気があたまをもたげたが、永大は逆にはっと呼吸を飲んだ。頭の真ん中から分けて肩へ垂らしている、長髪の下に、いきいきと輝いている切れ長の眼、面長の顔と、つんと筋の通った恰好のよい鼻、大輪の薔薇の花びらを連想する真紅の唇、皮膚がぬけるように白くだけに際立っている。水前寺公園の庭園は、三百年前に細川忠利が親子三代に亘って丹精こめた造園である。庭園いっぱい敷き詰められた芝生の緑を背景にして、女の妖麗さはたしかに眼を奪うばかりであった。

「取ったわよ。啓ちゃん、降ろして」

啓ちゃんといわれた男が身体をこごみはじめると、足首をもっていった男は前に回り、女の腰を抱き取って地面へ降ろした。

「足が汚れるじゃない」

女が不機嫌な声を出した。

「すみません」

一人が、ハイヒールを持って揃える。もう一人が彼女の片方の足を掌に載せて足の裏の汚れをハンカチで拭く。靴を足に履かせる。もう一方の足は共同作業だ。一人が膝を貸し

て、足のチリを払い、一人は足に靴を当てがい、靴べらを使って履かせるのだった。

女は五つの実の成った柿の枝を手に持ち、公園の出口の方向に、ゆっくり歩き出した。二人の男もつづく。

「おお——」

青島永大は、言葉にならぬ声を出して、部屋を出た。鍵をしめ、階段をかけ降り、たたきに靴を置くと、つかけるように履いた。

「お出かけですか」

と声をかけた寮母にも返辞をしなかった。憑かれものでもしたように、公園入口へ駆け出した。

罌に落ちる

青島永大は、公園入口へ出る近道を息せき切って、急いだ。入口前に出たとき、彼はほっとした。動悸が激しく、汗を拭きながら、鎮まるのを待った。その日は平日であったから、入園者は比較的まばらだ。

待つ間もなく三人の姿が現われた。

出口を出た三人のうしろから、永大は随いてゆく。

道路の両側に土産物店が並んでいたが、通りぬけた右側にタクシーの乗場がある。三人

はタクシーに乗った。永大も大急ぎでタクシーを呼び、前を駛る車に従いてゆくように命じた。

車は電車通りを右に折れた。水前寺駅通りを過ぎると次は味噌天神。味噌天神の鳥居前で、一旦車は停車した。永大も降りるつもりで、運転手に料金を訊いた。

「八十円です」

財布を出して、百円札を渡しかけたところ、
「で、おやっ? と不審をうった。降りたのは男ふたりだけである。永大は慌てて百円札を引こめた。」

動き出した車は、交番の前をとおり過ぎてすぐ左に曲った。三〇〇メートルも駛ると、天神マンションの車寄せへ横づけになった。

下車した女の姿を確認してから永大も降りた。一階から二階へ、二階の廊下をぐるっと右に廻ったところで、女は鍵を使って部屋の中へ姿を消した。

二一七号室。

「古荘」という姓を十二ポイントの活字で印刷した名刺がドアに小さく貼ってあった。

二一七号室の前を、永大は行きつ戻りつ、直接会ったものかどうか、永い時間ためらった。結局、永大にはその勇氣はなかった。手

紙にしようと思った。階段を降りて、一階の郵便受の前まで来たとき、ハッと思いあたるものがあつた。

郵便物——そうだ。彼女に落掌するまえに郵便の宛名を見れば、名前はわかる。永大は雀躍するように胸が弾んだ。

二一七号の受函をたしかめてみた。鍵がかかっていて中は空っぽだった。しかし永大は失望しなかった。二、三日中には必ず彼女の名前を探しあててみせる。

車寄せに、『丁字屋デパート』の文字を書いた小型の荷物車が停った。配達の手らしく赤い開襟シャツ姿の若い男が降りて来た。積荷の車体から、包紙にくるんだ四角い箱型のものを、軽々と右手に提げると荷札をたしかめたのち、階段を上りかけたが、永大の姿を認めると、元氣のよい声で訊いた。

「二一七号室の古荘彩子さんの部屋は、どう行けばいいですか」

古荘彩子——彼女だ。配達の青年は、永大をマンションの住人と思い違えたのだらう。

「二一七号ですね。その古荘さんなら、二階の廊下を右へ廻ったところですが——ちょっと待って下さい」

永大は咄嗟にチャンスを活かした。彼は荷

札をゆっくり確かめた。

古莊彩子。――

音読では、すぐ文字になる名前ではない。しかしいい名だな。青島永大の脳裏に、じんわり浸み込む名前だった。

その夜、永大は古莊彩子に恋文を書いた。

古莊彩子様

突然、不躰なお手紙を差上げる失礼をお許し下さい。僕はきょう、図らずも水前寺公園で貴女の姿を垣間見て、その瞬間から恋の虜になりました。貴女のタクシーを尾行し、天神マンションの二一七号室に住んであることを突きとめました。無礼の段は幾重にもお詫びいたします。貴女が柿の枝をもちでいらっしゃるところを見たのです。出来たら足台になって差上げたいと思いました。熊本にも、こんな素晴らしい美人がいたのかと、正直いつて舌を巻きました。現代の天女とは、貴女のことだと思いました。貴女は生きた美の女神です。

そんな書き出しで、燃ゆるような想いのたけを長い手紙に託した。それは彩子の美貌を礼讃する手紙であった。僕を貴女のファンの

一人にお加え下さい、とも書いた。

一週間経った。しかし音沙汰はなかった。

追っかけるように、永大は次の手紙を書いた。

が、なしのつぶてだった。

永大は性慾りもなく、三通目の手紙を書いた。貴女の喜ぶことなら、死んでもいい。煮て食おうと焼いて食おうと、お気に召すまま料理して下さい、とも書いた。もう意地ずくの、せっぱつまった感情である。

永大が、三通目の恋文を書いて投函した直後、鹿児島市谷山の取引先で代金が滞滞し、集金を兼ねて経営状態を調査するため出張することになった。

出張は五日間で終わった。幸い好転する兆しを見届け、序でに集金もすませて熊本へ帰って来た。

社長に労をねぎらわれ、褒美に、一日休養を貰った。いい気持ちになって、寮に帰ると、見なれない文字の小型の婦人用の封筒が、永大の部屋に配達されていた。

「おや。誰だろう？」

まったく予期しなかった。差出人はS生とあるだけだ。開封して読み始めて、はっと気付いた。すると早鐘のように胸が音をたてて

鳴った。

お手紙読みました。

何よりも正直に感情を述べている点、わたしの気に入りました。とくに最後の手紙はわたしをたいそう満足させてくれました。あなたのこと調査させました。

わたしのファンになりたいご希望は、入れて差しあげます。そのかわり、わたしの命令することなら、どんな難題でも、絶対服従するのですよ。

とにかく、わたしはわがままで、男はわたしの魅力のまえに、跪くものだと決めていますから、あなたのように命がけで恋を告白する男は大好きです。

あなたは、その意味でたいへん気に入りました。可愛いわ。

十月三十一日午後十時、わたしの部屋を訪問しなさい。かならず入浴し、ひげを剃り服装も第一装を着こみ、失礼のないように注意するのですよ。

指定の十月三十一日は金曜日だった。

人間誰しも自惚れのないものはないが、彩子の返辞を貰ったことで、永大は有頂天に

なっていた。文章の合間に伏せられた文字の意味を読み取れなかった永大は、たしかに人好しの一語につきた。

指定の時間は午後十時。商店は、水商売、パチンコを除き、ほとんどの店が、よろい戸を下ろす時刻だ。

天神マンションの二一七号室。青島永大は高まる動悸を押えながらドアをノックする。

「どなた」

耳のすぐ傍で、彩子らしい声が耳へとびこんで来た。勿論、ドアホンからであったが、低い、びっくりするほどハッキリ聴こえる声音だった。

「青島永大です」

「待っていたわ。留め金かけてないの。勝手に上って頂戴」

ドアを開けたときから、不思議に動悸は納まった。

洋間いっぱい、むらさきの絨氈が敷き詰められている。意表をつく色彩感覚に、まず度胆をぬかれた。部屋は、二つの間取りらしく人影はなかった。

永大のいる八畳の間が応接室らしかった。五点セットの応接台と椅子。抽象派の画家の作品四点が壁に飾られ、人造大理石のガスス

ープの上には、あとでわかったことだが、メキシコの首都アカプルコで求めたという、寶石を鏤めた楕円形の置物が、燦然と輝きながら、台座の上に据わっていた。窓カーテンは朱色の地に鳳凰が羽根をひろげている図柄であった。

もう一室、部屋は、次の間があるらしかった。真ん中から一段高く段がついていて、白い屏が中央から二つに割れた。

「こっちよ。お這入りなさい」

竜宮城に招かれる浦島太郎の幻覚に、永大は瞬間、捉われた。

「遠慮なくお這入りになって」

声だけが聴こえる。

「お邪魔します」

永大が段をふんで三歩ばかりあるき、視覚に赤い光線を感じて部屋の中を視廻し、もういちど改めようとしたときである。いきなり両袖から二匹の蝙蝠が、ひらひらと襲いかかった。若い男がふたり、腕を拡げて、むずと抱きついて来た。

半裸の男の両腕が、まるで翼をひろげた茶褐色の蝙蝠に見えたのだ。

ふいを衝かれて永大は前のめりになった。四つ這いになったところを、二人に押えこま

れた。

抵抗する、いとまもなかった。背広の上着を脱がされた。ビリビリと裂ける音がした。

一人はネクタイを締めあげ、もう一人がワイシャツを力いっぱい引き裂き、みる間に永大の上半身は裸に剥がれていた。

「な、何を乱暴するんですか」

辛うじて、永大は声に出して抗議した。

「ほ、ほ、ほ」

こころよい女の笑い声がした。反射的に、永大はその笑い声の主に視線を向けた。黒のうすいレースのカーテンの張られた寝台の上に肘をついて、掌に支えた顔をこちらにし、永大の姿を、じいっと見すえている女。

「ああ、貴女は古荘彩子さん！」

永大の唇から、悲痛な、おどろきの声が迸り出た。

地下室監禁

古荘彩子の横たわった肢態がゆっくり動いた。眼がなれるに従い、うすいカーテンを透けてみえる彩子の白い顔の輪廓が、獲ものを狙う豹のような眼の光とともに、やや、はつきりして来た。

「啓、そいつを縛りあげよ」

「はい」

黄いろいナイロンのロープが、両腕を密着させた身体に、ぐるぐると蛇のように巻きついていた。

「無茶な。……僕を帰して下さい」

その頃になると、永大は恐怖感に憑かれ始めた。臆ごと激しい抵抗を試みたが、所詮は空しい、身悶えでしかなかった。それどころか永大がもがけばもがくほど、相手の愉しみに油を注ぐ結果になった。

「竜、そのカーテンを開けよ」

寝台をかくしているカーテンが、おもむろに割れた。黒のネグリジェを着た古荘彩子の肉体は寝台の上で、人魚のように起きあがった。

「その者を、その場に引き据えよ」

肩を強く押えつけられ、永大の膝は床に崩れた。彩子との距離は三メートルと離れていない。

北条啓辰が、寝台の彩子の足もとにサンダルを揃える。ガストロブの青い焰を映してサンダルの石が多角的な光彩を放った。彩子の、ブラジャーとパンティだけをつけた肉体が、ネグリジェを透けて豪華に見えた。

「青島永大」

「――」

「返辞をせよ」

「はい」

「お前は、わたしの乗ったタクシーを尾行してわたしの住居と名前を無断で調べあげたばかりか、身のほど知らぬ恋文を三通までも書き送った。それはわたしの魅力がそうさせたのだから、許してあげよう。しかし下郎が貴婦人に恋をした場合どんなことになるのか、それをお前は存じているだろうな。永大、そこで改めてお前に訊きたいことがあります」

彩子の口吻は、時代がかっていて、平民に君臨する貴族の態度だった。

「お前は、わたしを生きた美の女神として、崇めたらしい。当然なことです。わたしが喜ぶことなら死んでもいい、と手紙に書いたな。お前を生かすも殺すも、わたしの自由です。永大、お前に申し聞かせておきたいことがあります。わたしの美容を永く保つために奉仕させる美容師が要るのですが、お前は、古荘彩子専用の美容師になることを承諾しますね」

「でも、僕は勤め人ですから、時間に制限がありますので――」

「調査によると、お前は三国商事に勤めてい

るようだ。当然やめて貰うわ」

「それは困ります。やめるなんて無理です」

「永大、いま何かいったかい。いやだと聞かえたが、まさか。もう一度いうてみよ」

「――」

彩子の身体が、すうっと立上った。坐っている永大の顔とすれすれに、彼女の腿が接近した。脚を開いて立ちほかかる。

「下郎、頭が高い！」

彩子は一喝した。啓辰と竜が永大の首筋をつかみ、額を捻じ伏せるように力をこめた。永大の上半体が折れ、彼の額はいやおうなく床へぶつかる。こつんと音がした。掴んだ手が顔を吊りあげる。その動作を二、三回、同じようにくりかえす。床に顔を伏せるたびにこつんこつんと音を発した。

永大の首筋が真赤にほてり、顔を伏せたところを彩子のサンダルの足が上り、首の上をぐっと、ふみ敷く。

永大は猛然と、あたまを振った。

彩子のサンダルが滑り落ちる。しかしすぐねちっこく、永大のあたまを狙って、サンダルが、からみつく。

「ううん、痛い！ 痛い！」

永大の苦痛を訴える悲鳴。サンダルの踵の

尖りを、後頭部につっ立て、滑り止めにし、脚の重みをかけたのだった。

「ふ、ふ、ふ」

彩子の鼻にかかったふくみ笑いが、低く滾れた。暫く、そうやって、サンダルを通して伝わる永大の触感を愉しんでいたが、前こどもになると永大の髪の毛を左手の指に巻きつけて、顔を吊るし上げた。

二つの視線が、尺の間で火花を散らして睨み合った。彩子の栗色の長髪が両肩に渦を巻いて垂れさがっている。食うか食われるか、男と女の凄じい闘争の一瞬であった。

一分。……二分。……三分。……

童貞永大は、とうてい彩子の敵ではない。パチパチ瞬きすると、脆くも眼を伏せた。

「勝った！」

彩子は勝利者の凱歌を揚げた。すると、本能的に、華奢な掌首が鞭のように撓った。ピシリ、ピシリと永大の頬に鳴り響いた。五つ——六つ——七つ。

「どう？ 古荘彩子さまの家来になって、わたしの美容に奉仕するか」

「……はい」

永大の眼から涙がとめどなく溢れ出した。「永大、近う寄るのです。さあ、わたしの足

下においで」

ふたたび寝台に凭れた彩子がさし招く。永大は首をたれて、膝ですり寄る。

「永大、お前の理想の美の女神、古荘彩子さまの足にうやうやしく接吻せよ。美容術の初歩だよ。よいかな」

サンダルを脱いだ脚を膝に組み、永大の鼻さきにつきつける。両掌に彩子の臍を包み、唇を足の甲につけて、永大が吸った。

「きつく吸え」

必死の永大は、彩子のいうとおり強く足の甲を吸った。

「こいつ、不器用だよ。——ようし、今度は指を一本、一本口にふくんでしゃぶれ」

長い作業だった。永大の額から汗がたらたらと流れおちた。啓辰がハンカチで、その汗を拭き取るようなしぐさをしながら、いきなり鼻孔に押し当てた。急に永大の視界はかすみ、気が遠くなって、意識をうしなった。

美容快樂法

青島永大はようやく麻酔からさめた。どのくらいの時間眠っていたのか覚えていない。ワイシャツと上着を着て、朱い絨氈の上に寝ている自分の姿に気づき、頭を動かして周囲

を見廻した。部屋が違っていた。洋風づくりの部屋ではあるが、装飾も調度品もすべてが違っていた。まず眼に這入ったのは、フランスベッドである。次に美容院で使っている全身マッサージ用の寝椅子。寝椅子の前の壁は全面が鏡張りである。鏡の右手の隅に三段組の硝子戸棚が置かれ化粧品台になっている。色とりどりの化粧瓶がきちんと並べられていて、その上辺の鏡の鈎に、髪型の違った髪が三つ、懸かっていた。

あたまがづきづき痛む。永大は起きあがろうとして、始めて気がついた。脚を動かすたびに金属性の音がした。足首の片方を真鍮の鎖で繋がれていたのだった。

「畜生っ！」

永大は激怒し、唇を咬んだ。力いっぱい脚力に反動をつけてみた。

「あ、痛っ！」

永大は、蹴上げた足を抱えこんで、跼まった。彼は猫のように眼を光らせ、もう一度部屋の中を見廻した。

冷蔵庫もあればガスセットもある。フライパン、鍋釜、食器類など、炊事ができるし、見たところ、浴室や便所の設備もある部屋の作りであった。

永大は鎖を曳きずって歩いてみた。その結果わかったことは、鎖の長さは室内をどこでも行ける距離半径の幅を保っている。要するに、永大の逃亡を防止するための足枷であるらしい。

永大は急に空腹を感じた。冷蔵庫を開けてみた。パン、牛乳、ハム、ソーセージ、缶詰フルーツ・ジュースの類が、ちゃんと用意されていた。

永大はパンを頬張りソーセージを食い、牛乳を飲んだ。腹拵えがおわると、彼は太い吐息をついて急に黙りこんだ。

夜なのか昼なのかは、てんで見当がつかない。勤め先の三国商事のことが火のついたように気になり出した。

そのときである。

カツ、カツとタラップを降りてくる靴音がした。ドアの入口でその音はとまり、鍵を使う気配がして、ドアが開いた。

「おお、あなたは、古荘彩子さん！」

濃い、むらさき色のパンタロンスーツの彩子は返事もしない。白い鳥の羽根の飾りのついた上履に履きかえると、鍵を掛けて、永大の眼を直視しながら傍まであるいて来た。

「下郎、頭が高い」

瞬き一つしない眼の光に圧倒された。永大はふがいなくも両膝を揃えて坐り、額を絨氈にこすりつけた。

いちど蹴合った鶏は、二度と蹴合うことをしない。負鶏は勝鶏にあたまを小突かれて、コソコソと餌のこぼれを拾いながら生きるのである。

彩子は永大のあたまを足の下にふみ敷く。彼女の前に出たときの挨拶である。

「彩子さまのおみ足に接吻せよ」

永大は差出された彩子の足の甲に唇をつけて吸った。

彩子は悠然と衣裳を脱ぎはじめた。入浴するのだ。全裸になる。彩子の雪のように白い背中と逞しく発達した円いお臀が、永大の視野から消えた。やがて浴槽に湯水を貯める音がきこえた。

ロマンチスト・青島永大の処女への思慕はむざんにうち砕かれた。古荘彩子は、おそらく十指に近い男達と関係をもった女性に違いない。彼の最も嫌悪する女性に苦もなく捻じ伏せられ、征服されたのだ。しかも、バスマーの彩子の優美と自信に満ちた肉体を、ここをこめて流して差しあげたいとおもうのだ。それはもう、恋の奴隷の感情であった。

青島永大は勤め人である。勤め先の三国商事の会計事務がどうしても気になるのは人情だ。厚いカーテンに日光を遮ぎられた部屋の中は夜か昼かさっぱり見当がつかなくて、日の経つのはわからないけれども、一週間以上は過ぎたような気がする。彩子の顔を見るたびに頼んでみても帰してくれそうもない。話の口吻では、どうやら永大の前にいた男は、外出を許したばかりに職場へ逃げ帰ったらしいのである。

靴音や自動車の警笛から判断して、ここは地下室ではないかと思われた。金の輪を埋めた頭の尖だけが床のすみに突き出ている。その下は土中にコンクリート打ちして固めたのだろう。押せども引けども鎖の石座はビクともしないのである。鎖を外せないとなると、のがれる術はない。永大の顔にようやく諦めの色が現われた。

永大は童貞のまま、異性とのセックスに眼覚めた。妙な話であるが、肉体交渉はないのに、彩子の豊麗な裸身の前に跪きながら、興奮し、悦楽の頂上に達し得た。

彩子は永大の熱心な哀願を叶えられるものから聞きとどけるようになった。最初に叶えられたのは入浴である。その頃になると、足

の鎖を外して自由にしたり、彼女のいわゆる美容のために専念するように飼育された。彩子は入浴から睡眠に至るまで、裸のままだった。入浴——全身美容——睡眠——永大は徹宵眠することは許されない。彩子は寝入ってから、足をしゃぶる作業を強制した。

永大がみじめであることは、彼女の優越感を煽り、快感につながった。それが彩子の美容法であった。女神の瞋恚にふれたとき、永大は全身を縮めて、かれいのように小さくなる。そんな演技を、彩子は好んだ。美容椅子に寝そべり、全身美容に奉仕させるときも、頭のとっぺんから足の爪先まで、化粧品のあるこれを指図しながら、実際ご神体に触れるところを永大に植えつけた。打たれたり、蹴とばされたりしながら、日が経つにつれ、永大は眼に見えて上達してゆく。いや、この頃では、彩子が三日も天神マンションの方で寝泊りし、私設美容室に姿を見せないと、嫉妬心で胸を掻き毛られる思いがした。

古荘彩子、二十歳。丁字屋デパートの社長の愛人である。もとより永大は彼女の正体を知らない。

一カ月も過ぎた頃——というのは、永大の腕時計が彼の左手首に戻ってきたので一日が

算えられるようになった。

例によって彩子は五日間も美容室を留守にすることがある。夜も更けて、タラップを降りてくる靴音がした。永大が、胸を弾ませて待っていると、たしかにもう一つ、別の靴音が混っているのに気づいた。

「誰だろう？」

ドアが開いた。永大より二つ三つ若い、色の浅黒い男を、彩子は連れていた。

部屋に這入るなり、男はペタリと土下座した。額を床にすりつけて三拝九拝する。

「彩子女神さま！ お許し下さい。百毛は貴女なくして生きてゆくことは出来ません。それに気付いたのです。今度こそ、永久に女神さまの奴隷になるために帰って参りました。どうぞ、奴隷百毛を厳罰に処して下さい」

「死刑を覚悟の上で帰ったのか」

「はい、女神さま」

「お前の背中に八彩子さま奴隷・百毛真琴Vと刺青してやろう。二度と逃げられないように、足の指を切断するが、よいか」

「——」

「百毛、お前の耳に皮の紐を通し、昼間はそこのベッドの脚に結いつけておくが、よいか」

「——」

「ふ、ふ、ふ。お前は震えているね。お前の真心が見えるまで、断食せよ。飲みものは、彩子女神さまのご神水。お前はいつも四つ肢になって歩くこと。立ってはならぬ。百毛、答えよ」

「はい」

「永大、服を脱がせて」

彩子は裸になった。百毛真琴を四つ這にし騎上したままバス・ルームへ這入ってゆく。

「永大、女神さまの玉体を流せ」

浴室でも、彼女は百毛の背に騎上した姿勢を変えなかった。

「流せ」

湯槽から汲み出したかかり湯を、彩子の身体に浴せながら、腋の下や腿のくぼみを丹念に洗う。悠然と浴槽のタイルを跨いで湯に浸り、うつとり眼を閉じて、美貌に生まれついたわが身をいとおしむように快感を貪る。うきうきした彩子の情感は、血液の循環を一層よくし、彼女の美容の栄養となって、皮膚をなめらかに潤すのだ。

「美しく生まれるということは、何という幸せだろう」

二匹の奴隷を、今夜は一睡もしないで、奉

仕させてやろう。

彩子の頬に妖しい微笑がうかんだ。

「さあ、洗うのじゃ」

驕れる王妃の境地である。ざあっと湯を切って、百毛の人間流し台の上に倚る。石鹸水の泡をたてて、永大は洗い清める。腰掛の百毛も泡だらけになった。

バス・ルームから出ると、全身美容だ。美容椅子におお向けに寝た彩子の肉体に、化粧水、クリーム、香水を使って、たっぷり二時間にかかるマッサージである。百毛は、女神の足をしゃぶっている。

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

「百毛、女神さまのご神水を飲ませてとらすぞよ。こぼさぬように飲むのじゃ」

「ありがとうございます。彩子女神さま！」

古荘彩子のとじた臉が、排泄の快感で赤らむ。

「彩子女神さま。永大にもご神水を恵んで下さいまし」

永大が耐えかねたように跪いた。

「おお、もっともじゃ。真琴と交替して飲むがよいぞよ」

その夜、フランス・ベッドに横臥した古荘彩子は、飽くなき快楽に耽った。二匹の奴隸

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

犬は、全身を汗まみれにして、彩子女神のご神体に額づいた。夜が白むまで不眠不休の恋の奴隷の讃歌が奏でられ、彼女の肉体の刺激に、精力のすべてを献げつくした。

その頃。――

青島永大が蒸発した当日の目撃者、三国商事の独身寮の寮母は何度目かの呼出しに渋々応じ、証人として社長室へ出頭していた。

「仕方がない。警察へ捜査願を出そう」

三国社長は無然とした声を一こと洩らし、蒸発する理由の何一つなかった青島永大の失踪に首をひねった。たしかに現代の七不思議の一つに違いなかった。

警察へ届けることに意を固めたあとも、三国社長は諦め切れないうらしく、

「おばさん、もう一度聞くと、青島のことを知る上に、想いあたる節はなにかいた」

「社長さんもくどかですね。なかというたら、なかばいた」

十一月の陽射しはあっけらかんと明るく、小春日のように暖かだった。

最終回の言葉

『男性虐待快楽術』もちょうど十二回、この

シリーズものも一年間書いたことになる。第十二話を書き終えたところで、一応、第一部の最終回にしたいとおもう。

ご愛読いただいた諸兄姉に厚く感謝のお礼を申しあげたい。

この『男性虐待快楽術』は、ハイ・レディと将来ハイレディたらんと志し、美貌と肉体美の真に女王の資格ある現代の貴婦人に捧げるために書いた小説である。

作者はこの小説の中で、美貌と肉体美の女性性、勇気と自信さえあれば、多くの男をセックスの奴隷にして、ゆうゆうと贅沢な生活ができることを説いたし、現実そんなハイ・レディがますます増えていることを実証したつもりである。あくまでフィクションであるから、——『男性虐待』の話の中には、何人かの実在のモデルも登場しているが、本人に迷惑を及ぼさぬ程度に潤色を試みている。

当然、作者には作者の嗜みがあって、女王になれる女性性、驕慢で、精力家で、貴族趣味でなければならぬという一つの設定がある。いわゆるプレーガールの中によく見かけるニセものではない。その線の区別は、われながら驚くほどきびしいのである。

SMは結局、性欲の文化である。エロチシ

ズムのないSMは醇味のない日本酒とおなじく、価値がない。Sだけを描くことはそれ自体残酷とグロの世界の怪奇趣味でしかなく、多くの史実が物語るように、決してSM文学ではない。作者は、SM文学の基準をそこに置く。

あるいは、またいう。女王趣味の女性こそ現代の最高水準をゆく貴婦人である。彼女自身は何の労働もしないし、男どもに労役を強いて、快楽することができ。しかもその快的な生活こそ、美容最上の源泉となり栄養となるのだから、奨励するまでもなく、女王趣味をもつハイ・レディなら、そのほうを撰ぶにちがいない。男に隷属することを喜ぶ女性もあろうし、逆に男を征服して、男達に収入相応の納税の義務を課し、優美な生活を享樂する女性もあってよいだろう。

ハイ・レディよ

ミニ・スカートの脚線美を、男達の視線の中で、椅子に腰をおろし脚を組むとき、貴女はスカートのすそを引っ張ったりしないで下さい。水着スタイルの貴女に、男達の視線が集中したら、悠然と観賞に応えてあげて下さい。

奴隷志願者が現われたときは、貴女はニッ

コリ笑って、ただちにそれを許可し、条件をつけて下さい。貴女の魅力溢るる肉体のムードで相手を圧倒して下さい。男は決して、貴女に對等の肉体交渉を望んだりしないから、反って、脚線美の前に跪かせることを、率直にいいわたすことが、何よりも重要なことです。

ハイ・レディよ。

ますます輝きを加える貴女の美しさのために乾杯し、短い青春のいのちを謳歌するがゆえに、その勇気と智慧と、必ず貴女の胸の奥にひそんでいる女王趣味に、いちど点火する冒険を試みられては、如何。

すくなくとも、しわくちゃのおばあちゃんになる前に、そんな体験も、貴重であると判断し、実践すべきでしょう。

ハイ・レディよ。

では、貴女的美貌と男性虐待の美德のために、もういちど乾杯して、祝福しよう。

また会う日まで、さようなら。

(男性虐待快楽術第一部おわり)



イチジク願望

甘美などろ沼に

小早川もと子

時計が五時を指した時、私の頭の中にはもう爆発してしまいそうなほど、せつない想念が充満していた。

「やるんだわ。きょうこそは律子さんに……この機会をはずすと、二度とチャンスは来ないかもしれない」

そんな私の胸の内も知らずに、律子さんはいつもに変わらない、くったくのない笑顔を投げかけてくる。

「チェックアウトよ。さあ、帰り仕度にかかりましょうよ」

大阪・堂島にある私たちの社のビルは五階建ての近代的なビル。土一升金一升といわれる土地柄、キリのように細い建てかたで、私

たちは四階の二部屋を独占している。ふだんは七人いる女子社員の五人が神戸営業所に出張している。きょうの女の子は私と律子さんの二人っきり。

男子社員がゴソゴソ帰り仕度をはじめた時私たちはもうお化粧室へ……。

赤い娘のマークが鮮かな化粧室のドアを開くと、律子さんはもう鏡をニラんでクレンジングで顔をぬぐっている。

柔らかなアゴの線にカールの黒髪が、横から見ると余計によく似合う。いつもそう感じるのだが、律子さんの可憐さは食べてしまいたいほど可愛い。

『あのまあるい瞳が、きっと泣き出しそうに

なる。白い襟あしが、恥ずかしさでまっ赤になるだろうな』

私は、その可愛い横顔をみつめながら、その胸につぶやいた。

律子さんと私は同期の桜。七人の女子社員のなかでも、とくに仲がいい。『レスじゃない』と噂を立てられるのも、二人そろって男ざらいで通してきたせいだろうか。

土曜の午後は、肩を揃べてボーリングやパブ形式の洋酒喫茶をのぞく。何かと声をかけてくる坊やがいても、いつも積極的に受けたり、デートに応じるわけでもない。最後は、安あがりのお寿司やさんで腹ごしらえして帰る。そんな繰り返しで毎週が暮れる二人の仲

だから、そんな噂をする人もあるのだろう。入社して三年。最近では、かなり突っ込んだ話もするが、別に同性愛といった感情は持っていない。

平凡な日々に、ふと「悪魔の思いつき」がさし込んだのは昨日だった。律子さんが「私時々おなかの調子が狂って困るのよ。四日も五日も自然が呼ばないの……」と、ゆううつな顔をしたからだ。

今朝からも律子さんの顔は冴えない。私がお昼の休みに、ひそかに薬局で恥ずかしい思いをしたのは、この絶好の機会をつかみ、生かしたかったためだ。

そんな想いが実感を伴う妄想を呼び、内心の喜びがこみあげてくるのを押えながら、つとめて明るい声でいった。

「さあ、私もカベ塗り開始」

律子さんと並んで鏡の前に立ってから化粧バッグをあけて、私はいかにもあわてたようにひとりごとをいった。

「アッ、大変。もう少しで忘れるところだったわ。おクスリ入れなくちゃあ……。バッグに入れといてよかったワ」

「どうした？」

と振り向いて、バッグをのぞき込んだ律子

さんの顔を、いくらそう仕向けたとはいっても、まともに見る勇氣は私にはない。

でも、練りに練った筋書きどおりに、演技だけはしなくっちゃあ……。

「私、いまね、ひどい便秘してるの。出勤前は時間がないから、会社で使おうと思ってイチジク浣腸持ってきたのよ。悪いけど、ちょっと待っててくれないかしら？ さきにさっぱりさせてもらうワ」

バッグの中にはビニール袋にはいったピンクの容器が二個。そのひとつを、さりげなく指でそっとつまみあげると、わざと律子さんの方を見ないで、まうしろのドアに滑り込んでカギをかけた。

いまごろ律子さんは、残ったイチジクをのぞいてるかしら。……そう思いながら、自分でも顔の火照りがよくわかる。

ドア越しに話しかける。

「このおクスリ、とっても便秘にはよく効いてよ。なまじっかな下剤なんか飲むより手軽で、すぐにおなかの調子がよくなるからいいのよ。慣れると手放せなくなるワ。あなた、使ってる？……」

こんな場合は、あけすけにいったほうが相手も平気になっちゃう。男の子のワイ談みた

いなものだから。そう思っても、ずいぶん度胸のいるお芝居。

いつもの声より少しうわずっているんじゃないかしら……と自分でも思う。

「私、使ったことないワ。お医者さんにすめられたことあるんだけど……。そんなによくきくの？」

律子さんの声がドアをのり越えてくる。

「ええ、私なんかもう二年越しにお世話になってるんですもの」

白っぽくって清潔なおトイレに、ピンクの容器が、いっそう可愛い感じがする。話しながら袋を破って穴をあけると、パンティをずらせて身仕度をした。中腰になっていつも通りに調子を見る。ひんやりと冷たい。

薬液を出来るだけ注入すると、一度容器を手元に返し、ていねいに空気を入れる。まだ三分の一は残っている。二度目は大きく空気が押し出される音がした。

律子さんが気掛りそうにしているのが、心配でわかる。

「ああ、早速の催促よ。五分ってとってもながく感じるわ」

私は先手を打って話しかける。

「あなたって勇氣があるわねえ。私なんか、

とっても自分でそんなことできないワ。どう
大丈夫？」

ドア越しに律子さんと話しながら、私はや
がて爆発の兆候を迎えた。

自分でも気まりが悪いドラム・ソロの音を
消すために、水洗の音を立てるのを私は忘れ
なかった。いつの間にか、演技のつもりが、
本当の楽しみに変わっているのをごまかすた
めにも。

「生き返ったみたい」

わざと明るい声を立てながらドアを開けた
私。その目にうつった律子さんが、気まわり悪
いのか、むやみにパフをはたいているのが、
とってもおかしい。ドアはわざと開けたま

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投
稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会に
は一切応じておりません故、御安心の上
御送稿下さるようお願い致します。尚手
紙の転送なども原則としては取り扱いは
致しておりません故御諒承下さい。
○如何なる理由に拘らず直接発行所への
訪問や電話は固くお断り致します。御用
件はすべて書面にてお寄せ願います。
○編集者に面会を求められる方は、住所
氏名職業を明記の上、用件を附してお申
込み下されば、電話番号、連絡場所など
を御返事申し上げます。予告なしに突然
訪問されてもお逢い致しかねます。

ま。さあ、いよいよこれから本番。……私
は洗面台の水を出しながら、次の作戦の実行
に取りかかる。

「そうそう、あなたもお通じがないっていつ
てたわね。その顔色じゃあ、まだ困ってるん
でしょ。ちようどいいじゃない、ひとつ残っ
てるからお使いなさいよ。武士は相見たがい
っていうじゃない。私に遠慮なんかするもん
じゃないわ。みずくさいことをいったら承知
しないワヨ」

勝気で知られている私は、こんな時にはず
いぶん有利。

手を洗い終ると、早速、ピンクのお菓子を
律子さんの手に握らせた。

「いいのよ。私はいいのよ。だって、もうな
おってしまったもの」

「ウソ。きのう、そういったじゃない。お腹
の調子悪いって」

「でも、でももう。……いまはおなか、いた
くないんだから」

顔を真っ赤にして、おクスリを押し返そう
とする律子さん。

声をひそめてもみ合っているうちに、手の
上で躍っていたイチジク流腸がピョンと床に
落ちて転った。そのうえそれは、いま私が出

てきたドアの中で止まって、こちらを招い
ているように見える。

「あら、ごめんなさい」

律子さんがあわてて、拾いにドアに半身
はいるのを見て、一瞬、私の脳裏に奇策がひ
らめいた。

律子さんを追うようにして押し込み、私も
はいると後ろ手にカギを掛けてしまう。

「なにも恥ずかしがることなんかないわ。あ
なたが自分で使えないなら、私が教えてあげ
るわよ。ここに居るのは二人っきりだし、今
日はもうだれも来ないわ。私たちの仲じゃな
い、二人の秘密にしようよ」

私はからだを固くする律子さんを背中から
そっと抱くように、耳たぶを柔らかに噛んで
あげた。

「だって、だって……」

といていた律子さんのからだだが、私にも
たれかかるようにぐったりするのに時間はか
からなかった。

「ごめんなさいね。無理、頼んで……」

消え入りそうな声で、律子さんが私の目を
見返した時、私はもう夢中で、震える手にあ
るイチジクに穴をあけていた。

(おわり)

連載 第三回

地獄ホテル

藤 見 郁

5

白いいけにえ

三笠英子は、必死に身をくねらせ、巨大な三面鏡の前から逃げようとした。肩をふり、尻をよじり、脚をばたつかせた。

しかし、いくらあばれても無駄だった。三面鏡は、英子のみじめな裸身を執拗にとらえて放さなかった。夢中になって前後左右に裸の尻をよじると、いっそうあさましい下品なポーズになった。

英子の両手は縄で背後に縛りあげられ、しかも、のどには革の首輪をはめられ、その首輪は天井から吊りさがっている鎖につながれ

ているのだ。

三面鏡の前から逃げようとすれば、すぐに首が締まって呼吸ができなくなる。鏡には、羞恥のすべてをさらけだした、みじめな自分の姿が、なまなましくうつっている。

英子はあばれるのをやめ、顔をそむけて目をとじた。

すると、王の手に握られている縄じりが、すぐに鞭のかわりとなって、英子のむきだしの尻に鳴るのだった。

まっ白い柔軟な尻に、たちまちうす赤い縄のあとがしみつき、英子は気の遠くなりそうな屈辱と苦痛に下半身をふるわせた。

「目をとじてはいけない。目をとじたら、せ



カッ ト・志 羽 利 也

っかくの美しい自分のからだを、自分でみることができなくなる。お前は、鏡のなかの自分の姿をしつかりとたしかめて、自分の美しさ、そして、現在の自分の運命を、素肌で認識しなければいけないのだ」

王は、英子の表情を注意ぶかくみつめながら、なぶるように、ゆっくりといった。

そして、それまで握っていた縄じりを放すと、英子の足もとにかがみこんで、ある作業をはじめた。

三面鏡の前の床には、直径五センチほどの金属製の環がはめこまれていた。それは、ちょうど英子が両足をひろげて立った足の裏のすぐそばに埋めこまれていたのだ。

王は指のさきで、かんたんにその環をつまみだした。環にはほそい鎖がついていて、その鎖は、床に密着していた。

「ウフフ……お前の足は白くてかわいい。たべてしまいたいほどかわいい足だ」

王は、子どもが草むらにひそんでいるカエルをつかまえるような手つきで、いきなり英子の右足首をつかんだ。同時に、片方の手で床からひき起こした金属製の環を、パチリとひらいた。

その環は手錠に似た仕掛けになっていて、英子のほそい足首に、カチリと噛みつくとき、そのまま離れなくなった。

「ウウウッ！」

新しい恐怖を直感して、本能的に下腹をふるわせ、英子はさるぐつわの奥で切実な声をあげた。

尻を大きくよじると、まだ自由がのこされている左足を、けるように高くあげた。

王は、手早くその左足首をつかんで、手もとにひき寄せた。床に装置されているべつの足錠を、カチリッと鳴らして、つかんだ英子の左足首に噛みこませた。

「むむッ！」

絶望的な悲鳴が、英子ののどからもれた。

英子の両足首は、約一メートルほどひらいて、床の上に固定されてしまったのだ。

臀部と腹部が、新しく襲った不安と恐怖に、はげしく波うった。

縄でうしろ手にたかだかと縛りあげられ、のどにはめられた革の首輪は天井からの鎖に吊られ、そして、両足は八の字の形に、床の上へ固定されてしまったのだ。

それはどこか秘密の神殿に捧げられた邪教のいけにえを連想させた。清純な肉づきをもったういいういしい姿態であるがゆえに、縄と革と鎖に拘束された白いいけにえの光景は痛々しく、その悲惨な肉体の内部に強烈なエロチズムがひそんでいた。

英子はもう三面鏡に背中をむけることはできなかった。わずかに首を左右にひねって、自分のあさましい屈辱の姿を鏡からそむけることだけが、英子にのこされた逃避だった。しかし、顔をそむけると革の首輪が締まった。英子はうめきながら、白いのど首から胸を、カエルの腹のようにヒクヒクとあえがせていた。

縄目のくいこんだ胸からゆったりと起伏をみせる腹部にかけて、とくにみずみずしい魅力にあふれ、生きている女の艶とかがやきに

息づいていた。乳房の先端のうす赤いつぼみは、突きだすように愛らしく、処女の象徴のように小さくとがっていた。

王は、うっとりした目つきで、うめきつづける白いいけにえを眺めていた。英子自身と巨大な三面鏡のなかでもがいている数人の英子を、交互にみくらべているのだった。

その目のいやらしさを意識すると、英子は自分のもっとも女らしい柔肌を、風に吹かれる草の葉のようにうねらせ、男の心をかきたてる羞恥の色にそめるのだ。

いま王は、英子のどこにでも指を触れることができるのだった。どんなに破廉恥な行為でもできるのだった。王の意志を拒否するものは、なにもなかった。

王の精力的なふといのどが、その行為の前ぶれのように、ごくりと鳴った。右肩のあたりが、わずかに動いたようだった。

しかし、王は自分の欲望をおさえるようにして、英子のそばから離れると、ふたたびソファに腰を沈めた。

あわてることはないのだ。王は、その男性的なあぶらぎった容貌に、余裕のある微笑をうかべた。

一番うまさうなたべものは、一番最後まで

のこしておこう、と王は自分にいいきかせるように、胸のなかでつぶやいた。

それに、いまはあまり英子にばかり、つきまといっているわけにかなかった。王には、つぎの日課が待っていたのである。

東京九段に大きな総合病院を経営している九条勝彦のひとり娘の真理の、その後の馴致状態をみなければならなかった。

いま、三面鏡の前に吊られている三笠英子のずばぬけた美しさにまけない美貌をもっている九条真理だった。

ただ、真理の性格はあまりにも勝気で、そしてわがままだった。自分の美貌をうぬづれていた。その驕慢な性格を、なんとか矯正しなければならぬ。しかし、その仕事は王にとって、けっして面倒なものではなかった。

王は立ちあがった。そして、地下四階の矯正室へいくために、この部屋を出た。英子のポーズは、そのままだった。

9

矯正室の真理

地下四階の矯正室は、暗い照明のなかにつめたく沈んでいた。

地上十階、地下五階のこのホテルは、各室

それぞれがあかるい照明の設備をもち、いかにも観光ホテルらしい、しゃれたバラ色のムードにつつまれていた。

『接見室』にしても『監禁室』にしても『美容室』にしても、その目的や機能をべつにして、雰囲気そのものは、けっして陰惨でもなければ、暗くもなかった。犯罪めいたにおいは、どこにもなかった。

だが、この『矯正室』だけは、とくべつだった。その名にふさわしい、冷酷な、そして陰湿な空気がよどんでいた。

ロープでうしろ手に縛られた九条真理が、少年調教師のピーターに縄じりをとられて、この部屋に現われた。

足の長い真理はすらりとした身長で、ピーターよりも十五センチは高かった。

自分よりも小柄で背のひくい、男だか女だかわからない子どもに縛られ、尻を小突かれて廊下をあるいてきた真理は、それだけでも激しい屈辱に、心身を蒼白にしていた。

真理の胸にはブラジャーがあり、腰部は白いパンティーでぴっちり包まれていた。ブラジャーの上と下に縄目がきびしくくいこんでいるのが、ひどくむごたらしく見えた。

ピーターはいつものように、黒い革のジャ

ンパーとズボンをはいていた。

倒錯的な妖しい美貌をもつピーターには、その黒い柔軟な革の服が、まるで皮膚そのもののようによく似合った。

「さあ、おねえさま。社長がくるまで、その壁によりかかっているわい」

と、ひっぱっていた縄じりをゆるめながらピーターがいった。

社長とは、王のことである。このホテルの内部において、王はキングとも、社長ともよばれている。

「ひどいわ。なぜ私は、いつもこんなに縛られていなければならないの。せめて、廊下をあるくときぐらいは、自由にしてよ」

と、壁にもたれた真理は、呼吸をあらくしていった。その眉や目の光りには、負けずぎらいの性格が、ろこつにあらわれていた。

「おねえさまには、もう自由というものは、なにも残っていないのよ。そのことはもう、よくわかってはいるはずなのに……」

男のくせに、ピーターはときどき女の言葉を使った。

ピーターが美少年だけに、それはけっして不自然ではなかったが、あまったるい口調には退廃的な不潔感があった。

「私は、縛られるような悪いことは、なにもしていないわ！」

真理は壁から背中をはなし、ヒステリックにわめいた。

ピーターは、ぬれているような赤い唇をゆがめてせせら笑った。

「疲れるだけだから、あんまりさわがないほうがいいよ、真理おねえさま」

いくら唇をつきだしてわめいたところで、真理のほそい両腕は、うしろにねじまげられて、みじめな縄目をうけ、背中に固定されているのだ。反撃のチャンスはいくらねらったところで、ピーターをつきとばして逃げることはできなかった。

体あたりをくらわせてピーターを倒したところで、この地下四階から地上へ出ていくためには、幾多の廊下や、階段をのぼらなければならぬ。いまの真理は、出口の方角すら見当がつかないのだった。

肩に力をいれたために、胸と腕を巻いている縄が針金のように皮膚にくいこみ、真理はその痛みに唇を噛んだ。

そのとき、王がこの部屋に姿を現わした。

ピーターは王の顔をみると、どこか芝居じみた動作で一礼した。そして、真理の縄じり

をひきながらいった。

「用意はできております。どうぞ」

「うむ」

王は、軽くなずいた。そして、真理の顔にチラリと目をやると、傲然とした態度で、この部屋の奥に足をすすめた。

王のすすむ方向には、厚い生地できた真紅のカーテンが垂れさがっていた。

ピーターが壁のボタンをおすと、その真紅のカーテンは、音もなく左右にひらいた。カーテンのむこう側には、もうひとつ、こじんまりとした部屋があつて、その中央に、銀色の細いパイプで組み立てられた奇妙なカチのいすが、意味ありげに据えられていた。

一見しただけで、複雑で精巧なメカニズムを秘めたいすであることが想像できた。そのパイプいすだけに、天井からピンク色のライトがふりそそいでいた。

周囲はうす暗く、パイプいすだけがピンク色に浮かびあがっているのだった。前衛劇の舞台を想像させた。

パイプいすと向かいあつて二メートルほど離れた位置に、すわりごちのよさそうな、ややひくいソファが置いてあつた。

そのソファは王がすわるためにあり、そし

て、冷酷な形をしたパイプいすが、真理のためにあることは、容易に想像できた。

ピーターが真理の縄じりをとって、王のそばにひきたててきた。王は期待の目で真理をふりかえった。

「すこしはおとなしくなったかな、真理。このホテルは、淑女ばかりを招待するためにある。だから、お行儀のわるい、反抗的なお嬢さんは、すこし教育をしなければならぬのだ」

王は、真理の勝気な表情を眺めながら、備えつけてあるソファに腰をおろした。

「真理おねえさまは、こちらのパイプいすにすわるのよ。さあ、いらっしゃい」

いいながら、ピーターは細い金属製の鞭でピシッと真理の尻を打った。その打ちかたがあまりに強かったために尻の肉がしびれ、まだ抵抗のかまえをとっている真理の気力がくじけた。

ピーターは、真理の下半身をひきずるようにして、パイプいすの上にのせた。

「つめたいわ、やめて！」

真理は不安を感じて、すぐにパイプから尻を浮かした。しかし、首すじを鞭で打たれてまた腰を落とした。

四本のほそいパイプが、井桁の形に組み立てられているところへ、じかに尻がのった。

「はじめはつめたくても、自分の体温ですぐにあたたくくなるよ」

ピーターはいたずらっぽい微笑でいうと、手に握っていた鞭を、ズボンの尻ポケットにさしこんだ。これから本格的に、真理をパイプいすに縛りつけようというのだった。

「いやよ、やめて！」

真理は大きく身ぶるいすると、いすから立ちあがった。

しかし、ピーターはすばやく鞭をぬきとって、ピシリッと真理の太腿を打ちすえた。

「ひいッ！」

と悲鳴をあげて真理はふたたびパイプいすの上に尻をおろした。

「あまり世話をやかせないでよ、真理おねえさま。静かにしていてくれないと、ぼくが困るんだ。このパイプいすは、とても操作がむずかしいんだ。このホテルのなかで、ぼくだけしか、操作できる人間はいないんだ。おねえさまのからだは、ぼくよりもだいぶ大きいから、あまりあばられると、ぼくには扱えなくなる。さあ、お尻をもうすこしふかく、このパイプの上へのせてください。おや、い

やなのかい。それじゃしかたがないから、このベルトで、下腹から腰のうしろまで縛らせてもらおうよ」

パイプいすに装備されている細い皮紐が、真理の腰部にぐるりと巻きつき、強烈にいくこんだ。

「ああ、痛いわ、やめて、ああ、ううッ！」

真理は、また悲鳴をあげてのけぞった。

苦痛と同時に、はげしい不安が真理を襲ったのだった。こんないすに縛りつけて、この社長とよばれる男は、私になにをしようというのだろうか。

「そろそろ、そんなにあばれちゃ駄目だといったろ。しようがないなあ。よし、それじゃこのベルトを、もう一本、おへその下のところへまわすよ。これなら動けないだろう。い格好になったなあ。おりこうだから、おねえさま、もうすこし静かに、おとなしくしていてね」

いいながらピーターは、パイプいすの背中についている直径十五センチほどの小さなハンドルをまわした。すると、真理の両膝の裏側にあたっているパイプが、するすると左右にのびた。

「お尻がきちんと落ちついたから、こんどは

足のほうをしつかりと始末しようね。両足を横に、できるだけひろげて水平にのばしてごらん。前にのばすんじゃないんだ。左右に大きくひらいてのばすんだよ。だめだめ、膝をまげちゃ駄目だ。ピーンとのばすんだ。いうことをきかないと、また鞭だよ」

ピーターは、ほそい金属製の鞭のさきで、真理のなめらかな腹のあたりを、するどくたたいた。

その鞭の痛さは、さすがに強情な真理でもがまんできないものだった。苦痛にうめきながら、真理は足をひらいた。

鞭で脅迫されたからとはいえ、自分から足をひらくという行為に、真理は目から血の流るほどの屈辱をおぼえた。

「そう、そう。やろうと思えば、ちゃんとできるじゃないか。それじゃ、左足首から、このベルトでくくってあげようね。この革紐は細いけれども、いくらあばれたって絶対に切れないから、無駄なことはやめたほうがいいよ」

パイプいすに装備されている革ベルトが、真理の左足首に巻きつき、ぎりぎりといくんだ。つづいて、右足首にも革ベルトが巻きつき、パイプいすに密着した。

アクロバットダンサーのように、両足を左右に水平にひらいたまま、真理は縛りつけられたのだった。

「痛いわ。ああ、痛いわ。やめて……もう、やめて……」

真理はうめき、首を左右にふって、目の前にいる王に哀願した。

しかし、その声は王の耳にも、ピーターの耳にもはいらなかった。雪よりも白い肌をもつ下半身が、なまなましくさらけだされた。内腿の柔軟な筋肉が痛々しくひきつれた。

脚の美しさを誇っている真理だけに、この屈辱は耐えられなかった。

真理は噛みしめた奥歯のあいだから、ヒューという声をふきだしながら、虫のように、もがいた。

「これで足はいいわ。きれいにひらくことができたわ。ひらいたまま、もうどんなことがあっても動かせない。こんどは手だよ。このパイプいすにすわったら、こんなに縄でぐるぐる縛っておく必要は、もうないんだ。まずこの縄を解かなければ……」

ピーターは、ひとりごとをいいながら、器用な手さばきで、真理をうしろ手に縛っている縄を解いた。

両手が自由になると、真理は思わずその手で、自分の二の腕にしみついた縄のあとをさすった。縄のあとには指さきで、はっきりしたかめられるほど深く、むごたらしく、皮膚の色を変色させて、きざみついていった。

自分の肌を愛撫するように、さすっている真理の頭上に、ピーターの命令がとんだ。

「その手を、またうしろへまわすんだ。ぐずぐずしてしないで、早く背中へまわすんだ。いつまでもじもじしているんだよ。いやなのかい。それじゃ、また鞭が欲しいんだね。こんどは、足の一番ふといところをたたいてやるのか」

その声に、真理はおびえた。ピーターの鞭は、ほんとうに痛いのだ。骨のずいにまで、ひびくような、するどい痛さなのだった。

真理は目をとじ、屈辱に肩をふるわせながら、左右の手を背後にまわした。

「それでいい。世話をやかせるんだな、まったく」

ピーターは舌うちすると、パイプいすの背に装着してある細い皮紐で、真理の両手首をひとつに、くくりつけた。

しみついた縄目に変色しているとはいえ、真理の手首は細く、可憐だった。とくに、ぜ

いたくな生活に慣れている十本の指は白く、長く、なめらかだった。

真理は、眉と眉のあいだに皺をよせて、自分の手首にくいこむ、革紐の不快感を耐えていた。手を背後に縛りつけられるということは、意志や行動の自由を最も束縛される感じがして、不安だった。

しかし、いまはすこしの抵抗もゆるされなかった。ロープから解き放たれたと思ったのも、わずかに数秒間だけだった。

左右の手首を、背後のパイプにくくりつけられると、真理の胸は必然的に前へつきだすような形になった。

ピーターが、真理のその固定された手首をなでながらいった。

「皮紐がほそい手首にくいこんで、ずいぶん痛そうだな。だけど、すこしの辛抱だよ。そのうちにしびれて、痛みも感じなくなるさ。さあ、こんどは首だな。この首枷は、ちょっと犬の首輪に似ていて、おねえさまみたいなお金持ちのお嬢さんのプライドをすこし傷つけるかもしれないけど、変わったアクセサリーだと思えば、辛抱できないこともないさ。案外よく似合うかもしれないよ」

ピーターの指が、背後から真理の首すじや

のどの周囲に触れて、いやらしく撫でまわした。男の子のくせに、妙にやわらかい、しめっぽい指だった。悪寒が、真理の背すじに走った。首や肩を、上下左右にふって、真理ははかない抵抗をした。

しかし、ピーターは強引に、その革の首枷を、真理ののどに、はめこんだ。

その首枷も、当然、パイプいすの、真理の首のうしろにあたる部分に密着していたのである。

「さあ、できた。これでおしまいだ。もう自分で動かせるのは、口と指のさきぐらいだ。フフフ、ずいぶんおとなしくなったね、真理おねえさま。ぼくのことを化けものだといって罵倒したり、逃げるんだといって大あばれした、さっきの元気はどこへいったのかな。ハハハ……」

ピーターは、額にたれさがった栗色の巻き毛を白い指さきではらいのけながら、勝ち誇った笑い声をあげた。

「ああ、ううう……」

パイプいすにくくりつけられた真理は、全身の筋肉や関節におそいはじめた苦痛とたたかいに、ただうめくだけだった。

10

非情のメカニズム

「よし、それでいい。あとはわたしがやる」

王が、うなずきながらいった。

ピーターは一礼すると、黒い猫のように足音をしのばせて、この矯正室から出ていく。

この部屋でのピーターの役目は、もう終わったのだ。

真理と王だけが、それぞれいすにすわり、向きあったまま、この部屋にのこった。

王はソファのひじかけの裏側についているボタンのひとつを押した。

すると、室内に軽快なロマンチックな音楽が、ひくく流れだした。真理にそそいでいる照明も、いくぶんあかるさを増したようだった。くくりつけられている真理の素肌が、いっそうなまめかしく、生き生きと、かがやきはじめた。

王は目をほそめて、せつないあえきをつづけている真理をみつめていた。飽きることのない眺めだった。完全に自分の掌の上にのった真理の美しさを、たのしみながら味わっているのだった。口中に生唾がわいてくる。

真理の顔、首、肩、胸、腹、足、すべてが

それぞれ独立して美しかった。それらには、手垢のついていない新鮮な美しさがあった。

王の心のなかに、積極的な意志がうごめきはじめた。

さっきピーターは「パイプいすを操作できるのは自分だけしかない」といったが、それは正確ではなかった。

王もまた、このメカニズムを、自分の手足のように操作することができると。なぜなら、このパイプいすを考案し、設計し、つくらせたのは、王自身だった。この複雑なパイプいすは、王だけのために存在しているのだ。

「美しい。お前はまったく美しい。お前が驕慢な気をつよい娘だということを知っているせいか、その姿がいっそう美しくみえる」

王は、口にだして感嘆した。

そして、自分がすわっているソファの、ひじかけの裏側についているボタンのひとつを軽く押した。

すると、真理をのせているパイプいすが動きだして、なめらかな速度で王の前に接近してきた。

パイプいすの下には車がついていて、王は精巧なりモートコントロールによって自由に移動させることができたのだ。

王のすぐ前に接近して停止すると同時に、パイプいすの脚が、するするとのびあがって真理の位置が五十センチほど高くなった。

「こわいわ、やめて、やめてッ！」

真理は思わず恐怖の声をあげた。

いくら気をつよい娘でも、つぎつぎに襲いかかってくるこの奇怪な運命にうちかつ神経はなかった。

「フフフ……こわがることなんか、なににもない。わたしはお前を、かわいらしい心をもつ娘にしてやろうというのだ。男から愛される性格をもった女に、教育してやろうというのだ。金持ちの医者家に生まれ育って、傲慢な、こわいもの知らずになっているその性格を、女らしい従順な心にしてやろうというのだよ」

王は、またリモートコントロールのボタンを押した。

パイプいすは昆虫のようにじわじわと四本脚をひろげ、微妙な運動を示しながら、王の膝の上すれすれにのった。

王はソファにすわったままで、いすに縛りつけられた真理を抱くことのできる形になったのだ。

王の吐く息が、真理の顔にかかった。真理

が過去に一度もかいだことのない、不潔な、男くさい息だった。首枷をはめられている真理は、その吐息を避けることができない。自分の呼吸をとめることだけが、せいっぱいの反抗だった。

「フフフ……そんなに毛嫌いするものではないよ、真理」

王は、真理の表情を間近にみながら、うつとりと笑った。若い女だけがもつ、あまずっぱいような刺戟的な体臭が、王の鼻孔をくすぐっている。唇のまわりに生えている淡いぶ毛の一本一本までが、王の目にたしかめられる。

すすり泣くような細い声が、真理ののどからもれた。皮紐に締めつけられて盛りあがっている筋肉が、わずかに変色している。

「痛いかな。すこしきゅうくつかも知れないが、がまんしなければいけない。あばれたりすると、手足や足首や、首や、それからおへその下を締めつけている革のベルトが、もつとくいこんで苦痛が増す。それに、このパイプいすのすわりごちは、そんなに悪くはないはずだよ。わたしが三カ月もかかって設計し、入念につくらせたものだからね。直接肌にあたるところは細いスポンジが貼りつけて

あるから、どんなに敏感な皮膚でも、傷つけるといふことはない。おとなしくしてさえいれば、それほどつらい思いをしなくてもすむはずだよ。わたしはお前に、肉体的な苦痛をあたえようとは思っていないのだから」

女は美しい生きものである。その美しい生きものを、さらに磨きあげて、より美しく魅力的にするための努力を、わたしは惜しまない。わたしの一生は、その目的のためにあるのだ。と王は、やさしい微笑をうかべながら語りつづけるのである。

「私をこんなひどい目にあわせておいて、よくそんなことがおっしゃれるのね！」

耐えきれずに、真理はさげんだ。

やや目じりのつりあがった感じで、いかにも気のつよそうな真理の美貌が、怒りと屈辱にゆがんだ。

王をにらみつける目は、一点の濁りもなく澄んだ色をしていた。驕慢ということは、逆に純粋な心をもっているともいえる。鼻は高く、唇もきりりとしまっていて、不自由のない生活を送ってきた過去をあらわしているようにみえた。

その上品な顔が、いま王のあぶらぎった男ざかりの顔のわずか三十センチ前にあった。

王の目の高さに、真理のややとがり気味の顎があった。その顎の下につながる白いのどを指で軽くすぐってやりたい衝動にかられたが、王はがまんした。

そんなことは、いつでもできる。

真理の乳房をおおっているブラジャーも、腰部をつつんでいるパンティーも純白で、もぎたての果実の皮のように清潔だった。うすいナイロンの生地を透して白い皮膚が、より神秘的にみえた。

王のねばっこい視線が、その腰部のまるみにじろじろとそそがれた。真理は、はじめのうちにはできるかぎりもがいて、抵抗の気力をふるいたたせていたが、王のいったとおり、手首や足首を締めつけているほそい革ベルトがくいこむだけだとわかると、ぐったりと力をぬいて、動くのをやめた。

「フフフ……そうだよ。無駄な努力はしないほうがいい。頭のいいお前には、もう察しがついていることだろうが、このパイプいすはここに装備されているボタンひとつで、どのようにでも操作できるのだ。お前のからだには、もうなんの自由もない。わたしの心のままになってしまったのだ。わたしは、どんな恥ずかしいポーズだって、お前にとらせるこ

とができる。このパイプの一本一本には、わたしの心が通じているのだ。お前はもう、人形使いにあやつられる裸人形にすぎない。魂をもたない人形よりも、お前のほうが、よっぽど魅力的でかわいらしいけどな。フフフ」

「ひどい……ひどいわ」

真理の目から、涙がこぼれはじめた。

「おやおや、くやし涙かね。よろしい、いくらでも泣くがいい。美しい女というものは、泣く顔も美しい。そのぶざまな姿で泣いているうちに、お前の自尊心もしだいにくずれてくるだろう。そして、自分でも知らないうちに、男にとって従順な、奴隷のような女になっているはずだ」

「う、う、ううう……」

涙が頬につたわり、さらに新しい涙が目からこぼれおちた。

「フフフ……かわいい。とてもかわいいよ、真理」

王は身をのりだし、真理の顔に自分の顔を近づけ、舌をのばして、彼女の目からあふれる涙をなめた。

「ひいッ」

という金属的な声をあげて、真理はのけぞった。王のぬらぬらした赤黒いような舌の愛

撫から逃げようとしたのだ。しかし、のけぞろうとしただけで、実際は首のうしろに密着しているパイプの支柱のために、後頭部をよくこすっただけであった。せまってくる王のあぶらぎった体臭を避けることはできなかった。

「フフフ、フフフ……」

と、王はのどをふくらませて笑いながら、真理の顔をべろべろとなめまわした。とじたまぶたの上や、鼻のあたまで、その両わき、頬ぺたや唇を、とくに入念に唾液をつけてなめまわした。

そして、それに疲れると、やや離れて坐りなおし、慈愛のこもった目で、自分の唾液でところどころ光っている真理の顔をあらためて見た。

王のすわっているソファの横に、まるで拳銃のホルスターのように革のサックがついていて、そのなかには、羽毛とか、ハサミだとか、耳かきだとか、毛抜きとか、つめ切りだとか、クリップだとか、洗濯バサミのようなものが、こまごまと、しかし整然と、さしこまれていた。

王は、その革サックへ指をさしこむと、銀色に光っているハサミをとりだした。そして

真理の鼻の前で、パチリとそれを鳴らしてみせた。

「さあ、このハサミで、真理のブラジャーを切り落とすことにしよう。そういえば、わたしはまだ、真理の乳房をみていなかった。この際、ぜひみせてもらおう」

自分の居間にそなえてある大型のカラーテレビで、王はすでに真理の肉体のすべてをみていた。しかし、肉眼でたしかめるのはたしかに、いまがはじめてだったのだ。

真理の皮膚とブラジャーの紐のあいだに、つめたハサミの感触がさしこまれた。真理は「ひいッ」と口のなかで声をのみ、全身を硬直させた。

パチリッと、ブラジャーの紐の片方だけが切られた。つづいて、べつの紐が切られた。かんたんな作業だった。

王は、片手でブラジャーをわしづかみにすると、ひといきに剥いだ。

「む、む、むッ……」

という、声にならない声が、真理の口からもれた。美しい、清純なまろみをもった乳房が、羞恥にふるえながら、王の目の前にむきだされた。

「おう、これはみごとだ」

好きなケーキを目の前にさしだされた子どものように、王の瞳が生き生きと光りかがやいた。

それは、いくらか小さめではあったが、こんもりと形よく盛りあがった上品な乳房だった。米粒ほどの小さな乳首が、恐怖のために固く縮んでいた。それがまた王の目には愛らしくうつった。

数呼吸のあいだ、王はその魅惑的な隆起をみつめていたが、やがて、たまりかねたように、頬をすりよせた。

「ひいッ。いやッ、いやッ、やめてッ。汚ないッ！」

真理は泣きながら悲鳴をあげた。しかし王は、左右の頬を交互にすりよせ、押しつけ、執拗に愛撫をくりかえすのだった。

やがて王は、皮膚とそれに密着しているパンティーのゴムのあいだに、ハサミのさきをさしこんだ。

真理は、狂ったような黄色い声をあげた。

全身の筋肉をげしく動かして抵抗しようとしたが、パンティーにさしこまれたハサミは冷酷に活動をはじめた。いくら真理がもがいても、パイプいすはびくともしなかった。

うす暗い小部屋に、痛切な悲鳴だけが高く

ひくく反響した。

ハサミはゆっくりと白い布地を切り裂いていった。最後までかくされていた真理の素肌、すこしずつ現われてきた。

そこは、いままでのどの部分よりも白かった。真理のプライドの最後の守りだった。

パイプいすの足もとに、きれぎれになった白い布きれが一片ずつ落ちた。目的を終えたハサミは、またソファの横にある革サックのなかへさしこまれた。

王はつぎにハンドルを回転させて、パイプいすの四本の脚を一メートルほど高くのばした。真理のからだができるすると浮きあがった。気が遠くなるような不安と屈辱感に真理はうめいた。

どんな抵抗もゆるさない非情のメカニズムは、王の気軽なハンドルさばきだけで、きわめて正確に動いた。そして、停止した。

真理の腰の下に、王の顔があった、首輪のために、うつむいてそれを見ることはできないが、王の吐く息ではっきりと感じられた。

井桁のかたちに組まれたパイプの中央に、真理の臀部はすっぽりとハマりこんでいるのだった。そして、その臀部の真下に、王の顔があるのだった。

「きれいだ！」

と、下からみあげながら、王はうなるような声で感嘆した。

「こんなきれいなものは、これまでにみたことがない！」

それは王の本心だった。

真理は目をとじた。どうもがいても避けることはできないのだった。みられるまま、いじられるままにされているより、仕方がないのだ。屈辱の涙がこみあげ、どっとあふれだした。

クッククックと、のどの奥でしゃくりあげるようにして、真理は泣いた。涙は頬から顎へ、そして乳房へとしたり、ついには王のおおむいてゐる顔まで、ぬらすのだった。

11

黒い簞口具

じゅうぶんに目的をはたした王は、上機嫌で巨大な三面鏡の部屋にもどってきた。

そこには三笠英子が、両足をふんばるようにしてひらき、うしろ手に縛られ、首輪を上から吊られたままの姿であえいでいた。さっき王が出ていったときと、まったく同じ拘束状態だった。しかし、英子自身に微妙な変化が

おこっているのを、王は敏感に感じとっていた。

「おや、なんだか苦しそうだな。どうした、英子」

英子の表情を注意深くみつめながら、王はいった。さるぐつわのために、英子の顔の半分はかくれている。

王はふりかえって、女秘書を呼んだ。

「はい」

と返事をして、黒い服に身をつつんだ美貌の女秘書が現われた。

「英子のさるぐつわをとってやりなさい。どうも、ようすがおかしい」

と、王は命じた。しかし、王はこのとき、英子の微妙な変化の理由を、すでに察しているのだった。

女秘書は、慣れた手つきで、英子の口をおおっているさるぐつわをはずした。

「おねがいです、あの……」

英子は、大きくひとつ呼吸をすると、待ちかねていたようにいった。三面鏡のなかの数人の英子も、大きく胸をふるわせて呼吸し、あえいだ。

「どうした、なにが言いたいのだ」

王は、英子の顔をのぞきこみながらゆっく

りときいた。

「あの……」

英子は口ごもった。そして、羞恥に耐えかねるように腰をくねらせた。王の目が、その腰をじろじろとみた。

「どうした、さるぐつわをはずしてやったのに、口がきけないというのか。わかった。わたしの耳にきかせたくないことなんだな」

王はふりむいて女秘書に目くばせした。英子の言いたいことをきいてやれ、という意味の目くばせだった。これはしかし王の親切心ではなく、まったくその逆なのだった。

女秘書はうなずいて英子の前にまわると、その自由になった唇の前に、自分の耳を寄せた。

「おゆるしがたわ。言ってごらんなさい。どんなことなの？」

この女秘書にも、英子の訴えたいことは、すでにわかっていたのだ。

英子は、女秘書の耳になにごとかをささやいた。

「なんですって？ おトイレに行きたい？」と女秘書は王にきこえるように、声にだしていった。英子の顔が、羞恥のために赤くそまった。それは、健康な肉体をもった人間な

ら、当然あるべきはずの生理だった。

「それで、大のほう、小のほう？」

女秘書は、声をはりあげるようにして、英子にきいた。英子の顔は、さらに赤くなり、のどから胸のあたりまで血がのぼった。

女秘書は、耳を英子の口のそばに寄せた。

「小のほうね、わかったわ」

女秘書は、そのことを王に報告した。

「なるほど、そうか。そんなことなら、自分の口から、はっきりといわなくてはだめだ。これからもあることだから、英子、はっきりと大きな声でいいなさい」

王は、叱るように英子にいった。

しかし、英子にそんなことがいえるはずはなかった。英子は沈黙した。沈黙しているあいだにも、下腹の圧迫感はますます膨張して英子をくるしめた。

「あ、あ、あ、おねがいです。あ、ああッ」

英子は、しぼりだすような声であえいだ。

「だから、はっきりいいなさい。はっきりといえ、すぐにでも行かせてあげるよ」

王は、微笑をふくみながらいった。

「おねがいです。おねがいです。そんな意地悪をしないで……ああ、うう、うううッ」

英子は、まるい尻をうしろへつきだし、舌

をひきつらせて哀願した。天井から首輪につながっている鎖が、かすかな音をたててふるえた。

「まだまだ素直になれないのだな。よし、それでは、ひとつそのかわいらしいお尻に、鞭をくれてやるかな」

王は、けいれんしている白い尻をみながらいった。

「ああッ！」

英子は泣き声をあげた。いま尻なんか打たれたら、どんなに恥ずかしい失態をしでかすかわからない。英子の切実な欲求は、すでに我慢の限界に達しているのだった。

「いいいます。いいいますから、縄を解いて。おトイレへいかせてください」

英子は泣きながらさげんだ。屈辱の涙がづきからづきへと頬にあふれて、こんどは顔の色が蒼白になっていた。

「そうか、そんなにトイレに行きたいのか。それなら、すぐにさせてあげよう。その前にもう一度、さるぐつわをはめなければいけないよ」

王は、意味をこめた目で笑いながら、女秘書に合図した。

忠実な女秘書は、すぐにこれから英子の口

にほどこす、さるぐつわの一式を、銀製の盆の上にそろえて持ってきた。

王は、盆の上のガーゼを、指で一枚だけつまみあげた。それは、口のなかにつめやすいように、適当な大きさに切っており、十枚ほど積みかさねてあった。

「ああ、ゆるして。もう、さるぐつわだけはやめてください。口をふさがれると、とても苦しいんです。おねがいです、そんなさるぐつわは、もうしないでください」

英子は、涙をながしながら哀願した。その涙は、さらけだしている、ふたつの乳房の上にも、したたり落ちた。

「だめだなあ。もうそんなに大きな声をだしてさわいでいる。わたしは、うるさいのはきらいなのだ。女の子は女の子らしく、もっとしとやかに、静かにしていなければだめだ。英子の口は、やっぱり、さるぐつわが必要らしいな」

王は、一枚つまんだガーゼを、英子の鼻さきに持ってきた。

「だまります。だまりますから、やめてください。さるぐつわなんか、もうやめて！」

英子はふるえあがり、悲鳴のような声をあげた。首を左右にふって逃げようとしたが、

それは、ただ首輪の鎖をむなしく、ふるわせるだけだった。

背中に縛りあげられている両手首を必死にこすりあわせて、英子は哀願した。あまりあばれると、下腹部の緊張がゆるんで、みじめな失態をさらさなければならぬ。膨張感はずます増大するいっぽうだった。英子は唇をひらき、犬のように舌をだして荒い息をついた。しかし、王がさるぐつわのためのガーゼを入れようとすると、すぐに唇をかたくとざしてしまうのだった。

「もう観念して、おとなしく口をひらくんだな。さるぐつわをはめないうちは、なにもさせてあげないよ。このまま、両足をひろげたままで、おもらしをするんだよ。それでもいいのかね」

英子にとっておそろしい、恥ずかしいことばを、王は平気でいうのだった。

英子は泣きながら、ついに観念して口をひらいた。下腹部のほうの忍耐が、ますます限界に近づいているのだった。

「よしよし、いい子だ、いい子だ。さあ、もっと大きくひらくんだ」

赤ン坊をあやすようにいいながら、王は英子の舌の上に一枚目のガーゼをのせた。

「ああ、む、む、む……」

英子の口のなかに、ガーゼがつみかさなっていく。その不快さにもがこうとしたが、下腹に鈍痛が襲い、足がすくんだ。両足の膝がぶるぶるふるえてくるのだ。

「む、む、む……」

英子の声はしだいにふさがれて、うめき声にかわっていく。王はこの作業を、わざとゆっくり楽しみながらやっているのだ。

銀盆の上に用意されたガーゼの山が、一枚のこらず英子の口のなかにねじこまれた。

王はつぎに、黒光りしているなめし革の嵌口具をとりあげた。

ガーゼをつめこんだ英子の口へ、その嵌口具をあてると、首のうしろへまわして厳重にしめあげた。

その黒いなめし革は、英子の口から顎までをぎっちりとおおい、うしろは精巧な尾錠でとめられるようになっていた。

英子の声は、完全にふさがれてしまった。

鼻の穴だけを大きくひらいて、英子は呼吸した。あまりの苦しさに、のどをヒクヒクさせながら、ふたたび目から涙をこぼした。左右の乳房が、その悲鳴のかわりのように大きくはずんでゆれた。

王は、自分の考案した新式の嵌口具の効果にまんぞくし、女秘書につきぎの命令をあたえた。

「ベッドの用意を」

「はい」

女秘書は、つぎの部屋から敏速に移動ベッドをひきだしてきた。それは病院で使う患者移送車を、もっと複雑にしたかたちをしていた。

英子は、不安の目を王にむけた。さるぐつわをはめたら、すぐにトイレへつれていくくれると思っていたのだ。

そうではなかった。

女秘書は、英子の首から首輪をはずした。つぎに、床と両足を直結して固定してある足錠も解いた。最後に、うしろ手に縛ってある縄を器用な手つきで解きはなつと、運んできた移動ベッドの上に、英子を大の字にしてくりつけたのである。

ああ、このベッドにも、なにかおそろしい仕掛けがあるにちがいない、と英子は直感した。そして、また私をくるしめるのだ。

「むむ、むむむ……」

英子は哀願の目をいっぱいにみひらいて、王をみあげた。王はそしらぬ顔で、英子の白

い下半身を、みおろしている。英子の下腹はなだらかな曲線をえがいて、こころもち、ふくれあがっていた。

「さあ、おトイレだったね。すぐにしたくをするから、もうすこし待っているんだよ。よく我慢をしたね。感心、感心、いま、おむつをあててあげるからね」

と、さりげない口調で王がいった。

おむつ、という言葉を引きいて、英子は戦慄した。

そのおむつは、自分にあてられるのだ！

英子は直感し、気の遠くなるような恐怖をおぼえた。この男のやりそうなことだ。この男だったら、きつとやるにちがいない。思わず、もらしそうになって、英子は下半身の神経を必死に緊張させた。みんな、この男の計

画なのだ。私におむつをあてるために、こんな妙なベッドに縛りつけたのだ。

一度この部屋から姿を消していた女秘書が白い布のかたまりを両手に捧げて、王に近づいた。

「ふふ、ふふ……」

と、王はいかにもうれしそうな、ふくみ笑いをもらした。

「フフフ……それでは、それでは、おむつをあててあげようね。心ゆくまでするがいい。

だれにも遠慮はいらない。英子は、わたしにとっては赤ン坊だ。かわいい、かわいい赤ン坊だ。だから英子は、わたしをパパと思えばいい。フフフ……じつをいうとね、このおむつは英子のために、もう一週間も前から用意しておいたものなんだよ。さあ、静かにして

いるんだよ。わたしが直接、このおむつをあててあげるからね。英子は、わたしに感謝しなければいけないよ」

英子は、はげしい羞恥のために全身を赤くそめて、うめいた。

王の手がおむつをつかみあげ、白く脂肪ののった英子のなめらかな腹部を、たのしそうに凝視した。

英子は目をとじた。口いっぱいにつめこまれた、さるぐつわのために、舌を嚙んで死ぬこともできない。

「きれいだ。まったくきれいだよ、英子は。ただきれいなだけではなく、品のいいところがたまらない。英子のためだったら、わたしはなんでもしてやりたい。どんなに汚いものでも、英子のものだったら平気で扱うことができるよ。このおむつだって、わたしが考えてつくった新式のものなんだからね」

耳はふさがれていないから、王の声はすべて英子の耳にとびこむ。

英子はうめき、あばれた。しかし、いくらあばれたところで、大の字に縛られた全身はどうすることもできなかった。

王は、みせびらかすように、自分の手でつくったというおむつを、英子の顔の前にひろげた。

(つづく)

天星社刊

《限定版グラビア写真集》 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に發揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円(送共) 略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

体験告白

活

路

黒田孝志



カット・柏木真佐男

私が結婚したのは十年前であるが、その当時には表面上はともかく、実質的にはピタリした夫婦ではなかった。

その夜は中秋の満月が窓辺を照らして、美しい夜景であった。私は友人から贈られた蘭鉢を窓辺に持ち出して、部屋からの螢光灯と月光とのカクテル光線に映える蘭葉を眺めながら鉢をなでさすっていた。

その時、そっと寄り添ってきた妻は、なまめかしい態度で挑戦の素振りである。私は、その気持を察して応ずべきであるが、如何にせん、その当時は、性的不能に近い状態であった。別に異状もなく五体満足すぎる程の体

力を持ちながら、いざとなると夫婦生活に溶けこむことが出来なくなっていたのである。

従って、妻がなまめかしい態度でじゃれていく程、そのコンプレックスに悩まされるのである。気持の上では悶々と燃えても、本番では駄目であることがわかっているので私は不本意ながらも、あいまいな態度で受け流すより仕方がなかった。

妻も、私を元の状態に復活できないものかそうしなければ夫婦の仲は破滅になる。と考えてか、種々の本を買ってきて調べていたようである。（私も勿論、調べていた）

そうこうして妻がじゃれついているうちに大事にしていた贈物の蘭鉢を窓辺から落として割ってしまった。鉢を割られた蘭は、見るも無残に投げ出されている。その落ちたのがどうしても彼女が故意に突き落としたとしか思えないので、ついカーッとなり「ばかやろう」と、一発、殴ってしまった。

妻はその場に泣きぐずれて、せきこんでいたが、私としては、腹立たしさと殴った後味の悪さに、その場をつくろう術もなく、ぼんやりしていた。

しかし、内心では可哀そうな奴、殴ってすまなかった、と思う反面、自分の不能に腹立

たしさも感じていた。

それから三十分も経った頃だろうか。それまで泣きじゃくっていた妻は、むっくり起き上がる、

「私は悪い女でしょ……気がすむことなら、どんなに虐めてもいいわ」

と、いいだしたのである。私は、その言葉を聞いて驚きもしたが、彼女の真意は何か、疑惑の念を抱かざるを得なかった。

はたして、どのように言葉を返すべきか、暫くためらっていたが、おもいきって、

「どんなに虐めてもいいのなら、縛って引きずり廻してもいいんだね」

と念をおすと「こっくり」と、うなずくのである。

○

この夜から私は、一旦はあきらめていたS・Mの虜となり、緊縛による快感を味わうことになったのである。

それまでの私としては、もちろんサド的要素は十分にあった。結婚後、間もなく妻をうまく説きふせて、寝巻を着たままで両手を後ろにして腰紐でゆるく縛り、足首も簡単に縛ったのであるが、唯それだけなのに、私の昂ぶりは異状なものであった。完全に自由を奪

うことのできた勝利感と違って、緊縛女体美の観賞もさることながら、この無抵抗の女体を弄ぶことのできるよろこびに、他を省る余裕などなく、心は唯、緊縛女体に集中していた。

ところが、妻のほうはマゾ的素質がないのか、ある程度の羞恥美は見せても、そんなことをする私をなじるような態度を、それに上廻って露骨に見せた。

「手が痛いわ、もう解いて。……ね、腕が痺れてきたわ。もういいでしょ」

といって、私が期待した昂ぶりも恍惚境も見せてくれなかった。それでも私は、芋虫のように転がっている妻に、

「もう少し辛抱しろ」

といって痛くない程度に転がしたり、抱きかかえてみたりして無抵抗の緊縛女体を弄ぶことに専念した。しかし、妻はそれらのことをされるたびに、

「痛いわ。ああ……もう許して」

と悲鳴をあげ続ける。

適当にやめればいいものを、私の昂奮はいやが上にも昂ぶり、自己を制するどころか益々ハッスルして、つい度を越してしまった。しかし、その時には短い時間ではあったが言

語につくせぬ程の感激を得ることができた。

それから、次の機会に、前回の感激の味が忘れられず、また縛らせてくれるように話をもちだしたところ、

「あなたは変態ね。見損ったわ」

といわれ、それまでの昂ぶりが一ペンに冷めてしまったのであった。

それでは仕方がない、正攻法でいこうと試みたが「変態ね。み損ったわ」の言葉が頭にこびりつき、どうハッスルしようとしても萎縮してしまう結果に陥ったのである。

もっとも、性的不能に近い状態といってもいざ妻と相対したときが不能であって、彼女が熟睡しているとき、こっそりと目的を達し自己満足をするには出来るのであったが……

したがってその当時は、お互いに何か気詰りで、真から打ち溶けることなく、満ち足りない生活が続き、言葉には出しにくい不満がつる一方で、私も妻もノイロゼー気味の毎日であった。

これも、徐々にMとして飼育する努力をしなかった罰としての、はねかえりだろうが、当時は、それに気がつかず、何が原因かもわからずに、病気なのか、とも思った。

だが他人に相談できるような単純なものではないので、私達夫婦にとっては実に深刻な悩みだったのである。

○

さて前置きが長くなったが、蘭鉢を割られた夜からは、プレイすることによって、これまでの性的不能に近いというコンプレックスもふつとび、元の正常な身体となり、いや、以前にも増して体力絶倫の健康体を取りもどすことができたのである。

妻との夫婦生活をどうすればとり返すことができるのか、悩みに悩んでいたことが、この意外なでき事から活路を見出したのであるから、この喜びは何物にも例えようがない程のものであり、それまでの暗い気持も、一度に明るさと希望がもてるようになったのである。

初め、縛られることに嫌悪を示していた妻も、自分が縛られることにより、主人は元の元氣あふれる体で接してくれるし、また自分も安心を得るようになったのだから、少々の我慢だ、と思っていたのである。縛りということに関しては、嫌悪の色をあまり見せなくなつた。ところが、プレイがたび重なるにつれ、初めの頃の我慢が次第に恍惚の顔とな

り、次第にM女性として育っていったようである。

私達のプレイは、彼女を全裸にして緊縛し部屋を数回、引き廻した後、身体検査。その後適度な責め、といった形で進められることが多い。

○

それは、主に土曜日の夜十時過ぎから始められるのであるが、その一夜を告白しよう。風呂上りの火照った肌が珊瑚色にがやく体をバスタオルに包み、鏡の前で化粧している妻を横目にしながら、私はロープを準備して待っている。

今宵はどのように責めてやろうか、縛りはどうのように、吊りはどのように、操りはどうのように、と責めの構想は、無限に広がっていく。この思索のひと時は、実に楽しいものである。しかし、これも限度があり、次第に待ちきれなくなってくるのだ。まだ化粧の終わっていない彼女を無理に、

「いい加減にせんか」

といって引き立て、バスタオルも取り去ってプレイを開始する。

彼女は、私がロープを持っていることは、これまで後ろ向きながらも知っている筈であ

るが、目前にそれを見されると、心なしか微かに頬が赤らみ、目を潤ましたように、そつとつむっている。そして両手を乳房にあてがい、微かに震えて羞恥を見せている。

「手を後ろに組むんだ」

といって後手にさせ、始めに縦縄にするため、首輪を作り、それを首にかけて前に垂らし、さらに後ろに回して引き上げて首輪の後の方に通してから、それで後手に組ましてある手首を高手小手に縛る。残った縄を腕から回わして乳房の上下を通してその谷間を締め上げると、二つのおわんが生き物のように盛り上ってくる。さらに余ったロープで腹部を菱形にして締め上げると、縦縄が一分のゆるみもなく強くしまる。

この頃になると彼女の鼻息が荒くなり、鼻腔を開いたり、閉じたりしている。

「腕の縄がしまりすぎて痛いわ。おねがい、もう少しゆるめて」

「つべこべ文句をいうな」

とは言ったものの、手首や腕の縄を心もちゆるめてやる。気持が高ぶって締め上げたのだから縄は強くしまり、ゆるめるのに手こずるくらいである。

さて、これから愈々引き廻すのである。彼

女はうちしおれ、いかにも罪人のように、よろよろと歩を進めていく。羞恥心は、いやがうえにも昂ぶり、恍惚から快楽の境地へと追い込まれるのであろう。一、二回は、おぼつかないながらも歩行を続けているが、三回目頃になると、前後左右に揺れながら、または身をくねらせながら忍耐のかぎりをつくして歩をはこんでいる。そこにつけてむ。

「どうだ。おまえは囚人であり、俺の奴隷だぞ。今、おまえは引き廻しの刑にあっているんだ。恥ずかしいとは思わないか」

この追い打ちの言葉で、彼女は快楽の境地から愉悅が充満し、歩行に耐えられなくなるらしく、その場にしゃがみ込んでしまう。

「だめだ。もう一回、廻れ」

と無理に追加の一回を廻らせて、ようやく縄を解いてやる。

次は第二の関門、身体検査である。これはどれだけ自分の身体を清潔にしているかをみるのが主目的である。

まだ引き廻しの昂奮から冷めやらないで、うち臥している彼女を、

「まだまだ、これからだぞ。早く立て」

と、改めて後手縛りにして仰臥させる。

この検査は、頭部、胸部、腹部、手、足と

いう順序で検査が進められるのである。

先ず頭部は、頭髪をかき分け、かき分けして臭いを嗅ぎ、目に移る。目やには、ついていないか指先で押し広げたりして調べる。次は鼻であるが、ここはつまんでみたり、上に押し上げたり、引っ張ったり、はては鼻穴に指をさし込んで調べる。そのたびに彼女の表情が異なり、

「ああ……痛い……苦しい」

と鼻声でもがき、顔をそむけようとする。

そうはさせじ、と私は両膝でしっかりとさみつけて動けないようにする。

口は歯がきれいに磨いてあるか、舌の柔軟度や伸縮度をみるため、引っ張り出して揉んだり、引っ張ってみると、ここでも舌を引き出され握りしめられたまま、言葉にならない声が、よく反応してくれる。

耳も同じように引っ張ったり、揉んだりする。揉みたいのか、顔を引きつり片目だけをつむったり、両目を固く閉じたりする。

こうして頭部の検査は完了する。

次は、胸部であるが、ここで中心となるのは、何といっても乳房である。乳頭の色艶から伸縮度、ふくらみと弾力性等が主な検査目標であるが、この検査に移ると、彼女のこれ

までの呻きが次第に絶叫に変わり、腹がはげしく波打ってくる。

それから検査は腹部に移り、臍の中まで入念に調べていく。ここが終わると次の順序はいわずともおわかりと思うが、夫婦でもやはり女は女で、いつの時でも

「ああ……そこだけはだめ……許して」

といっているが、許したことはない。

次は、伏臥にして手を調べる。汚れや悪臭はないかを、指の一本々々までを検査。手首から先は、既に血の氣を失っているが、手に取って調べるうちに血行がもどるのか、生氣を取りもどして、よく反応してくれる。検査が終えても、X型に組まされて嚴重に縛られている手先は、空をつかんだり、開いたりして、「もっと、もっと虐めて」と言っているようにも受けとれる。

次は、最後の脚部である。普断の彼女だったら、あまり反応を示さないのに、緊縛されて緊張しているからか、上体が反り上って何とかしてこの魔の触手に耐えようと努力している様子だ。顔は喜びとも苦しみともつかぬ表情で引きつっている。

私の掌は、太腿からふくらはぎへ、さらに足首へと、ゆっくり動いていく。そして最後

の足先である。

日光にあまり当てない為か、白魚を思わせるような美しい足が既に先程から、ピクピク足指を動かしており、何かを期待しているようでもある。……事実、彼女は足責めをされると極端に昂奮し、羞恥もあらわに示すのである。プレーしないときでも、彼女の足指を握りしめるだけで、かなりエキサイトして恥ずかしがるのだから、おして知るべしというところだろう。

彼女もそれだけに、自分の足を見せたがらないし、また大事にしているようである。それに日頃の手入れもいきとどいており、美しさに自信を持ち、誇りのようにしているかのようでもある。(これは結婚後、間もなく彼女の足の美しさを褒めてやったところ、それから磨き上げるようになった)

しかし、彼女の足が羚羊のようで脚線美を誇るようなもの、とっているのではない。脚線美といわれる女性は、ある程度の距離から見たスタイルのよさであって、実際に手にとってみると、足首から先はごつごつしており、肉感的なやわらかさがない。私の理想とする足の美しさは、足首から先が主で、色の白さも大事だが、なめらかさと、やわらかさ

に代表されていると思う。

これを具体的に述べるならば、足首はよくしまっていること。それからアキレス腱が発達していて立っているのを後ろから見たとき踵の近くが細くはつきりしているのは男性的でいただけない。踵は位置が高くなく、目立たないもの、特に内側のそれは、ほとんど見えないくらいがよい。甲は皺やタコがなく、なめらかで、静脈の浮き出ていないもの。指も靴ダコがなく、関節はふくれていないで、すんなり伸びているもの。足裏にいたっては皮膚がうすくてやわらかいこと。特に土踏まずは弾力性があり、擦ったとき敏感に擦ったさを感じるもの。踵はなめらかである程度、光沢のあるもの。さらに、全体のサイズとして、ふくらはぎの囲りが三十五センチ以内、足首囲り二十四センチ以内、文数は実測で十二センチ以内であれば申し分ない。

しかし、実際には、こんな足の持ち主は仲々いないのが現状といえるのではないだろうか。私の妻にしても満足とはいえないが、前記の理想に近いから、プレイとなれば必ずといってよいほど足責めもしているのである。

その足を膝から折り曲げ、双臀の上にくるようにして足の甲から調べていく。皺とかタ

コの様子はどうか。左手で足首を握り、右手は丹念に皮膚をつまみあげたり、引っ張ったりしてみる。指先は、白蟻のようにすんなりした指一本一本を丁寧な、爪のはえ際までの手入れ、垢の有無までを綿密に調べていく。

そこが終わると足裏に移行する。今まで探る折り曲げていた膝を、九十度ぐらいにもどす。ここでは汚れ具合、汗臭さ、柔らかさ、擦ったときの反応を見る。

掌全体で一握りに強く握ったり、両手で足裏を横に引っ張って広げたり、押し縮めたりして柔らかさや清潔さを見る。次いで擦ってみる。強く土踏まずを中心として擦ったり、そっと擦ったりして。……彼女は既に、悦虐の境地を通り越し、見栄も外聞もなく絶叫し続けている。

これらの検査は、検査という名目のみで責めといったほうが適切であろう。その証拠に彼女の足の爪先は空にのけぞり、高手小手にした両手の指先も虚空を掴み、全身を反らせて、足を私の掌にあずけたまま忘我の境地に陥っていったのである。

エクスタシーの境地から徐々にさめる頃にはロープも解き放つてあるが、彼女はぐった

りと手足を投げだして伏臥している。そして去りゆく恍惚境を惜しむかのように、体を時々ピク、ピクと動かしている。

「さあ、もういい加減に起きんか」

といって、彼女の返事も待たずに引き起こして正坐させる。

彼女は、これから身体検査の結果を聞かされ、今宵、最後の責めが決定するのである。

その前に彼女は、三度目の縄を受け、後手に嚴重に縛られることになっている。

私はロープを手にとると、自分で両手を後ろに組んで待つ彼女の手をX型にして縛り、胸にも回して乳房が盛り上るようにして後手にとめる。

その姿でうなだれて正坐しているのは、いかにも罪人らしく、哀れさを漂わしている。私はその前を行ったり、きたりして仲々結果をいわないのである。彼女にとっては重苦しい時間であろう。当然、これからいくつかの汚点を指摘され、その後どのように責められるか、その不安と期待とが交錯して、早くも昂ぶっているのがわかる。

両手を背中では下手小手に組み合わされているのは、女性が和服を着たときにつける、おたいこのようでもあり、その脹らみが背を円

くし、それにうなだれている姿は、何とも服従的であり、『私はあなたのものです。おもいきり虐めてください』と観念しきっている姿は実に感動的である。私にとって、緊縛女体の中で、こんな姿ほど素晴らしいものはない。だから私は、その鑑賞に余念がなく、仲々結果の発表をしないのである。……こんな彼女の姿を見ていると、むらむらと嗜虐の情念が私をかり立てて虐めてみたくなる。

足蹴にして転がすと、あられもない恰好で足をばたつかせ、派手にひっくりかえる。その恰好が恥ずかしいのか、すぐ横臥して、ちびこまってしまう。

「何をしている。早く起きて正坐をせんか」

というと、彼女は不自由な動き方で起き上がり、また正坐する。こんな時の彼女は、抵抗もみせずに被虐性の倒錯した快感を感じているのか、二つの瞳はキラキラと潤み、もつといじめられたいと訴えているように、私には感じられる。今度は彼女の肩に私の足を乗せて揺すぶったり、足の指先での乳房のいたぶりを開始する。

「ああ、もういや。やめて」

といいながら、彼女は膝をずらして少しずつ逃げていく。

「逃げるな。そこから動いてはならん。」

といって、なお一層、責めつけてやる。

でも、やはり耐え辛いらしく少しずつ後ずさっていく。しからばと思ひ、彼女の頬を両足ではさみつけ、

「なぜ逃げるんだ」

と凄味をつけてどなると、はさみつけられた顔を歪めて返答だけはする。

「だって、耐えられないのです。これぐらいにして下さい」

でも、彼女の顔は悦楽の表情である。

「嘘をいうな、おまえの顔は、もつといじめで欲しいという顔つきじゃないか」

といって、後に踏み転がしてやる。彼女はまるで猫にいたぶられる鼠も同然である。それでもすぐに、後手に縛られた不自由な体を肩や膝、足先まで使って起き上がろうとするから可愛い。

「もういいでしょ。たいがい今夜の責めをおっしゃって下さい」

このいたぶりから逃がれようとしているようでもあり、次の責めを期待しているかのようでもある。

私は、この辺りで検査結果を告げてやる。結果の宣言は、その日によって異なるが大

体次のようなことが指摘材料になる。

◎歯の間に食べかすが残っていた。

◎腋の下が臭かった。

◎足指の間に汗臭かった。

◎足裏が汚れていた。

……これらのことは、風呂上りだから汗臭かったり、汚れている筈はない。私が作りだすようなものである。

それでも彼女は、これらのことを指摘されると、一言半句も返さず神妙に聞いている。そして暫くもじもじしているが、いうことは決まっている。

「私の日頃の清潔に対する心掛けが足りなくて申し訳ありません。この上は、どのような拷問でもお受けします」

いつの時もそうであるが、彼女は既に覚悟ができているのか、それとも、これからのプレーを期待しているのか、このようにいうのである。私は、もちろん茶番劇を続ける。

「その言葉に、嘘偽りはないだろうな」

「はい、嘘ではありません」

このような経過から、愈々最後の拷問プレー開始である。

茶番劇であることは当然、彼女も承知の上であるが、さてこれからは、どのように責め

られるかわからないのである。でも、いよいよ、その段取りになると決まって、またもや悦楽の表情で頬が紅潮してくるのである。私は、ここで一旦、縄を解いてやり、風呂に入ってくるように命じる。

彼女が入浴中、私はビールを飲みながら責め方を考えるのである。

それからのプレイは、マンネリ化を防ぐため、その都度、変えることにしているが一番印象深く頭に残っているプレイを書くことにする。

風呂で上気した肌を匂わせて、彼女は私の前に正坐した。

「今夜の責めを行なう。いいな」

「はい。それで、どんな責めを？」

「いや、それをいったら、お前としても楽しみがなくなるだろうから、いわない」

と、彼女を引き立て、キッチンの食卓用テーブルの所につれていき、命令する。

「この下に上を向いて寝るんだ」

彼女は台の下に長々と仰臥する。私は彼女の腕を横に広げ、左右の手首を大の字なりにしたままテーブルの脚にしっかりと括りつける。今度は反対側に回って、両足を一纏めにして足首を縛り、足裏が天井を向き、足首か

ら先が台上につき出るように引き上げる。そして足首を縛った残りの縄は台上をはわせて両手を括りつけてある台脚に繋ぎ止める。

縛りとしては、手首と足首だけの簡単なものであるが、彼女としては、恥ずかしいことこの上なしであろう。

色白ですき通ったような足は、すんなりと伸び、やわらかな足裏は上を向いて、テーブルの端から、によっきりとつき出し、引っ込めることもできず固定されている。……そのうちに彼女は、足責めと気づいてか、親指をくの字に折り曲げたり、伸ばしたりして、

「どうするの？ ……痛くしたり擦ったりはしないですね」

と予防線をはってくるが、何だかそれを期待しているかのような甘え声である。

こうしておいて、垂直に立っている足の前に椅子を置いて坐り、上を向いて揃えられている足裏に、ご飯を少なめによそい、卵と醤油をかけて、できるだけやわらかくなるように掻きまぜ始めてやったのである。掻きまぜるのにサジを使ったのであるが、足裏は擦りたいに違いない。

「ああ……くく。そんなこといや。やめて」と絶叫している。でも止めずに、丹念に、

できるだけ、サジが足裏を強く、やわらかく擦るように掻きまぜる。こうして出来た卵飯を、私は更に掻きまぜながら、できるだけ、ゆっくり食べていくのである。

そうしながら、私の両足はテーブルの下の彼女を踏んづけたり、ところ構わず擦っている。

彼女は、この奇妙な責めを何とか耐えようとしているのか、体をゆすり足先を震わせて悶えている。私は、もっと動け、もっと跳けというように、卵飯を掻きまぜ、足先にも力を入れて責め続ける。そのうちに私の狙いの効果が表われはじめた。

「あなた、もうやめて……足首をつたって下がってくるわ……ああ、いや」

と泣き声に変わってくる。

卵飯の汁は、彼女がいくら両足をしっかりと閉じていても、流れ落ちるのが当然なのである。彼女は、それがむず痒いのか、気持が悪いのか、声も一段と激しく、双臀をゆすり、両膝もこすりあわせ、声も既にかすれたようになり、

「ああ……うう……ゆ、る、し、て」

と、きれぎれの絶叫である。

強い責めより、こういういたぶりのほうが

被害者にとっては拷問以上のものかもしれない。これに「耐えろ」ということも、また無理であろう。しかし、この瞬間こそ、嗜虐者たる私にとっては、最高の感動場面でもあるのだ。

私は尚も擦り続けてやった。

彼女は見栄も外聞もなく、全身をゆり動かし、食卓をガタガタと震動させ、これまで九十度折り曲げられていた腰がグーッともち上げられた。そして、その状態でしばらくもちこたえていたが、急に気が抜けたようにスツと腰が落ち、そのまま動かなくなってしまった。

私はあわてたが、失神したのでなかった。

——〇——

以上、私達の夫婦プレイの一例を述べてみたが、過去の性的不能に近い暗い生活から、ふとした緊縛によって活路を見出し、それからは生活に張りを持ち得て、楽しい日々を送るようになったのは事実である。それも、私だけの一方的プレイではないと確信出来るから、少なくとも妻に対しては、むやみな罪悪感を持たなくてもいいからかも知れないと思う。道義ぶるわけでも、自らを慰めるわけでもないのだが、このような異常な行為が、よ

いとは心底思っているのではない。しかし、それで実害があるどころか、私達にとってプラスの面があるのだから、それなりに利用しても悪くはない筈だと思っている。

時には行き過ぎを反省し後退したが、現在も尚、回数は大巾に減ったにしろ、続いているのは勿論、私達の血がそうさせるのだから。

唯残念に思うことは、夫婦だけのプレイでは、どうしてもマンネリ化することと、写真を撮っていないことである。以前に写したことはあるが現像できないので焼き捨てて、その後は撮影していないでいる。また、どんな拍子で子供に見られるかわからない、という懸念。それが心配で、なるだけ惜しい記録が残さないことにしている。

マンネリ化の方は、場所を変えればある程度は違った味が出て新鮮さが得られるのではないかと思ひ、時々旅館とかモーテルを利用するのであるが、これも出費が嵩むということだけでなく、子供のことで、仲々計画通りには、いかなるのが実状である。

プレイにしても、もっと研究してみたいと思っているのだが……。

(完)

青春の陥穽

新妻の秘密



芳野眉美

A

二軒目のボロ家に買手がついて勇は失業した。アルバイトはいくらでもあるから別にど

うということはないが、三田夫妻の奇妙な夫婦生活から離れることを考えると、どんな男が買ったのか知らないが、買手を殺してしまいたいほどの憎悪を感じたから不思議であっ

た。

大工や、畳屋や、経師屋の職人たちの出入りがにぎやかになると、にこにこ顔の家主が勇にアルバイト代を払いにやって来た。

三田は、ボロ家を買ったままで、手入れはあまりせず、新しい家具が古びた家に、やけに目立っていたが、今度の新しい買手は、かなり几帳面で綺麗好きな人と見受けられた。

勇にアルバイト料をはらったついでに、元家主は、三田の家に寄り、真昼だというのに長襦袢一枚でだらしなく寝ている葉子に驚いた様子だったが、両家の庭の境に石塀を造るからよろしくと、庭先から声をかけていた。

両家の庭の境は莫然としたもので、垣根とは名ばかりの、竹を適当に切って地面に突き差したものだから、新しい二人の地主のためには、かえって境界線がはっきりして、よさそうであった。

それにしても、欧米の庭は塀が簡単で見えるものが多いが、日本の家は、やたらに高い塀で囲んで、外界との視線を遮断してしまうのは、秘密主義のせいか、泥棒を警戒してのことなのか、それとも国民性の相違なのか、よくわからない。

元家主に声をかけられて、やっと起きる気

になったのか、長襦袢の前を手でおさえただけで葉子は廊下に出て来た。若い職人が、インディアンのような喊声をあげるのもかわわず、廊下にしゃがんで眩しそうに外を見た。

「売れちゃったよ」

なさけなさそうな顔で勇は葉子にいった。

いつもの勇なら、地面に這いつくばって、廊下にしゃがんでいる葉子を下から覗こうとしたのに違いない。

葉子は、いつも長襦袢の下に何も着ていないのを知っているからである。

「そうでしたっね」

勇の失望落胆が、あまりにも大きいのがおかしいのか、葉子は勇の顔を見て、くすっと笑った。

「売れなければいいのに」

「あら、どうして」

「どうしてって……」

知っているくせに、と勇は、うらめしそうに葉子を見た。このまま葉子と別れることはとうてい出来なかった。葉子を好きになりすぎたようであった。

人妻に恋をしてはいけないということはない。葉子のような奔放な人妻には、成人式前後の若者は弱いのである。

「殺してやる」

と勇は改造しているボロ家に向かっていった。葉子の顔を見たら、気が高ぶったようであった。

「誰を殺すのよ」

「俺を追い出した奴さ」

「おお、こわ」

葉子は、ここに坐りなさいという風に勇を手招いて、縁側をたたいた。

「どうしたのよ、いったい。そんなに興奮してさ」

「興奮なんかしてないよ」

「顔がひきつっているわ」

「――」

「タバコ持っている？」

と葉子が勇にいった。

勇がポケットからハイライトを取り出して差し出すと、二本を一緒に口にくわえて火をつけ、一本を勇の口にあてがった。

「葉子と別れるのが、そんなにいやなの」
ふっとタバコの煙を勇の顔に吹きつけた。

「ねえ、そうなんでしょう」

そっと勇にささやいた。

勇は無言でタバコを吸っていた。

「葉子のそばにいたいでしょう」

「――」

「葉子にいいめられたいでしょう」

勇はムツとした顔で、タバコを庭に投げ捨てた。裏返し of 愛の表現であった。

「おあがんなさい」

葉子は勇の手を握った。職人の口笛が、やけにけたたましかったが、そんなことには無頓着であった。

勇を家に上げ、ぴしゃりと雨戸を閉めた。

八畳の部屋に布団が敷きっぱなしなのは、葉子のトレードマークのようなものである。

掃除がしてあったのは、出勤する前に三田が手早くかたづけていったものだろう。

葉子が雨戸を閉めるなり、勇は葉子を抱きすくめた。まるでダムが決壊したような、すさまじい勢いであった。

「うっ」

と葉子は呻いた。勇の荒々しい接吻に舌をあやうく噛み切られそうになったのである。まるで、いつもと逆であった。

勇の顔を突き放して、

「乱暴ね」

と葉子は甘い声で勇にいった。

「好きだ」

長襦袢の前がはだけて、葉子は裸と同じで

あった。すべすべした象牙色の肌が、勇の両手の中にあつた。

長襦袢をかきわけて、勇は、くねくねとした、しなやかな葉子の裸身をまさぐった。むちりと緊った腰のあたりを手の平で重ね重ね撫で、丸いむっくりしたお尻を舐めるようにさわっていた。

「好きだ」

謔言のように勇は、いい続けた。

「好きだ」

「好きよ」

葉子の可愛い、ふくよかな乳房が揺れた。

「このままでいたい」

と、だだをこねるように葉子にいった。

「いつでも会えるわよ」

勇の顔を抱きしめ、髪に頬すりしながら葉子は、やさしくいった。

「毎日、遊びに来てもいいのよ」

勇が、がくつと膝を折った。

「ああ」

葉子は長襦袢で勇を包んだ。

葉子の、ぎらぎらと輝くような眼が、静かに閉じられた。

「見ているわよ」

勇を抱きすくめながら、葉子はいった。

雨戸の節穴が明かるくなったり、暗くなったり、ちらちらと動いている。職人たちも昼から雨戸を閉めたことで、葉子たちの情事に気がついたらしかった。

「見られているほうが面白いわ」

そのまま葉子は勇を布団に倒した。

「そうでしょ」

葉子は長襦袢を脱いで全裸になると、雨戸

に向かって尻を高く突き出した。

勇は深い嘆息をついた。

不意に葉子が立ち上った。

「脱いで」

と息づまった声をだして勇にいった。

「早く」

葉子の溶けるような眼差しが、勇をじっと見下ろしていた。

「ねえ、もうがまんできないわ」

裸になるのを待ち切れない様子だった。

B

廃墟のような、倒産した工場の長い塀がつきと、新しい石塀が小さな家を囲み、そこ

だけが妙に明るく新鮮に見えた。

新しい表札には、大崎とある。

勇を追い出した本人だから、あまりいい気

持はしない。いつかは復讐してやろうと夢みたいなことを考えて、勇はじろりと表札をにらみつけた。

隣の三田の家は、あいかわらず古ぼけたままだが、三田が掃除好きなのか、それはそれなりに静かな佇まいをみせている。

庭に車がなければ、三田が出動している証拠である。勇は安心して三田の家を覗き込んだ。

雨戸は半分だけ開けられ、障子の中央にはめられたガラス越しに、寝乱れ姿の葉子が見える。

留守番のアルバイトがなくなって自宅にもどったものの、勇は予備校に通うより、葉子のところに通うほうが多いようであった。

障子をそっと開け、這うようにして布団に近づき、服のまま葉子の側にすべりこんだ。

「勇、早かったわね」

眼をつむったまま勇のほうに向き直り、勇を白いふくよかな胸に抱え込むように抱きすくめた。

「馬鹿ねえ、服を着たままで寝る人がいますか」

「寝に来たんじゃないよ」

「あら、葉子がほしくないの」

「そりゃ、ほしいけど」

「それなら早く脱ぎなさいよ」

勇は布団に入っただままで服を脱ぎ始める。

脱ぐというより、まるで葉子に剥ぎ取られて
いるといったほうが、ぴったりした。

浮気な女に不感症が多いといわれる。浮気
な女の共通点は、性感が薄く、性的感受性も
弱く、性的エネルギーも強くはないそうであ
る。従って、性の愉しみが薄く、性的満足を
得られないので、男から男へと移っていくと
いうわけである。

が、葉子の場合は、どう考えてもこれには
あてはまらない。

性的感受性が鋭敏で、性的エネルギーも抜
群に強く、全身が性感帯のような女のように
思われる。

淫奔な女には違いない。

寝起きの口臭に顔をそむけなくなるような
女（男もだが）がいる。葉子の口臭も一種独
特だった。甘ずっぱい、すえた匂いが勇の口
を包んだ。

この匂いが毒薬のように勇の全身を硬直さ
せるのだから不思議だった。

あふれるような葉子の唾液が勇の口に流し
込まれ、口を吸われながら、勇ののどが激し

く鳴った。

そのままぐるりと身体を反転した葉子は
「あっ」

と小さな叫び声をあげると、掛布団をさっ
とまくって、片膝ついた。

「スケベジジイの奴、栓をしていったな」

「えっ？」

と勇は葉子に聞き返した。

「なんですって」

「栓をしていったのよ。あのしつっこいオヤ
ジが」

いいながら葉子が勇に見せたものは、紙の
貞操帯であった。

「そうだ」

と葉子が叫んだ。

「勇、始末してよ」

「始末って？」

「あのブタ野郎の浮気封じをしたばかりだっ
たのを忘れていた」

「お湯をわかつてふきますか」

「馬鹿、それまで待てないわ」

片膝つきの露骨な恰好のまま、葉子は勇の
顔を上から見下ろした。

「勇の舌でよ」

「それだけは……」

勇は首をすくめて悲痛な声をだした。いく
らなんでも、そんなことは出来ない。

「できないの？」

「無理です。できません」

「そう。葉子のいうことが、きけないの」

「そういうわけじゃないけど……」

勇は口籠った。葉子をおこらせたくはなか
ったが、生理的嫌悪が先にきた。

「命令よ」

「いやです」

「葉子の命令に服従しないか」

勇は上半身を畳に乗りだして逃げた。

その瞬間、おそろしい勢いで顔を踏み潰さ
れて勇は呻いた。

葉子は、いいように勇を翻弄し始めた。

「どうだ、これでも服従しないか」

鼻と口を葉子に密閉されては、呼吸困難で
返事も出来ない。勇は嘔吐しそうになった。

庭に足音がして、女の影が、ちらっと庭を
横切った。

「おや、お隣の奥さんかな」

勇の顔を捉えたまま、葉子はつぶやいた。

雨戸は半分開けられ、縁側と部屋の境の障
子の中央が透明なガラスであれば、庭から丸
見えであった。

「とんだところを見られちゃった」

葉子は、ぺろっと舌をだした。別に驚いて
いるわけでもない。

「どうしたの？」

嘔吐をこらえて苦しんでいる勇を見下ろし
ていった。

勇は、うらめしそうに葉子を見上げた。そ
こまでして、いじめなくても良いと思うのだ
が、それが葉子の性癖であり、興奮剤なら仕
方がない。

「いやだなあ」

突然、腰を浮かせて葉子がいった。

「ヘンなことさせるものだから、オシッコが
したくなかったじゃない」

不安そうな顔で、勇は葉子の顔色をうかが
った。悪い予感がしたのである。

「勇、飲んでよ」

眼の前が暗くなった。悪い予感、えてし
てあたるものである。勇が飲む飲まないは別
として、葉子は、いうと同時にどっと実行に
移したのである。

「うっぶ」

息をするひまがなく、勇は一瞬、失神しそ
うになった。

「どう、葉子の便器になった感想は」

笑いながら葉子は勇に、いった。

C

同じ新婚でも、三田と葉子のような父娘み
たいではなく、年もそう違わないらしく、大
崎夫妻には、ういういしいところがあつた。

家を土地ごと大崎の親から買ってもらった
ようで、二人だけの新婚生活を楽しんでいる
風に見受けられた。

私鉄の駅までかなり歩かなければならない
のが難点だが、雨の日などは、個人タクシー
の三田の車を利用することもあるらしく、石
塀はあつても、隣人の付き合いはうまくいっ
ている様子であつた。

「隣の奥さんたら、毎朝、御主人を門の前ま
で送っているのよ」

ハイライトを吸いながら葉子は、ぐったり
している勇にいった。情事のあとのタバコほ
どうまいものはない。

「葉子とくらべたら、正反対だといいたいの
でしょう」

吸いかけのハイライトを、勇の口にはさん
でやって、葉子は勇の頬を指先でこづいた。

勇の若い肉体を思うままに馴れて、葉子は
すっかり満足しているらしかった。

「でもね、あの夫婦も、うちと似たり寄つた
りよ」

と葉子が意味深なことをいった。

「この間、お湯で隣の奥さんと一緒になった
のよ。そのうちにお風呂場を増築するらしい
のだけど、それまでは銭湯で、がまんするら
しいわ」

「二人だけなら、わざわざ風呂場を造らなく
ても、銭湯でいいじゃないの」

ものうげに勇は答えた。

「わかつちやいないのねえ」

「そりやわかりますよ。新婚はやはやだから
二人で一緒に、はいりたいのでしょう」

「違うわよ。隣の奥さんったら、洗うのにも
肌をかくしながら、洗っているのよ」

「恥ずかしいのでしょうか、きっと」

「そんなウブじゃないわ」

「そうですか」

「奥さんの肌にね、妙なアザや傷があるのを
見ちゃったの」

「へえ」

「歯で噛んだらしい痕とか、縄で縛られたら
しいあととか、なにかで打たれた傷とか、よ
くわからないけど、そんなものね」

葉子の眼がものに取り憑かれたようにぎら

ぎらしてきた。

「それでね、あの奥さんの秘密をさぐってほしいの」

と葉子は勇にいった。

「隣の奥さんの秘密？」

「大崎夫婦の秘密といってもいいわ」

「さぐるって、どうするの？」

「たいくつまぎれに、葉子はまた、とてつもないことを考えたようであった。」

「石塀を乗り越えて覗いておいで」

「そんなこと無理ですよ」

「勇は覗きのベテランだろう」

「夜ですか」

「あたりまえよ。隣の御主人が帰って、二人が寝室に入ってからが知りたいの」

「できるかなあ」

「命令よ。今夜、やって」

「だって、今夜、お目当てどおりにするかどうかわからないじゃない」

「今夜しなければ、明日の夜また忍び込みなさい」

「うちに帰れなくなる」

「帰れなくてもいいでしょう」

「三田さんは帰ってくるし、どこに寝ればいいのかよ」

「そんなこと心配しなくてもいいよ。ブタ野郎に目かくしをして寝させるから、廊下なり便所なり、好きなところにもぐって寝な」

愉快そうに葉子はいった。

「朝、三田さんに見つかってしまおうよ」

「大丈夫だよ。ギリギリに縛っておくから。」

眼がさめたら、その前に勇を起こして、逃がすから」

葉子の頭の回転は、かなり早いほうらしかった。勇は、しぶしぶだが、葉子の命令に従うより仕方がなかった。葉子をおこらせて、このまま会えなくなるほうが、死ぬよりつらいことには違いなかった。

「よし」

勇は決心した。

「ねえ、しっかりやってよ」

と葉子が勇の頭を抱いた。

「なんだか知らないけど、ぞくぞくしてきたわ」

葉子の興奮した乳房を感じながら、勇は心地良い眠りに、はいつていった。十分に睡眠をとっておくほうが、よさそうであった。

三田が帰宅する前に勇は葉子の家を出た。

駅前の喫茶店で時間をつぶしながら作戦をねった。なるようになれと、内心はふてくて

れていた。勝手にしやがれ。

葉子に生血を吸われるように惚れてしまったのは、不恰好なフォルクスワーゲンが、よく売れるようなものだった。

フォルクスワーゲンは、アメリカの車のように、一つの容器の中に人間を入れるという感じではなく、触覚的に包み囲む感じの車だから、現代人に好まれたとマクルハーンはいうそうである。

グーテンベルグの活字というメディア（伝達媒体）が、テレビその他のエレクトロニクスメディアにとって代わられつつあるのが現代である。

従って、頭で考える（視覚型）活字型人間から、からだ全体的で受けとめる、触覚的運動的多感覚的人種に移行しつつある。皮膚族といわれる理由である。

勇の葉子に対する感情は、従来の、愛とか恋とかといったものとは、ほど遠いように考えられる。

皮膚族の一人らしく、葉子にすっかりインボルブ（つつみ込み、関係させる）されたのに違いない。

からだ全体で受けとめたものは、すぐ行動に移せるものだ。現代っ子は行動が早い。

活字という視覚文化でそだった人間は、ものを離れて見て識別できる習慣があり、視覚化したものを行動に移すまでにそれなりのギャップがある。

テレビっ子である勇には、それが無い。

青春は旧制高校の廃止で終わった。彼等活字型人間は、本のうえでのみ女体を考え、決して触れようとしなかった。だから、青春があった。

現代っ子は、触覚的に女体を感じないと気がすまない。原始時代のように、子供からすぐ大人になる。行動が優先する。

時間をみはからって、葉子に命じられるままに勇は、大崎家の新しい石塀を越えた。

工場の廢墟、雑草の茂った空地、広い畠に囲まれた二軒だけの家、その一軒にあとおしされて、もう一軒の家に侵入することは、それほど危険ではない。

三田に気がつかれぬように、葉子は徹底的に夫を責めつけて、勇を援護していることだろう。雨戸が、びったりと閉められていた。

D

留守番で寝ていた家に忍び込むのである。勝手知ったる他人の家で、その点、気が楽で

あった。

雨戸の節穴は、三田の家の雨戸ほどはくわしくはないが、間取りが全く同じ二軒家なのだから、あらためて大崎の家を覗くという気があまりせず、いつもの通り、三田の家の雨戸にへばりついていていようであった。

勇が期待したほどの光景ではなかった。若夫婦はお茶を飲みながら、テレビを見て笑っているのである。

葉子に不満を洩らした通り、お目当てのところが今夜おこなわれるかどうか、他人の知るところではない。

いつまで待つのか、うんざりしながら勇は庭先に坐り込んでしまった。

そういえば、三田の家の雨戸にへばりついて、三田夫妻が何もしないで、テレビを見ているといったあたりまえの光景を見たことがないのである。

いつでも葉子が三田を責めつけていた。ただなんとなく坐り込んでいるのも能のない話だが、大崎夫妻が行動を移さない限り、葉子の密命を受けた勇の出番はこない。

障子の開く気配がし、廊下に足音がしたとき、勇の耳はそばだって全身が硬直したが、ただそれだけのことであった。

一度だけ便所の窓から明りがもれたが、誰が入ったのか、勇は確かめもしなかった。初日から危険な行為はさけたいし、葉子が命じた、大崎夫人の肌の秘密さえ、さぐればいいのである。

大崎夫妻の笑い声を背にして、勇は夜の中に坐り続けた。

恋の至極は忍恋と見立て候。逢ひてからは恋のたけが低し、一生忍んで思ひ死する事こそ恋の本意なれ。と葉隠にあるそうだが、忍ぶということは、待つということと同じらしいと、勇は少し腹を立てながら考えていた。とにかく、結果報告を葉子にしなければならぬのである。

勇は背を丸めてかがみこんでいるうち、ふとうとうとしたが、押入れが開く音がしたりせわしく動く人の気配に、再び雨戸の節穴に眼をつけた。

八畳の居間に、新婚夫婦らしいなまめいた布団が敷かれていた。

「お尻を見せてごらん」

布団に坐った大崎の声がした。勇の視線が小さな節穴に釘づけになった。

大崎夫人は真新しいシートにひざまずき、あでやかな掛布団に顔を埋めて、夫の前にお

尻をもたげてうつ伏した。

大崎は無造作に着物の裾を捲りあげた。勇のどろどろと鳴った。こういうときに生唾液が口に湧いてくるのは、生理現象なのだろうか。

着物の下には何も穿かないのがたしなみだろうが、若い女性の着物姿は珍しいし、水商売ならともかく、素人の奥さんなら穿いていたとしても当然である。

着物をまくられた大崎夫人は、勇の眼には何も穿いていないように見えた。

「少しは慣れたかい？」

という大崎の声がした。夫人の声は聞き取れなかったが、小さな声で返事をしたらしい

様子がうかがわれた。

「きつすぎはしなかったかい？」

耳をすませて雨戸にへばりついている勇の耳に、

「いいえ」

という大崎夫人の返事が、かろうじて聞き取れた。

「痛くないかい？」

「いいえ」

いつまでも息を殺して節穴に密着していることは不可能であった。勇は顔をそらせて空を仰ぎ、気がつかれぬように深い嘆息をついた。

夫婦の会話がよくわからない。

〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。○御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号晩出版株式会社へ願います。

「締めつけている感じはどう？」

「とてもいい気持」

かなりはつきりした大崎夫人の声に、勇はあわてて、また雨戸の節穴にかじりついた。二軒の古家を、いったりきたりする守宮のようであった。

大崎の頭でかくれていた夫人のお尻が、今度は勇の眼にもはつきり見えた。その瞬間、勇の心臓がどきりと鳴った。

小さな金属性の器具が、びっちり食い込んでいたのである。

貞操帯。勇はそう思った。

婦女子の貞操を保護するための、カギのついた鉄銀製の器具。一般には、十五六世紀のヨーロッパで、十字軍の騎士が妻に使わせたという風に思われているが、貞操帯はルネッサンスの発明である。

ルネッサンスはフリーセックスが盛んであった。妻にだまされた夫の残酷な復讐としてまた妻の貞操を男たちの誘惑から防ぐため、器械じかけの貞操帯が考えだされたという。パヒンガー・リンツ博士が一八八九年、オーストリアの古い教会の墓地から発掘した鉄の貞操帯は、前にノコギリの刃のような鋭いギザギザがつけられた縦に細長い穴があけら

れ、うしろに三つ葉のクローバに似た穴がけられてあった。それぞれ排泄のため必要である。

大崎夫人が貞操帯をはめられている。

が、大崎の口からは、貞操帯という言葉がでてこないのである。

「もう、ひとまわり大きな栓にしてみようかな」

関係のない言葉が勇の頭を混乱させる。

栓——いったいなんのことだろう。

「いやかい」

お尻を高くもたげたまま、掛布団に顔を埋めた大崎夫人は、しきりにいやいやをしているらしかった。

「便秘癖のある女は、普通でも四、五センチは広がるそうだよ」

広がる——と勇はおうむがえしに自問自答した。便秘、広がる、と続けられよう……。

「これは貞操帯じゃないよ」

勇は、あつと声をたてるところだった。大崎は夫人のその小さい金属性の器具を、貞操帯ではないと、はっきりいったのである。

「わかっているね」

夫の掌でびたびたとたたかれながら、夫人は何度も、うなずいていた。

「これは拡張器なんだよ」

「はい」

勇は絶句した。拡張器と口の中で繰り返した。

大崎の手にコルクの栓のようなものが、にぎられていた。細いのやら、太いのやら、いろいろな栓を指でつまんで、選んでいるようであった。

「はじめの頃から思うと、ずいぶん柔軟になったものだ」

その意味が、勇にも少しずつ、わかりかけてきたようにも思えた。

大崎夫人は飼育されているのであろう。

「着物をお脱ぎ」

と優しく大崎がいった。

パリのポアティ博物館にある十五世紀の鉄製の貞操帯のように、シンプルで美しいアクセサリーベルトが、着物を脱いだ大崎夫人の華麗な腰に飾られていた。

葉子に似た華奢なからだつきだったが、意外に腰から太腿がむっちり肉づいて魅力的であった。着やせするタイプなのかもしれないかった。

まだふくらみきれぬ小さな乳房を両手でかくしたのもいじらしく、葉子と違ったういう

いしい年令の幼さを見せたしぐさであった。

大崎夫人は夫婦生活に就いて何も知らないのではないかと勇は思った。SEXについては赤ん坊と同然なのかもしれないと、なんとなくそう思った。

夫にリードされるままに、それが夫婦というものであり、生活というものだと思じているのかもしれない。

何も知らない新婚まもない新妻を、自分の好みのままに飼育していく。勇は大崎にジェラシーに似た敵意を感じて、きつとなった。

復讐心が思いがけないところで倍増したようなものであった。おまえの留守に、奥さんを寝取って、おまえをコキユにしてやると勇は心の中で叫んだ。

拡張器なるものが、はずされた。

大崎夫人が犬のように四つ這いになった。夫の異常な趣味など、少しも疑っていないらしい従順な新妻振りであった。

勇の顔に、かっと血がのぼった。

「うっ」

大崎夫人が呻いたらしかった。

——(未完)——

カット・春川ナミオ

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表



私のイタ・セクスアリス

ある妊婦マニアの告白

留 根 呉 男 (写真も)

(1)

女の妊娠した姿に関心を抱くようになったのは、まだ少年のころからだ。すべてのことに早熟だった私は、小学生四、五年のころには、子どもというものが男女の性の営みの結果であることを知っていたが、その営み自身には、まだあまり興味はなかった。

ただ、そのころから、妊娠して腹の大きく

なった女をみると、妙に快い刺戟を覚え、そうした女の前を何度も行ったり来たりした。相手は幼い子どもと思って別に警戒もしない。それがこっちのつけ目で、せり出した大きな腹部をいろいろな角度から観察した。当時はいまのようにマタニティ・ドレスなどない時代で、大ていの女は着物姿だった。それだけに、腹の大きさは隠しようもなかった。

小学校五年生の春だった。珍しく母と一緒に風呂に入ったことがあった。その時、母の

腹部が大きく膨れていることに気がついた。灯台下暗しというのだろうか、他の女のことには注意がゆくのに、母の妊娠には気がつかなかったのである。

私は湯槽にひたりながら、すぐ目の前に露わにひろげられた巨大な腹部をまじまじとみつめた。そのころ、三十代の半ばで、しかも私をいれてすでに四人の子どもを生んでいた母は、いわゆる中年肥りという段階に来ていたのだろうか。湯気でピンク色に染まり、ぼてっと膨らんだ腹から下肢へかけての線は

子どもの目にも妖しい魅力となって映じた。

私は、ふと蛙をつかまえてその尻に管を突込み、息を吹きこんで腹を風船のように膨らませる残酷な遊びを思い出した。いま、この母の腹部を、同じように大きくしたらどうなるだろう？　そして、それをぐっと押えつけたら、赤ん坊はどこから飛出すだろう？　とてつもない悪魔のような妄想が、次から次へと私の胸に、わいた。

湯槽から上がった時、私の体は知らぬ間に異常な変化をきたしていた。

それから、二、三日後、朝目をさますと、赤い顔をした赤ん坊が母の布団の横に寝ていた。私は大きかった母の腹が、ぺしゃんこになってしまったのを思い、妙な気持になるとともに失望もした。

そのころ、私はまた、父母の目をかすめて盛んに大人の雑誌、とくに婦人雑誌の妊娠や出産に関する写真の図つきの記事をむさぼるように読んだ。妊婦の解剖図などはひそかに切抜き、本棚のかげに隠しておいたりした。だから、その方面の知識は、小学生の終りころには、大人並みになっていた。

中学に進んでからも、私の妊娠に対する関心は、高まりこそすれ、全然衰えなかった。

異性との交遊、セックスの遊びもある程度できるようになって、心ではいつも妊婦を追っていた。中学生も中ごろ、家の風呂が故障して、暫く町の銭湯に通ったことがあった。普通、銭湯の鏡は、男と女の脱衣場の仕切りの壁に、背中合せにつけられているものだが、この銭湯では、それがそれぞれ反対側の壁につけられていた。しかも番台の前の、男湯と女湯の通路が割に広くあいていた。このため男の脱衣場の入口近くに立つと、女湯の鏡の一部がのぞき見えた。

ある日、その前にしゃがみこんでいる三十歳前後の妊婦の姿をみて、私の心は躍った。女は丸く盛上がった腹にゆっくり白い腹帯を巻いている。もう臨月近いのだろう。真中にうす黒く妊娠線が走り、豊かに垂れた乳首の乳うんの黒さがあざやかだった。私は息をのんでみつめたが、あいにく、どやどやと客が入りこんで来て、私の視線はさえぎられた。

しかし、私の興奮はおさまらなかった。私の観賞眼が進んだ故もあったが、小学生時代にみた母の腹の比ではなかった。私は急いで服を着ると、外に出て女の出て来るのを待った。やがて女は大儀そうにゆっくり腹を突出して出て来た。そりかえって肩で息をしてい

る。双生児でも入っていきそうな大きな腹部だった。私がそれまでみたものの中で一番すばらしい妊婦姿だった。通りすがりの女学生が顔をしかめて、ささやくのが聞こえた。

「いまにも落っこちそうね」

私はその夜、女の夢を見、快い陶酔を覚えた。朝、気がついてみると、夢精していた。文学少年だった私は、中学生の中ごろから日本や外国を問わず、名作と呼ばれる小説を読みあさっていた。もちろん、その中でも、妊娠や出産に関する描写には、とくに魅かれほとんど見逃がさなかった。

日本文学の中では、志賀直哉の「和解」、夏目漱石の「道草」などが印象に残った。前者では、主人公が見守る中で、妻が自然分娩する姿が精緻なリアリズムで描かれ、後者では産婆が間に合わない出産に夫が困惑する有様が描かれていた。

外国の物ではモーパッサンの「女の一生」で、女中がベッドの脚にもたれながら、床に坐りこみ、まるで犬のように、簡単に赤児を生み落とすシーン。そしてその子の父親でもある主人が、無難作に赤ん坊をとり上げる非情な描写。またショロホフの「静かなドン」で、ヒロインが島の中で産気づき、ゆれ

る馬車の中で分娩するすさまじい迫力などが私の欲求を満足させるものだった。

そのころ、また、町の公民館で、衛生博覧会なるものが開かれたことがあった。模型や写真、図表などを使って、大衆に衛生、保健思想をPRするためのものだが、その中の特別室が私たちの関心の的になった。

そこは、性病と妊娠、出産に関する部門で十八歳未満は入場禁止になっていた。私はまだその年令に達していなかったが、ごま化して入りこんだ。私の興味は、もちろん性病などより、妊娠出産に関することにあった。しかし、陳列されているものは、異常胎児のアルコール漬の標本や、教訓的な図表が多く、私の興味を満足させるようなものは、ほとんどなかった。ただ実物の三分の一ぐらいの大きさの人形模型で、妊娠月数の腹の大きさの変化を示しているものが、わずかに面白く感じた程度だった。

(2)

やがて、戦争が激しくなり、私たちも工場動員に駆出された。政府は「生めよ、殖やせよ」を盛んに宣伝したが、肝心の働き盛りの男が、戦場にひっぱり出されては、妊婦の数

が減るのも仕方がなかった。私たちも工場の寮にとじこめられ、妊婦を観察する余裕もなくなっていた。ただ、ある日、近くの町民たちと合同で防空演習をやった時、臨月近い大きな腹をしたモンペ姿の中年女が、苦しそうな恰好でバケツリレーをしているのを見て、久しぶりに私は欲望の高まりを感じた。そして余り熱心にみつめて作業に失敗し、班長からこっぴどく、どやされた。

それでも、どうにか戦争は終り、私はアルバイトをしながらも大学を卒え、ある地方銀行に勤めることになった。そして、解放された男女関係の中で、三、四人の女性と交渉をもったあげく、私は、ある取引先の商店のB Gと恋をし、半年後に結婚した。

妊婦姿に憧れながらも、私は子供それ自体はあまり好きでなかった。兄弟の多い家に育ち、うるさく感じていたことと、子供への重い責任感がおっくうだった。だから、妻が身体の欠陥から子供を生めないことを知った時もそれほど失望はしなかった。妻は、やせぎすのスタイルの美しい女だけに、その妊婦姿も見たいとは思ったが、妻が妊娠した場合、その腹の下から突上げているものの実体が、実は自分の細胞の分身であるという考えは、

客観的に妊婦の美を楽しむという余裕を与えないだろう。テレ屋の私は、まず面映ゆさが先に立つかも知れない。そんな気持が、私に妻の妊娠を求めさせなかったのだ。

その代り、私は、妻に対して、時々思いきり息を吸い、下腹を膨らませたポーズを要求した。彼女は初めいかかわしく思ったらしいが、元来が素直な女だけに、私の要求通りの姿勢をとった。そんな恰好でも腹は結構六カ月から七カ月ぐらいの大きさになり、私の欲求をある程度、満足させた。

そのころ街には又いろいろなセックスの雑誌や単行本が現れ出した。戦後の解放は一番先に、こうした世界にやって来たのである。私はそうした物の中から、相変わらず妊婦に関する物をむさぼり選んだ。しかし、なぜかその種の物は少なかった。むしろ、婦人雑誌の妊娠や分娩に関する記事の中に、妊婦の腹部などの写真が露骨にのるようになった。私は、妻に隠れてそうした本を買い集め、写真をひそかにスクラップしたりした。

いわゆる「お産映画」なるものが流行し始めたのもそのころだった。私は、世の中には私のような嗜好をもった者も多いのだと思いながら、欠かさず見にいったが、私の期待に

そのものは少なかった。大ていは前書きが長過ぎたり、つまらぬアニメーションが大部分だったりで、私の求める妊婦の腹部や、出産そのもののシーンなどは、ほとんどなかったのである。

それでも外国映画の「私は子供がほしい」という作品の中では、仰臥した外人の妊婦の突出した腹に、医者が聴診器をあてて、胎児の心音をきくシーンがあった。その妊婦の尖形の腹部は、一種の芸術的な美しさをもち、私は思わず嘆息し、そんな腹をまのあたり眺め触れることのできる医者が羨ましくてたまらなかった。私は、そのわずか数分のシーンがみたくて、毎日、高い入場料を払って映画館に通った。

四、五年ほどして、私は銀行で係長に昇進したが、そのころから、私は同じ課にいたC子という娘とつき合うようになっていた。C子は、文字通りドライな女で、私に妻のいることを知りながら、平気で食事に誘われたり映画やダンス、さらにはバーまで行を共にした。結婚と交際とは、はっきりと区別していて、それだけ、こちらにとっても都合がよかった。

C子は妻とは反対に、全体にセクシーな感

じのあふれたやや肥りじしのグラマータイプの女だったが、私は、銀行内での噂が怖かったので、肉体的関係はあまり求めず、ただ、つれづれなるままの、格好のガールフレンドとして利用していた。

C子は映画好きだったため、彼女に誘われてよく見に行った。たまたま、あるロードショーで、ヘミングウェイ原作の「武器よさらば」を見たことがあった。第一次世界大戦の際の、将校と看護婦の悲恋を描いたものだがヒロインにふんじたジュニア・ジョーンズのお産のシーンがなかなか迫力があつた。白布で覆われてはいたが、女の大きな腹部のもだえるところがクローズ・アップされ、私はC子の存在も忘れて、食い入るように画面をみつめた。

映画館を出たあと、近くの喫茶店でお茶をのんだが、たまたま話が、そのシーンに触れた。C子は顔をしかめていった。

「いやあね。私も子どもができれば、あんな風になるのかと思うと憂うつだわ」

「どうして？ 僕は、女性が妊娠すると、何か充実した落着きのようなものができて、却って美しいと思うよ」

「そうかしら？ みんながそう思ってくれれ

ば、いいんだけど」

「ねえ、君が結婚して妊娠しても、いまと同じようにつきあってくれないかな」

「私はかまわないけど……。でも、結婚しても暫くは、子どもなんか作りたくないわ」

その時は、そのまま別れたが、間もなくC子は、遠縁に当る平凡な商社会社のサラリーマンと急に結婚することになり、銀行をやめた。C子を失って、一時は寂しかったが、もともと格別な愛情で結ばれていたわけでもなく、私の心は、いつかC子のことを忘れ始めていた。

それに、私は半年ほどたってN市の支店に転じることになった。仕事は却って暇になり住宅の関係で妻とは別居し一人でアパート暮らしをすることになったので、私の女性関係はまた、かなりルーズになった。

F子は、ある雑誌の読者紹介欄で知合った若いBGだった。N市が初めてという私の為に、いろいろ案内役を買ってくれている中にいつか深い関係になった。小柄で、ほっそりした、少女のような面持ちで、どう見ても二十四歳には見えない娘だった。

私は一人暮らし、F子も九州の田舎から一人で出て来て下宿住まいをしていたので二人の

行動を束縛するものはなかった。

F子は、私に妻がいることは知っており、とくに結婚を望んでもいなかったが、妊娠した時には、さすがに悲劇のヒロインのように泣きぬれた。彼女は、日蔭者でもいいから子どもを生みたいというのである。

私は、このほっそりした、子どものようなF子の腹部が大きく膨れ上がり、肩で息をしなから重そうに歩くその妊婦姿をたまらなくみたい衝動にかられた。そして思いきって産むことを承諾しようとさえ思った。

だが、妻とのトラブル、また生まれて来る子どもへの責任などを考えると、やはり女に中絶を強いざるを得なかった。その時、F子はすでに四カ月に入り、小さな乳房は、黒く色づき始めていた。さすがに腹部はまだ目立たなかったが、私は、女に息を吸いこませ、思いきり下腹を膨らませた。可愛い妊婦の裸像がそこにあった。それは少なくとも七カ月ぐらいの大きさに見えた。小柄な少女のような女の妊婦姿は私の欲望を一層昂めた。かつて母の妊婦姿の時に感じた残酷な思いにとらわれたのである。この腹をパンク寸前までに膨らませ、そしてぐっと押しつぶすのだ。女の絶叫と、どろどろした内部の流出、血の

海……。

私のS的な想像は、地獄の鬼のように途方もなく広がるばかりだった。だが、何もしらず、一切を委ねて、目をつぶっている女の顔をみて、私は、ようやく理性を取り戻した。

(3)

F子は、それから二日後に中絶した。手術は簡単に済み、費用の一切は、私が負担したのだが、彼女は私のエゴイズムをなじって、それ以後、あまり会おうとはしなくなった。そして、見切りをつけさせるように、私もまた、東京へ転任した。

私はいつか四十代に近くなり、もうBGや若い女とは簡単に友達づきあいできなくなつた。酒のあまり飲めない私は、いわゆる水商売の女たちと知りあう機会もなく、といって街娼にもあまり興味はわかなかった。私は、休日や暇な時に、専らデパートとかマーケットを歩き廻った。そんなところに妊婦の出没する機会が多いからである。デパートのベビ用品売場にゆくと、必ずといっていいくらい臨月近い妊婦が、夫かまたは母親らしい女と一緒に、出産の準備の買物に来ていた。中には、いまにもこぼれ落ちそうな腹を抱えて

いる者もいた。私は、その腹をヌードでみるためなら、どんなに金を積んでも惜しくはない気持だった。

マーケットでは、着飾ったデパートの妊婦とは反対に、やつれ切った、生活の臭いのしみ出ているような妊婦が目立った。私は、却って、そういう妊婦の方に魅力を感じた。私は、買物をするふりをして、何度も店内を歩き廻り、怪しまれない程度に、彼女たちの妖しい美しさを観賞した。

愛読していたKK誌が、その頃から、妊婦の写真の分譲を始めてくれた。待望久しいものであったので、私は発売される毎に、むさぼるように購入した。それはすべてすばらしいものばかりだった。とくにM夫人の双胎腹の見事さなど、私は、撮影者のT氏やM氏に対して羨望の念を禁じ得なかった。私自身、何とかして、一度でもいいから妊婦フォトをとりまくってみたかった。

だが、どこのヌード・スタジオを探しても妊婦のモデルなどみつかりそうもなかった。だが、あくなき私の欲求はふとあることを思いつかせた。ヌードの妊婦をとるのはむずかしいが、衣服をまとった妊婦なら、カメラでとらえられるのではないか。そんなモデルなら

町のデパートやスーパーへ行けば、たくさんいるだろう。それを隠しカメラでとれば、問題は無い。

私は、ちょうど売出されたばかりのポケット・カメラを買入れた。幅四センチ、縦十センチ、厚さ二センチとほとんど掌に入ってしまうほどの小型である上に、前を向いていて横にいる人間が隠し撮りできるという、私の要求にぴったりのものであった。ただフィルムが8ミリ映画の一コマぐらいの大きさしかないため、映画は引伸しが必要だったが、幸い、私は少年のころからカメラが好きで、成人後も、ずうっと写し続け、古いものながら引伸し機械ももっていたので、その点の悩みは、あまりなかった。

私は、ともかく、そのカメラをポケットにしのばせ、デパートやマーケットに出かけ、妊婦の隠し撮りに専念し始めた。カメラが小型だけにブレが多いのと、相手がこちらの望むようなポーズになってくれず、せっかくいチャンスが来ても他の者が横切ったりして仲々思うようにとれなかった。

だが、その中に、カメラになれてくるに従い、一番いいのは、バス停などで妊婦が止まって待っている時であることに気がついた。

この場合は妊婦が動かないし、またわりに放心状態の時が多く、突出た腹部を隠さず露わにしている場合が多いのである。

こうして、私の妊婦カメラハントが始まった。私は惜し気もなくフィルムに金を使い、常にカメラをポケットにしのばせ、駅や電車の中でもチャンスにはシャッターを切った。

数百枚もとったこれらの写真の中には、何度見ても、見飽きない傑作もかなりあった。デパートの入口で、壁に背をもたれながら、腹を突出し、放心の姿で憩っている少女のような若妻。いま流行のミニスカートをはき、普通のワンピースを着ているので、その腹はまるで、上着の下にサッカーのボールでもいれているように見える。コートの下から腹が突上げて、ボタンがいまにも飛散りそうな中年の女。腹とともに尻が極端に後ろへ出て、横からみると、Sの字の変形のように見える女。胎児が動くのか、エプロンの上から膨らんだ腹をさすっている商店のお内儀。腹が大きすぎて、帯がすっかり結べないため、襟元がだらしくずれかかっている和服姿の女など……。

私は、ときどき、これらの写真を、秘密の隠し場所から出しては、一人ひそかに眺め、

勝手な嗜虐的な空想をたのしんだ。女たちから、すべての衣服を無理にはぎとり、全裸にしてずらりと並べ、腹の大きさを較べ合いさせる。その中で一番美しく、一番腹の大きな妊婦をひき出し腹を押しひしいだり、撲ったり、切割いてみる。そして、無理に陣痛を起こさせ放っておく。何十人という全裸の妊婦の集団分娩である。女たちの苦悶の絶叫。のたうつ白い女体。波打つ腹、腹、腹。そして排出される真赤な血潮の流れ。どろどろとした肉塊……。

私は、かつて妊婦をとらえ、その腹を裁ちわって、胎児の性別を調べたという昔の淫虐な武将たちのぜいたくな快楽を思い、彼らの心が実によく分かるような気がした。

しかし、その中に、このひそかな愉しみも次第に、私にとって物足りないものとなり始めた。モデルは無限にいて、バラエティもあるが、何といても衣服の上からでは迫力がなかった。想像力にも限界があった。私には何か新しい刺激が必要だった。そんな折に、まるで待っていたかのように私は、C子と再会の機会をもったのである。

C子は、平凡で、まじめだけが取得のような夫にはあきたりないようで、結婚生活にも

ひどい倦怠を感じ始めていた矢先だったらしい。久しぶりの私との再会に、彼女は激しく燃え、積極的に私を求めた。私もまた、人妻としてのC子の女体に新しい魅力を感じた。私たちは、急速に近づき、週に一度は必ず情事のひとときをもつようになった。

経済的にも余裕の出来ていた私は、会う度に若干の小遣いを与えた。それが、夫の月給がさほど多くないC子にとっては、ひどくうれしかったらしい。私が要求すれば、かなりの無理をしてでも、デートに応じてくれた。「夫より、あなたの方が好き。だから、いつまでも離れてゆかないで」とC子は会う度にいったが、といって夫と別れるつもりでもないようであった。そしてその無責任さが却って私にも都合がよかった。

二カ月ほどたって、私の傍に横たわっていたC子が、やや甘ったれた声でいった。

「私、妊娠したらしいの」

私はどきりとしたが、平静を装った。

「だれの子だい？」

「もちろん、あなたのよ。でも、公表は主人の子どもにするわ」

C子という通り腹の子が果たして私の子であるかどうかは半信半疑だった。いや、C子

自身はつきり分からぬのではないか。ただ私の手前、そういつているように思われた。

「で、生むつもりかい？」

「ええ。本当は、いまはそんなに欲しくもないんだけど、年をとったら、やはり寂しくなるんじゃない？ だから、生むつもりよ。でもあなたには決して迷惑をかけないから、安心して」

C子があくまで夫の子として生むつもりであることが、私のエゴイズムを安堵させた。彼女がそんな態度でいる限り、私はあくまで関係のない第三者でおれるし、相続などで将来むずかしい問題も起らないだろう。そしてようやく、待望の妊婦をまのあたり眺め、触れることのできるチャンスが来たのである。最初の、私の当惑は、いつか浮き浮きした期待に変わりつつあった。私は彼女が子どもを生むことに賛成した。

(4)

C子の腹は、私の期待に反して、あまり大きくならなかった。私はC子がウソをいったのでないかと一時いぶかしく思ったほどだ。

だが七カ月目に入ったところから急に目立ち始めた。ホテルの部屋で、C子が腹帯をとき始

める。乳房はすでに黒く色づいている。ぼつてりと膨んだ白い腹部が徐々に現れる。私は生つばをのみ胸をわくわくさせてみつめる。やがて目の前に突出された腹は私を陶醉させる。女をたたせたり、横臥させたりして喰入るように凝視する。色の白い、ぼつてりしたC子の妊娠ヌードはすばらしい眺めだった。私はこの姿を永久に保存しようと、カメラでとりまくった。

吞気で、神経の太いC子は、月が進んでも私との情事を拒否しようとはしなかった。むしろそれまでより積極的に私を求め、私を喜ばせた。夫よりも古いつきあいであり、また経済力もある私が妊娠を契機に頼りになり出したようであった。まして、胎児の父親の可能性だって半分はあるのだ。

私たちの逢瀬はC子が八カ月、九カ月と進んでも続けられた。明らかに腹の大きい女と一緒にホテルに入ることとは、確かに面映い気もしたが、私の飽くなき欲求を押える障害にはならなかった。

八カ月から九カ月、さらに臨月とC子の女体の変化は、逢う度に私の目を堪能させた。医学書などによると、妊婦の腹の形は前へ前へと、せり出してくるもの、前よりはむしろ

後ろへ出てゆくもの、つまり尻が突出る形、横に大きくひろがる形など、女の体つきによって色々タイプがあるらしい。そしてC子の場合横にぼってり膨らむ型のように、腹部や臀部の突出しがあまり目立たない代りに、胴部全体が丸やかに膨らんで来た。いつもはおきやんで身軽なC子が次第に、動作が物憂くなり、のろのろと大きな腹部をもてあまし気味にしている恰好が、私には却って魅力のように映じた。

C子が臨月に入って間もなくの事だった。例によって、その妊娠ヌードを撮影していた時、C子が突然、私にいった。

「ねえ。私を縛りたいと思わない？」

私はびっくりした。わけをきくと、いつか私の見せた分譲妊婦フォトに緊縛シーンがあったのを覚えていて、私のような性癖のものは、みんなそういう欲望を持っていると思っ

てのことにらしい。

私もちろん、妊婦に対するS的な気持の昂まることはあった。街で会う妊婦を裸にして縛ったり、腹を押しつぶしたり、残虐の限りをつくしてみたい衝動にかられることもあった。分譲の妊婦フォトや、自分が街で撮った妊婦の写真をみながら、そういう妄想を、

ほしいままにする時もあった。

C子の妊娠は、それを現実に実行してみる絶好のチャンスであったが、しかし、実際上妊婦を縛ったり打ったりすることは、胎児や母体に何らかの悪い影響を与えるであろうという不安が、私に実行をためらわせた。また現実には、私は妊娠した女体の身体そのものの美しさ、いわば妊孕美、それだけで十分満足できたのである。

それだけにC子の唐突な申出は、私に戸惑いを感じさせた。C子は、ちゅうちょしている私を促すように、ささやいた。

「遠慮しないで。実は、私も、前から縛ってもらいたかったのよ」

「だが……」

「無茶をしなければ大丈夫よ」

私は、むしろC子にうながされた形で立上がった。予期していなかったことなので、縄の持合わせはなかった。しかし、幸い、その日のC子が和服姿で、その腰ひもや帯ひもをつなげば、何とか代用ができそうであった。

私は縛りの経験は皆無だった。まして相手は妊婦である。どう縛るべきか見当もつかなかったが、しゃにむに腹部の大きさと乳房を強調するような恰好に縛り上げた。もちろん

母体や胎児への影響をおそれて、あまりきつくは、しめつけなかった。

それでも、紐によって誇張された妊婦のヌードは、私の目に、新しい刺激と魅力をもって映じた。C子は、自分の縛られた姿を、鏡に投じてから、やや不満そうにいった。

「もっと、ぎゅうっと縛ってもいいのよ」

C子は縛られたことによって、M的な嗜虐の芽がかりたてられたようであった。私もまた床に無抵抗に投出された妊婦の姿態に、隠れていたSの火がむらむらと燃えさかってくるのを感じた。

私は、C子を一人用の椅子に縛りつけた。それは、いつか、お産の本でみた或る国の女の出産を思わせるポーズであった。盛上がった腹部と、黒ずんだ乳房が極端に波うっていた。

「赤ちゃんが出てしまいそうよ」

C子は、やや苦しうにいった。しかし、その裏に、悦虐の表情がひそんでいるのを、私は見逃さなかった。

「ここを押して、出してしまうぞ」

私は、C子の腹の上に、右手をおいて、押すまねをした。

「押して、押して……。うんと」

S子は不自由ながら身をくねらせ、目をつぶって訴えるようにいった。私の加虐への欲求はさらに高まった。両手に力をいれ、この蛙のように盛上った腹部をぎゅうっと押しつぶす。苦悶に絶叫する妊婦。羊水と血潮がほとばしり、ついで胎児がずるずると流れ出て苦しさにのた打つ妊婦の血みどろの姿。その地獄のような悦楽の情況が、私の脳裏にまざまざと描かれた。私は、無意識の中に、突出た腹を押えつけていた。

「苦しい！ やめて！」

女の悲鳴が、私の自省心をひき戻した。

「ごめん。つい、夢中になって」

「ううん、いいのよ。もっと、虐めてほしいのよ。でも、こんなところで、本当に出てしまつては、お互いに困るでしょう」

C子は、喘ぎながらいった。額には、汗がにじみ出ていた。しかし、苦痛の中に、快楽を感じているのは、明らかだった。私は、もう一度、押しつけ、つぶしてみたい衝動にかられた。

だが、彼女のいうように、あまりにひどいことをして、この場で本当に出産が始まったらどうなるだろう。それを考えるとやめざるを得なかった。しかし、私たちは、その日、

いつにない、深い満足と充足を覚えながら、再会を約して別れた。

(5)

それから数日後、約束の再会日が来たが、C子からは連絡がなかった。こんど会ったら本格的な縛りをやってみようと、私はひそかに縛り方を研究し、縄も用意していた。それだけに、私はC子の音沙汰無しに失望すると同時に、不安にもかられた。あるいは、出産の予定が早まったのではないか……と。

私の不安は当たっていた。丁度、約束した日の朝C子は陣痛が始まり病院に運ばれた。そして午後、無事に女の子を生んだというのである。病院に電話をかけて聞いた話なので詳しいことは分からなかったが、赤ん坊にも母親にも全く異常はない模様であった。

私は、先日のあの乱暴な扱いが、何の影響も及ぼさなかったことに安心したが、その反面もう暫くC子と会うことができず、またたとえ、会うことができるように回復しても、もう彼女の腹は小さくなっており、私の欲求に応えてはくれないのだと思うと、失望せざるを得なかった。

私は、自分の部屋にとじこもり、ひそかに

C子の妊婦ヌードをとり出して、思い出を楽しむだけだった。そして、それにも、いつか飽きてしまった。私の妊孕美に対する無限のあこがれは、押えられると、ますます高まる一方であった。だれか他の相手を捜そう。

私は、例のポケットカメラを懐中にしのばせて、デパートやスーパーやマーケットなど女の人出の多い盛り場をほったき歩いた。

私は、人ごみにまぎれて、その姿をカメラにおさめた。中には、ヌードにして、緊縛でもしたら、すばらしい写真がとれそうな妊婦もいた。

そうしたさまざまな妊婦の姿は、C子を失って、ぽっかり口のあいたような、空虚な私の心を少しずついやしてくれた。人類が存続する限り、地球上から妊婦が消えることはない。そして妊婦がいる限り、私のひそかな愉しみも続くのである。そして、この数多い妊婦の中には、C子のように、私と悦楽の機会をもつことを望む者がいないとは限らない。

そういう考えが、私に、何か明るい希望のようなものを抱かせた。私は少年のように、浮立った心で、そうした女性が、ある日突然現れることを念じつつ、きょうも、盛り場に出向いてゆくのである。

— フェチ小説 —

天使とブタ

浅羽 やすし

(1)

ペランダのむこうからオカッパがこちらをのぞき、かわいい声が彼を呼ぶ。

——リカだ。——

信吉はもう、いてもたってもいられない。

英語の参考書をほうりだして、

「リカちゃんか。おいで」

せいっぱいの甘い声で答えた。

ほんとうは、遊んでなんかいるばあいではない。今夜中に英語をあげて、あすのテストにはなにがなんでも90点は稼ぐ必要がある。



もしも、90点をとらなかったら、B組にお

とされ、もういちど、やり直した。試験にはゴマ化しは許されない。予備校とはいえ、信吉の在籍する「東大予備校」は、テストにはとても厳格なのだ。

これから、テープレコーダーで、会話の独習をやるうと、思考するところへ、リカちゃんから声をかけられ、信吉の計画は、もうくもくずれてしまった。

今夜は半徹夜のかくごだった。でも、いままでの経験では、あけ方の三時には、どうやら自信がもてるころまで、ゆける筈だった

のだ。

まあ、いいや。と信吉は自分にむかって気やすめをいった。

リカと、二時間遊んでも、三時までの自習を五時まで延ばせば、よいわけだ。

今日は朝から、机にむかいばなしで、あたしのシンがズキズキする。そんなときに、天使のようにかわいらしいリカの来訪は、気分転換にはプラスになるだろう。

これも、勉強のうちさ、と、自分の心をマヒさせて、玄関のドアを開けてやった。

カット・春川ナミオ

(2)

リカはフランス人形の様な美少女だった。

婦人雑誌や、ファッション誌のカラー口絵には、かわいいモデルになって、毎月のように姿をみせている。これは、リカのママの、大井みち子が、デザイナーであり、顔をきかせて、わが娘を売り込んだからである。

ことし六才のリカの収入が月に平均六万円それだけではない。近く、あるレイヨン会社の専属モデルになると別に五万円が保証されると聞いて、これは、かなわないと思った。

六才のおんなの子が、十万円も稼ぐのに、信吉が自由に使えるのは、ガラス拭きのバイト収入三万円から、学費や参考書代を差引いた一万円に及ばない金額なのだ。

なんて、なさけない話だろうか。

「コンニチワ」

リカは、行儀がよかった。

モデルに出て、もまれていたためだろうか身のこなしは、こまっしゃくれている。

「おにいちゃん、おみやげ」

チョコレートと、ガムを机に並べた。

リカは、買い喰いだけに、月一万円をつかうという。

「しょうがないのよ、リカは」

ママのみち子が、自まんそうに言ったことがある。

まんざら自まんばかりでなく、リカは仕事で出かけるときは、雑誌社さしまわしの、ニッサンプレジデントに、ちょこんと乗って貴婦人のようにすまして出かける。

ちいさな、ハンドバッグには、いつも何枚かの一万円札が入れられている。

仕事が終わる、撮影担当の婦人記者が、ていねいに送りだし、ふたたび、社長車のプレジデントで送られるみちみち、リカはキャンデーストアの前にクルマをとめさせ、菓子を山のように買うのがクセであった。

「いちどに三千円もお菓子を買い込むの。食べきれなくて、すてることもあるのよ」

これも、みち子の自慢のひとつだった。

甘いものの大きな信吉だけれど、乏しいポケットマネーでは、百円の菓子代すら自由をしている。たまたま招かれた、みち子の室で、彼女は、山のような菓子をすてる。

「買って三日もたって、味の変ったキャンデーなんかたべたら、病気になるわ」

そんなことをいい、豪華な箱に入れられたチョコレートや、ボンボン、レーズン、パウ

ムクーヘン、まんじゅうなども、手もつけないまま、クズカゴに放りこむのだった。

『もったいないな』

信吉は、こんなところに何回も出会っている。みち子は、クズカゴに入りきらない菓子にマユをひそめ、室内グツのまま、その山の上のってギューギューつめ込むのである。

がまんできなくて、まだまだ食べられる、その菓子を、そっとひろって持ち帰り、こっそり食ったことは二回や三回ではきくまい。

大型の板チョコに、クッキリと深く、みち子の、ハイヒールの力カトのあとが刻みこまれ、吐きだされたガムが、歯型をのこしたまま、くっついていた。

でも、信吉は、これが、あのうつくしいみち子か、あるいはリカのかみだしだ、と思うと、ちっとも、きたないと思えないのだ。

みち子が、トイレに立ったスキに、クズカゴから、ひろいあげた菓子を、そっとポケットにしまった。

みち子には、みられてないと思ったのに、リカが、ひとみをクルクルさせながら、すっかりそれをみてしまった。

それくらい、リカは、信吉のところへ遊びにくるたびに、お菓子を気前よく持ってきて

くれる。

六才の少女のやることではなかった。

これは、モデル写真の撮影のとき、裏方さんたちにチップをくばることから習いおぼえたものである。

『オトナはプレゼントで買収できる』

ことを、この童女は肌で知ったらしい。

「おあがりなさいな」

ちいさな手をのばして、ガムの包紙をむき信吉にくれた。

「リカちゃん、今日おしごとは？」

「今日は、お休み。スポンの宣伝部長が、カゼで倒れたんだって」

スポンサーのことを、TV局の連中は、スポンと呼ぶらしい。にくらいいほど大人びた口ぶりだった。

「おにいちゃん。リカ、トイレいきたい」

とつぜん、そういい、立ち上がった。

この子は、こわがり屋であった。一人で入っていると、オバケが、おしりを撫でる、と思ひこんでいるのだ。

こうして、遊びにきたのも、ひとつには、時々やるように、信吉に見張ってもらいながら用をたそうという下心かもしれなかった。

「もっちゃうヨ」

リカは泣き声だった。

「しょうのないリカだなあ。じゃ」

信吉は、リカをトイレへ伴った。

「おにいちゃん、こわい。みてて」

ちいさな、ひとにぎりという感じのヒップ

に、真っ白なパンティースがまぶしかった。

おにいちゃんと呼びはするものの、リカは

信吉のことを、忠実なサービスボーイと思っ

ているらしい。中まで入って見張ってて、と

甘えるのに、こちちが、気恥ずかしさを感じ

ながら、信吉もあとにつづいた。

少女のでも、香りは、大人のそれとおなじだった。

でも信吉は、立去りがたい思いであった。

度々、お菓子をもらっている手前、あと始末を求められても、それをこたわるのは、わるいような気がし、信吉はトイレトペーパーを丸めた。

さっさと出ていくリカは、水を流そうともしない。

小粒の、宝石のようなものが、ペーパーの下に、かれんな姿を、のぞかせていた。

なんだか流し去るのが惜しまれ、信吉は、そのままにして、トイレから出た。

リカは、無心に、ひろげてあった英語教科

書の絵に見入っている。その横顔をみていると、いまトレイに流しのこしてきたものの姿が眼前にちらつく。

「リカ、ねむくなったわ」

かわいくアクビをやりだした。そして、信吉のぺっちゃんこの座ぶとんを枕に、もう、イビキをかきだしていた。

信吉は、なぜかもういちどトイレをのぞいてみたくなった。リカが寝こんだのをみすまして、おそるおそるドアをあけてしまった。醜悪のはずのそれは、どういうわけか尊いもののように目に映る。

信吉は、このまま便器の底にもぐりたい衝動に、自分をおさえることができなかった。

(3)

信吉は、マンションの、兄の孝一夫妻のところに世話になっている。3DKの、北向き3畳の室をあてがわれている。子どもは、いない。兄ヨメの伊佐子は、むかしはスチュワートデスだったが、結婚して乗務をはなれた。いまはキーパンチャーとして、同じ航空会社につとめている。すばらしいスタイルをもつ北欧ふうの美女だが、冷酷な女性だった。野菜、肉、魚、パンなど、兄夫婦と信吉の

三人の食料品の買入は、信吉のしごとであった。室の掃除から、せんだくまで、まるで女中のような仕事は、居候に入ったときの条件であった。

伊佐子は、自分の下ばきのせんだくまで、平気で信吉に命じていた。コキ使わなければソンという態度であった。

でも、信吉はせんだくなどを命ぜられても喜々として従った。

二十八才の伊佐子は、性格はともかく、すれちがった通行人がふり返るほどの、美女であった。まだ独身で通りそうな若さを保っている。

人妻も人妻、兄のものという抵抗は、なくもなかったが、その抵抗は、伊佐子のすばらしい美しさが消してくれる。信吉は伊佐子が好きだった。

物ぐさの伊佐子は、汚れたパンティでも、平然と、バスケットにつっ込んで出勤する。

兄の孝一は、通信社の外電のデスクをやっており、勤務は不規則だった。なにか事件があったりすると、あけ方でも社旗をはためかせた迎えの車で出かける。

夫婦は、ほとんど、すれちがいの生活で、したがって、伊佐子と信吉の二人きりの食事

などは、めずらしくなかった。

でも、なぜか伊佐子は、信吉につめたい。そのくせ、自分の汚れものをその手にゆだねるのは、へいきなのだ。

それら、せんだく物を仔細に点検すること、信吉は好んでいた。兄の肌着など、目もくれない。もっぱら伊佐子のものをねらうのである。

伊佐子は、軽度の腸の病気をもっており、しばしば下痢をした。そのためであるう、汚れがひどく、手にとると異臭がただよった。でも、けっしていやではない。

三畳のタタミにひっくりかえり、下痢のあとの、はっきり判る下着を、顔の上にのせて深呼吸するのは、クセのようになっていた。

手にはアルバムから、そっとぬいた、伊佐子の顔をクローズアップした、手札のカラーフォトがつつまれている。

目だけだして美しい伊佐子の顔をみつめながら、異臭にむせたり、そっと舌を伸ばすとモヤモヤした心がスツキリする。

伊佐子の会社は、遅刻がことのほか、うるさい。だから伊佐子は、つとめて早く出勤するようにしていた。

ところが、腸を病む彼女は、トイレが長い

のである。用をたしながら、外国雑誌のライフや、タイムを読むのだから、二十分位かかってしまう。

そのあとが、たいへんだった。

「アララ。遅刻だわ」

水洗のバルブを押す時間すら惜しんで出かけてしまうのは、どうも、そんなあと始末までじぶんの手をくだすことはなく、そのために、きゅうくつな思いをして、信吉を置いてやっているのじゃない、と思っっているようなフシがある。

信吉は、帰ってくるまでそのままにしておいて、だらしなさを見せつけてやろうかと考えたこともある。でも、水のなかに沈んでいるとはいえ、その臭いが、三畳までにおっきそうで、つい流すことにしていた。

ある日の事、ふとイタズラを思いついた。

その伊佐子の、置きみやげの上に、じぶんのものをおとしたとき、そうした行為が、なにかひどく相手を侮辱したみたいな気が、にわかにおこり、痛快さに心が晴れた。いらい何時間でも、朝、伊佐子が落としたままにしておき、自分が排したくなったら、かまわずその上におとすことにした。いわば合作である。それが、伊佐子への慕情の充たしかたで

ある。

つい先日のことだった。前夜、伊佐子は、したたかに酔って帰った。来日したアメリカの旧友と、ビールを呑んだという。

翌朝、れいによって、セカセカと出ていくのを見送ってトイレに入ったとき、ふとのぞいた便器の底に、なにやら白い破片を発見した。電気をともして、もういちどのぞきこんだ信吉の目に、その白い破片がピーナツのかけらだとわかるのに時間はかからなかった。伊佐子はビールのつまみに、ピーナツをとったのであろう。それが、よく消化されないままに水のなかに落下されたのだ。

「これが、ほんとうの落下生だ」

テレくさをかくすために、ダジャレを言い、そのピーナツをつまみあげたことから、信吉の運命は大きく狂いだすのである。

噛みのこされたピーナツの一片は、原形を完全に保っていた。神秘的なパールを思わせるピーナツは、かすかに異臭を放った。

なんのために、そんな行動をとったのかはじぶんでも不明であった。われに返ったら、パールは口のなかで躍っていたのである。

おそろおそろ、噛んでみた。しめりけをおびているのは長時間、水につかっていたため

だろうか。

ポツンと、噛んだ瞬間、信吉のあたまのなかを、あらしのようなものが通りぬけた。

えらいものを、食べたという衝動だった。

ふしぎに、不潔感は、みじんもない。

もちろん、味があるわけではなかった。

ただ、口のなかをころころとくろげ、あちこちへはね返り、きわめて自然に、歯のあいだに侵入してきて、プスッとくだけたみたいなのだ。

のどへおとすときには、さすがに、いささか抵抗があったが、食道を落下するころは、それはあたりまえのことだと思えた。

なにか、伊佐子そのものを、呑みこんだ感じだった。

彼女を、ひどくけがしたみたいない気持ちだったが、また、自分自身が、あべこべに、ひどいはずかしめを受けたみたいだった。

信吉は、何をやってもかなわない、兄貴の孝一を、いつもおそれていた。にいさん、と甘えられないのである。

その兄貴でさえ、かつて試みたこともない方法で、伊佐子をじぶんのものにしたのは、痛快だった。

信吉は、さらに甘美なピーナツを求めて便

器の底をのぞきこんだ。一つ二つ、ちいさいながら、破片が、みえた。

さすがに耐えがたい醜悪な思いはあった。

しかし、その、神秘的な舌ざわりの前に、信吉は屈伏した。

戦慄が腹の底から、こみあげた。

ああ、おれは、なんて、くだらないことをしたのだろう。

みんな、伊佐子がいけないのだ。水を流してくれさえすれば、そんなことをすることはなかったのだ。

自虐に、胸をさいなまれる。

ふつうなら、信吉などに指一本ふれさせる伊佐子ではない。ましてや、女性なら左様なおどましいものを、他人の目にさらすことは絶対ないだろう。

汚れた下ばきといい、この便器の底に沈むものといい、この世で、思いのままにできるのは、おれひとりなのだ。

そんな思いは、ひどく信吉の胸を熱くさせる。でもこれは与えられた神の賜物なのだ。

万一、伊佐子が用をすませたあと、気がむいて、バルブのコックを押したら、それはたちまち下水へ流されてしまうだろう。

事実これまでに何回かは、伊佐子も水音を

たてさせている。これからでも、あと始末の番がじぶんに戻ってくるという保証はない。

やれるうちに、たっぷりやっておくことだという思いが、信吉の胸を熱くさせる。

呆然と、便器の底を凝視する。異臭がのぼってくる。それは、伊佐子そのものといえるだろう。

信吉は、せい一杯、鼻腔をひろげ、伊佐子の香りをむさぼったのであった。

(4)

「ママがあそびにいらっしゃって」

電話器のむこうで、かわいいリカの声がする。カベひとつへだてた、となりどうしのマンションぐらしなのに、リカは、ときどき、イタズラに電話をかけてよこす。

でも、いまの電話は、リカのいたずらでなく、ママのいいつけらしい。

信吉は、そのときも、熱心に英会話の練習に、はげんでいた。

前回のテストは惨々だった。六十人のクラスで、五十八番めの成績には講師も首をかしげた。それまでは、いつも五番以内だったのだから、これはめっちゃくちゃだった。

『新規まき直しだね』講師は、つめたくテス

ト用紙を返してよこした。そして、あすは、その新規まき直しのテストなのだ。

でも、リカの声をきき、ましてママのいいつけとあれば、なんとしても行かねば、気がすまない。

「えい、どうにでもなれ」

やけになって、辞典をたたきつけた。

真前のドアに、かわいいリカのわらう顔があった。

「ママ、いま風呂なの。あがって」

かわいらしく首をかたむける六才のリカのこなしは、幼女のそれではなかった。CMタレントになっていらい、いっそうリカは、おとなに近づいている。

信吉は、よその室の人にみられては、まずいと思い、あわててドアの中へ飛びこんだ。

「信吉さん。ちょっと……」

玄関の右手の浴室は大きく開かれ、大井みち子の華麗な顔が、ほほえんでいる。

「おせなか流してよ」

これが、六才の女兒の母親とは信ぜられない。みち子は大柄のすばらしい体躯だった。

三年前、三十一才のときに、みち子は交通事故で、映画のプロデューサーだった夫を、失った。大地主である夫の実家は、まだ若い

みち子を、未亡人にしておくのをあわれみ、二千万円の財産をわけて、自由の身にしたくれた。

リカを、連れてという条件であった。

ひところは、映画に出演したこともある、みち子は、とてもそんな年令には、みえない若さだった。

三十四才の、おんな盛りの香りを、ふんだんにまきちらし、伊佐子とは対照的な日本調の美女である。本職はデザイナーだった。

ひるまは、デパートの婦人服部のチーフデザイナーであり、夜は、半分気晴らしに、新宿に、友人と共同で、バーを開いている。

「おどろいたよ」

孝一が伊佐子にいったことがある。

会社の接待で、社長のお供をしていた会員制のバーに、みち子がいたという。

夜は、通いのメイドがきたり、ときには、デパートの女店員が、リカのめんどろをみに来てくれるからよいようなものの、みち子はあまり家に落ちついていない。リカが、おにいちちゃん、おにいちちゃんと、なつくのも、ひるま一人でいることの多いさびしさが、そうさせるのだ。

湯気につつまれたみち子は、いっそう美し

かった。全身、ぬけるような肌の白さがまぶしく、みごとにグラマーで、そのくせモモなどはしなやかな細さだった。腰のあたりは、中年女性らしく、よく発達して、グラマーだけに、バランスがとれて、裸身を引きたてている。

せなかを流して、と求められたのは、これで二回めである。

「信吉さん、お上手ね」

この前は、ほめられてうれしかった。

うしろへまわり、ゆたかな、肉ののりきつたせなかを、流しだす。

「もっと、きつくやってちょうだい」

腰を浮かせ、ゆたかなヒップを、さらけだす、みち子は少々酔っているらしい。

「お店公休なのよ。ゆっくりしていつてね」
午後一時をちょっとまわったこの時刻にはマンションは、しんと静まりかえっている。

兄貴は決算で、このところ、ずっと帰宅が遅いし、伊佐子は伊佐子で「クラス会なの」といつて出ていつている。

伊佐子のクラス会は口実で、クラブへおどりにいくことは、信吉は見ぬいている。

でも、そんなときは、そっと千円札を、食卓の盆の下にかくしていくので、口どめ料の

つもりで、だまってもらっておく。

兄貴だって、決算なんていつたって、なにをしてるやら、わかったものじゃない。

伊佐子のピーナツを、こっそり食べていらい、信吉は、すっかり伊佐子の足もとにひれ伏したいみたいな願いに支配されている。

伊佐子のためなら、兄貴を裏切ることぐらいなんでもなかった。

兄貴も、伊佐子も、帰宅がおそいということとは、みち子のいいなりになって、この室でゆっくりしてもいいということになる。

信吉は、英語のテストを、あきらめることに決心した。

「なに考えてるの？ 伊佐子さんが怖い？」

みち子は、いらだたしそうに声をちょっと荒くした。信吉は、あわててスポンジに石けんをぬり、その前にひざまずいた。

「待って。ちょっとトイレすませるから」

みち子は、信吉の心をおしはかったようにうっちゃりをくわせて、バスタブのとなりの便器に寄る。

「わるいからチップあげる。そのかわり、きょうは、あたし専用のホストになるのよ」

さわやかな、せせらぎの音をたてながら、みち子は、まごつく信吉を見詰める。

「チップ払えば、主人役だものね」

追いうちをかけるように言われ、信吉は屈辱を感じたが、女王さまのようなみち子を拝むと、屈辱は消えた。

「五千円。やすいかしら」

さすがに、そうまで言われると、自分を売ったみたいで、よいきもちはない。

しかし、こんなリツのよいバイトはないのだ。深夜勤務のガラス拭きより気が利いている。

「オッケーね」

いささかのテレくさをかくそうとしてかみち子は、いきおいよく立上がった。水滴がとんで、信吉の顔をぬらした。

そのとたん、信吉の身うちを、あの、伊佐子のピーナツを噛み、のみくだったときに似た、戦慄のようなものが通りぬけ、信吉は、身もこころも売ってくやまない、きもちになつてしまった。

(5)

「イヤーン。リカもおにちゃんに洗ってもらうんだ」

「リカは、ママが洗ったげるから」

母と子は、一人の信吉をあらそっている。

でも、いいでしたら絶対あとへひかないリカだった。

リカにしてみれば、まいにちのように遊んでくれる信吉を、じぶんのものと思いこんでいる。そのママが信吉を五千円で買った。

「お菓子だってあげてるじゃない。五千円ならリカだって払うわ」

おこづかいで、おにいちゃんが買えるとはリカにとって大発見だった。

けっきょく、みち子は、リカに負けた。

「教育上よくないから、パンツはつけてね」しぶしぶ言い、ちょうど、どこかから、かかってきた電話に出た。

リカは、湯ぶねで、はしゃいでいた。

なんて清らかな、からだだろうと思う。みち子や、伊佐子とは、くらべものにならないルビーいろの肌や、まだ発育しきらない人形のような手あし。足の指などは真珠の輝きを思わせる。

きよらかなものを感じて信吉は感動した。

「おにいちゃんも入るのよ」

せまいバスタブに、リカははしゃぎまわっている。

ふと、英語でアブラをしばらく忘れたことを思いだした。一瞬、入浴中を忘れた。

「きみ、しっかりしないと、国立どころか有名私大もムリだよ」

ひごろ、好意をもってくれる講師の小山に冷やかたにいわれた。

……とつぜん、さわやかな音に、信吉は、われに返った。音のぬしは、リカであった。

「ママ、いつも、こうするのよ」

リカは、天真らんまんに、ポーズをくずすうともしない。

バスタブの、石けん台にあぶなっかしくのりながら、なにを考えたのか、トイレのときと同じの水の音をたてているのだ。

細く、小雨のようなその流れは、一直線に信吉のひたる浴槽にそそがれている。

恥じらいをしらない童女のそれは、清冽であった。澄んで、かすかに色づき、いつも高貴な香料をさえ連想させる。

みち子ママは、いつも、こうするという。

なぜ、みち子が、わが子の前で、そんなことをするのか。あるいは、中年女性のひそやかな愉しみなのだろうか。

こどもは母親のマネをするものである。母親のすることなら、なんでも正しいと信じている。

いま、おにいちゃんは、じぶんがギャラを

払って買いきったのだから、いつもママにされることを、こんどはじぶんがしてみたくなったのを、誰もとがめられはしないだろう。

リカは、そう考えているらしい。

「洗ってもらおうかしら」

口調も、みち子そっくりだった。

リカは、どうやら信吉を、自分の思いどおりに追いまわせることに、興味を抱きはじめてたらしい。

湯ぶねのフチに腰をおろし、信吉を見おろして、いきなり、ペッと、つばを吐いた。

つばのなかから、くちやくちやに噛んだガムがとびだして、信吉の顔にあたり、湯へ落ちた。

「ひろってくるのよ」

命令である。こんなことばは、いままでに一回もつかったことがない。

その一言は、信吉の頭脳を貫いた。いま、おれは、天使の足下にひれ伏し、ドレイの奉仕を命ぜられている。そう思うと、湯の底に沈んだ、ひとくれのガムが、神の賜り物のように思えてくる。

みち子の、おとしたアブラとアカに、やや色づき、さらにリカの水の音をたっぷり混ぜこまれた湯の底に、もぐって白く浮くガムの

吐きすてを魚がエサをついばむようにくわえて、浮きあがる。

「おもしろいわ。イルカみたい」

この奉仕は、リカのお気に召したようだ。何回も何回もくりかえし、ガムは湯の底へ投げこまれ、そのたびに、信吉は、もぐりこまねばならない。

ガブリ、と生あたたかい湯を呑んだ。石けんの香りがした。

でも、ちっとも不快ではない。天使のからだを流した聖なる水——そう思うと、とおとくて、いくらでも呑みたくなる。

信吉は、口をあけ、ガボガボと、石けん水をたっぷり呑みこんだ。

「クジラだわ。ポンポン、タヌキみたい」

リカは、ごきげんである。湯をたっぷり呑みこんで、ふくれた信吉のおなかに貝ガラのような、かわいい耳をあてて

「ガボガボ、音がする」

たのしそうに、叩く。あげくには

「これ呑んで」

プラスチックの洗いおけに、なみなみと汚れた湯を汲み、呑むことを強要する。

みち子のアカを溶かしこんだためか、白いあぶらのようなものが不気味に浮いている。

「呑まないと、五千円あげないわ」

そのとき信吉は、目をつぶっていたのでわからなかったけれど、リカの顔に、残酷な影が、あらわれた。とても、六才の少女とはみえない。残忍といったらよいか、鬼女のような表情を、もしも信吉が眺めたら、どんなにおどろいたことであろうか。

しかし、信吉は、鬼女の前に屈した。

ゴクゴクゴクとうまそうにのどを鳴らし、その汚水を呑みほしたのである。

「おにいちゃん、なんでも食べちゃうからブタみたいでおもしろいって、ママが言ってたわ」

心当たりはなくてもない。

みち子は、信吉をときどき呼んで、もらいもののシューマイや、サラミ、牛肉のみそ漬け、パサパサのサンドイッチののこりものを食べさせてくれた。

好意かと思って、すすめられるままに、ムシャムシャ食べたが、どうやらいま思うと、残りものを捨てるのに、信吉の口を利用したということのようだ。

「おにいちゃん、ママが噛みだしたステーキも、たべたんだってね」

十日ばかり前のことである。

「パーティでもらってきたのよ」

ぶ厚いステーキをくれた。このところ、久しく好物の牛肉を食べていなかったの、うれしかった。

「ふたりで、仲よく食べましょうね」

ステーキにナイフをいれ、自分もさっさと一口かぶりついたが、

「だめだわ。お肉たべると、太るから」

クッキリと齒型をのこし、おまけに、つばきと、口紅のあとまでのこるステーキを、

「よかったら、あがらない？ あたしの食べのこしなんか、いやかしら」

とてもうまいステーキであった。ハラもすいていた。みち子のものならきたないとは思えない。えんりょなく、ちょうだいしたが、どうやら、それは、みち子の気まぐれのイタズラだったらしい。

湯あがりの、水滴のしたたる裸身を見せつけたり、眼前で便器にかけ平然としているのは、なにを目的としてのことであったのか。おまけに、リカに、ブタだと教えている。

「あたし、したくなった」

リカは、ちょこちょこと、便器のそばに寄り、フタをもちあげた。

「おにいちゃん、掛けさせてよ」

抱っこしたりリカは、マシユマロのような手ざわりであった。体重はいくらもなく、人形を抱くみたいである。

リカは、平然と腰をおろし、テレビのCMソングを、ハミングでうたっている。

甘く、せつなく、男の心をそそる、とても六つの子の声でも唄でもない。シャンソン歌手になりたいというリカだけに、唄はうまく、信吉は、ききはれた。

「おわったわ」

リカは、いった。唄も終わっていた。

「あら、ペーパーないわ」

カベにとりつけられたペーパーホルダーはカラであった。

「こまったわねえ」

リカはベソをかき、

「おにいちゃん、たすけて」

といった。テレビに出るようになってからリカのボキヤブラリーは、とても豊かになりいささかオーバーだった。

ペーパーが切れたくらいで、たすけてというのだが、信吉にもよい方法がうかばない。

「おにいちゃん、ブタでしょ」

リカの面上を、ふたたび、鬼女の表情がよぎり、冷然と言いきった。

「早くしてくれないと、五千円あげられないわ」

ペーパーがなければ、タオルがあるじゃない。あるいは、抱っこして、湯水コックのとこへ連れてゆき、洗ってくれればいいじゃない、とリカは思ったのだ。

だが信吉は、そこまでは気がまわらなかった。「ブタでしょ」というリカの声が、天使の声となって、脳髓を貫いている。

どうなっても、かまわないと思った。

けがれをしらぬ幼女のなら、無菌だし、害はないと思えた。不潔感を感じなかった。

意を決して、天使のうしろに回った。

リカは、平然として、信吉のなすがままになっっている。

双方とも生まれてはじめての経験だった。

でも、ブタの奉仕は献身的で、おまけに徹底していた。ペーパーの必要は、これならないだろう。

五分間の静寂を、おそろくこれから信吉は生涯忘れないだろう。そして、おませなりカも。

（この不倫と冒瀆。でも悔いはしない。これも五千円のうちだ）

信吉は、この行ないを、五千円という仕事

のうちだ、と自から信じさせることによって昇華させようとしている。仕事なら、誰も、こんな行ないを、非難はできないだろう。

「おにいちゃん、ブタよ」

かわいい天使からかけられた、このひととが、信吉の人間性をうばいさり、かれは、とうとう屈伏したのだ。

でも、いい。

この無垢の天使の道具に使われるのは喜びだった。信吉は、気の遠くなるような感動にふるえた。

しかし、感動を他人にみせるのはいやであった。二人だけの密事にしておきたかった。

ママは、長い電話に立ったきりもどってこない。天使は、無心に浴槽で遊んでいた。

誰もみていない聖なる奉仕の五分間——と思ったのは、信吉の一人がてんだった。

みち子が、ある目的のために取りつけさせた、五〇センチの正方形のマジックミラー。

浴室からみればふつうのカガミ。反対のベツドに回れば、浴室の内部をくくめに映してみせる、そんな仕掛けをほどこしてある。

そして、いまそこに四つの目が光り、リカと信吉の妖しい行事を食い入るように覗きみて

いることを、信吉は気づいていない。

(6)

マジックミラーのむこうで、孝一は息をこらし、弟のあさましげな行動を、食い入るように眺めていた。

信吉がたいことだが、虚像でないことは認めないわけにはいかないのである。

「あたしのお話、ウソじゃないでしょ」

ベッドの孝一の背後から、みち子は、ささやいた。

「すばらしいもの。あなたにも関係のあるシヨイが、はじまるわ。みにいらっしゃい」

さきほど会社へ、みち子が電話でさそいをかけてきた。しぶっている、

「いらっしゃいよ。あなたの名誉にもかかわる問題だわ」

脅迫ともとれる誘いだった。すべては、みち子の仕組んだドラマだった。

仕事のフリをして会社をぬけだして来てみたら、いきなりベッドルームにさそわれた。

となりどうしのため、アラが目立つのだろ
うか。伊佐子とみち子は、廊下で出あっても顔をそむける仲であった。

マンションで、一、二をあらそう互いの美ぼうが、よけいライバル意識を煽ったのだらうか。みち子は、孝一をねらっていた。

偶然、店へ来た孝一が、伊佐子の夫であることが、よけい、みち子のライバル意識をそつたのは、事実であった。

孝一は、みち子の心や、からだの内側に、伊佐子のもってないものを感じ、急速にみち子に惹かれていった。伊佐子といっしょになったことを悔いる想いであった。

そのみち子によって、マジックミラーのむこうに、おとうとの信吉の人間性を完全になぐりすてた奇行をみせつけられたのだ。

ここに至るまでに、孝一は、この室へ五回も呼びだされている。忙しい仕事を放りだし帰宅すべき時間でないのに拘らず、わが家のドアをみるのはスリルであった。

呼びだしておきながら、みち子は堂々と、
「オアソビ代」を要求した。

一回二万円。

どちらからともなく、そんな相場がつけれ、孝一は、ためらわずに支払った。

孝一は、二万円でも高くないと思う。

そしてみち子は、こんな方法でも孝一をトリコにすることに、伊佐子と争って勝った喜

びを思うのである。カネを要求してやることで孝一の熱は、よけい高くなる様であった。

みち子は、孝一から受けとる二万円の「おあそび代」を信吉を買うカネにあてた。

みち子は、孝一の地位にほれていた。

この秋には取締役になり、ニューヨーク支店長に赴任するという。三年間はアメリカ、ヨーロッパ各地の支店を歴任し、帰国後は専務になる筈だった。うまくいけば、一流会社の社長もユメではない。

その孝一を、けむたい伊佐子の手からうばいとすることは、全身がゆれうごくほどの愉しみに思えただけではない。弟の信吉は信吉で命令すればどんな奉仕にも喜々として屈伏する。手あしまといのリカのためにも信吉は、べんりな存在なのだ。そして、その信吉を買うためのカネは、じぶんが楽しみながら孝一から、ださせるのだ。

こんな愉快なことがまたとあるだろうか。

「ねえ」

みち子は、からだを這いまわる孝一の手をかるくかわしながら、いった。

「リカだけじゃないわ。信吉が、私のからだを喜んで洗うようになったのは、今日はじまったことじゃないのよ」

「え？」

「あれはブタよ。ハナならして、あたしの流した垢だって、エサにするわ」

「なんだって？」

「おどろくことないのよ。それだけじゃないわ。命令すれば、トイレのおともからトイレットペーパーの代りまで、いいえ、それ以上に恥ずかしいことまで、喜んでやるのよ、あなたの弟さんは」

「恥ずかしいことって？」

「あたしのくちからはいえないな。ぜんぶカメラにおさめたわ」

「カメラに？」

「そうよ。信吉さんは、あなたとウリ二つ。ちょっとみたら、あなたが、あたしのおしりの下じきになってるみたい」

たしかに、信吉は、顔が孝一とよく似ている。誰がみても、血をわけた兄弟であることはスグ判る。

「あたしのおねがいを書いてくれなかったら写真をたくさん焼いて、あなたの会社の社員ぜんぶに送ってやるわ。これが、未来のあなたがたの社長の弟さんですって」

「バカなことを考えるもんじゃない」

「バカじゃないわ、真剣よ。それだけじゃないわ。信吉さんはあなたのおくさん、つまり義理のねえさんの伊佐子さんの、おなかから自然にでてきたピーナツをたべたんですって。うまかったから、あたしにも食べさせてなんて手を合わせて拝んだわ」

「わからん。なぜ、ピーナツが、腹から出るんだろう」

「とぼけないでよ。トイレのあとへ入れば簡単に手に入るのよ」

信吉行状記と、タイトルをつけて、ひるま一人で義姉のパンティを、あたまからかむったりピーナツを食べたりの行動を、告白体の読物にまとめてあるという。

「ファックスで、大量に印刷してバラまいたら、おもしろいだろうな」

ぶ厚い原稿用紙を製本したのを見せられて孝一は沈黙した。

伊佐子が、トイレのあと、水を流さないのは自分も知っている。不快な思いをこらえてわが手で水を流したのは、二回や三回ではきかないだろう。

思いあたることは、たくさんある。信吉のするすにのぞいた三畳の押入れに、悪臭を放つパンティがかくされていたことも――。

みちのおねがいというのは、伊佐子を離婚

してくれということだ。自分といっしょになろうと、迫るのだ。

「あたし、社長夫人になりたいのよ」

きいてくれたら、写真や原稿は焼きすてるけど、万が一、ききいれてくれなかったら、妖しいスキヤンダルをガリ版でバラまくという。

「結婚してくれたら、あたしもいっしょに海外出張についていくわ。あたしの二千万円の預金はそのときのお小遣いよ」

おどしと、好条件の両天秤かけた求婚だった。

マジックミラーのむこうでは、リカを肩ぐるました信吉が、ブクブク泡をたてながら、何回も、湯の底へ沈んだり、また浮き上ってくるしように、息を吹きだすのが、みえた。ベッドにいたはずのみち子が、いなくなっただと思ったら、マジックミラーのむこうに、みごとなからだを現わし顔をミラーに近々と寄せて、ニッコリ、ウインクをした。

そうして、身をひるがえすと、湯ぶねの前にしゃがみ、ちょっと前にかがんで、深呼吸の息を吸ったりだしたりしはじめた。形のよい腹部が、出たり引っこんだりするのは奇妙だった。

リカも信吉も、あっけにとられている。みち子の正面の湯が、そこだけ、さざなみを立てているのは、ふしぎだった。

もういちど、みち子がこちらをむいて、わらい、そしてミラーから消えた。

「あたしのいうこと、ウソでない証拠をみせたいよと思って」

戻ってきたみち子は、事もなげにいった。

孝一の決心をうながすために、浴室へ入り信吉たちに、洗礼を浴びせてみせたのだ。

孝一は、もうみち子から逃れられないと判断した。伊佐子より年令が上だけど、女としてくらべれば、みち子のほうが上だろう。ましてヨーロッパへ連れていくのには、みち子のほうがよさそうに思えたのだ。

孝一の決心はどうやらついたらしかった。

(7)

「信吉、あなた、なにしてるの」

伊佐子は叫んだ。

信吉は、便器に首をさしいれて、うごごうともしない。それは、たったいま伊佐子が使ったばかりなのだ。

けさもれいによって、いそぐままにとび出

した。ところが、会社の社員証を、トイレのなかに落としたらしい。社員証がないとオフィスへの出入りは許されない。せっかくマンションのロビーまでおりたものの、致し方なく、もういちど五階のわが家へもどる必要があった。

そして、ドアを開けたままのトイレに、信吉のすがたを発見したのだった。

このごろ、朝の出勤のしたくに、信吉を手伝わせている。時間がなくなり、服を着るとき、片足あげて、クツ下をはかせるのは、信吉の仕事になっていた。

ただし、孝一が、家にいるときは、さすがにそんなことはやらせない。

「ねえさんが遅刻しそうなよ。クツ下くらい、はかせてくれたらどうなの」

このひとことで、それくらい、その手伝いは、信吉ときまったのだ。

けさにかぎって、孝一はるすなのに信吉の手を使わず、自分でクツ下をはいた。

信吉は、そのサービスに自分が使われなかったのが不服だった。だから、よけいにはげしく便器に惹かれたのだろうか。それにしても、床にひざまずき、半身を便器につこんでいる異様なすがたであった。

「ほんとにやってるのね」

伊佐子は、怒りがこみあげた。

ゆうべ、夫の孝一から、くわしいことは聞いている。

「おまえが、だらしなからだ」

孝一は、みち子から聞かされたことのなかで、都合のいいところだけをぬきだして、伊佐子に迫った。

汚れた下着を洗わせたり、トイレの水流しまでやらせる、そんなだらしが無い女房では将来社長にもなろうとするおれには、まっぴらだ。別れよう、とをもって回った理不尽な言いふんだった。

いわれてみれば、自分のほうにも、落度があつた。しかし、原因をつくったのは信吉のはず。その信吉をほうっておいて、別れようとはムシがいいと思う。

その信吉が、いま眼前にあさましくも醜怪な証拠をみせている。

むしようにハラが立ってきた。しかし信吉は、顔をあげようとしなない。伊佐子は、便器のフタに手をかけ、せいっぱいのちからで、それを信吉の後頭部に倒した。それだけではたらず、いきなり信吉の背にのしかかって、全身をかけてゆさぶった。

グウ、とフタの下で、信吉がうめき、それが、伊佐子のからだに伝わった。あとは、むちゅうだった。

「おれの弟を殺すのか」

いつ入ってきたのか、孝一の声であった。あとから、みち子の顔がのぞいていた。

(8)

勝負は、ついた。夫の留守を幸いに、義弟の背にまたがって、大胆な愉しみをぬすんだという、孝一の強弁には、しかし事実そのような行動にふけり、みち子にまで見られている。

「みち子さんが証人だ。訴訟をおこしてでも別れる」

孝一のいいぶんに、反駁の余地はなさそうだった。

でも、会社の地位を重んじる孝一は、それ以上に離婚を迫ろうとはしない。

そのかわり、それらしい公然と、大井家へ出入りする孝一だった。

孝一は、案外ずるい、おとこだった。

海外出張には、妻は病気ということにして単身出発すればよい。海外で、白人女性と、

つきあうほうがよいと、考えたのだ。

伊佐子は、わりきれないながらも、マンションを追われるよりはマシだ、と割り切っている。孝一はほとんど、みち子の室へ入りびたりだったが、信吉がいてくれることで、多少は、まぎらすことができたようだ。

「信吉は、みち子のとこじゃブタだそうだけど、あたしの前ではウマよ」

いちど、腹立ちまぎれに、人間の騎乗を味わったのを、忘れられなかったらしい。あれからも伊佐子は、あいかわらず、クツ下をはかせたり下着を洗だくさせたり、トイレのお供を命じたりしている。孝一から捨てられた不満を、そのことで忘れようとするかのようだった。

そして、信吉は、伊佐子の前では、おとなしいウマであった。

(9)

「おにいちゃん、ちょっと来て」

リカは、毎日のように、おとなたちが出はらったあとは信吉を電話で呼びつける。

気まぐれのリカは、モデル仕事を、

「あたし、イヤよ」

あっさりことわって、ほとんど家にいる。

ポスターの仕事をついぱんやれば、六才の幼女には、二カ月たっぷりは、つかいきれないギャラが入る。月五千円の、信吉の手当てなどは、おいしいと思わず、

「おにいちゃんを買ったわよ」

祝儀袋へ入れて、わたしでよこす。

トイレへのお供も、お風呂の世話も、いっさいは、そのギャラにふくまれているのよ、という表情だった。

「あのね、ブタは、なんでも食べるんだって孝一おじちゃまがいったわ。だから……」

舶来のチョコレートへ、さらに自分で、味つけしたものをつきつけ、

「食べないと、ショーチしないわ」

迫るその目は、まるで幼い鬼女であった。

どうやら、ママを、孝一おじちゃまにとられた、そのうっぶんを信吉によって、晴らすうとするかのようだ。

リカに、異様なチョコレートをつきつけられて、信吉は、その味の前に屈伏する。

そのかわいらしい足を、顔の上にのせられると、ほんとうに、自分がブタになったみたいで、どんな命令にも、木偶人形のように従う信吉であった。大学進学のことなど、完全に忘れていた。



S M カメラ・ハント

佐倉絹子とその夫の巻

『悦虐に憑かれて』

辻 村 隆

夫婦プレイをこいねがう人妻の愛情相談を聴く羽目になって――。

十一月の中旬ごろであつたらうか、突然見知らぬ女性から電話がかかってきて、私をドギマギさせた。その女性、佐倉絹子は、数年前より、秘かなる奇クファンであつて、私の名前は、カメラ・ハントを読んでいて熟知していたのであるが、誌上では私の住所も分からぬまま、奇ク宛に手紙を出したとて、所詮は相手にされないし勝手にきめて、いつか

折あらばと機会を窺っていたそうである。偶々十月末、私がイレブンPMに出演したのを見て、読売テレビ制作局に電話して、私の電話番号を聞き知ったという次第であつた。

声だけでは年令の想像もつかないが、何か思いつめた調子で、是非一度、自分の話をきいて欲しいというのであつた。人生相談を受けて、それに満足な解答の出来るような私ではないが、彼女の哀願するような必死な口調につられて、それでは兎も角、お話をききましようということになった。私の都合のいい時間に合わすというので、土曜日の午後、大

阪ミナミの、私の行きつけの喫茶店を指定する。目印は週刊新潮。女性は三十三才で小柄やややせぎすのタイプだと告げた。

公共の視聴率の高いテレビ番組に出たため思いがけぬ副産物が転がり込んで来た思いである。どうせ私に相談を持ちかけるからには多分にSMめいた要素もあるに違いないと勝手に判断して、私は未だみぬ佐倉絹子という女性に、さまざまの想像を逞しくするのであつた。

午後一時、指定した喫茶店のドアを開いて

グルリとルームの中を一望する。アベックが三組と商談らしきもの一組、長髪族の若者の一群れ。そして奥まったテーブルに女性一人コーヒークップを前にして人待ち顔。それに目をつけて近づき、空いたその前の椅子に坐ったら、彼女はジロリと私をにらんで、はっきりイヤな顔をした。二十才前後のOLタイプ。誰か恋人待ちらしい。どうやらお目当てが外れて、私は苦笑して会釈すると、空いた隣のテーブルに腰を降ろす。約束の時間には未だ姿をみせてはいなかったのであった。

十分—二十分—三十分。私は、すっかりイライラし始めていた。電話の言葉を真に受けて、ノコノコ出てきたお人好さに、自己嫌悪を感じ始め、何かカラカワれたような気持ちが先に立って、或いは、この喫茶店の何処かで私という人間をひそかに観察して、ワラっているのではなからうかという憶測にかられ、私は今にも立ち上りかねない気持ちを抱きながらも、或いはという未練心が、私の決断を鈍らせていたのであった。佐倉絹子の、あのつきつめたような口調が、私の耳朵の底に残っていたからであろうか。

かなりの客が消えて、又現われ、三十分の間に、半分ぐらいは顔触れが変わり、最初間

違えた若いO・Lにも、青年が現われて、イソイソと消えていった。

私の視線は、ドアの開閉につられてチラチラと走り、その都度未遂の落胆を繰り返していた。もうこれ以上、無駄だ——と心に決めて立ち上った時、ドアが開くと、急いでかけつけた風の和装の女性が、あわただしく辺りを見廻していた。片手で胸に抱いたハンドバッグと週刊誌。咄嗟のカンがピンと走ると、私は立ち上りかけた腰をもう一度ゆっくりと落とす。じっと彼女に視線を釘づけにしていると、ルームの明るさに眼が馴れたのか、彼女は客の一人一人を確かめるような眼付で、奥まった私の方に近づいてきて、はっきりとそこに私をみつけると、サツと表情が硬ばり一瞬全身が凝固してハタと止まり、極度の緊張が、ありありと女性自身をつらぬいているのを私は認めた。

眼と眼が会釈したのを機に女性の顔にサツと血の気が引き、あわててうなずくと、私の前の椅子に、そっと腰を降ろしてきた。

「佐倉さんですね、お電話の？」

「ハイ、左様でございます。大変おくれました。申訳け御座いません。遅れるといけないと思いますして、家から駅までタクシーに乗りま

したら、却っておくれました……それに、このお店を探すのに手間どりましたものですか……」

彼女は恐縮したように、言うのであった。その言葉を裏書きするかのように、戸外は、もう台オーバーの、北風吹くうすら寒い季節というのに、うっすらと、ひたいに汗を、にじませていた。

小紋の絹ものに縮緬の薄緑ぼかしの羽織。しつとりと落着いた若奥様風の姿は、PTAに出席した小学生の母親の姿をホーフツとさせる、よそおいであった。

私が黙っていたら、美德がそうさせるのか彼女も一向に語りかけるでもなく、黙ってうつむき加減に、週刊誌を指先でいじくっている。自分の方から口をきるのが、はしたないとでもいった風な素振りであった。私は改めて、もう一杯、彼女と一緒にコーヒーの追加を注文して、正対する佐倉絹子を凝々と観察していた。あからさまには告げられぬ、秘めたる心の憂いの堆積が、心なしか彼女の表情を暗くし、やや頬骨の尖った、ふくよかさは凡そ縁遠い、皮膚の薄さ、吊り上り気味の切長の眼は、女の顔を喰のあるものにしていた。ズバリいって、ヒステリックな、心の悩

みを一杯に、はらんだ顔であった。女は愛嬌と笑顔だといわれるが、佐倉絹子の、このいささか陰悪めいた、憂鬱たる内憤の表情に、笑顔と愛嬌を与えたら、相当な美人と思われるのであったが、今、眼前の彼女には、笑顔一つ之余裕すらないような、思いつめた気配でうつむいているのであった。こうした開放的な喫茶店では、彼女の堆積した心の秘密をきくのには、ふさわしくないようであった。彼女の硬化した心を解きはぐす、なごやかな雰囲気をつくらないと、この女性は、益々自分の殻の中へ閉じこもろうとする、垂直思考の一般の人妻の様相であった。それに、彼女の事について、私は未だ何一つ知らなかった。現在ここに存在する女性が、佐倉絹子という人妻らしいという以外のこととは——。こういう型の女性に限って、思いつめたら、何をするか分からないという、思慮分別に欠けるタイプでもあった。

「食事、なさったのですか？」

「ええ、家を出ます時、軽くたべて参りました」

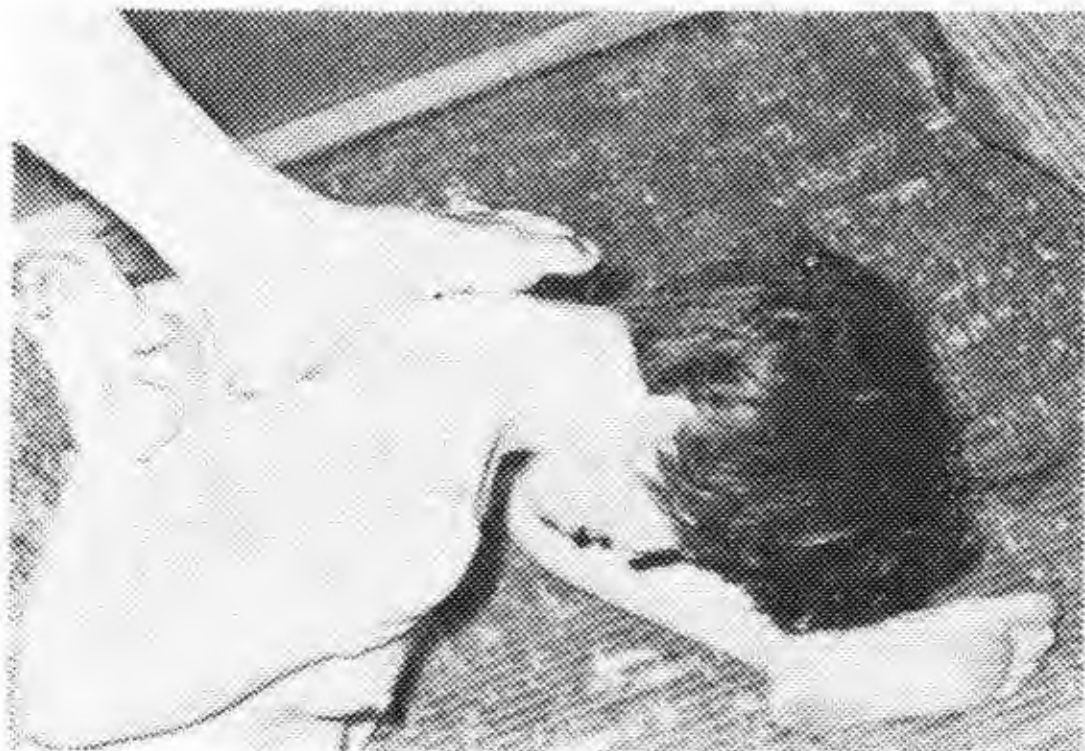
「ここじゃ、ゆっくり話も出来ませんね。どうか静かな処へ参りましょうか」

「でも、いくら何でも、お会いした最初から

そんな処……」

静かな処をホテルと感違いしたらしい。彼女はパツと頬を染めて、私の言葉をなじるようにいった。語るに落ちたのか、テレビの見過ぎか、私は彼女の想像力の逞しさに、思わず苦笑を洩らし、

「とんでもない。個室喫茶か、小部屋のある



料理店ぐらいと考えるんですよ。何ならここでもいいんですが、なにか誤解なさったのじゃ……」

「まあ、御免なさい。私、近頃どうかしているのですわ」

女はチラツと羞らいのかげりを泛かべたが、笑いを失った表情は冷たく感じられた。

「いきなり電話がかかってきまして、驚きましたよ」

「失礼とは存じましたが、ああでもしないことには、私如きにお会いして下さらないと思ひまして」

「買いかぶり過ぎですよ。アングラ的存在の私なんか、そんな大した人間じゃありませんよ。果して貴女の御期待に添えるかどうか」

「いえ、辻村さんなら、私のこの気持、きつと分かっていただけたらと思ひましたの。衝動的になると、もう矢も楯も堪まらなくなるんです、私って……」

「じゃあ、聞くだけでも聞かせていただきます。御様子からお察しして、奥さんですね？」

「ええ、結婚して、もう八年になります。幸か不幸か、子室には恵まれないんです。私が悪いのか、うちの人が悪いのか、どちらとも

いえませんが、私の躰、お医者様に診断して貰いましたら別段異常ないと仰有るんです」

「その悩み？」

「それもありますけど、もっと外のことで」

「お住居、どこなんです？」

「泉佐野市より、もう少し和歌山よりのT荘というところ、御存知でしょうか。半農半漁の古い家に嫁いだのです」

「変ないいかたですが、その割に田舎くさくないですね」

「そうでしょうか。私、愛知県の碧南市で生まれたのですが、縁あって、こんなところへ嫁いだものの、泉南の人間になり切れないんです。それがいけないのでしょうか」

「失礼ですが、お年は三十三才とか」

「ええ、もうダメですわ、いい年になって」

「人生の一番いい盛りですよ。それで単刀直入にいつ、御相談とは」

「うちの人、二号、三号をつくって、殆ど帰ってこないんです。そのことで私……。やっぱ、どこか辻村さんと二人きりのところへ参りましょう。ここでは、とてもお話出来ませんわ」

佐倉絹子は、いきなり颯々と立ち上った。累積した憂憤が、ここで爆発するのを懼れた

かのような、唐突な動作であった。案に違わず、佐倉絹子は嫉妬にかられ、それが否応なくヒステリックになって現われていたのである。

お門違いも甚だしい——そんな、やり切れない思いで、つられて立ち上ると、今更、乗りかかった船、ひきもならずと伝票を握って先に立つ彼女の尻についてゆく私であった。

……………

お女将にS気があって、若いM気のあるツバメを紹介してくれと、本気か冗談か、いつもせがまれるK廻家の二階の小部屋——。

昼下りで料理の支度もなく、お女将が私の肩をポンと叩いて、ゆっくりやりなさいよと意味ありげに片眼つぶって、トントンと階段を降りたあとは、四帖半の部屋に私と絹子の二人きり。チャブ台に、鉋子二本とツマミのウニのいかあえと、ふぐの干物がおいてあるだけ。

盃を奨めると、あっさり受けて、この女性意外にも、のみっぷりがいい。返盃の手付がフト玄人ッぽさを感じさせる。道理で泉南はずれの海辺の漁村で、こうもみなりが整っているのだろうか。そんな詮索めいた推理が私の心をよぎる。それとは口には出さず、さり

げなく受けて、酒が、硬化した心を解きほぐすかも知れないと、私は又しても奨めるのであった。蒼白いひたいに、仄赤みがさしてくる。女の姿態は心なしに崩れつつあった。

「奇クを読んでるんですってね」

そんなところから探りをいれてゆくと、

「ええ、うちの人に内緒なんですのよ。段々と殖えてくるものですから、隠す場所に困っているんですの」

「ズバリいつてS？ それともMなの？」

「女ですもの、Mですわ。勿論」

「だって、女上位の近頃、女のSも随分と多いですよ」

「所詮、女の躰の構造からいっても、女性はMが本当ですわ」

「そういう、貴女自身の、仰有り方や行動はSめいているんですがね」

「そうでしょうか。私はMになりたくて、なりたくて、うちの人、うんと虐めてくれたら、どんなに嬉しいだろうと、しょっちゅうそんなことばかり考えているんですのに」

「そのくせ、浮気する御主人に、眼に角立てて、くっつかかるんでしょう」

「悲しい女のごうでしょうか。うちの人が好きで堪まらないのに、よその女と寝てきたと

考えると、もう胸がはりさけそうで、噛みついたり、抓ったり、むしゃぶりついて泣き喚いたり、恥かしいですけど、それが女、仕方ありませんわ」

「行動はS的なんですね。それで御主人は貴女にされるままになってるんですか？」

「自分が悪いから、防戦一方です」

「浮気の御主人の解決法なんて、私の柄じゃありませんよ。私には特定の二号とか三号とかいった女性はありませんが、多い月になると、違った女性と何回となくデートしては、さまざまにプレイしてるんですからね。私の家内は、余っ程、亭主を信用し

ているのか、滅多に嫉きませんがね。もっとも嫉いてた日にゃいくつ体があっても足りませんが……その代りといっちゃ何だが、私はプレイとして、すべてを割り切っています。ずるいようだが相手の女性に対してアイライク (I LIKE) であってもアイラブ (I LOVE) にはならないよう気を使っています。それが、せめてもの私の良心というか、良人の貞操だと思っ



す。だからプレイのあと、ラブレターめいた綿々と想いのたけを綴ったような手紙を貰うと、女房の手前、一番困るんです。分かるでしょう、この気持」

「ええ、分かります。うちの人も外の女に対してアイライクなら、私だって、こうもジェラシーを起こしません、アイラブだから腹が立つのです。でも私の方も悪いのか分かりません。私には過去があるのです。うちの人も告白したのですが……」

「薄々感じましたよ」

「まあ怖い。どんなこと？」

「奥さんの過去に、水商売の経験があるような——間違ってたら御免なさい」

「分かるのでしょうか。実は名古屋で二年許り働いたことがあるんです。でも、うちの人と知り合ったのは、その時ですから、うちの人は、その点は承知の上なんですけど、その以前に単なるセックス以上の、SM的な結びつきがあったのです。SMのプレイについては、うちの人には話していません。分かってもらえるかどうか、それが怖くて」

話は段々核心に触れてきたようであった。佐倉絹子は、言葉に衣をきせず、同好者の用いるSMとかプレイとかいう言葉で、語るのであった。その用語の奥に、彼女のSMに対する並々な探求の深さを、まざまざと感じるのであった。普通の人妻からは、到底聞くことの出来ぬ、耳馴れた言葉の、はしはしであった。

「名古屋で、ある男性と交渉のあった時、M化されたというんですね」

「それが分からないんです。被虐を求める心は、先天的なものでしょうか、それとも後天的なものなのでしょうか。偶々その彼がSでしたが、私には、千天の慈雨のように、彼の行為をうけいれたのです。彼と三日に挙げず

デートして、過ごしたプレイのひとつときが、私にとっては、この世のものとも思われぬ楽しい時間でした。その強烈な刺激が、今も心の奥底に働いていて、うちの人との夜をつまらなくさせているのかも知れないんです。セックスの欲び以上に、被虐の欲びの方が大きい私を、うちの人には懸命に愛してはくれたのですが、心のどっかに潜んでいる満ち足りぬ不満を、うちの方は、いつしか夫婦のみに分ける愛情の中に感じて、それが私から遠ざかった原因のようにも思えるのです。二号、三号は恐らく、うちの人のセックスを十分に満たしているでしょう。それが分かっているが、どうしようもない私の心、この潜んでいる被虐を希む心を、どうして、うちの人に分かってもらえたらよいかと、それが相談したかったのですわ」

彼女の表情に、やっと話し得たあとの、しこりのおちた柔らか味が漂い始めていた。酒が、この人妻の舌をなめらかにし、心を温めたせいかも知れなかった。Sの夫がノーマルな妻を飼育してゆく手段は、前戯に使用して比較的スムーズであるが、Mの妻が、ノーマルな夫に、被虐の行為を願望するのは、立場が転倒しているだけに、困難が伴うことが多

かった。わざと怒りを買う行為をして、打擲をうけ、暴行されても、憎悪が先行して、愛情のともなわぬS的行為は、被虐のプレイを望む妻にとっては物足りず、況してや夫が、Sのプレイの制約の下に行なえば、愉しい悦虐に繋がる行為も、プレイを無視しての単なる怒りに任せてのS的行為は、むしろ逆効果となつて、精神的、肉体的苦痛以外のなにものでもないことが殆どである。私の謂う、SといいMという心理作用は、真性のものではなく、いう迄もなくプレイというルールの上に立っての行為で、それによって、Sの人間も歓喜し、Mの人間も快虐を覚えねばSMプレイは成立たないという前提条件のもとでの行為であった。Sでない男は、暴力を振るうことによって尚更、苦渋の悔恨を増すだけであるし、わざと怒りを求めて責められた女は、屈辱と苦痛の痛恨を、むなしく心に灼きつけるに過ぎなかったであろう。

佐倉絹子の場合、愛する夫より快く虐められたい——。唯、その願望だけが彼女を支配していて、どうすれば夫をその方向にむけられるかという悩みに懊悩しているようであった。二号、三号をつくり、子宝に恵まれず、ともすればヒビの入った夫婦生活に、SMの

プレイをとり入れて、何とか愛情の復活を願う絹子にとって、過去の八年のノーマルな夫婦生活のギャップは余りにも長かったに違いない。私がイレブンPMで、倦怠期の夫婦に活を入れる手段として、SMプレイをとり入れるということを喋ったのが、絹子にとって天恵の言葉として響いたのかも知れなかった。

今更、八年経過した、ヒビの入った夫婦にとって、この相談は、私にとつても、かなりの重荷であった。どうすれば、よいか——。理論では割り切っても、いざ実際となると難しい問題である。私は、しばし熟考する。絹子を欲ばせる言葉と手段は何であろうか——しばしの考慮が、或る時点に到達した。この人妻の被虐の程度を先ず調べてみることであった。私は笑顔を向けた。

「ところで、あなたの被虐の欲びの程度は、どれくらいなんです？」

「程度と申しますと……、何を基準にしているか？」

「そう難しくとられると困るなあ。例えば、乳房を責められるとか、お尻を思い切り、ぶたれるとか——ああ、そうだ。名古屋で彼とプレイした時、どんな虐められ方をされたの

か」

「よろしくやってるんじゃない？ 入ってもいいの」

「何もないさ、身上相談。およそ私に、ふさわしくない話さ」

「とか何とかいって、カメラ・ハントに口説いているんですよ」

案外ひよっとすると、そうなるかも知れない——。お女将の洞察力に苦笑して電話を措く。昼下りの情事は、あえなくも消えてしまった。

「私の口からはいえませんが。何とかうまくうちの人に持ちかけて下さいませんか？」

「だって、御主人とは一面識ないしね。貴女とだって今日が始めてですよ」

「お願い。うまくゆけば、きつとお礼しますから」

半ば媚びるような態度で、彼女は思いもかけぬ厄介な媒介を私に押しつけてきたのであった。

「お礼なんか期待していませんよ。唯、うまくいったら、ハントに書きちゃいけないかなあ」

「いいですわ、お書きになっても。でも全部本当のこと書きますの？」

「都合の悪いプライバシーは抜きますよ、勿論——何なら、貴女だけでも一度撮ってみたいですね」

チラリ本心を覗かせたら、唇を歪めて、皮肉めいた笑みを泛かべて、

「多分そう仰有ると思いましたが。でも私の場合、自分の心に自信持てませんのよ。恐らく世間で謂う『よろめき』になることでしょ。それじゃ、うちの人の、二号や三号のこゝとを怒れなくなります。やはり、うちの人のプレイがしたいのです。分かって下さるでしょう？」

彼女の場合、はっきりと夫婦プレイを望んでいた。その仲介を頼まれたに過ぎないことを私は今更ながら知らされた思いであった。ほんの先刻みせた媚態は、しからば私の心を挑発する擬態に過ぎなかったのであろうか。そうではあるまい。私がその気になれば、易々として体を傾ける筈であった。人妻としての良心が心ならずも、そうした言葉になったとしか私には思えなかった。それが人妻のせめてものギリギリの線かも知れなかった。テレビで、苦しまぎれに使った『風俗研究家』という、わけの分からぬ名称で、私は彼女の夫に会わされる羽目になってしまった。

佐倉昭二、三十六才——伝来の農漁業に、ほどほどに見切りをつけて、或る事業を始めているマジメ人間（二号、三号をおいてマジメ人間も可笑しいが、私の観念からすればマジメ人間である）。

さて、どう切り出しているものやら、奇妙なことから、私は心ならずも一つの重荷を背負い込む仕儀になってしまった。

佐倉絹子の夫の述懐。マジメ振りを發揮して、夫婦プレイの伝授を依頼される顛末——

数年振りで踏む堺市は、私の生まれ故郷である。南海電車堺駅からして遠くない割烹『Y』の二階で、絹子の夫、佐倉昭二氏は、既に私の来訪を待ち兼ねていた。

髪を短く刈り上げ、大柄で浅黒い精悍そうなタイプのいい男であった。

彼は如才なく私に上座をすすめた。ゆきつけの料亭らしく、私が到着すると、心得たように女中が料理と酒を運んで来て消える。佐倉絹子は、この実直そうな夫を、一体どういう手段で口説き落としたのであろうか。何か先手をとられた恰好で、私はこの初対面の佐

倉氏と、とりあえず盃の応酬を交した。

「いつも絹子がお世話になっております。テレビや映画でお忙しいときいております」

「いや、ほんの一寸……」

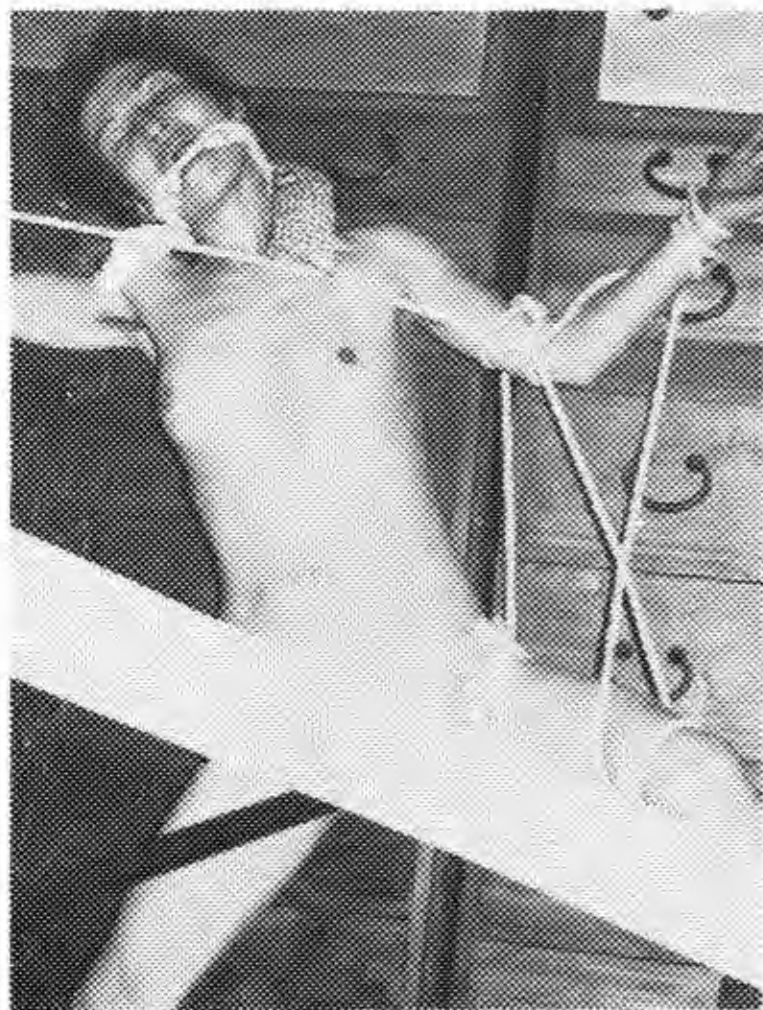
咄嗟に相手の心を計りかねて、うやむやに返事すると、相手は委細かまわず続けてくれた。

「何でも、絹子の兄と非常にお心易いそうで先日、大阪でバッタリ出会って、食事をごちそうになったとかいってましてたよ」

ハハーンそういうことになっているのか。それならそれで調子を合わさなくてはならない。私はウソの話を固める手段として、しばらくは、佐倉氏の職業や、近づきつつある衆議院の選挙の話の方に、さりげなく転じていった。心の準備をつくるためにも、一刻は時を稼がなくてはならない。

佐倉昭二氏は案外イケル方らしく、のみっぷりも豪快で、忽ち銚子四五本をカラにしてすっかり赤く顔をほてらせている。私がこの堺市の出身だというと、意外な顔付になって出身校などきくのであった。世間は広いようで狭いもので、何と彼は私の卒業した、堺の商業高校の後輩であったのである。私も往時の学生時代などを懐かしく語り、彼も在学中

の共通する恩師の名前など列举しては、その共通点の、未だに綿々と引継がれているニックスネームで、教師の誰彼を思い出して、もう二昔以前の、荒廃していた頃の学校の有様など、愉しそうに語り続けるのであった。いつしか彼は、私を先輩扱いにし、目に見えぬ親しみがこもっているようであった。親近感はい出来たものの、SMめいた話を切り出すには反って後めたい困惑さが私を支配して、どうも話がしにくくなってくるのを覚える。いつまでも昔を懐古して、初対面の人間同志、そんな話ばかりもしておられない。



「実は絹子さんから……」

と、決心して口を切り出したら、さっと片手を挙げて制止し、

「いや、わかっています、御意見でしょう。

いいと思っちゃいません……しかし、デリケートなんですよ。何といたらいかなあ」

「一方的な話で独断できませんが、私だって貴方の立場なら、多分、同じ結果を招いたでしょうね」

「分かってくれますか?」

「分かりますとも」

「どんなことを喋ったのです? あなたに」

私は佐倉絹子の、SMプレイの婚前交渉の件だけ除いてありのまま彼に話したのであった。フンフンと頷きながら彼の表情に、次第に苦渋の翳がさし始めた。ウソは反ってあとあと気拙くなると、私は彼の誠実さの前にカブトを脱いで絹子夫人のつくり話をも粉砕してしまったのである。「奇譚クラブという雑誌は、家内の留守の折フト何かの拍子に十数冊も発見して、拾い

読みして驚いたのを憶えています。薄い記憶ですが、縛った女性の写真入りの文があったのも記憶していますが、そうですか、あなたがお書きになったのですね」

チラリと佐倉昭二の眸の奥に警戒の色が走った。

「ええ、拙ない作文です。この本を御覧になってどう思われましたか？」

「妻が、こうした種類の本に興味をもって、いることが驚異でした。あっとおどろくタメゴローですね。いやホント。私は妻のプライバシーのために、そのことについて、ついぞ口に出したことはありませんが、絹子自身、あの本の、どのような異常行為に興味をもって、いるのだろうか、いつか折あらば問い訊してみたい気持でした」

「あなたは、奥さんを全裸にして、犇々と縛り上げて、思い切り自分の思うように、気のすむまで虐めてみたい——そんな気持にかり立てられたことはありませんか？ 失礼な質問で御免なさい」

「ありますね。ネチネチとヒステリックに絡んでくる女房を縛り上げて、思いきりぶちのめしたら、どんなにスカッとするだろうか、そんなことを考える時もあります。もともと

好きで一緒になった家内なんです。でも結婚してみると、何か異和感があるんですね。えらい女と結婚したと思いましたが、所詮は自分の蒔いた種、どうしようもないんです。そんな家内への不満が、ついつい、つまらぬ女に通ったりする結果になったのです。金はかかるし、余り未練もないんですが、帰って女房と顔つき合わせていても面白くありませんから、ついつい外泊するというような悪循環をくり返しているんですね」

私の彼の言葉の底から、冷たい、どうにもやりきれない夫婦生活の不和をジカに嗅ぎとった思いであった。夫も妻もやり切れないのである。そのくせ、離婚も出来ず、ずるずるべったりに惰性のような毎日の繰り返し——この不和の根源を探ってみれば、罪はあきらかに絹子夫人の方にあるようであった。結婚前に、はしなくも知ったSMのプレイ。それがしこりのように、心の底にオリとなって、夫のノーマルな愛情に、陰微な翳を落としていつまでも尾を曳いているようであった。

彼にSM気はないようであった。しかし何とか、その中から幾分でも抽出して、プレイによって、愛情の復活を求めなければ、この主婦にとって解決の道は凡そ程遠いように思

われるのであった。はしなくも妻は、それを秘かに熱望しているのである。憎悪を伴わぬ愛情のSMプレイについて、私はどうしても彼を口説き落とさねばならない、責任のようなものを感じつつあった。この際、言葉に衣をきせず、ズバリと核心をついた方がいいように私には思えた。

「もうお分かりと思いますが、実をいうと、私は絹子さんの兄さんと友達でもなんでもありません。正直いって、数日前までは、絹子さん自身すら知らなかったのですからね。他人の私が、貴方がた御夫婦の生活に嘴を入れるのは潜越だと思うのですが、絹子さんの真剣なたのみに、つい負けて、とうとう引き受けてしまったのです」

「真剣な、たのみといえますと？」

言葉を裏書きするように、彼の瞳はキラリと真剣に光った。

「あなたの愛人と別れてくれなんてことはいません。それは、私の分野ではないからです。もう既にお気付の通り、絹子さんは、奇クを読まれて、自分の願望を読書によってはかせていますが、心の奥底では相当強く、被虐の願望を抱いておられるのです。しかも、あなたに対して……」

「被虐の願望といえますか？」

意味が理解出来ないのか、彼はオウム返しに訊ねてきた。

「つまり、愛情を伴った上で、さまざまに夫であるあなたに虐められたいのです」

「分からない」

思いがけぬ言葉をきくといった風に、彼は呟いた。

「分からないでしょうね、ノーマルなあなたには。でも、そのことで私は依頼をうけて、こうして今、塚までやってきて、あなたに会っているですよ。これは本能です。先天的なものか、後天的なものか、絹子さんの場合そこまでは分かりませんが、はっきりいって奥さんはノーマルな単調なセックスに飽き足らないのです。私はむづかしく考えなくてもいいと思う。セックスの前戯でいいのです。その前戯に、そうした相手を虐めるというプレイをとり入れてみては如何かということですね。それによって、違和感のあった夫婦のセックスがうまくゆけば、それが例え夫であるあなたの望まぬ行為であっても、それによって奥さんが快楽を覚えるのであれば、幾分は奉仕のつもりで行なってみてもいいんじゃないかと思うのです。それがセックスをエンジ

ョイするならば、この際、絹子さんの希望を入れて試してみてもいいじゃないですか」

「はっきりいって、あなたの仰有る意味が分からないんです。しかし妻は実際にそうした行為を望んでいるのでしょうか」

「それを伝えるのが私の役目なんです」

「虐められて喜ぶ——私には到底、考えられません、例のあの本には、そうしたことが書いてありましたね。架空のあり得ないこととしか思えませんでしたが、実際にそうしたことがあるのです。しかも、私の家内が、そんな性向であるとは、結婚以来八年間、想像もつきませんでした」

佐倉昭二は半ばあきれ、半ば驚いた顔で、放心状態のようになっていた。農漁村に住む単純細胞の、垂直思考的なものの考えしか出来ぬ彼にとっては、SMのプレイなど、凡そ小説か想像だけの、縁なき衆生の出来事に違いなかったのであった。しかし私は、彼のそうした単純思考を一概には笑えなかった。事実、先日イレブンPMに素顔で出演したため、近所の人々や、親戚、又、同好者でない友人などが、かなりこの番組をみていて、それらの人々が一緒にいう言葉は、（何か専門めいていて、さっぱり意味が分からず、むつ

かしいことばかり喋っているの面白くなかった）という一致した私への批判であったのである。ということは、まだまだ世間一般の通念からすれば、SM思考は僅少であるということへの裏書きでもあった。

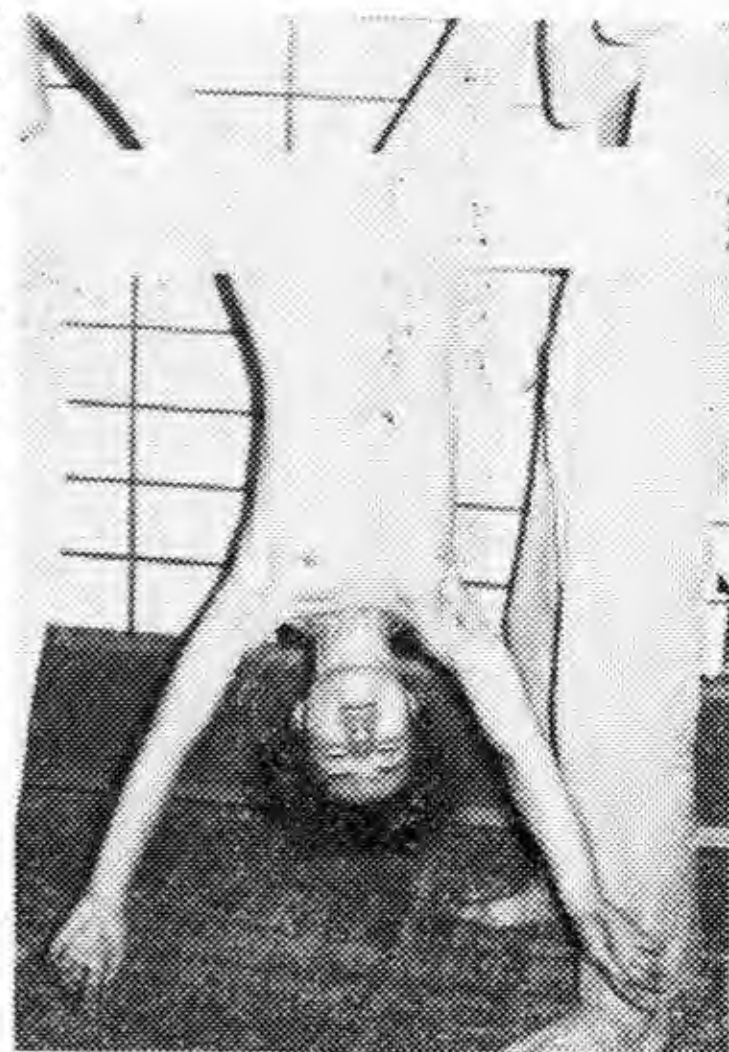
「倦怠期に於ける夫婦プレイは、愛情復活の最短コースである」という私の持論は、未だ一般概念には通用しないことを、私はテレビ出演によって、いやという程、思い知らされたのも又、事実である。

佐倉昭二、絹子夫婦の、愛情にヒビの入った二人にとって、今、プレイを行なうことは私の持論を立証する、一つのテストケースでもあったのである。

「奥さんが真実そうした行為を望んでいるのです。一度試みて、若しダメなら元々でしょう。今更、冷え切った貴方が夫婦に、こうしたプレイを奨めても、あなた自身、そんな気になれないのは当然でしょう。しかし欺されたと思って、やってみては如何です」

いつしか私の口調は熱を帯びていて、他人事に関して、私自身でも意外に思う程、熱心であった。

「やってみてもいいんです。しかし私には、正直いって、どうしていいのかわからないの



です。虐めるといったって、第一、愛情をこめて虐めるなんて、心と行為が、まるっきり逆じゃありませんか」
ノーマルな人間の突き当たる、当然な困惑であった。

「逆も又、真なりですよ」

「じゃあ、具体的にいって、どうすればいいんです」

「縛って御覧なさい」

「急に云われたって、そんなこと、照れ臭くって出来やしません」

離れ離れになった二人の心の在り方が違うのであった。彼の言葉も無理もなかった。い

かりはね。夫婦のプレイなんてデリケートな行為ですからね」

「いいじゃないですか、絹子がそこまで貴方に相談にいったのですから。ことのついでにお願いしますよ」

「弱ったな」

「弱っているのは私の方ですよ。どうせ見知らぬあなたに、私達夫婦の極秘をすべて曝け出してしまったのです。絹子がそれを求めているのならば、その道のベテランのあなたがひとつ指導して下さい」

まさかこうなろうとは予測もしていなかっただけに、私は契めておきながら、いささか

きなり愛情をこめて縛るという行為自体が、佐倉昭二にとっては、余りにも唐突すぎて、それこそ想像もつかなかったに違いない。

「愛情の問題が先決でしょうね。でも奥さんはそれを秘かに待ち望んでいるんだがなあ」

「教えて下さいよ、どうすればいいか……」

「教えるといってもこれば

うろたえざるを得なかった。そのくせ内心はあの細身の端麗な顔に陰の走った、S願望の絹子夫人を緊縛出来るチャンス到来に、心は急にソワソワし出してきたのである。こうした場合、あっさりと決断しないと、状況は又どうして急変するとも限らなかった。ましてや、佐倉昭二の酒気が、こうした大胆な発言をよんだとも考えられるのであった。正気にかえった時、彼はその要請に後悔するかも知れないとしても、今や成行で、彼はかなり本気でそれを望んでいることは確かであった。

「じゃあ、やってみましょう。しかし絹子さんがどういいますかね」

「勿論、本人が頼みにいったくらいですから嫌という苦もないでしょう。むしろ喜ぶんじゃないですか」

「妙なことになりましたね」

「最初から、すべてが妙なこと許りですよ。

しかし、何だか急に生甲斐をおぼえてきました。こんな世界もあることを知ったのも、私の人生にとって、大きな収穫かも知れませんよ」

私達は、そこで具体的な打合せに入った。

プレイの場所は、佐倉昭二氏宅ということにきまり、絹子夫人の生理日以外ならいつでも

いいということになった。家族は同居中の妹夫婦と祖母の五人だそうだが、その日には、口実をつくって外出させてもよいし、日頃、滅多に使わぬ古い離れ家があるから、そこなら誰も入ってこないということであった。話すうち、佐倉氏の心は急速に、興奮を伴った期待に、胸が弾んでゆくようであった。第三者の私に妻を縛らせ、それを傍らから観賞するという、思いもかけぬ刺激的な光景が、彼の単調な細胞を、俄かに浪立たせたようである。

尚も彼は私を引き止めたが、固辞して料亭を出た。三時間近くも喋っていたのか、すっかり暮れ果てた駅頭のネオンが、眩いばかりに、私の眼を射るのであった。早々と、あわてもののジングルベルが、どこからか風に流れて聞こえてくる街並を横切って、私は堺駅へと急いでいた。

廃屋で繰り拡げる妖しいプレイに、
絹子は乱れに乱れ、佐倉昭二の欲
情は激しく燃え上る狂った一頁

海が近い。寒風に追われた波濤が、白く泡を噛んで咆哮している。

いずれ昔は、守護大名の荘園の名残りであろうか、Tの荘という古めかしい名称で呼ばれるこの漁村を、私と佐倉昭二は肩を並べて歩いていた。

なまぐさい乾魚の臭いが、風に乗って私の鼻孔をくすぐってゆく。

妹の夫は和歌山へ勤務し、妹は大阪へ買物で外出している筈であった。風邪気味の祖母が母屋でふせっているので、古い廃屋に近い半ば風雨で倒壊したような離れ家が、今日のプレイの場所であった。

離れ家の入口の土間に、農機具や、漁網が雑然と散乱している。煤ばけてガランとした厨房の奥に縦棧の黒い戸襖がはまっていた。高い上りかまちを上って、タタミを踏むと、潮風を幾星霜吸っているのか、ブヨブヨとして気味が悪い。

「ひどい部屋でしょう。いずれここ一年ぐらいの間に壊しますので放ったままなんです。私はすぐにでも壊して建て直したいのですが迷信深い祖母がうるさくてね。日どりや年廻りなど、いろいろ文句をつけますので、祖母の気の済むまでおいてあるんですよ」

弁解めいた口調で、イソイソと佐倉昭二氏は、私を案内して、襖戸を開いた。石油スト

ーブの、不燃焼の臭気と熱気が同時に私の鼻をついた。

一時代前の、真黒にほこりのしみついた薄っぺらな電気笠に、四〇Wくらいの電球が赤黒く周囲を照らし出している。この時代に未だこうした妖気迫る部屋が存在していたのかと、奇異の想いで私は辺りを見廻していた。タンスも水屋も明治時代の骨董物のように古ぼけて、黒塗りが剥げて部屋の隅々を占めていた。ほとんどケバのむしりとられたような赤茶けたタタミは、もう何十年、敷かれてあるのだろうか。

すべてのお膳立が、余りにも妖異にみち、それがプレイの場所に、むしろふさわしかった。デンと片隅に持ち込まれて据えられた新しい石油ストーブだけが、この部屋の唯一の新品であった。

流石にプレイするこの部屋だけは、タタミに、ほこりはなかった。そのために慌てて掃除したらしく、余分なものも転がってはいない。座布団すらない部屋の中央に、うすら寒い気持で、あぐらを組んで坐る。

佐倉昭二と出会ってから、半月近く音沙汰もないままに、やはり、いざとなれば気後れしたのかと、私の独り角力を笑止がっていた

ら、十二月の声をきいた昨日、突然、彼より電話がかかって来て、唐突的に明日はいかがかとの早急な連絡であった。

彼の仕事や、絹子夫人の体のこともあって一日おくれになっていたという言いわけであった。今更いやともいいかねて、慌しかったが、何とか仕事のメドをつけて、南海電車に小一時間近くも揺られてきたのであった。

「縄の方は仰有る通り準備しておきました。これでいいでしょうか」

古ぼけたタンスの抽出を引っ張り、数条の白縄をとり出してくる。

「ああ、それで結構です。折角のいい機会だから、カメラも持参してきたのですが、電源の挿し込みはないのですね」

「何しろ古いものでこの電灯だけなんです。ここからじゃいけませんか」

「いいですよ。じゃあストロボに電池を使いますから……フオトは奥さんのお望みなんです、本にのせてもいいって仰有ってましたよ」

「えッ、家内がですか？ 困りますねえ。やはり書かれる気なんですね。あんまり本当のこと書かんで下さいよ。狭い村ですから、誰か読んだら、すぐばれちゃいますから」



「心得ています。奥さんは？」

「いざとなると羞かしがってるんですよ。今呼んできますから」

佐倉昭二はその点、積極的であった。今となつては未知の興趣に、心を疼かせているのかも知れなかった。

「奥さん、どう仰有ってました？」

「それが、確かに奇妙なんです。私が、あなたに縛って貰うように依頼したという、それだけでスゴク反応がありましたね。妻に語ってから、三度ばかり交渉があったのですが、非常にハッスルするんです。こうした行

為を想像しただけでも、ああも違うものかと内心、驚いたり、歎んだり、その歎びの期間を一寸でも長びかせようとして、つい返事がおそくなつたようなわけです。やるやるといって、いつまでも妻の心をつっておくわけに行かないりました、遂に清水の舞台から飛び降りるつもりでお電話したのですが、本当は妻の突き上げが強かったのです」

微妙な女心の変化であった。未だ現実のプレイもせぬ間に、既に彼女の心は濡れそぼり被虐の期待に胸疼かせて、プレイの想像によって早くも変貌を遂げつつあったのである。夫がプレイの一件を閨の睦言に口にする事によって、妻は想像と幻想の中に、逸早く快虐を覚えて溺れていたのであった。

これは私も予期せぬ成果であった。しかし私以上に佐倉昭二は喜んでいい現象を、まざまざと自分の体で確かめている筈であった。それだけに今、イソイソとする彼の心境も、歴々と手にとるように分かるのである。

妻を呼びに、母屋へ去ろうとする彼を私は呼び止めた。

「いいですか。奥さんをここへ連れてくるなり、あなたは、裸になるように命令するんですよ。わざと、きつい口調でね。それで羞かしがって洩ったら、荒々しく無理矢理、脱がしまえばいい。それが被虐に通じるですよ」

「へえ、そんなものでしょうか。兎も角、仰有る通りにやりますよ」

「プレイですからね。分かっていますね」
念を押すように云って、わざとキサクに彼の肩をポンと叩く。

待っている時間は長く感じられた。十分近い待ち時間であったが、独りポツネンと廃屋の古ダミに坐っている私にとっては、半時間以上にも感じられるのであった。

土間に足音が縫れて響く。さっと私の心に緊張が走る。

重い戸襖が開かれ、絹子の体を押し出すようにして二人が入ってくる。小柄な彼女はうなだれて、消えもいりたげな、しおらしい風情であった。ヒステリックな風貌は影をひそめ、アバンチュールの期待に、羞恥を全身に漂わせて、たたずんでいた。常着の着物の上

に羽織った綿入れのハンテンのチャンチャンコが、絹子をいかにも漁村の主婦めいた姿に変えていた。祖母に怪しまれぬため、常着のままで私を迎えたことに、彼女は恥じているようにも思えるのであった。

私はチラッと佐倉昭二に眼くばせする。その眼くばせに、彼は片眼をつむって応える。彼の心の緊張さが、つむった片眼に窺えて、フツと軽い失笑が私の顔をよぎった。今、彼はこの一瞬に、或いは愛情の復活を真剣に賭けているのかも知れなかった。もともと好きで一緒になった二人にとって、これは将来の夫婦の生活を変えるかも知れないという、厳肅なる一瞬でもあった。この一瞬が絹子にとっても、他の女に心を走らせていた彼を、再び自分の掌中に納め得る機会になるかも知れぬのであった。私のプレイ経験を通じてもこのような真剣さを秘めたプレイ開始は珍しいことであった。

「絹子。さあ、脱ぐんだ。辻村さんに、お前の素裸の浅ましい姿をみてもらえッ」

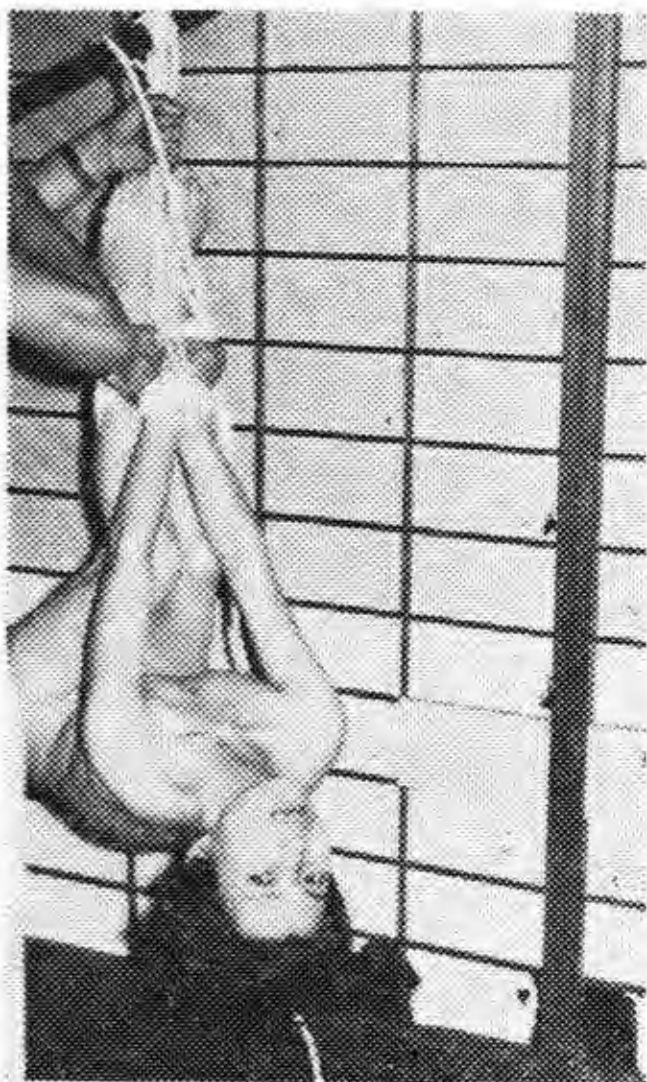
予想以上にいいセリフが、夫の口から吐き出された。いやいやというように妻は小柄な体を揺る。当然、起こる予定の行動である。「どうしても、いやかッ」

ハタと揺れた体が停止する。颯々と夫の手がチャンチャンコにかかるという間もなく引き剥がしていた。ついで帯に手がかかり、わざと悶える夫人の体から一枚一枚が剥がされていった。絹子夫人はチャンとそのつもりで心得ていた。長襦袢を、さっと剥ぎ終わった途端、全裸が前触れもなく現われたからであった。下着をつけていないところに、彼女のプレイに対する準備の姿が、まざまざとみうけられたのである。

わざと荒々しく、夫はドンと妻の体を押すと、よたよたよろめいて、絹子夫人は赤茶けたタタミの上へ、白い体を惜しげもなく投げ出したのであった。

私の想像通り彼女の裸身は貧弱であった。やせぎすの、やや骨ばった体つきに、ムチムチした若い女の魅力といったものは皆無であった。月亭可朝の歌笑曲の、「大きいのがボインなら、小ちゃいのはコインやで」というコインのオッパイが、斜めに打ち伏す彼女の胸許から、かすかに覗いていた。

反面、この細身の女体特有の、被虐タイプの裸身から、メラメラと妖しい願望のほむらが立ちこめているのを、私はまざまざと、この眼でみた。



既に夫は、かなり激しい息づかいで、ジツトリとひたひたに汗を浮かべながら、妻の裸身を強烈なまなざしで凝視していたのである。妻の裸身を、見知らぬ第三者である私の眼前に曝したことによって、彼は既に或る種の昂奮を覚えているようであった。

被虐の縄目を待って、じつとうずくまる女体に、私の縄を持つ手が近づくと、いきなり両手を背後に握りあげて、高手小手に縛って体を起こすと、胸に縄をかける。一分とかかからない早業であった。夫はポカンと口を開いて、毒気にあてられたような顔付で、私の縄捌きをみつめていた。閉じて伸ばした両脚をわざと足先でぐいと捻げさせると、素早くカ

メラをとり上げ、パツとめくらむ閃光を走らせる。

呆然と佇む夫に近寄ると「足を開かせたまま、ぐいぐい足で上半身を屈曲させなさいよ」

とアドバイスする。

いわれるままに彼は、ズボン下をたくし上げると、絹子の背後に廻って、かなりの力を足にこめて、じわ

じわと踏みつけていった。

「あッ、あッ、やめてエ」

息苦しい声で、悦虐の呻きと共に唇から洩れる。夫の足は、尚も容赦なく、絹子の髪が、タタミすれすれにつく程までに弯曲させていった。

「どうだ、これでもか——」

思わず勢い込んで、調子にのり始めた夫の声につられて、

「ああ、もう……あなたカンニンして」

絹子は圧迫されて、さも苦しげに叫んだ。それは被虐の願望と、現実の違いを如実に示す叫び声であった。

ハッとしたように、佐倉昭二は押えつけて

いた足を外すと、そっと私の顔色を窺った。いいんだ、というようにうなずいて、私は自分の頭に手をやり、髪を握り素振りをする。頬を紅潮させた夫は、いきなり絹子の髪を握んで、乱暴に上体をぐいと大きくそらせた。矢張り予期していたように、彼女の表情に、悦虐の陶酔のいろが、ありありと流れ、軽く閉じた瞳に淫靡なかげらいが漂って、SMのプレイは今始まった許りだというのに、すっかり酔い痴れたかのように、微かな喜悅の喘ぎを洩らしていたのであった。

夫は開かれた妻の片脚を握ると、更に一杯に開ききって、髪を握んだ手を激しくゆさぶり始めた。その行為は、快楽に呻く妻のこの変貌が、彼に激しい感銘を与えた自然のなりゆきの結果であった。

揺さぶられ続けて、彼女の唇から、今ももう恥も外聞もなく甘い呻きが間断なく洩れ、それが夫の心を否応なくエキサイトさせてゆくかのようであった。いきなり展開したこの意外なポーズに、めくるめく思いで、私のカメラは、しきりに閃光をきらめかせていた。妻の陶酔は、いやまして、夫を求める痴語が微かに夫人の唇から洩れ始めた。それは、ノーマルに生きてきた彼にとっては、正にセッ

クスの革命にも比すべき驚異の体験であったに違いなかった。この荒廃した仄ぐらい密室で、歓喜を顔面にみなぎらせて、きれぎれに愛を求める妻の口説が、閨の喜悦につながる刹那と同一のものであることを、夫婦のみが知る感覚で鋭敏に嗅ぎとったらしい夫は、不思議な現象を眼前に見る思いで、悦楽にむせぶ妻の肢態を、にらみ据えるように凝視していたのであった。私が彼に始めて出会った日に、あっと驚くような彼女の願望を伝えたのが、今まぎれもない事実となって、まざまざと展開されているのである。佐倉昭二は、やっと妻の体から両手を離すと私の傍らへ近づき、ひたいの汗を手で拭いながら、

「分かりました。あなたの仰有る通りでしたよ。妻のあの表情の微妙な変化が、何よりの証拠です。確かに喜んでおります。どうしてだか分かりません。でも、事実は事実です」

「やって御覧なさい、あなたの手で——」

「縛るのをですか——」

うなずくと、行為に自信を持ったのか彼は「縛り方なんてどうでもいいでしょうね」「勿論、そんなルールはありませんからお好きにやうに——私が邪魔になりませんか?」「正直いって、二人だけでやってみたくなり

ました。でも今日は、いいです」

夫婦の間に介入する私の存在は、いつしか夫にとって、やや目触りになりつつあったことは確かであった。それだけ彼の心がエキサイトし始めた証拠でもあったが、今更ここであっさり引き上げる手もあるまいと、私は傍観者の立場をとることに心をきめる。

私の縛った簡単な縄を、佐倉昭二は手早く解いていった。解かれても余韻をたのしむかのように、彼女は体を開いたまま、そのままの姿勢を崩さなかった。

妻の体を抱きかかえるようにして、彼はタンスの前に彼女を立たせた。至極不器用な手付で、片手をタンスのカンに結びつけると、その縄を伸ばして、もう一方の手首を横のタンスのカンにぐるぐる巻いてとめ、しばらく思索していたが、長い縄のやり場に困ったかのように、片腿にかけてぐっと吊り上げ、二の腕で結んでとどめるのであった。

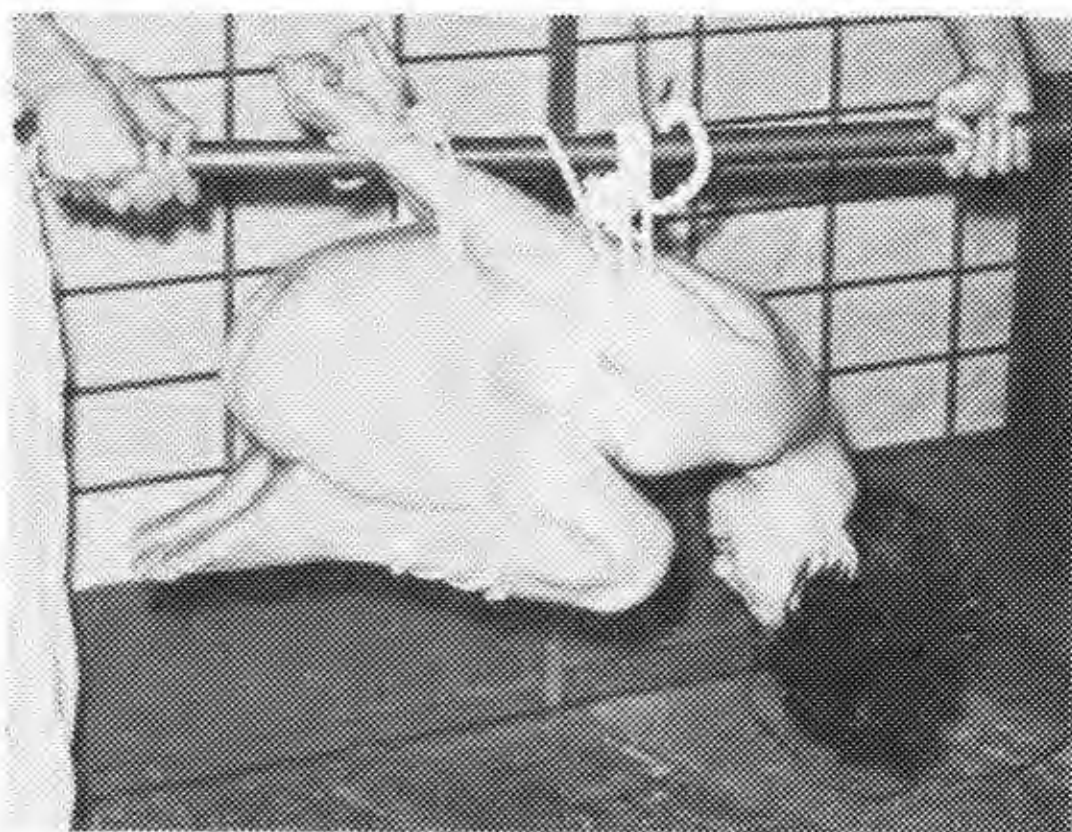
タンスに片脚を吊られて、ハリツケになった絹子夫人の上半体が、片脚だけにかかった重心で傾いて、爪先が滑って、苦しいポーズになる。

佐倉昭二は土間から、黒光りした六尺棒を持ち出してくると、その棒先でグリグリと妻

のコインの先をねじり廻し出したのである。絹子夫人の顔に、途端に淫蕩めいた悦楽が泛かび上り、この棒責めを、さも喜ぶかのように、口をダラリと開いて荒く激しい息遣いを立てるのであった。

棒の先端が、彼女の腋下にぐっと押し込まれてねじられていった。奇妙な動物めいた喜悅の声が、けたたましく洩れて、彼女はしきりに上体をくねらせる。

もう佐倉昭二は、すっかり夢中であつた。ノーマルの筈の彼が、知り立てのホヤホヤのこのSMプレイに熱中するさまは、さながら子供に珍奇な玩具を与えた時に似ていた。それだけに、未知の彼が演ずるプレイの行為は原始的であつても、私には新鮮で反って眼新しく映るのであった。カメラを構いて夫人に近づくと、淫暴的な気持で、ダラリと口を開いて喘ぐ彼女に猿轡の日本手拭をかませる。彼の棒は次第に下降していた。或いはそれが最終目的であるかのように、執拗に攻撃を繰り返し、魂切るような絶叫の喜悅の声をきいても、いつかな彼の手は休まず、ひたすらに攻めつづけていたのであった。始めて知ったプレイの愉しさに、彼はすっかり耽溺しきっているようであつた。



佐倉昭二の義兄弟の登場で、プレイの様相は一変して、妖しく入り乱れること

裸身を擦りよせて、私を挑発しようとする絹子に、辟易しながらも、内心は胸の疼くお

もいで、女の体を燃え立たせる攻撃を、私は続けていた。

何を思ったのか、ちょっと、といって佐倉昭二は、私と全裸の絹子をその場に放ったまま姿を消して、もう半時間にもなるのに戻ってこない。プレイの最中にこれは又、一体どうしたというのである。彼の唐突な行動を審かしく思いながら、私はすぐ引返してくるものと軽く考えて煙草に火をつけて一服して彼の戻るのを待っていた。

棒責めによって、極致を経過した絹子は、私の傍らににじりよって、淫らな眼付で、私の煙草をとり上げると二、三度軽く吸ってポイと火鉢に投げ込み、私の首に両手をかけてきたのである。佐倉昭二は、こうした痴態を予想して、或いはどこからか、そっと覗いているのではなからうか——。そんな不安に襲われて、じわりと彼女の両手を外すと、女は更に強く、体ごと投げかけて私に縋りついてくるのであった。異様な雰囲気、このおどろおどろした陰鬱な古室に立ちこめて、さながら江戸川乱歩めいた、妖しい陰獣の蠢きが、鬼気迫る思いで、私の心に重苦しくのしかかってくる

のである。

いつ戻るかも知れない夫を待つ時間に、その妻は吐く息も切なげに、私を求めて猥らに体を崩そうとしていた。それはもう多情多淫としかいいようのない、怖ろしい感覚の推移である。彼女は私の私に一体、何を求めようとしているのであろうか——。若しそれが刹那の快楽につながるものであるとすれば、余りにも絹子夫人の欲望は大胆であり、魔粧めいていた。彼女は一言も発せず、行動だけが生き生きといきて、避けようとのけぞる私の顔に、蔽いかぶさるように、唇を求めて女の顔が近づく。もう遮二無二、くちづけを果たさずにはおかぬという女の一念が凝り固まって、小さい体がのしかかってくる。

女の口腔は生ぐさく、吐く息の匂いに情炎のはむらが充満していた。

口を塞がれて、強引な、くちづけ——。女の指先が私の背中をムズムズさせて、まさぐってくる。長い長い間、二人の顔が重なっていた。積年持ちつづけた被虐の願望が、今ここに果たされた時、女は一気に執念を燃焼させて、果てしもなく、ただれた悦虐の淵に、とことんまで耽溺しようとするかのようであった。

ガラリと戸襖が開く。サツと体を離したが遅かった。明らかに戸外の光を背に受けた黒い影は、私達の姿を眼にしたはずであった。佐倉昭二の背後から、ノッソリと、もう一つの影が、表戸をしめて這入りこんでくるのが私の眼にうつった。

誰だろう？ この秘密のプレイに侵入して来た男は——。どぎまぎして、いずまいを直したのは私だけで、絹子夫人は不貞腐れたように裸身の背を向けていた。

「いやどうも、こいつを呼んでくるのに時間をとられましたね。安さんって云うんですが兄弟以上に親しい奴で、家内も知ってるはずなんです。どうせ、あなたもいらっしゃることだし、こうなりゃ、男二人でも三人でも同じことと、こいつも好きな方ですので、仲間に入れてやろうと思ひましてね」

ノーマルと思っていたのは、私の眼違いだったのだろうか。佐倉昭二は我が妻の被虐にのたうつ姿を、更にもう一人の男に見せつけようとしていたのである。これは一体、どう解釈すればいいのだろう。気拙い思いで私は頭を下げた。一向に照れもせず、安さんという男は、のっそりとその場に坐って、背を向けた絹子の裸身をジロジロとためるように見

廻すと、煙草をとり出して火をつけた。年令は彼と似たところであった。微かに酒気が漂ってくる。凝々と観察すると、二人共、一杯引っ掛けてきたようであった。私と妻の抱擁を気に止める風もなく、佐倉昭二はチョットと私を手招いて戸襖の外へ出ていった。後について行くと、待っていた彼は声を潜めて、

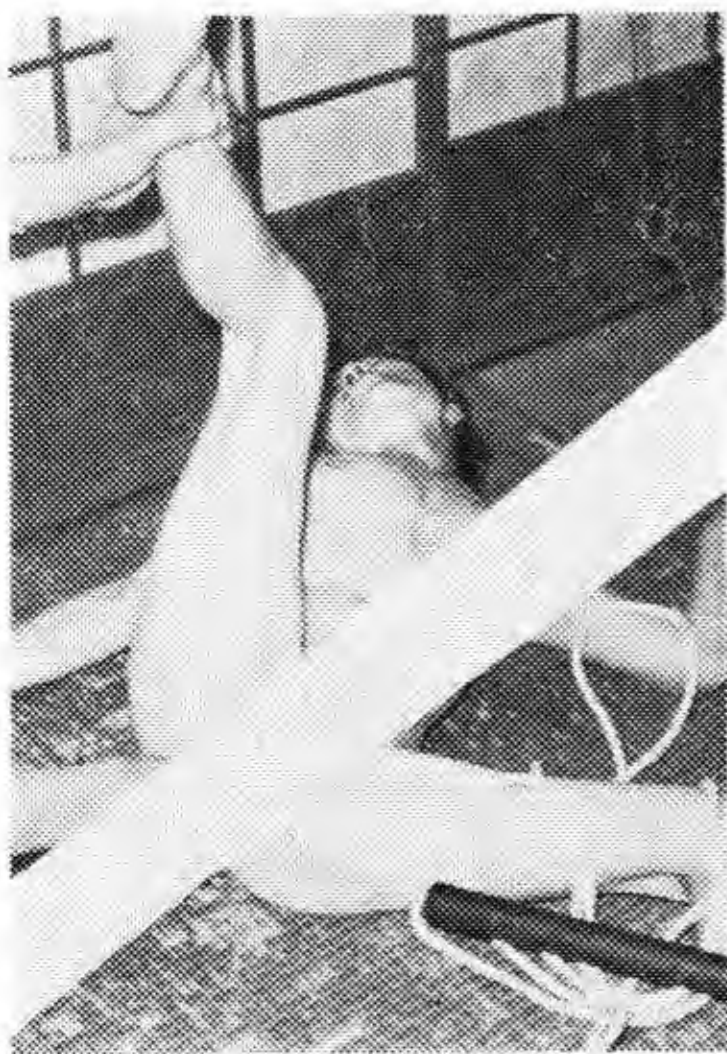
「あいつには借りがあるんですよ。実はネ、あいつの妹を囲っているんです。それに何しろ、あいつの女房も好きな奴でネ。安さんが海へ出てる間に女房とも関係出来ちゃって、それが一緒に寝ているところをみつけれられてから、どうも頭が上らなくなって、前々から

やいやいいわれていたもので、恰度いい機会だと思っと呼んだのですが、ことのついでだから、よろしく頼みますよ」

私は啞然とした。夫といい、妻といい、この乱脈ぶりはどうだろう。妻は私にモーショをかけて平然としているし、夫は安さんという男の、女房と妹の二人と結ばれて、しかも間男の彼が、相手の亭主をヌケヌケと呼んできて、我が妻の痴態をみせようというのだから、これは正に常識の埒外であった。SMのプレイというアブノーマルな行為を追求しても、こうした乱れた男女関係は、私にとっ

ては一寸、想像も出来ないことであった。夜這いとか間男とか、そういったものが、案外暗黙裡に容認されているのであろうか——。

古室に戻ると、安さんが絹子夫人の背後から肩に手をかけていた。流石に羞恥に身を硬ばらせて彼女は身をかがめていたが、彼を拒否する気配のないのが、私にとっては理解に苦しむ女の気持である。かけていた



手を引くと、安さんはニヤリと笑って私達をみた。海灼けした赤銅色の顔がテカテカ光っている。

この妖気霧々たる古室といい、登場した男達といい、すべてが一世紀前の出来事のような錯覚にとらわれる現実であった。

佐倉昭二が、安さんの耳許で何か囁くと、彼はジロリと私をみて、

「フーン、じゃあ何かい、今日は絹子はんをうんと虐めてもいいというんかい。そらオモロイがな。やりまひよ、やりまひよ」

と、ケタケタと笑うのであった。

酔いの廻った二人は、私の存在を無視していきなり絹子の両足首を左右から掴むと、ヒョイと軽々と逆さに吊り下げ、股裂き刑のようになり、ぐっとひっぱりながら、ぶらぶら宙に振りゆさぶるのであった。ゴクリと大きな音を立てて、安さんは唾をのみ込むと、揺れる絹子に顔を近々と寄せて、女臭をかぐように鼻をクンクンいわせ、さも愉しげに、ヒョイヒョイと声をかけてゆさぶりつづけていた。パツと光るストロボの光に、彼は一瞬ビクリとして私をにらんだが、それがカメラの光と分かるとニヤリとした。どうにも住む世界の違う人間のようなのである。やめてーとも

叫ばず、あッ、あッと噎れた声を立てながらも、彼女は男達のなすがままに任せていた。逆立って揺れる髪につれて、ガクンガクンと顎が突き出し、絶え間なく悲鳴に似た絶叫が流れた。

海の男はSMのプレイを無視した残酷さを持ち合わせているのであろうか。プレイの意味は分からなくても、虐めるといふ行為が、男達を夢中にさせていたようである。全裸の女を思うままに翻る喜びが、安さんの心を有頂天にさせるのか、彼は夫、昭二の思惑もものかわ、

「おい、手を離すぞう」

と叫ぶと、ぼいと軽い荷物でも投げ出すように、彼女の体を、どさりとタタミへ、はずみをつけて放り出した。

「安さんよう、今日はくくつてもええのやでうちの女房を」という昭二に、

「そうかい。面白い、吊り下げてやろうや」

彼はヒョイと縄をとり上げると、絹子の両手両脚を一緒にして、あっさり縛り上げ、転がっている六尺棒に結びつけて、

「昭やん、一方をかつげや」

という、肩を入れて、昭二と二人、猪吊りに担いで、雨戸に面した破れ障子の上の、

鴨居の細長い障子をガタガタと片手で開いてヒョイと六尺棒をのつけたのであった。

片棒は昭二が担いだままである。

「ほうれ、どうじゃ。ほーれ、ほれ」

奇妙な掛声をかけて、安さんは絹子の髪を掴むと、吊り下った裸の体を大きく押した。ブラリブラリと前後に揺れて、キシキシと縄が六尺棒できしみ、絹子は縛られた痛さに、ヒイヒイと喚いた。昭二が真剣な眼で、被虐に堪える絹子の苦悶の表情をじっと見下ろしている。もう私の存在は完全に無視され、今は安さんが、さながら主人公のように振舞っていた。昭二にとっては、私という始めての性格の分からぬ第三者と二人でいるよりも、気心も知れた、奇妙な仲の安さんが同座すること、むしろ安堵感すら抱いているように先刻にくらべて、いきいきとした顔付になって、我が女房の、この破廉恥な姿を複雑な表情で見守っているものであった。ヘンな飛入りのお蔭で、私という人間は、すっかり浮き上がった恰好である。今更帰りもならず、もうこうなりや、トコトンまで傍観者でいようと腹を据えて、私は男共二人の行動を黙ってみつめていた。

やがて昭二の肩が痛くなったらしい。

「もう降ろそうや」

という声で、絹子の体がタタミにつく。男三人の眼前で、散々に弄ばれる、被虐の露出が反って、絹子の心を悦虐へ、悦虐へと押しやっているようであった。

「どうだ、絹子——痛かったか？」

夫は流石に気になったのか、声をかける。

「ええ、少し……でもいいわ、好きなようにして」

「フーン、えらいわ、絹子はん。よっしゃ、やったるで——」

安さんは、いよいよ張り切り出した。彼の縄捌きは意外に手際がよい。素早く解いて、息づく間もなく乙型にぐいぐいと縛り上げ、六尺棒を縛った両手首の下から差し通して、背の縄をつらぬいた。

「よっしゃ、担いでや。ええな」

大の男二人によって、絹子の体は、いとも軽々と持ち上る。これは激しい苦痛を伴ったのか、絹子はヒイヒイと呻き声を上げた。両手首の縄に棒が通って、それで躰全体を持ち上げているのだから、苦しいのは当然であった。今や虐めることに愉しみを見出した男共は一向にその苦痛など構ってはいなかった。狭い六帖の古室をヨイショ、ヨイショと担ぎ

廻って二周したが、

「どうや、昭やん。こうして担いで表へ出ようか。みんなみたら吃驚りしよるで」

と、安さんはとんでもない事を提案した。

「そりゃ、殺生や。何ぼ何でも、そんなことしたら、絹子これから外、歩かれへんがな」

「ほんなら庭を横切って、おも家まで担いでいこか。おばん寝てるさかい、恰度ええ。誰



も気いつけへんで」

この男、よくよく担ぎ出したがっていた。

昭二が渋るので、どうやらこの計画はあきらめたものの、彼は土間の、曳網をかけてある黒い梁に目をつけ、太い綱をかけて、二本の輪をつくり、

「よっしゃ、あれに吊り下げとこ。ええ眺めやで」

とヌケヌケというのであった。

地上より二米はあろうか。二つの輪縄に六尺棒をかけ渡され、絹子は無慚な姿で吊り下げられた。

「こら、ええ。こら、ええわ。どや昭やん、酒もってこんか。このええ眺めみながら一杯やろう。虐められるのが好きな絹子はん、涙流して喜んでるで」

いやはや何とも凄まじいことになってきたものである。私が緊縛のプレイをしていたら恐らくこんな思い切ったことは出来なかったであろう。

吊り下げられた縄のしまりと、土間の冷氣で裸身が、ひしひしと痛むのか、絹子は

「カンニン——降ろして。あッ、痛いよう」と泣き叫んでいた。

夫が酒瓶をさげて戻ってくると吊り下った

絹子の体の下をかい潜って土間に上った。

「もう降ろしてはどうですか。寒いでしょう」

第一——」

私は云わざるを得なかった。プレイの逸脱である。

「そうしましょう、安さん。早よ手伝えや」

案外素直に昭二は彼女を降ろすと二人して元の古室へ運び込んできてタタミに降ろす。

不器用な手付で、昭二が皮肉に深く喰い込んだ縄を、ほどいてゆく。

「一寸どけや、昭やん」

いきなり安さんは、昭二を押しのと、解かれて、仰向けにタタミに倒れた絹子の片脚をぐいともち上げ、どす黒く濁った情欲の塊を吐き出すように、夫の眼前で絹子の体をもてあそび始めたのであった。こうした約束が出来ていたのか昭二は黙って引き下ると、湯呑みに冷酒をついでグビグビのみ始めた。

「イヤッ、やめてえ。安さん、いやッ……」

拒絶の叫喚とはウラハラに、悲しい女のさがか、叫喚は次第に甘く乱れて、この猥らな妻は、夫の眼前で安さんを受けとめていた。衆目のハレンチがそこにあった。

悦虐はいつ果てるともなく続けら

れ、蒼然たる古室は鬼氣を孕んで

波乱万丈——。そして意外な事実

女は一体、何度燃えたら満足するものなのだろうか——。

安さんの貪婪な欲情が、夫の昭二にまるで復讐でもするかのように、繰り返し繰り返し続いていた。

卵の黄味だけを吸ったあとの、白味の溜った汁椀がそこにある。その傍らにひねこびた胡瓜が一本転がっている。

安さんの考えた野蛮な手段も、私が好んで使うパイプライターも、帰するところ一つに外ならなかった。

縛りなどはどうでもよかったのだろう。それが、絹子夫人に与える屈辱の手段として、一応形式的に使われているに過ぎなかった。

安さんは執拗に、これでもかこれでもかと責めつづけるのであった。

一方の足を握る昭二の血走った眼は、妻の狂乱のように快虐にのたうち、幾度となく来り、又去る激情の起伏を、驚愕と讃嘆の思いでみつめつづけていた。

こうした羞恥の極みの手段で絹子夫人の最も歓喜するプレイを行う安さんに、私はフト二人の仲が、今日始めてのものでないことを感じた。彼女と始めて出会った時、SMプレイを教えた男は、自分の体を使わず、さまざまに彼女を歓ばせたと、彼女自身告白していた事を想起し、今もこうして、彼女が安さんの存在を拒むどころか、むしろ喜々として、彼の手によって悦虐に悶える姿をみて、私は夫の知らない二人の関係を察知したのであった。安さんにスマートなSのプレーヤーめいた処はなかったが、縛ることもかなり手馴れていたし、女を歓ばすコツも心得ていた。

安さんの訪問は、或いは昭二自身の希望というよりも、閨の睦言の間に、夫人が意識的に夫に吹き込んだのではなからうかという疑問すら、私には持たれてくるのであった。だから、今の位置からして、私は初のゲストであり、主人公は安さんで、夫昭二は、唯あれよあれよと許りに、見ることなすこと啞然、愕然とする哀れなピエロの存在にすら思えてくるのであった。安さんは私や昭二を、まるで無視してしまつて、独り傍若無人に振舞っている感じであつたが、安さんの嗜虐の手を甘受する絹子夫人の妖しい女心の方が私にと

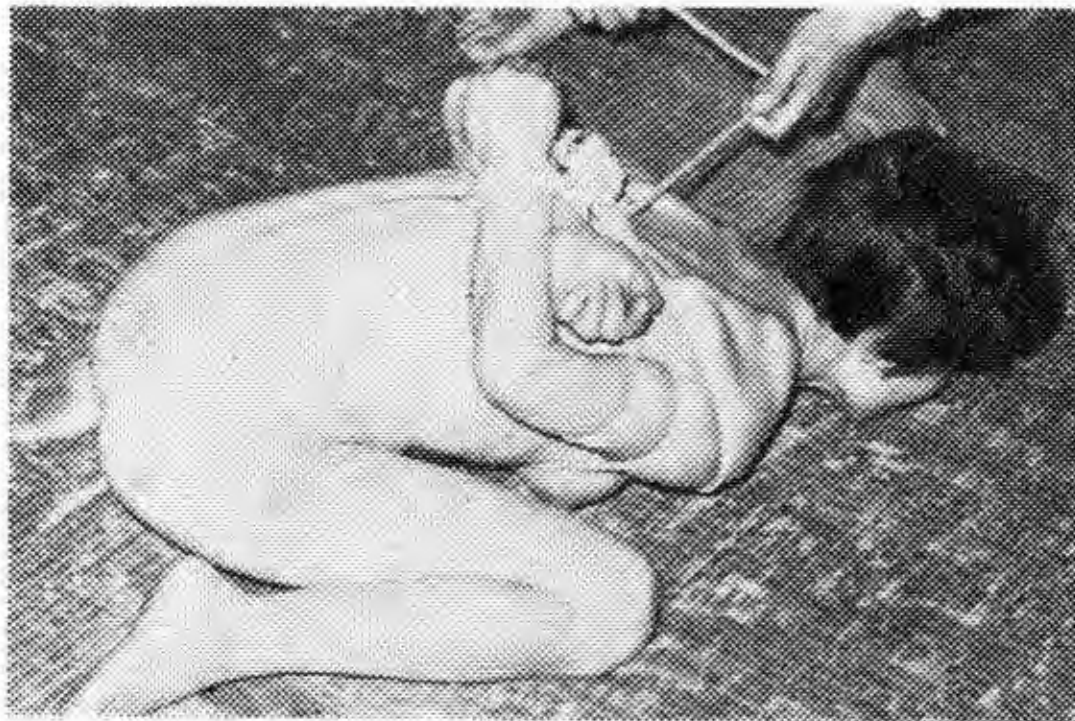
ってのは関心があつた。夫の口から言葉巧みに安さんをプレイの仲間へ呼び込んだ、彼女の魔性の心の中には、安さんの女房と妹を姦淫した、夫の昭二に対する痛烈な復讐のようにも思えたのである。とすれば、この日を契機にして、秘かに通じ合っていた絹子夫人と安さんの関係が、夫の公認のもとにしようとする、深い謀みがあつたのではなからうかという、女の策謀すら感じられるのである。昭二——絹子——安さん——彼の女房——彼の妹の、これは背徳の輪舞の五角関係を構成して、お互いが傷つき、血みどろになり、乱れ、どろどろになって、心の葛藤を演じているのかも知れない——そんな醜い争いが、渦を巻いているように思えてならないのであつた。それは、私の余りにも推理めいた想像であつたかも知れない。しかし今、彼女の悦楽のツボを心得て快虐の責めを続ける安さんの態度の中に、今日が始めてでない、なにものかが、はっきり現われていた。ここまでプレイの淵に惑溺しては、もう夫の昭二に、言葉の差し挟むすきすら、なかつたのである。

一しきりの快虐を果たし終わり、夫人の表情は桃源境を彷徨して、心を奪われた魂なき女のように、うつろに悦楽の極致に歪み果て

ていた。眼隈にありありと浮き上つた、どす黒い淫虐の陰影が、女の顔を凄惨にして、鼻翼をピクピク蠢めかせて、彼女は薄い唇をダラリと開いて、大きく喘いでいた。

「おうい、昭やん。もっと酒もってこいや」

主人格の安さんは、すっかりふてぶてしくなつて、夫に要請するのであつた。昭二は弱



々しくうなずき、言葉も返せず、のっそりと立上る。

「ついでに何か肴も、みつくるってな」

まるで命令調である。夫が戸外に消えると

「どや、絹子はん。満足したか？」

はつきり二人の間柄を裏書きする言葉が、安さんの口をついて出た。

「あたし、もうクタクタ……」

「フン、まだまだやで。そうや、ここに縛り的大先生も来てはる。えらい放つといてすみまへんなあ、ワイばかり面白いめして」

彼は、やっと私の存在に気がついて、声をかけてきた。

「大分、縛るのが手馴れてますね」

「いやいや、お恥かしい。この人から、よう本みせてもろてますのんで……。あんたはんも随分ご精が出ますなあ、次々とおなご縛りはって——」

「御存知ですか」

「ああ、知つとりますわ。ワイは縛ることだけなら、あんまり興味おまへんねん。縛つていて今みたいに、散々になぶるんやったら面白いけど。……あんたはんも近頃は太分そんな傾向になつとりますな」

「いやどうも……。お二人共プレイは大分お

やりのように見受けましたよ」

「そうかいな」

安さんはトボけてみせた。

「私の直感だけど、あなた方は今日が始めてのこうしたプレイじゃないと思うんですが」

「やっぱりコワイな、分かるんやろか」

「分かりますとも、能動と受動がピッタリ呼吸が合っています。安さんがここへ現われたのは、佐倉さんが誘ったようにいったが、私にはどうもそうは思えない。奥さんがお膳立てして、蔭で糸を曳いてるように思えるんですがネ。どう奥さん、もう白状しなさいよ」

「御免なさい、今まで隠したりして……でもわたし、辛抱出来なかったんです。辻村さんがいらっしゃるときいて、私すごく嬉しかったのです。いよいよ時節到来って感じ。私、あの人の胸の中で燃えながら、こうなれば二人も三人も一緒だからと、この人を誘うよう、一生懸命、契めたのです」

二人は顔を見合せて照れ臭そうに笑った。「ばれたらしょうないわ。この人がこんなことしてくれと頼みよるので、しょうことなしにやってるうち、段々おもしろなってきました。昭二の奴が、ワイの女房と妹をいきよったさかい、これでも未だ五分五分やない

んやけどネ。これからは大っぴらにやったらと思うてますねん」

てっきり私の推察した通りであった。夫に虐めて欲しいと願望したあの絹子が、被虐願望の誘惑に耐えかねて、夫の目を盗んで安さんとプレイしていた事実を知って、私は内心憮然とした。彼女は安さんのみで飽きたらず夫をも乱倫の道へ曳きずりこもうとしているのではなからうか。とすれば、この女の底知れぬたくらみにうまうま乗って、一役買った私も又、夫を笑えぬピエロに過ぎなかったのである。底なし沼のような妖異な猟痴の世界で、絹子夫人は被虐を求めて遊戈しているのであった。私にも最初の日みせた、あの媚態——それはあわよくば私をも曳きずり込もうとする魔女の陥穽であったかも知れない。安さんに凭れて放心したように私をみる絹子夫人の顔には、荒淫に爛れ、悦虐に憑かれた悪女の相が、まざまざと漂っていた。更に彼女に露出癖のあることすら、安さんの次の言葉で窺い知ったのである。

「この絹子はんは、多勢の人の見ている前で犯してほしいといいよりますねん。さっきも担いで出ようといったのも、この人の好みを考えていうたんやけど、今日は三人の前で、

散々いじめられたから、さぞ満足やろ」

女は黙っていた。安さんは言葉をついだ。

「この夏でしたかな、妹のところで昭やんが泊った晩、合図があったんで忍んできたら、暑いさかい海へ連れてくれといいよりまして、この人の好みで、裸にして縛り上げて、ウキをつけて海へ放り込み、ワイの舟の舳へ綱の端をくくって一時間ばかり沖へ出ましてん。夜やさかい誰にも見つからなかったけど、舟をあげてからも波打際で大分長い間そのまま放っといたりましてん。えらい飲んどりましたで。どや絹子はん、来年もやったらるか」

絹子の頬をパチパチ平手で叩いてイタブリながら、安さんはこんなプレイを平気で放言するのであった。

「ああ、ワイも大分疲れた。いっぺんあんたはんのくくるのみせてもらいますわ。パッター交替や」

パッターは打者か。成程、叩く人間が交替するのもよからう。私は安さんの話をきくうち、むしろ絹子を虐めたくなってきた。

「この人を叩くこともあるんですか」

安さんにきくと、赤ら顔をニヤリとほころばせて、

「ああ、この人のケツ（尻）を平手でバシバ



シ叩きのめしてやりますねん。飛び上って欲
びますで。ホラ、みてみい」

いきなり、絹子夫人の体を軽々と抱き上げ
て、膝頭に腹部をのせて打伏せにすると、容
赦なくゴツゴツした大きい掌で、かなりの力
をこめてバシリ、バシリと小気味よい音を響
かせて叩きまくるのであった。

「佐倉さんもエエ面つらの皮ですね」

「ハハ、知らぬは亭主ばかりなりや。という
てワイもあいつのこと笑ろておられへん、自
分の女房と妹イカれたんやからなあ」

「それで平気ですか？」

「最初はものすごく腹立って、昭二の奴を殺
したる思うたんやけど、ちっちゃい時からの
幼な馴染で、出来たものじゃあないと許して
やった。ボンヤリしてたワイも悪いんやから

——。その代り、あいつの嫁はんやった
んやからアイコやけど」

と割切っている。

「それで、奥さんとは、うまくいって
いるの？」

「いくもいかんもない。この頃はこんな
ことするのがおもしろなって女房にもし
てやるが、段々飲びよるようになった。

ワイにひけ目あるさかい、反っていうこ
とようききよる。いっぺん折があったら
女房と絹子はんを一緒にして、思いきり
代りばんこに虐めてやろと思うてますね
ん。どうや絹子はん、やりますけ？」

「あたしはいいわ。安さんの奥さんさえ
承知なら……」

「こらオモロイ、近じか早速、段取り考
えよう」

私も呼んでくれと言おうとしたが、あきら
めた。奇クを読んでいても、安さんの私に対
する関心は薄いようであった。実行派の彼は
本を読んで自瀆的な満足をするより、可能の
牝の獲物が二匹も手許にあるのだから、その
方で充実した満足感を得るに違いなかった。
所詮私のつけいる隙はなかったようである。

昭二がカマボコのきったのを大皿一杯に盛
って一升瓶をぶら下げて戻ってくる。昭二自
身、最早薄々どころか、はっきりと妻と安さ
んの関係を気付いていたかも知れなかった。

やり切れない思いを酒でまぎらわそうとする
かのように、冷やのままドクドクと湯呑みに
溢れんばかりに注ぐと、一気に呑みほしてし
まった。安さんと絹子の間柄を知っても、怒
れぬ弱味を抱えているだけに、彼の表情から
は先刻迄のうわずった興奮の色は消えて、沈
鬱に暗く変貌していた。

「えらい沈んでどうしたんや。さあ元氣出し
や。もう一息やるんやで……。こんどは縛り
の大先生がやってくれるんで、おもしろいで」

力なく昭二は、うなづく。大先生というト
ボけた言葉に照れながらも、私は絹子に近づ
くと早い縄捌きで女の上体を縛り上げ、高手
小手にして、縄先を安さんに渡した。心得え

て彼は縄を曳く。正座したまま胸がタタミに密着し、彼女は古ダミの塵を鼻先で真向に吸う羽目になった。背骨が一直線に浮き上り余り豊かでない臀部の、双丘のまじわる尾骨が、ぐりっと飛出していた。

慌てて数枚撮り終わると、私は一本の縄をもって背後に回り、かなりの力をこめて臀部にピシリとふり降ろした。ビクリと体が揺れ呀っと大きく声を立てたのは、夫の昭二の方であった。二度、三度、縄ムチは風を切って絹子夫人の尻に突きささって碎け散った。

ヒイヒイと悲鳴あげる声に甘さが交り、それはともすれば歓喜の嬌声のようにも聞かれるのであった。安さんの引きしぼった縄は強く、女の上半身は押えつけられてビクともしない。縄ムチは尚も飛び交い、被虐の情痴に狂った牝犬は、けたたましく咆えつづけていた。その時、振り上げた私の手を、背後から昭二が、ぐっと掴んだ。

「私にやらせて下さい」

思いつめた眼の色であった。うなずいて無言で交替する。いきなりパシリとくれて、

「どうだッ、痛いカ——」

顔を硬直させ、酒の悪酔いで蒼白く冴え渡った顔をひきつらせて、昭二は叫んだ。そ

の縄ムチには愛憎の響きが激しく、こもっていた。思いがけない夫の逆襲であった。

「どうだッ、どうだッ」

連続して処きらわず炸烈するムチに、牝犬は必死にあがき、狂ったように咆哮した。安さんが引き絞っていた縄尻を思わず放す。女の体はマリのように転げ廻り、弾けとんだ。

「あッ、イタ、イタイ……やめてえ、もう」

凄絶な力任せの鞭に、絹子夫人は夫の憎悪を肌じかに感じとって輾転反側した。

「辻村さん。この縄で、もっと雁字搦目にこいつを縛り上げて下さい」

強い昭二の必死の眼の色にうながされて、私は太い麻縄を更に裸身にかけ廻し、縄尻の余りで強烈な股縛りに仕上げていった。プレイのルールは完全に外れていた。安さんは鼻じろみ、私はフト恐怖を感じた。凍りついた部屋の空気とは反比例して、熱気は暑いまでに天井から垂れ下っていた。

「安さんよ、もう帰ってくれ」

怒りを殺した声を敏感に感じて、安さんは黙ってうなずき、そそくさと消えた。素早く

閃光を走らせる私を彼はジロリとみて、

「すみません、プライベートな問題なんです、一寸、出てくれませんか」

流石に私には怒りの調子はなかったが、きつい有無をいわせぬ言葉に、うなずいて、靴もカメラもそこへ投げ出したまま廃屋の戸をガタピシいわせて表へ出る。

暮れなずむ夕陽が、遙か彼方の水平線を真赤に染めて、夕映えは照りはえている。立去りかねた安さんが数米先に佇んでいた。

「こら、一寸えらいことになるぞう。やり過ぎたんやな」

「感じたのしょうね」

「らしいな。だが、まあ、殺すこともないやろ。ワイはさきに帰りますわ。御縁があったら又会いまひょ」

うそ寒い顔に返って、酔いもさめ果てたらしく、彼はそそくさと路地の小道を曲って消えていった。

仕方なく、私は辺りをブラブラしながら、それでもいつしか足音を忍ばせて、裏側の雨戸の方へと回っていった。じっと耳をすましたが、声を殺しているのかシンとしたように物音は伝わらなかった。

突然、ギエーッと、激しいつんざくような悲鳴が耳につき、昭二の何事か叫ぶ罵声が流れてきた。こんな時、盗聴器でもあればいいのだがと私はあきらめきれぬ思いで胸をさわ

がせつつ、ヒタと雨戸に耳をよせる。

呻き、嬌声、はじけるような悲鳴が矢鱈と交錯して、盗聴が私の胸を疼かせる。ドタドタという音、もののぶつかる音——確かに昭二は荒れに荒れているに違いなかった。

あきらめて、壊れた垣根の石に腰を降ろしつるべ落としに暮れてゆく海に心を鎮めて眼をやりながら、私は煙草を吸い始めた。

待つ時間は、いやに長い。時計の長針は遅々として進まず、それでも三十分近い間、私は辛抱強く待ち続けた。いっそ持物一切をもつて出てきたら、このまま帰れたのにと、悔んでみたが、今更仕方のないことであった。

数本目の煙草に火をつけて、ジリジリする思いで入口の方へ回つてくると、昭二が顔だけ戸口から覗かせていた。

なごやんだ眼が私を招いていた。

「御免なさい、失礼しました」

「いや、いいんです。入って構いませんか」

「さあ、どうぞ。随分、寒かったでしょう」

元の古室に戻つてくると、縄目の痕もあざやかな絹子が、いましめを解かれて依然として全裸のまま、仰向けに大の字で転がっていた。体の節々が痛むのか、自力で起き上げそうもない程に困憊している様子であった。

六尺棒が傍らに転がり縄が散乱して、半刻の折檻の激しさを、まざまざと感じとれた。

つむった女の眼尻から頬にかけたあたりが紫色に腫れ上り、腿にも数カ所のあざのあとがあった。奈辺から飛び散ったのか、首筋から鎖骨の辺りにかけて、小さく点々と鮮血のこびりつきが眼についた。

そして、フツと私の鼻孔をよぎる栗の花の匂い——。この幽色蒼然たる妖気漂う古室の片隅で、血みどろな折檻が、激しい欲情を喚起して、愛憎が卍巴となって交錯し、貪ぼりつくすようなセックスが展開されたことは、まぎれもなかった。

「絹子、もう起きろ」

昭二の厳しい口調に、やっと彼女はノロノロと体を起こした。不思議にも女の眼は澄んで、ほむらと燃えたぎっていた情炎の火は消えて、おだやかさが蘇っていた。

「辻村さんによく謝まるんだ。このバカが……いろいろと、とんだお世話をかけやがって」

昭二の声につられて、絹子夫人は人が変わったような柔らかい声で、

「すみませんでした」

と呟くようにいう。

「分かったな。夫婦間の出来事は夫婦で解決

するんだぞ。しかし俺もいい勉強になった」

確かに佐倉昭二は、微妙な夫婦生活の何ものかを体得したらしかった。毒も時と場合によつては交じてクスリとなる。赤裸々な男女の葛藤と相剋の中に、彼等は血みどろな斗争を通じて、或る心のつながりをもったことは確かであった。それでいいのだ、夫婦というものは一たす一は二にならないところがデリケートであるのだ。

「じゃ、さようなら、お元気でね」

それだけいうと、表へ出る。お説教めいたSM談義は何もいらぬ。肉体と肉体がじかにそれを会得しているに違いなかった。

絹子が安さんと結びつこうと、昭二が他人の女房や妹の尻を追おうと、それは私の知ったことではない。悪夢の残滓を脳裡の片隅にこびりつかせて廃屋をあとにすると、冷たい寒月が、くつきりと私の影を照し出した。

悦虐に憑かれた女——佐倉絹子とは、恐らく再び二度と会う機会もあるまい。

それでいいのだ、それでいいのだ。私自身の心に、むなしい虚無の風を吹き抜けさせる想いで、急行の停まらぬ漁村の小駅へと木枯らしの吹き始めた日暮れの道を、小走りに急ぐのであった。

体 験 告 白

被 虐 鼻

(前)

—— 鼻責めを知らしめられるの章 ——

大 橋 美 代 子

カ
ット・芝
縄 太 郎

何故、私の鼻はこのような苛められる運命に巡り合ったのでしょうか。私が夫に、妻としての愛を捧げる時、私の左右の鼻腔には、それぞれ数個ずつのパチンコの玉がギッシリと押し込まれることが多いのです。このパチンコの玉は子供の玩具用で、普通のパチンコの玉より一廻り小さく、白いガラスで出来ております。

美貌の中心である、私の恰好の良い鼻は醜くふくれ上り、きつと豚の鼻のようになっていく事でしょう。痛い。苦しい。それにも増して何という屈辱感！ 逃れようとしても、両手両足を背中一つに纏めて縛られ、逆海

老の恰好で仰向けにねかされていては、抵抗どころか身動き一つ出来ません。

でも、私はうれしいのです。動かれないこと、苛められることは、本当に辛く苦しいのですけれど、それが夫の手によってなされているということだけで、その苦しみの中に、じんと痺れるような、めくるめく被虐の陶醉が湧き上って来るのです。

全身をギッチリと縛り上げられ、完全に自由を奪われて、夫の意のままに鼻を、弄ばれ責め苛まれる事に、私は身体の芯から疼き出すような燃え上りを感じます。

いつものことですが、夫は私の鼻腔からそのパチンコの玉を取り出す時には、鼻鏡を使って、鼻の孔を大きく押し広げ、ピンセットを鼻腔内深く差し込んで、一つ又一个。あたかもその作業を愉しむかのように、殊更ゆっくりと取り出してゆくのです。

ようやく全部の玉が取り出されて、ほっと一息つく想いになっても、手足の縛しめが解かれない以上は、夫が次の責めにかかるという意志表示と同じことなのです。

次はどんなむごい責めが、私の鼻腔に加えられるのだろうか？ という不安と恐れの中に、私の胸はその責めに対する期待が、甘美

な陶醉となつてふるえます。倒錯した被虐心理なのでしょうか。鼻を責められるということに、私は心から妖しい喜びを感じるようになってしまったのです。

異常性愛というものには全く無知であつた私が、夫の根気よい説得と巧みな調教によつて、責められる事に喜びを見出すようになって、責められる事は、私自身にも順応できる何かがあつたからかも知れませんが、夢にも考えられなかつたことです。異常な喜びに悶えるまでに飼育されてしまったともいえるでしょうが、このようになる迄の過程について、少し述べさせていただきます。

◇ ◇ ◇

夫は三十四才、私は二十六才で、或る銀行にお勤めする中に知り合い、一年程交際した後、昭和四十一年に結婚致しました。夢のように楽しかった新婚旅行から帰り郊外の新居に到着しましたが、先ず驚かされたのは、夫が引越荷物の中の大きな段ボール箱から沢山の奇クを取り出し、本箱にズラリと並べた事でした。

夫は、交際期間中も新婚旅行の間も、奇クのことは全く秘密にしておりましたが、昭和三十四年頃からの愛読者だそうです。でもそれ

以前の発行日付のものもたくさんあります。

私は夫の愛読書というので、夫の一面を探るつもりで読んでみました。生まれて始めて覗いた異常の世界——SM、浣腸、切腹等、今迄想像もしなかつた別世界には、信じられない想いながら、すっかり驚いてしまったものです。

その驚きを夫に話したところ、夫は笑いながら鼻責めの記事を読むようにしていました。しかし、私は変つてゐるなという以外の興味はありませんでしたし、夫も新婚早々の事として私に遠慮があつたためでしょうか、あまり露骨に鼻責めの話を繰返そうとはしませんでした。でも、夫は前々から女性の鼻に異常な程の関心を持っていた模様で何とかして鼻責めのきっかけを掴もうとして、その機会をうかがっていたようでした。

或る日、夫は三崎書房発行の秋山正美氏著「ペッティングマナー」という本を買い求めて来ました。その本には三百数十頁に亘つて男女のペッティングの仕方が詳述されていましたが、その中の「鼻への愛撫」の記事を私に読ませるために、買って来たもののようにしました。御参考迄に、次にその一部を紹介してみます。

唇と舌で相手の鼻を愛撫する。

鼻には、鼻筋、鼻頭、鼻翼、鼻腔などの各部分があり、顔の中央部の器官であるところから、人間の自我は鼻に集約されている、という説がある。つまり、鼻は自尊心を代表する部分といわれているのであって、鼻が高い、鼻を折るなど、個人の面目に関する比喻が、古来、数多くつくられてきた。その鼻を愛撫し愛撫されることは、男女が、自分の誇りのすべてを相手に捧げ合うほどの意気を持っている。唇を許し、鼻までも許し合った間柄は、もっとも親密な恋人同志といえるであろう。

—— a 〰 g : 省略 ——

h 相手の左右の鼻翼を自分の唇の間にはさみ、鼻全体を唇の間でもむ

g は 〰 吸う 〰 愛撫で、これは 〰 もむ 〰 もみほぐす 〰 愛撫である。息を一気に吸い込んで相手の鼻をその勢いに乗せて吸う場合よりも、やや時間的には長く、ゆるやかに行なえる。自分の唇だけでなく、頭部全体をよく動かして、やさしく静かに運動し、ときどき唇を離して相手に鼻呼吸をする余裕を与えるように心を使えば、相手は数分間に及ぶ鼻の愛撫に応じることができる。この点では g よりも

hの方がすぐれている。また、相手がわずかに唇を開いて口から呼吸をすることができるよう、自分のあご等によって、相手の唇をふさがずに愛撫をする注意を要する。

i 自分の上下の唇の間に、相手の左右の鼻翼をはさみ、鼻全体を口腔内に引き入れて舌の先でなでる。

唇・歯・舌による鼻の愛撫の中で、もっともこまかい心づかいがなくては実行できない方法である。なぜなら、この愛撫は、唇で相手の鼻をとらえて固定し、鼻をくまなくへなめるV動作を伴うからである。

この愛撫は、遊技的にへしゃぶるVのような動作はできるだけさしひかえ、ゆるやかに相手の鼻梁をなぞり、鼻頭から鼻翼へと舌を進め、左右の鼻孔の周囲をていねいにたどる。その間、hの場合のように相手が楽に口呼吸のできるよう、あごの位置を相手の唇から離しておかなくてはならない。

また、このような愛撫を受ける側は、唇と唇を合わせる激しい愛撫には熱心でありながら、目標が鼻になると愛撫が変態的で不潔なものに墮落していくような偏見を抱きがちである。けれども、鼻もまた唇と同様に愛撫の目標となり得るのであって、鼻を愛撫する行

為自体には、異常性や不健全な欲望があるわけではない。その方法が常軌を逸しており、相手の性感を無視したエゴイズムに満ちたものであるときだけ、異常となるのである。

◇ ◇ ◇

私は、接吻は口と口とで行なうもので、鼻の接吻があらうとは夢にも考えていませんでしたが、いま思うと、夫はこの頃から実際の調教に踏みきったつもりだったのでしよう。本のように誰でも行ない、決して不自然な行為ではないのだから、と執拗に説得し、鼻への愛撫をしようとし始めたのです。そして、私が拒絶しますと極端に不気嫌になって、幾日も口をきいてくれず、私を途方にくれさせてしまふのでした。

それに反して、私が気味悪いのを我慢して鼻の愛撫をうけ入れた時は、すぐく気嫌が良くなって優しくいたわってくれ、又高価な装身具等を惜しげもなく買ってくれたりするのでした。

一度、受入れたのがきっかけとなって、それ以後はまるで憑かれたように、鼻ばかりを愛撫したがる夫——でも、その事だけを除きますと、他のすべてについて夫は申し分のない人でしたので、私は夫に嫌われまいとして

気持が悪いのを我慢して鼻の愛撫をうけておりました。

夫も始めからあまり執拗な事はせず私が慣れるに従って次の段階に進んだようでした。そして遂には鼻全体を夫の口腔内に吸い込まれ、舌でなめ廻されるようになってしまったのです。

その頃には、私ももう覚悟みtainなものも出来ていたのですが、どうしても、恥ずかしさと息苦しさの入りまじった異様な感触から逃れようとしてもがき、思わず手で夫の顔を押し除けてしまいます。これがいけなかったのでしょうか。夫は手が邪魔をしないようにと言って、私の両手を後に回し背中を手首を交叉させ、腰紐で縛ってしまうようになったのでした。

そんなことにやりきれない情けなさを感じたことが何回もありましたが、無理やりに愛撫をうけている中に、始めは気持が悪かった鼻の接吻も、慣れると唇の接吻よりもずっと刺激が強く、官能的である事が判りました。殊に両手を後手も高く縛りと縛り上げられ、無抵抗の状態でうけるサジスチックな鼻の接吻は、被虐感というのでしょうか、妖しい快感に、全身が痺れるような気持を味わい、自

分自身うろたえるような現象が起こり始めたのでした。

それから夫は、うぶ毛があると具合が悪いとの理由から、鼻全体に乳液を塗りつけ、西洋カミソリを持ち出してきました。鼻筋を上から下に、小鼻の付け根から鼻梁に向かって上唇から鼻孔の周囲にかけての微妙な曲面もまるで理髪士さんのように時間を掛けて丁寧に剃り上げると、今度は棒カミソリを使って鼻孔内の鼻毛まですっかり剃りとってしまったのです。

こうして、ツルツルになった鼻全体に、再び乳液が塗られると、マッサージが行なわれます。鼻の頭や小鼻をつまんだり引いたりして入念に揉まれた後、グイグイとこじられるのですが、これは予想外に気持が良く、責められていることや縛られていることを忘れて私は思わずうっとり恍惚境に遊んでいる気分になったものでした。

「君の鼻の形は魅惑的だ。横顔の鼻筋の真直な線が何とも言えない。それに小鼻の形がすばらしい。僕が君と結婚したのも、君が美しい鼻をしていたからだよ。さあ、その恰好の良い鼻を改めて自分でよく見てごらん」

夫は私を姿見の前に坐らせ、鼻の下に凹面

鏡を当てるのでした。姿見の中に鼻だけが大きく拡大されています。私は思わず眼をつむってしまいました……。

しかし、私は夫がお勤めに出た後、一人で凹面鏡に自分の鼻をうつしてみました。

自分ながら形のよく整った美しい鼻です。白いふっくらと肉づきのよい小鼻、卵形をした程よい大きさの恰好の良い鼻の孔。うぶ毛を剃っているためお化粧ののりがよく一層美しく見えます。夫がこの鼻を愛撫したがる気持が判るような気が致しました。

顔は女にとって最も関心を惹くものですがその顔の真中にある一番よく目立ち、大切な呼吸を司り、容貌の美醜に深い関係のある鼻——鼻は女の生命と言えましょうか。

夫に鏡の前に坐らされた時は、恥ずかしくてよく見られませんでしたが、ゆっくりと一人で凹面鏡で拡大された鼻を見ていると、顔のなかで一番目立つ所にありながら、鼻というものには、エロチックでセクシャルな、又微妙な羞恥の感情が含まれているように思えます。

女は、真顔や横顔は誰にでも見せますけれど鼻孔となると、深い羞恥を感じるのではないでしょうか。女がじっとして鼻孔を見る事

を許すとき、——それは相手の愛情を受け入れるときで、つまり恋人が夫婦の関係になったときではないでしょうか——。

夫は私の顔を仰向かせて、耳かきなどで鼻翼の裏側や鼻中隔を柔らかくかいたり、耳かきの頭についている白い毛で、鼻の孔を擦ったりするのでした。

私は、鼻は美貌を形造る道具立てぐらいに思う以外は何の関心も無かったのですが、夫の鼻への執着を意識させられてからは、身内が燃え上がるような不思議な陶醉を呼ぶものだを知ったわけです。そればかりではなく、もっと強く鼻を責めてほしい、と願うようになったのです。私の心の奥深くにマゾの素質が眠っていて、夫の巧みな誘導によって開花したのかも知れません。

私が拒まないのをよい事にして、夫の、私の鼻への執着は、次第に濃厚の度を加えて行きました。

それに正比例して、始めは腰紐で手首を軽く括られていた縛りも、腰紐が何時の間にかロープに変わり、まるでイモ虫のように全身をギッチリと縛り上げられてしまいます。眼かくしをされ、幅七厘もある大きな絆創膏で口をふさがれた上、耳に迄脱脂綿が固く詰め

られると、夫が『人工呼吸』と名づけている
プレイが行われます。

口を封じられ、唯一の呼吸器官となった私の
鼻孔は夫の唇でおおわれ、夫の口から空気

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、
或は地方のため、入手することが出来ないとか、
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い
目に、手に入れたたいという御要望をよく承り
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御
予約下さるようお願ひ致します。毎月製本完
成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには
大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会
社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお
払込みの上、何年何月号より何力月分と御指
定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装
代などは、総べて当社にて負担致します。但
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分
二十円(切手可)の御負担を願ひます。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為
替、定額小為最、切手代用、振替(大阪四二

が送り込まれて来ます。

私の鼻腔に入ってくるのは、夫の肺の中の
空気なのです。全身の自由を奪われた上、全
く何も見えない、言えない、聞けない状態

七八三番)のいずれかをご利用願ひます。
現金の場合、景通郵便封入は違法ですから、
必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料
三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送
金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者
の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何力月分送れとお書き願ひます。第一回
分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何
月号からとお書きにならないときは、重複や
欠号をきたしますので御留意願ひます。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に
△本号にて前金切Vの列を捺印致しますから
継続お払込み願ひます。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願ひます。

○局留にて雑誌をお受けとりにならる方
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受
取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とをお知らせ下され
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから、数日後その局で受領願ひます
局での留置期間は十日間でその間にお受取り
にならないときは、発送人に返戻されます。

にされ、その上に呼吸までも夫に制御されて
しまうのです。この完璧な迄に自由を奪われ
る惨めな屈辱感を、皆様お分かり戴けますで
しょうか。

これは最早愛撫ではなく、完全な拷問だと
思います。

夫は私の胸一杯に空気を送り込むと、その
まま私の鼻孔から空気を吸い出し、今度は自
分の鼻を使って吐き出し、新しい空気に交換
して又私の鼻腔に送り込むのです。私が生き
てゆくには、タイミングを合わせて夫から空
気の供給を受ける外はありません。

それだけでなく息苦しいのに、夫は時々自
分だけ鼻で呼吸し、私への空気の供給を怠っ
て、更に苦しめる事があります。時には失神
寸前迄呼吸を止められた事もあります。私
はどんなに苦しくても身動き一つ出来ず、許
しを乞うことも、抗議をすることも出来ませ
ん。その屈辱感、被虐感、想像を絶するも
のです。

単に『鼻いじめ』から始まったお遊びでし
たが、もうこうなると、私は、完全に夫に征
服された女という以外の何ものでもないと思
われてきたのでした。

(未完)

連載・アブ紳士行状記

M 派 交 遊 録

(3)

(花村崇の巻)

鬼 山 絢 策

S 派 の タイ プ

前回で紹介した春木俊野君とは、ウマが合
って、急速に親しくなり、お互いのプライバ
シーな事柄まで打ち明けて話し合うようにな
った。

その春木君から「実は僕には、あなたに会
う前から、もう一人、M派の友達が居るん
ですが、会って見ますか」と、きり出された。
それが花村崇であった。

「ちゃんとした職業についていますし、悪い
人物ではないんですが、少し開放的な性格な
ので、その点が、ちょっと——」

と言うのが、春木君の花村評である。

ともかく会って見たいという、春木君が
いろいろ連絡をとってくれて、池袋の牛肉屋
の二階で牛鍋をつつきながら、春木君に連れ
られてきた彼と会った。

背は、あまり高くはなかったが、小肥りで
なかなかの好男子であった。言葉つきもハキ
ハキとしゃべり、暗さというものが全然、感

ぜられない。

私はM派の人々以外、S派の人とも多く会
ったが、S派の人々は、大別して二つのタイ
プがあるように思う。

その一つは、見るからに活動的で、エネル
ギッシュで、初対面から相手を威圧するよう
な、征服感の強いタイプ。もう一つは女性の
ように弱々しく、蒼白な顔面に神経質そう
な、おびえたような表情で言葉も、はっきり
しゃべらず、おどおどと伏し眼がちに相手の
視線を避けるようにして話すタイプ。



前者は征服慾が、そのままSとなって現われ、後者はコンプレックスが反転してSとなって現われる——と私は観察している。

特に前者でも後者でも、かん骨（頬骨）の張っている人相は、特に惨忍性が強いと言われている。よく惨虐な殺人を犯した犯人の写真などを見ると、たしかにかん骨が張っている。だが私は、かん骨の張っている人すべてが惨忍性のある人とは思っていない。かん骨の張っている人は、意慾の強い人だと思っている。その意慾が、よい面に発揮されれば、人一倍、努力家で大成する人物の中にも、かん骨の張っている人を多く見受ける。悪い面に出た場合に惨忍性となって現われるのだと私は観ている。

話が横道に入ったが、さてこれが、M派の人物はどうかというと、まず総じて、S派の後者に見られるような暗さはない。極めて明るいのである。

SMに関心のない人、または自分が、そのどちらかであっても、同派の人々とあまり交際の少ない人が想像した場合、M系の人物は、さぞ陰湿なかげりのある人物を想像されるであらうが、これは全く見当違いも甚だしい。それはMというものの本質を理解していな

いからである。

「Mの心理は自信過剰の発露である」と喝破した作家が居たが、私も同感である。

表面は他の要因のごとく見せかけているものの、潜在的には自信過剰が支配して、その人をしてMの行動をさせている——といっても過言ではないように思う。

ただし、M派の人物の中にも、開放的な人と隠微的な人とが居ることは確かである。私は開放的なM派の人には閉口することがしばしばあった。どういうことで閉口するのか、それはこれから開放的なM派の人々を順次紹介し、その事件に直面した事柄で自らわかることである。

靴フェチズム

花村崇は三十を一つか二つ、出たぐらい。進駐軍で働いていた。当時は、まだ進駐軍関係の仕事の多かった時代であった。

彼は英語は余り得意ではなかったが、中国語の方が得意であると言った。長らく中国に居た関係で、中国語は、よくマスターしているようであった。

「僕は靴に興味がありましてね」彼は初対面

（といっても、M派の人々との初対面の場合を言うのだが）の人に対しては、よくこう言ったものだ。私を含めて、彼がその後、多くの同好の士と会った時、口ぐせのように、そう言うのである。

大体、M派の人々は、靴のフェチズムが多いのである。

後に紹介する天泥盛栄君なども、靴に対しては我々より、はるかに強い執着と愛好をもっているが、天泥君の場合は女性の長靴やブーツであったが、花村君はハイヒールを愛好していた。

ハイヒールを何時間もかけて汚れを落としピカピカに磨きあげるのが、こよなく楽しいものだと言った。

その磨きあげられた靴をはく人を脳裡に描き、その靴によつての屈辱と苦痛を想像しながら磨く時が、たのしいのである。

進駐軍のアメリカ将校の夫人などには、S気の強い女性が多く、彼が丹念に磨いた夫人のハイヒールを、夫人の前にひざまずいて捧げると「膝の上に置き」と言う。花村君が自分の膝の上に置いて両手で支えて出すと、夫人は片足をあげて、膝の上の靴をはいてみる。グイと足に力を入れて踏む時、尖ったヒ

ールが膝にくいこむ感触が、何とも言えなかったと言う。

「その将校の夫人とは相当な線まで行きまし
たか」

「ええ、とてもすばらしいひとでした。我々
にとって一番いいのは、彼等は日本人なんか
ニグロなみに扱っていましたからね」

ニグロどころか犬畜生並みに扱われていた
時代が確かにあった。

この時から六、七年前、終戦直後の頃は、
チューインガムや、チョコレート一枚でアメ
公に肉体を提供していた女達が、新宿や有楽
町あたりにウロチョロしていた。

国鉄の駅の階段は、進駐軍専用の分が、仕
切られていて、どんなに混雑していても、日
本人はその空いている階段を通ることはでき
なかった。

窓ガラスのぶっこわれた電車に、すし詰め
になった空腹の日本人達の眼の前を、ガラガ
ラに空いた進駐軍専用の新車がスレ違って行
く。そのガラガラの中、G・Iとそれ
にからまって日本人の若い女がスカートを手
提して、当時、珍しかったナイロンパンティを
これ見よがしに見せつけ、洋モクをふかして
ふざけちらしている風景は、よく見せつけら

れたものである。

そういう若い女は、自分が日本人でありな
がら、日本人を軽べつし、日本人の前で、ガ
ムやチョコレートをムシヤムシヤ食べ、真赤
に塗った唇に洋モクをプカプカふかして、
「どうだ、うらやましいだろう！」

と得意になっていたのだ。いまの若い人に
は想像もつかないだろうが、当時は日本で甘
いものと言えば「うめぼし」という給玉と洋
カンぐらいしかなく、それもヤミで、アメ玉
一個一円（現在に換算すれば二百円位）もす
るほどバカ高い値段だったのだ。

だから日本人が、アメリカ人に対して奴隷
的な気持で接していた風潮は、終戦直後から
一、二年は特に強かったのである。

外人崇拜

だが昭和二十五年頃になると、日本人の生
活も一応まとまらなり、物資も豊富に出廻っ
て、アメリカ人をはじめ、外国人に対するコ
ンプレックスも薄れてきたが、一部には依然
として外人崇拜の邦人卑下思想が残ってい
たことは事実だった。

花村のアメリカ人に対する考え方も、多分

に、その傾向があった。

だが彼の場合は、そう言った一般的な風潮
からおしつけられたものではなく、彼自身、
アメリカ将校の夫人のみごとくに伸びた肢体に
対する憧憬とM心理がそうさせたもので、そ
れを世間一般の風潮のように見せかけて言っ
ているのだった。

ちょうどその頃、本誌に沼正三氏の「マゾ
ヒストの手帖」が連載中であり、沼氏がアメ
リカ将校の夫人の奴隷となったという手記が
のっていたので、花村もそれを羨望していた
が花村自身、アメリカ将校夫人のベッドル
ムまで呼びつけられて、ペットにされるとい
うところまでは行かなかったらしい。

その夫人がショートパンツ姿でテニスをし
ているところをよく見かけたが、あのテニス
のボールを自分にぶっつけてもらいたいとい
う衝動にかられて、テニスコートの中まで踏
みこんで行って、

「ゲラウト！」

とどなられると、ゾクゾクしたと言う。

「なにしろそのショートパンツがね、すぐく
ラフなやつでね。ベンチに腰かけて高々と脚
を組んでいるのを正面から見ると、お尻のへ
んまで見えちゃうんですよ。ああ、あのへん

にキスさせてもらえたら、死んでもいいと思
いましたよ」

夫人は花村の視線を意識したが、ちょっと
睨んだだけで、別に組んだ脚をほどうとも
しない。

「要するに我々日本人は犬畜生と同じで、犬
畜生に視かれたって別に羞かしいとは思わな
い、そう言った感じですね」

それから話のはずみで、夫人の肉体に接吻
したようなことまで話したが、それは多分に
彼の創作的なところが見受けられたので、私
は信用しなかった。

ほんとうにそこまで行けたのなら、テニス
の場面を、あれほど強烈な印象で話すはずが
ない。その数倍のショックキングな体験を受け
たなら、テニスのことなど、それほど委しく
話すことはないのだ。

話としては、それからの彼の「創作」と思
われる話の方が面白いかもしれないが、途中
で嘘だと分かると私は興味を失って、彼が、
どんなことを話したか忘れてしまった。

マゾヒストには、自分の夢想している願望
を、あたかもそれが事実であったかの如く、
遂行したように話す人が、かなり多い。

ほんとうにやったかどうかは、話を聞くう

ちに分かるものである。

そういうわけで、私は花村という男は、ち
よっと信用のおけぬ人物ではないかとさえ思
われたのだが、後になって、あながちそうで
もないことが分かった。

開 放 的 性 格

「ところであなたは奥さんに対しては、御自
分の性向を打ち明けているんですか」

この質問は、春木君にもした。春木君には
可愛らしい顔をした美人の奥さんが居て、私
は何度も夕飯を御馳走になったが、春木君は
自分の性向は絶対秘密のものとして、おくび
にも見せていないと言っていた。(これも数
年後には変わってくるのだが、その当時は、
そうだった)

「ええもう、そりゃ家内は知ってますよ」

「奥さんはSっ気があるんですか」

「イヤそれが、あまりないんですよ。大して
いやがりもしませんけどね」

だが彼の話によると「責めの部屋」と言う
のを一応つくってあると言う。

鞭などは、皮の鞭、竹鞭、皮紐の鞭など、
数種類のものを揃え、犬の首輪、マスク、手

錠、縄数種、それに天井板をどけて、梁から
滑車をぶら下げて、吊り責めの装置までつく
ってあると言う。

話だけをきくと、これは本格的である。

「どうだ！ 俺はこれだけのことでやって
いる。お前達はここまでの経験は、まだない
だろう！」

と誇らし気にしゃべっているムードが感ぜ
られる。しかも大きな声で、他に多勢の客が
居るのに、あたりはばからずしゃべられるの
には閉口した。こっちが気にするから、普通
の声でしゃべっていても大きく聞こえるのか
もしれないが、とにかく本人は、あたりの人
に聞かれることを意識しているのか、或いは
全然無神経でいるのか、そのへんのところが
はかり知れない。

私が開放的な人物には閉口すると前に書い
たが、一例としてこういうことがまずあげら
れるのである。

話ばかりではどうにもならない。実際にそ
の行為をこの眼で見、聞かなければなっとく
が行かない。

いまでこそテレビで秋山夫妻の残酷ショウ
とか、サド・マゾの世界など平気で放映され
る時代となったが、我々戦前から秘かに行動

してきた者にとっては、あまり大っぴらにやられると迷惑するのである。現在ではなにもこの位のことは秘す必要はないというところまで太い神経になったが、当時の神経はまだ非常にせん細であった。

その頃私はカメラに凝っていて、次から次へとカメラを買い替えて、仕事上の写真はもとより、風景、スポーツ、舞台、ヌードと、手当たり次第に撮りまくっていた。

だがまだMの写真は撮ったことがない、これを是非撮って見たいと思っていた。そこで花村に、男性の方のモデルになってくれるかと言うと、

「いいですよ」

と二つ返事で引き受けてくれた。

あまり簡単に引き受けたので、却ってこっちの方がウ스気味悪く思っただけだった。

男性モデルは決ったが、さて女性の方のモデルはどうしようと三人で相談した。

「どこかヌードスタジオでも使ってみたらどうです」

「やってくれるかしら」

「やりますよ。向こうは商売だもん」

「じゃ、やりましょう」

と、いうことでその日は別れた。

当時のヌードスタジオ

すると翌日すぐ、春木君から電話がかかってきて、

「昨夜の話、今夜どうです？」

と言う。えらく早く決まったものとびっくりしたが、

「場所は？」

「池袋の例のスタジオです」

と言う。そこは前に春木君と普通のヌードを撮りに行ったことがあるから知っていた。

「いいモデルが決まったんですか」

「ええ、もちろんですよ」

と春木君の声ははずんで、得意気だった。

そう言えば昨夜池袋の牛肉屋で飲んでから私一人はすぐ別れたが、春木君と花村はまだ

一緒だった。二人はすぐその足でスタジオを訪れて、スタジオの親父に交渉したものでらしい。

当時ヌード撮影は、三〇分で四百円ぐらい

だったと思う。一時間で六百円、それを一時間千円の特別料金で決めてきたと言う。

その頃のヌード・スタジオというのは、看

板に偽りなし、正真正銘のヌード・スタジオであった。

ヌードに凝っていた頃は、新宿、新橋、池袋と、さかんに方々へ出かけて行った。

中でも柏木スタジオというのは、淀橋警察署のまん前にあって、きれいなモデルが揃っていたのでよく行った。

ヌード・スタジオで面白かったのは、小田急線の代々木八幡にできたというので、こんな盛り場でもない場所でやるのはどんなものかと思っ行って見た。

代々木八幡の駅で降りて、駅から電話して道順を聞くと「近いから迎えに行く」と言うので、待っているとすばらしい美人がやって来た。こんないいモデルが居るのなら行って見ようと思っ、駅から一緒に行く途中、

「モデルさんは何人、居るの？」

「二人、居ます」

「是非あなたになってももらいたいな」

と言うと女は黙って笑っている。

「ねえ、出張撮影にも応じてくれる？」

「……………」

「こんどさ、お店に内緒でどこかへ出かけない？ その方がダイレクトに君の収入になるし、二千円でどう？」



などと話しているうちにそのスタジオなる家についた。これが何と普通のしもたやと何等変わらない家なのである。

旧式の木造家屋の二階家である。

「お二階へどうぞ——」

というので二階へ上って見ると、これまた驚いたことに、ありきたりの日本間の八畳と十畳が「スタジオ」なんだそうで、もちろん

畳敷きで、床の間とおぼしきところに白い紙と黒い紙が吊り下げられていて、ライトが両脇に一つずつ、これでスタジオだと言うのだから恐れ入ったが、さて交渉に入ると、何と先刻のすばらしい美人というのはこのマダムで経営者だった。

経営者とも知らず「お店に内緒でどうだ」と口説いたんだから引込みがつかなかったが

出てきたモデルというのは、そのマダムより数段劣る女だったのでガッカリしたが、ここまできてはしょうがない、三〇分の決めで撮りはじめたが、五百ワットのライトを二つつけると、外からはガラス一枚だから、あかあかと思えたに相違ない、夏など中の障子も開け放してやったら隣の二階からまる見えだなど思いながら撮ったものである。

この失敗談には更に後日談があつて、私は翌日会社に出ると、代々木八幡から通ってきている男が居るので「昨夜君の家の近くのヌードスタジオへ行ったよ」と失敗談を話すと「あ、その奥さん知ってますよ。僕の友達がヌードスタジオをはじめようと思うと言ってたが、そいつの奥さんですよ。丸ポチャで二十七、八の女でしょう」

「そうなんだ、背が五尺二寸位で小肥りに肥っている」

「ああ、それだ。ヤツ、とうとうはじめたんですね」

「君、毎日降り降りしていて気がつかなかったの。駅に小さな看板が出てるよ」

「そうですか。全然気がつきませんでした」

「あの奥さんのヌードならいいと思っただが、出てきたモデルはあまりよくなかった」

「あの奥さんだって話のもっていきようでは脱ぎますよ」

「そうかな、君が話つけてくれる？」

「イヤ、僕はだめです。友達ですから、向こうが断るでしょう。今度亭主を紹介しますから亭主に相談してごらんなさい」

ということ、私も乗り気になったのだがその後、忙しさにまぎれて二、三カ月、そのままにしていた。ふと思い出して会社の男に「いつかの君の友達っての、例の御亭主を紹介してくれよ」と頼んだら、

「ああ、あのヌードスタジオですか。あれ、とっくにやめましたよ」

ということ、オジャンになった。やはり思いついたことはすぐ実行に移さないとチャンスは逃げて行ってしまうものだ。

さて池袋の喫茶店で、春木君と花村と、おち合って、スタジオへ出かけた。

この店も、いまはなくなってしまったからほんとうのことを書いてもいいだろう。

池袋の西口を降りて、花柳街の方へ行く道の洋服屋の二階にあった。二、三回行った事があるが、あまりきれいな子は居なかった。

親父というのが話のわかる親父で、花村が

「男のモデルをいじめるようなポーズをとってくれるモデルを」と頼みこんで、女からもOKはとってあると言う。

当時のモデルはまじめそのもので、昨今のモデルのようにパンティをはいて出てきて、「これを脱ぐならもういくらいくら出しな」などということは言わなかった。

看板に偽りなく、三〇分四百円と言えば、それ以上は取らないし、最初からヌードで出てきた。

池袋のスタジオは二つあって、バックが黒いのと白いのとあった。

その後このスタジオは、ワイセツな行為をしたとかどで、営業停止になったことが新聞に出ていた、どうやらモデルの肉体の提供のあっせんまで親父がやったようである。

そのくらい話のわかる親父だから、私が干円出すと極めて事務的に受け取って、小柄だがグラマーなモデルを紹介した。

「よろしく御願います」

とモデル嬢はテレ臭そうに笑って、

「あんまりヘンなのは撮らないで下さいね」と釘を刺された。それから顔は撮らないでくれという注文だった。

はじめてのM写真

女性一人のヌードはこれまで何百枚も撮っているから手馴れているが、Mの写真ははじめてだから勝手が違う。

幕の蔭で洋服を脱いでヌードになって出てきたのを見ると、乳房が張っていて丸くお椀のように豊かであり、乳首がピンと上を向いているところなどなかなかカッコいい。身体の線も崩れていず、小柄だが整っている。

花村の眼がヌードを見て、更にもうひとつのものをみると昂奮に眼をうるませた。

もうひとつのものと言うと、常人は黒いものを想像するだろう。

黒いものには違いないが、常人の眼の行く所とは、ちょっとばかり違うのである。

花村の視線は、常人の視線のとまる黒いところを通り越して更にそのズーッと下の靴に視線がとまって動かなくなったのである。

このモデルさん、ヌードだったが、黒いエナメルヒールの高い靴をはいて出てきたのである。

花村はこの靴の形が気に入ったらしい。普通のモデルがヌードで現われる場合は、



靴もはいてないものだが、ことによると前夜の交渉の時に、花村がモデルに靴だけはいてくれと頼んだのかもしれない。

此処は五百ワットのライトが二つ、左右から固定され、それに移動式の三百のライト三つあったのがあり、天井からは五百のライトが三つあるので光量に不足はない、他にレフも備えつけてあった。

私はローライの二眼レフを持って行った。春木君はロードという35ミリフィルムのカメラである。

「露出は、どの位ですか」

と春木君が聞く。

「そう、明るいから5・6の60分の1でいいでしょう」

彼のフィルムは2Sだからそう指定した。

私は3Sしか使わないから5・6の125分の1にセットした。60分の1ではどうかするとブレる恐れがある。

花村は上衣を脱いで黒いシャツに白いネクタイといういでたちで、煌々と照らすライトの黒いバックの前にノソツと出た。

結局私がリードし、ポーズをつけることになった。

「花村君、そこへキチンと正座して。あんたは片足をあげて、花村君の胸のへんに突き出す。花村君はその靴を両手でささえて、つまり、いま靴をはかせ終ったというところ。ハイ、足をもう少し高くあげて。花村君、うやうやしく捧げ持て……」

花村はまじめくさって女の靴を大切に両手で持っている。

モデルは我々の方に向かって、前の方の脚をあげ、手を腰に当てて、顔は向こうを向いて撮られないようにかくしている。

私と春木君が並んでシャッターをきる。

「ハイ、今度はその靴で男の人の肩を踏んでみて……」

「ハイ、次は肩を蹴とばしたポーズ。足をもう少しあげて、花村君は蹴倒されて倒れる。ああここはポーズをとめなくてもいい、動き

のある方が実感が出るから、ほんとうに蹴って見てくれ給え」

モデルは肩へ当てた足を軽く上へはねあげる。花村は仰向けに倒れる。

「まだ力感が出ていない。もう一度、足をもう少し勢いよくあげて、ああ今度はそっち側の足でやってくれないかな」

「だってこっちの足でやると顔が写っちゃうわ」

ファイnderを覗いたところでは、彼女のまるい大きなお尻しか写らない。もう少しオッパイの両方とも写る位置に変えたいと思ってそう言ったのだが、モデルは顔を写されることを警戒している。春木君が身体の前面を写そうと、左側の方へ移動すると、モデルはますます身体を捻じまげて顔を後向きになるほどかくしてしまう。

だがモデルは身体の正面を撮られることは別に忌避しているのではないのである。問題は顔だけなのである。

「そんな髪をもっと顔の方へたらしめてくせばいい。左脚ばかりでやられるとキミのみごとなオッパイが写らないからね」

オッパイもそうだがもっと他に写したいところもある。そんなことはモデルの方も先刻

御承知である。髪で顔の半分をかくすほどたらずと、今度は左脚をあげてくれた。このモデルは身体には自信をもっているのだ。

モデルによっては盲腸の傷痕を撮られるのをいやがって、左側からしか撮らせぬのも居る。強いて右側からポーズさせると、手で巧みに傷痕をかくしてポーズする。だがこのモデルは虫に喰われたあとさえなく、パンティの紐のあとをつけず、まことに綺麗な肉体だった。

いまのヌード・スタジオ

私はこの夜を最後として、数年間はヌードスタジオを覗かなくなった。

五、六年経って、たまにはシングルヌードも撮って見ようかと、スタジオへ出かけてみたところ、モデルの質がガタツと落ちてしまっていて、幻滅の悲哀を感じた。

五、六年前にあったスタジオはほとんどなくなってしまう、新宿二丁目とか池袋の別の場所にできていたが、スタジオ自体のムードもおそろしく荒廃している。

モデル達は、瘡せて腰骨の出っぱったのや、はりのない薄い乳房をドラツとさげたのや、

一メートル半にも足りないような小女や、そしてまたお面の方も数段落ちてしまっただうしようもない連中ばかりである。

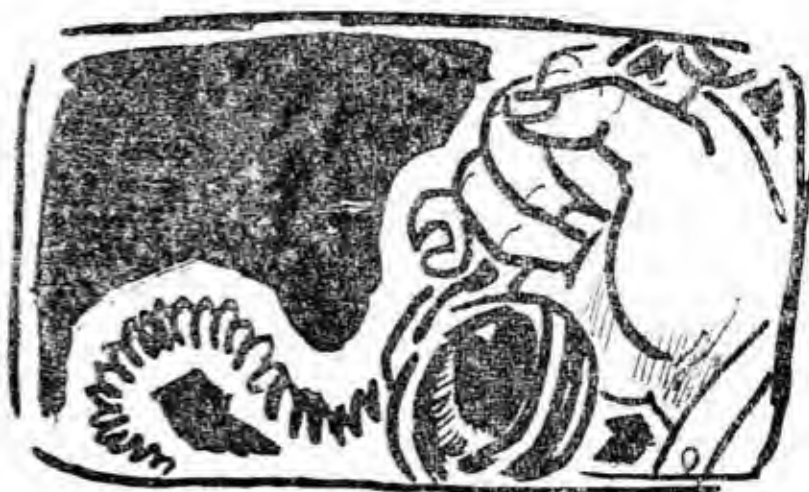
しかも盲腸の手術の痕だっただくそうともせず、平気でムキ出してくる。その癖パンティなどもったいぶってはいてきて、それを脱がせるのは「警察がやかましいから」とか何とか言っけて割り増し金をとる。そのパンティを脱れば、ゴム紐のよじれたあとをつけて平気でいるし、まっ黒な妊娠線を平気で見せてくるんでは、とてもじゃないが、ゼニをもらっても撮る気のしない連中ばかりだった。

癪にさわるから裸を見て一秒とたたぬうちに、

「ああ、もういいよ」

と、規定の料金を払って一枚も撮らずにとび出してきた。なまじ写すとフィルムを損する。昔こんなことしたらモデルにとっては耐えられぬ屈辱を感じたであろうが、この頃のモデルはイケシャアシャアとしている。

一体いまのお客はこんなスタジオへやってきて何をするのだろうか。私は想像に苦しむのである。モデルもすれっからしで、入口の扉を開けると、応接間みたいなところに四、五人ゴロゴロしているが、客の品定めをする



鬼 六 談 義

人

妻

の

話

団

鬼 六

久しぶりで鬼六談義を書く。というより、これは「花と蛇」休載のお詫びの一文かも知れぬ。

箕田氏より幾度も電話で催促されても遂に書けず、来月は百枚書くから、などとごまかしたりしたけれど、そもそも鬼プロなる映画制作プロを発足させた事が書けなくなってしまった原因で、不本意ながら二、三カ月の休載になってしまったわけだ。

月に映画一本、舞台一本ぐらい何て事はな
いと興行会社と契約してみたが、こんなに忙

しくなるとは思わなかった。渋谷に小さな事務所をかまえたのはよかったが、その翌日より千客万来、監督の売り込みやら役者の売り込み、それに配給会社より、クランクインは何時か、脚本はもう出来たか、宣伝材料を至急頼むなど、何だかんだと、ひっきりなしに電話がかかり、こっちはまるで浮足立ち、コマネズミみたいにクルクル動き廻り、それでも、あれよ、あれよと言ってる間に映画四本を制作し、実演も四回公演まで果たしたんだから、我ながらよくやったものだ、この年

の瀬に来て感心している。

映画制作については、これまでよく書いた事だが、三文映画であっても、制作するにはかなりの神経を使わねばならぬもので、監督と打合わせ、キャスティング、ロケハン、映倫との喧嘩——そんな合間をぬって 実演舞台の演出まで手がけるんだから、心身ともに全く疲れる商売だ。

会社を作ったんだから、一応、社員もかかえねばならず、あたり前の事だが、毎月、月給も払わねばならない。これがまた金額にし

て馬鹿にならず、ふと考えれば、人間に金を払うために仕事を始めたようなもので、会社としてはどれだけ利潤を上げているものか、阿呆くさくなるのが恐しくてまだ計算もしていないが、ものかきが商売などやらかすと、やはり武家の商法めいた匂いが濃厚だ。何かに追い立てられているような日々で、じつくりと思考する時間もなく、脚本を書く時も、一行書いては算盤はじいて、この映画にかかる費用を計算し、また一行書いては監督宅へ電話してキャストの相談、また一行書いてはスタジオなどに支払う手形帳へ印を押したりする。

最初のうちは、机の前に坐りこんで下手な原稿をもっともらしい顔して書く事よりも、一つのことを大勢の人間を使って制作するという事の方に何か仕事しているといった生活の充実感を覚え、仕事には立体感がなければ駄目だと大いに張り切っていたのだが、最近ではいささかバテ気味。映画、芝居、月一本の制作契約は少し無理じゃなかったかと、恨めし気に契約書を見つめている。そろそろ持前の怠慢根性が頭をもち上げて来た感じだがプロを設立し、人間をかかえた以上、もう後へは引けない。

他のプロより、私のプロの方が経営者が間が抜けているという故か、それだけに仕事はやりいと思うらしく、スタッフやキャストは大いに協力したがって、わんさどつめかけしてくれ、実に和気藹々^{あいあい}といった、なごやかなムードで撮影は開始された。私は、他のピンクプロみたいに、けちけちした制作はしないと、かねがね豪語していたので、まるで豊臣秀吉の小田原征伐みたいに、妻子を伴ってロケに随行し、スタッフ達にも妻子を連れてロケに出ても苦しくない。と命を発し、他から見れば阿呆扱いされるような香気な撮影旅行を行なったが、そんな調子では、やはりまともな映画が撮れる筈はない。

この間も試写を見た直後、役者の二階堂浩を呼び出して説教したのだが、彼はその映画では刑事役で、酒場から酔って出て来る犯人に手錠をかける事になっているのに、その時仲間と一諸に屋台で一杯ひっかけていて、助監督に呼び出されて現場へ行き、カメラの前に立ち、酒場から出て来る犯人を逮捕したわけだが、試写を見ると、酒場から出て来た犯人は酔っておらず、それを逮捕する刑事があきらかに酔っぱらっているのである。いくらぐうだらな映画でも、刑事が酔っぱらって、

犯人を千鳥足で追いかけるなど話にならないと、さすがに私も説教したが、こんなのは、まだましな方で、第四回目の映画の試写の時などは私は胆をつぶしてしまった。ピンポケが矢鱈に多く、しかも、どういうわけかカメラの縁が画面にはっきり浮き出て、双眼鏡から見た光景のような映画になっている。これは、あきらかにカメラマンのミスで、この映画は潜水艦が潜望鏡からのぞいた光景なのかと、配給会社の社長に皮肉を云われ、かえす言葉もなく赤面の至り。こんな風に神経をいらさせなきゃならない位なら、以前のように、あちこちのプロダクションより依頼される脚本だけ書いておいた方が、と正直思ってみたりする。無責任野郎が責任を持たねばならぬ仕事を手がけるのは正に悲劇だと思うものの乗りかかった舟だ少々な障碍で、へこたれては鬼プロ専属のスタッフに申訳ない。来年よりは腹をすえてがんばろう、と年の瀬に来て私は色々反省しているのだ。

そう、今はもう年の瀬、この原稿が活字になるのは来年だが、今日は十二月の暮。二十日までにどうしても原稿をと箕田氏に連絡を受けつつも、今まで書いて来たような事情で遂に落着いてペンをとる事が出来なかった。

この原稿を書いている二、三時間前も地球座の正月実演の打合せが新宿であり、今も、私のすぐ隣の部屋では、美也かおるや山本昌平達が舞台脚本の読み合わせを行なっている。

私は昔から年の瀬が好きだ。新宿、渋谷、または浅草の繁華街を、ただ当てもなく一人で歩き廻り歳末風景を観察しつつ、その一年を振り返ってみる。それが私の習慣になっているのだが、今年は、のんびり一人歩きする閑もなく、間もなく新年を迎えようとしている。

今年は色々な事があった。俗悪な精神に徹するとか、人生の浪費者になろうとか、何かの理屈をつけて、その集大成みたいな考えでピンクプロを作ってみたものの、仮面をかぶっているつもりでも、その仮面が真実、自分のものになってきたではないかと、ぞっとする時がある。嫌味な自己弁護は傲慢な自己主張につながるもので、歳末に来てくだらない感傷にひたるのもみっともないし、変態作家というレッテルをはられてしまった事を今更歎こうとも思わないが、調子に乗って今年はいささかオーバーな行動をとったという事は反省している。

変態作家なるものは、岩穴に住む山椒魚み

たいに、ひっそり息づいておればいいのである。おだてられて調子に乗り、サドマゾの講演にかつぎ出されたり、テレビにまで出てしまったのは醜態であった。あのナイトショーの出演は、家の者にも内緒にし、ごく親しい友人以外には事前に語らなかつたのだが、K誌を見てもわかつたが、やっぱり見た人はかなりいたようである。

とにかく、ぼんやり顔を出してくれればいいだけだと、テレビのプロデューサーに口説かれて、談志に応援を頼んで出演する事にしたのだが、その日、本番五分前に談志がすぐりこんで来て、何をしゃべっていいのやら全く打合せも出来ていず、それでも誰かが、たしかテーブルにハイボールが出る筈だからというので、ウイスキーが入れば私もかなりしゃべれる方だからと、たかをくくってテレビカメラの前にふんぞり返ったのだが、当てにしていたウイスキーは出なかった。それで調子が狂ってしまい、何がなんだかさっぱりわからぬ一幕になってしまった。談志がまた、ろくな事を言わないから、こっちもろくな事は言えず、最初プロデューサーに言われたように、ぼんやりと馬鹿みたいに椅子にふんぞり返っていただけに終わったのだが、こんな

事なら、どこかで一杯ひっかけ、もう少し恰好のいい事をしゃべればよかったと残念に思っている。あの時、一緒に出演した昭和女子大学の白石先生などは、談志や私とは、まるで心がけが違い、原稿紙を持参されて待合室で本番の勉強されていた。やっぱり学者は違ふと感心した。あの先生は馴れたもので、本番前にちゃんと自分で顔にお化粧され、カラーテレビは、こうしてドローン化粧をすると、よく写るのだそうだ。

あのナイトショーも、マルキッド・サドの映画みたいなものだったが、このテレビ出演の何日か前にも、この映画の宣伝を兼ねた会が何度かあって、私はその一つに講演を頼まれたが、私は、マルキッド・サドについての知識はまるでないし、第一、あの映画も見えないのである。サドの事は何も知らんと言つては、変態作家の沽券にかかわるから、何だか自分でも要領を得ない事をしゃべったけれど、SとかMにまるで興味を持たぬ人々に對して、そんな講演をする程、味気のないものはない。縁なき衆生の前で恥部をさらけ出すようなものだ。

しかし、あのナイトショーで芳村真理に逢えた事は嬉しかった。というのは、もう十年

も前になるだろうか、彼女がデビューした時の映画は私の小説の映画化されたものであつて、(昔は変態作家ではなかったのである)芳村真理は私の事を覚えていてくれた。あれまあ、あなたは、とお互いに懐しく、昔話に花咲いて、今はどんなものをお書きになつてらっしゃるの、と聞かれて赤面しながら人間冒瀆の小説と答えたが、談志が横から言わぬともいいのに「花と蛇」を読みなさい、僕が特集号を進呈するなど吐かし、私は尻からげしてその場から逃げ出したい気持ちになつたがやはり変態作家は、はでやかな場所に出るものではない。山奥や湖底で、ひっそり息づく、なまずや山椒魚になつていくべきだと思つた。

あのテレビ出演が終わつて、マニヤの一人から私の所へ手紙が来、読んだものから想像して、鬼六というのは鬼太郎みたいに容貌怪異人間かと思つたが、そうではなく仲々いい男に写つていたので、びっくりしたと言つて来たが、ちょっと嬉しかった。だが、やはりグロテスクな化物と思われていた方がいいのかも知れない。その方が私の小説も面白く読まれる事と思う。もう顔を出すのは真っ平だと思いつつ、ついこの間、送られて来たKK

誌をふとめくってみると、辻村氏と並んで、どっかで見たような男の写真が出ている。誰かと思えば、素顔の私であつた。恐らく辻村氏が写真を提供されたのだろうが、いささか迷惑に思っている。次を開くと、談志もひっぱり出されていたが、彼も、こんな事だけやつてればいいのに衆議院選挙になんか出馬して、落選してしまつた。いささか私も運動を手伝つたのだが、今夜にでも、おくやみの電話をかけようかと思つている。

とにかく、今年は色々の事があつた。

鬼プロの陣容も何とかまとまつて来たようなので、来年は乾分達に任し、最近、大分だらしくなつて来た「花と蛇」にエネルギーをさこふと思つている。

八年も連載すれば言いわけではないが、マニヤになつてくるのも当然、というより疲れが出てくるのも当然で、随分とKK誌編集部から尻をたたかれたが、二、三カ月、休養させて頂いた事は許して頂きたい。今回も、また短い枚数になつてしまつたが、来年度よりはがんばつて、今年は遂に果たせなかつたけれど、静子夫人を妊娠させる所まで持つて行こうと考えている。

やはり、この珍小説の中では、静子夫人の

ファンが圧倒的に多いようである。勿論、私が力をそそいでいるのも彼女にあるわけだが人妻というものが、これだけ人気を勝ち得るとは、最初の頃、私は想像もしなかつた。この種のマニヤは何と云つても、小夜子のような令嬢タイプの女性に食指が動くのではないかと思つていたのである。

私が人妻タイプを主人公に選んだのは、学生の頃、ふと芦屋附近を歩いて、高級車から降り立った優雅なムードを全身にただよわせた和服姿の美貌の令夫人を見、その時の印象がよほど強烈だったらしく、しばらくは落着かず、その高貴な匂いに満たされた夫人の端正な容貌を想起しつつ、一人で楽しむ事などを始めるようになったのだが、やはり、その時の思い出が尾を引いているものらしい。

男性が女性に魅力を覚える時、色々な好みもあるだろうが、男性の眼に魅力的な女として写る事を計算したようなタイトスカートやショーツスカート、腰や臀部を強調し、太腿までわざとらしく露出させるような女性には私の食欲はそそられない。ああしたスタイルは、女の本能的な悪智恵が考え出すものなのだろうけれど、ある種の男にとっては、むしろ辟易となる場合もあると思われる。勿論、

男性の求めるものは美貌であり、性的魅力を持つ女であるが、そうしたものを淑徳なアクセサリーによって覆い隠す女、簡単に言えば女らしい女に魅力を感じ、欲望を感じるものなのだと思う。それは、閨房において、女が羞恥に悶える時、一層、官能をそられて責めを加えようとする男の心理につながるものだ。美貌とか性的魅力をむき出しにするよりそんなものにさえ羞恥を感じるような女性とといったものに、何ともいぬ色気が滲んでいる。

優雅な環境で生活している人妻の魅力といったものは、秩序立った生活で磨きがかかり自己の美に生花のような形をととのえる事を知り、落着いた、奥ゆかしい女らしい女のムードを築き上げているという所にあるのではないか。新妻鏡とか人妻椿、また妻恋坂といったような言葉までが何となく美しく濡れたニューアンスを含んでいるように私には感じとれるのである。

女らしい女の秘められたる女の魅力をひき出すような肉体小説を書いてみたいと、そんな事を以前よく考えたものだが、それが交質化し、醜悪化したものが「花と蛇」だと思うが、いや、それも浮足立った自己弁護で、や

っぱり「花と蛇」は人間冒瀆の猥褻の醜悪小説だと、愛読者が見て下さった方が私は助かるのだ。

何度もうくり返して来た事だが、この珍小説は登場する一人一人の女性が全く類型的に過ぎず、それでもくどいくらいに女性の容貌やその肢態を描写し、更に肉体の魅力——もっと極端に言うなれば性器の魅力を描写する事に務めている。美女の性器を美的なものとして、くわしく描写すればそれこそ問題になってしまうが、これを無視しては女の魅力を語る事にならないと思うのだ。それは男性にとって、根源的な根底的な女体に対する魅力である事は間違いないのである。美貌であり、肉体美があり、更に性器美まで有している、こうした女性が男性にとって、完璧な女と云えるのだろうか。

今、この原稿を書く前、KK誌二月号をペラペラと拾い読みしてみたが、かなりの数の小説が掲載されているのに、女体の美しさを緻密に描写した小説が一つも見当たらないという事は情けなかった。裸にした、縛った、ぶった、なぐった、滑った、転んだ、の小説を三百五十円払ったのだから仕方がないとして我慢して読んでいる読者の事を考えると気の

毒になるし、私自身、読者として、官能描写のまるでない味気のない小説を読まされるのは困るのである。私は、女体の美しさと肉体の見事さを描写し、読者の官能をくすぐる事の出来る新人を期待している。はっきり云って、八年もつづいた「花と蛇」は、もう引退してもいい時期なのだ。ところが、この八年間、私のチャンネルにぴったり合ったS小説は遂に登場しなかった。KK誌編集部が私の引退を引き止める理由も、そこにあると思っている。

何だか、生意気にKK誌の批評をしたが、事実、女の描ける作家が一人ぐらい登場していいと思うのである。

また、二十代の頃、芦屋で見かけた美しい人妻以来、私は、人妻と名のつく女性で、あの時の美女を凌駕する女性にこれまでお眼にかかった事はない。自分の好みにぴったり合った女性というものは、そうざらにない事がわかったが、ピンク界で、愚にもつかぬ何年かを過ごしている内、人は、毎日、女の裸を見て暮しているから楽しいだろうなどというが、どれを見ても、歪で、すりへったような女の体、現実の女体に失望してくると空想の女体をやっぱり考える事になる。

正直、何人かの人妻と肉の交渉を持ったが後味のよいものはなく、夢にも見たあの美しい人妻のような女とは二度と逢う事もないと思われる。それどころか、環境によって、登場して来る女も高級なものと低俗なのがあるようで、わけのわからぬ、おかしい人妻とばかりぶつかっているようだ。

この間の映画撮影がすんだ時、私は一人の人妻に相談を持ちかけられた。容色は十人並で、男好きのするタイプであり、私とは長い交際であるピンク映画助監督B君の妻君であった。B君は、この女房のためにこれまで随分と苦労している。というのは、彼女がいわゆる尻軽女で、簡単に他の男性と交渉を持ってしまうのだ。それも、B君の知らない内に知らない男性と交渉を持つのならいいが、同じく映画関係者の、たとえば、カメラマンとかライトマンなどと、そんな事になってしまえば、大体、この種の連中は、口の軽い無責任なのが多いから、Bの女房と俺、うまくやっただけ、と酒場などで仲間の者に誇らしげに語り、お前も早いところやってはどうか、という調子で、妻の姦通した噂は嫌でもB君の耳に入ってくる。

B君も、もうそんな事にはなれっこになっ

ているのかと思っていると、そうではなく、彼は歯を喰いしぼる思いで、ふしだらな妻に対する怒りを必死にこらえているのだった。

そんな性的にだらしない妻を持つほど、男にとって、みじめな事はない。一そ、別れてしまっただけ、と何度か私はB君に忠告したけれど、彼は彼で、彼女の肉体にどうしようもない程、惚れこんでしまっているらしく、口では、やがてそのうちにきっぱり別れるつもりです、と云っているが、そのふんぎりは、なかなかつきそうでないのだ。たしかに、彼の女房は肉感的な女で、また関係した男達の話によると、その扱い方のうまさ、腰の弾力は抜群で、あれじゃ、いくらふしだらな女房とはいえ、Bの奴も、いくら怒ってても、おいそれとは別れる事は出来んだろう、と関係した男達は、哀れなB君の気持など無視して、そんな風に語るのだった。そんなに乗り心地がいいのならこっちも少し遊ばせてもらおうかと、ふとおかしな気分になったが共同便所みたいになった人妻には大して食指はそそられない。B君の気持を思えば、なおさらである。B君は、どこか有島一郎の顔に似たところがあって、性的魅力というものはない上に体力もなく、妻と関係した男を眼の

前にしても喧嘩を吹っかける気もない。自分の運命をあきらめてかかっているというのか憤懣とか屈辱とか後悔とかいったものが、心の底にも表情にも垢のようにこりかたまってまだ三十を少し出たばかりなのに四十半ばの男みたいに老けこみ、そのようなみじめさでもっと自分の心身を汚してみたいといったような、マゾの快感を味わっている風にも受取られるのだ。

そのB君が私の所の映画を手伝った。私は彼の気持を考えて、彼の女房と関係を持った男は採用しなかった。Aという監督がその映画を担当する事になったが、A監督を、あの先生は早撮りが得意で、手を抜く事なく、それでしっかりした映画を作るベランだと私に推薦したのはB君なのである。B君はA監督のまたお気に入り、どこで仕事する時でも、助監督はB君にして欲しいと制作会社に申し出ていたほどで、この二人はつまり、ぴったり息の合ったコンビだったのだ。

ところが、ロケ現場へ私が行った時、この二人の間に妙に重苦しい空気がただよっているのを感じた。撮影中は、A監督の指示を受け、一つ一つハイッハイッとうなずいて、敏捷にかけ廻るB君だし、先生、ここはこうい

う風にしたら如何でしょう、などと丁寧な言葉を使って、監督に意見を出すB君でもあったが、ちょっと何分かの休憩になると、この二人は、人のいる所をさけて、廊下の隅とか裏庭の隅で、何やら、ひそひそ小声で話し合っている。小さなめ事らしかった。時々、A監督が持前のキンキンした声で、いくら言ったら君はわかるんだ、と思わず声を張り上げてゐる。それでいて、撮影が開始されればB君は、監督の云う事は絶対服従で、何でもハイハイやっている。

一体、何をもめていたのか、と仕事ですんで東京へ戻った時、私はB君を酒場へ誘って聞いたのだが、彼は、私には隠し事が出来ず今まで尊敬していたA監督まで自分の妻に手出しするとは、と詠嘆的な愚痴をこぼし出したのである。それには私も呆れたが、今度は妻も真剣で、A監督と一諸になる、と言い出したので始末に困っている、とB君は顔を歪めて酒を飲むのであった。

A監督は、つい二、三カ月ばかり前、細君に逃げられた事は私も人に聞いて知っていたが、するとB君の細君は、その後釜に坐りこむ気になっているらしい。いわば師弟の関係でありながら、何というみっともない話か、

と私も憤慨し、A監督は、それで、君の細君を實際に奪い取る気であるのか、と聞くと、君に愛情を持ってない妻に今更、未練など持たず、男らしく別れてやれ、とB君の尊敬する映画監督は、B君に説教したそうだ。

表面では仲良く、息のあった師弟関係に見えていたが、一皮むけば、歪で醜惡な自利排他主義を発揮するのが、こうした低俗な社会にうごめく低級な人間の特徴かと、そんな風に感じとれる。面白い事に他人の女房を横どりしようとする方が五十年配で、取られる方がそれより二十才も年若く、そして、その師匠に妻を寝とられた哀れなB君の憤激の情を裏返せば、妻に去られるという事において生じる生計の不安と生理の不安がつきまといつてゐる。その時わかった事だが、B君の細君はスナックに勤めに出ていて、B君の稼ぎよりいい収入を得ているのであった。

以前から私が意見して、すぐに他人と浮名を流すような尻軽女を女房にしているは自分が馬鹿扱いされるぞ、と云つても、B君は別れる時が来れば必ず、あんな女とは別れますよ、と妙にはっきりしなかったが、生計費の大部分と性欲の相手を引受けてくれる女が出て来ない限り、別れるにも別れられず、浮気

しまくっている妻を彼はがまんして許していたわけだ。腹を立てて蹴とばしたりすれば、妻は必ずそれをきっかけに逃げ出すにきまつているから、頼むからもう二度と浮気しないでくれ、と彼はその度、涙を流して妻に哀願するのだそうだ。涙なんかは少し練習すればいくらでも出て来るそうで、俺ほど哀れな男がこの世にいるだろうか、と思うと、とめどもなく涙は流れて、ふと快感めいたものを感じ、というB君は、やはり少し、Mのけがあるようだ。

涙が乾いたあとは、やがて、この女は俺から逃げるのだから、その対策を構じるために、と、B君は以前から懇意にしている酒場女などを口説いて廻るのだが、なかなかうまい具合にひっかってこないそうだ。

事ここに至ると、人間の愛情なんてどのような形をなしているものなのか、わけがわからなくなってくる。五十年配のA監督も、弟子の妻を獲得する事によって、前妻に逃げられた腹立たしさと孤独を解消させる事が出来これも実際のところ、彼女の働きによって生計も安定し、何よりもその年で、若い肉体を相手に出来るという事は有難いに違いない。

それでいて、彼女の愛情が根本的な問題だ

などとA監督とB君は口論したりして、考えれば馬鹿みたいな話である。

彼等が撮影した映画の封切が始まって間もなく、今度はB君の細君から私の所へ電話がかかって来た。やっぱり、A監督と一緒にいたいという事で、何か私の意見を求めているような調子である。私は彼女と渋谷の喫茶店で逢った。彼女はすでにB君のもとから逃げ出し、A監督のアパートへ転がりこんでいた。

まだB君は女房に逃げられていい体制が整っていないのだから、もう少し時期を待って逃げてやった方がよかったのではないかと私が苦笑して見せると、Bのような男と一緒にいては自分の将来の見通しが全く立たないからA監督のもとへ走ったと彼女は言うのだ。たかがピンクの監督とくっついて、将来の見通しは大して明るくなるわけでもなし、と嫌味な事をこちらが云い出すより先に、彼女は、Bとはお金で話をつける事にしました、とはっきりした口調で言うのである。B君に手切金を払うというのだ。それは、B君が要求したものではなく、A監督がはっきりけじめをつける意味で、B君にそれだけの事はしておくべきだと言い出し、何日か前、B君を

呼び出して話をつけたそうである。捨てられた男というみじめな気分と、しかも、女を奪ったのは日頃、敬愛していた監督という観念に悲しく口惜しく、恐らくB君は自棄酒をぐいぐいあふりながらA監督の話を聞いた事だろう。女房も女房で、何年か一緒に暮した亭主の悶え苦しむ横顔を、新しい亭主と一緒に見つめながら、そんな宣告をしたのだから、一種の異常性格者だ。亭主に対する愛情はすでに喪失したとはいえ、亭主に代る男が出現したというわけで、忽ち、牛を馬に乗りかえるような神経の人妻——こんなのも世間にはいるのかと、その人妻という語感の持つ清浄さがバラバラにくずれ落ちた感になった。

B君に支払われる手切金はたったの十数万円で、その金を持って、場末の酒場の女でも口説き落とし、ものにしてはどうか、というような意味に解釈されぬ事はない。しかも、呆れた事には、彼女は、A監督の次の仕事は何時頃になりますか、と、もうA監督の女房気どりで、私の所のプロでは次回作もA監督に仕事させる気であるときめてかかっているのだ。そして、申訳ないが十万円を前貸りしたと云うのである。それで、B君に対する手切金を支払うつもりでいるらしい。

私は不愉快になって、次の仕事は、A監督ではなくE監督に仕事させる予定だと、わざと、そっけない云い方をした。「まあ、そうなんですか」と彼女は眼をパチクリし、解せない表情になるのである。

それからしばらくたって、私はスタジオでバツタリB君に逢ったが、苦悩と焦躁で恐らく土色の表情になってるだろうと思っていたのに彼は案外と元気で、Sプロの仕事をしてかけずっていた。私を見ると、近くの喫茶店へ誘って、「あいつら、まだ約束の十万円を持って来ないですよ」と憤慨して見せるのである。それから、A監督は、どここのプロの仕事をしたが、自分を助手としてそれに採用せず、しかも、ギャラを受取っているのに約束のものを渡そうとしない、とA監督の掌をかえしたような不人情ぶりを慨嘆、こうなれば、こちらも意地で、どうしても十万円は彼から取上げて見せる、といった闘魂のようなものをムキ出しにしているのだが、そこには、やはり、女房を寝取られた恨みというものがかもっていた。

ただ、私が感心させられた事は、B君は、恨みは恨みとして、A監督の助手としては、やはり働きたがっている事であった。あれ程

小説

いたずら

千恵

仕事のやりいい監督はない、とそれだけは相
交らずA監督を賞讃し、しかし、あの金だけ
はどうしても受取らねば腹の虫が治まらぬと
いきまいている。

そんな金を受取ったところで、女を師匠に
奪われたという観念が割り切れるものでもあ
るまい。

私はふと、もう一度A監督を採用しそれに
B君をまた助手としてつけてみようと考え、
それをB君に云うと、彼は、ぜひお願いしま
す、と云う。そして、A監督に支払う監督料
は、あの時の約束の金として、自分に支払っ
てほしい、と云うのであった。彼は、仕事と
私生活は別に考えると云うものの、彼は割り

切れても、私には、どうも割り切れぬ矛盾の
ようなものを覚えるのである。

こうした低俗な社会に棲息していると、こ
のような奇妙な男女関係をよく見かけるもの
だ。

正常な人間や異常な人間達の悲喜劇に、私
は生々しい興味を覚えてしまふのだが、この
みじめな生活圏内から一生、脱却出来そうも
なく、魂と肉とをすりつぶしていく人妻を見
て、また空想の美しい人妻に思慕はつのるば
かりである。

三日ばかり前であったが、B君から私の所
へ電話があつて、クリスマスの夜、A監督の
もとへ逃げた女房から連絡があつて、彼は彼

振り返ってみますと、私と鏡とのおつきあ
いは随分と昔からで、あの恍惚を、鏡の手助
けで最初に知ったのは、たしか十六才の時だ
ったと思います。当初は鏡の中に自分の裸身
を見るだけで、眩しいような恍惚をおぼえた
私も、二十四才になった現在では、もうそれ
ほど純情ではなくなっているのです。そして
考えつくあらゆる方法を試みた末、自己愛か
ら浣腸を始めとする自虐へと変化し、その鏡
の中で悶える肢体にすら、だんだんと色あせ

女と新宿で落合い、ホテルで休息し、また別
れたという。そんな事を電話で私に話してく
るB君はかなり酩酊していて、クリスマスの
夜はホテルも、ぼりますね。いつもの倍近く
取りやがるんですよ、と言った。何でもまた逃
げた女房がB君とクリスマスの夜、ホテルで
休息したか、わけがわからない。ただ何とな
く彼等が天衣無縫の生活を享受しているよう
で、それがうらやましく思えた。

クリスマスの夜、夫を捨てた妻が現われて
彼に肉を与え、木枯しの中を去って行く。何
となくそこに人妻の身のはかなさといったも
のを私は感じとったのである。

—(おわり)—

た虚無を覚えるようになってしまいました。
でも欲求はますます増加する一方で、その
昇華法を手さぐりで探し求めた末に、疾駆し
揺れ動く車のシートの上に見出したような気
になったのでございます。

○

車内から、国道二号線の水銀灯が流れ去る
の横眼にしながら、心地よい車の振動に身を
任せているうち、無意識で悪癖にふけてい
るのに気がつき、あわてて自分を取り戻した

告白

いた

小杉

ものの、その誘惑を振り捨てる事が出来なかったのです。

幸い運転手さんの真後ろに深く腰を降ろしてしまいましたので、振り返って見られることはなかったのですが、自分のしていることに気が付いてからは、そのスリルも加わって背中がカッカと燃え上るような気分になってしまったのでした。

お恥かしいことですが私は常でさえ非常に体臭の濃い女なのです。鏡相手の恍惚境で憶えがあるのですが、そんな時の体臭は、自身でわかるほど強いのです。おそらく運転手さんは、何らかの異臭に気付いたことと思いますが、目的地へついた時には、変な顔一つせず、私を残して走り去って行きました。思わぬ発見？に、私は強く惹かれる気持

を押えきれず、今度は充分意識的に次の日の夕方、タクシーに手を挙げました。

その目的ですから服装も考えて、ヒダのついたフレイヤースカートの超ミニにし、体にぴったりする、ニットの白いタートルネックセーターを着ました。そして前日とは違って、運転手さんがちょっと首を廻すと見えそうなななめ後ろのシートに、腰を深く入れて掛けるようにしたのでした。

自虐的なスリルは、私の意識の中で大きくふくれ上り、この娘らしからぬプレイ？の効果を高めてくれました。

もちろん運転手さんは、前日の人とは全くの別人でしたが、おそらく何かは気付いただろうとは思っています。でも、車内ミラーをのぞいたようでもなく、ごく普通の態度で、私が物足りなく思うほど早く、指定場所まで走り抜けてしまったのでした。

もし、不良運転手で不遠慮に振り返えられて、カラカイの言葉でも投げつけられたら……。きっと私は、被虐的期待の甘い想念などはふきとんでしまって、本当に羞恥のために失神してしまうかも知れません。……でも、あまりにもあっけない無反応さには、すこし物足りない思いで、去りゆくタクシーの

尾灯を淋しく見送りました。

このようなことなら、結局のところ、走る車も、運転手さんの後姿も、私にとってはあの鏡と変りないというわけです。

○

くやしさとじれったさの混じり合った気持が、恍惚を求める欲求を余計強くするのでしようか、私はいらだたしい気分で、知らぬ間に準備にかかっていました。

とり立てて計画した覚えはないのですが、自分がもう一度タクシーに乗ろうとしているのに気付いた時には、ためらいなく化粧品をバッグに入れ始めていましたから、日頃、夢みていたことが自然と集まってきたに違いありません。でもそうしているうちに、ふと今日はこうしてみようという案が、具体的に頭の中でひらめき始めたのです。

極端に短い、真っ赤な超ミニドレスを着て、腰からヒップにかけて、斜めに金鎖のベルトを締めこんで、薄いレインコートでそのキザな服装を隠した私は、用具？を入れた化粧バッグを提げて家を出ました。

夕暮れに行き交う人の間を縫って駅まで行くと、構内のおトイレで計画通りのお化粧をしたのです。

グイと長く眉をひき、つけマッゲを貼りつけ、濃いアイラインにアイシャドウ。唇に派手なモモ色の口紅を塗って、髪の毛をアップにまとめ上げた私。

自分でもいうのもおかしいのですが、こんなキザな化粧をしても、場末のバーの女のような荒れ果てたという感じはないと思います。

レインコートを脱ぐと、超ミニのスカートからのぞく太腿の艶々しさは、自分ながら満足出来ますし、小さな鏡の中の私の顔は、ドギツイ化粧ながら健康な若々しさがあると思います。少なくとも、十九か二十のフーテン娘に見えたのではないかとうぬぼれています。

でも、こんなキザな化粧と服装をすると、きっと家人でさえ私とは気が付かないでしょう。私自身でも別人の感じですから……。

トイレから出ると、自意識過剰のセイかも知れませんが、数多くの視線が、一斉に私に集中する思いでした。その中を強いてさり気なく歩く私の後姿は、金メッキの鎖バンドが斜めにひっかかったお尻がクリクリと左右に動き、スカートレスという方がピッタリする超ミニドレスの太腿とともに、その気のある人には注目の値打があったことでしょう。

ワクワクするような気持を押えて、わざと

ハスッパな仕草で歩道からのり出すようにしていますと、ヘッドライトの中にそんな私を見付けたのでしょうか、手も挙げないのに眼の前にタクシーが停まりました。よさそうなカモ、とても思われたのかも知れません。

車内から私を窺うように見ている運転手さんは中年の感じで、ほがらかそうに笑顔で問いかける仕草をしました。もちろん、乗ることが目的でこうしている私ですから、人のよさそうなこの運転手に賭けてみる気で乗りこんだのでした。

私はドアが閉まるなり、一番車の混んでいるだろうと思う、平野街道越えの有馬行を告げました。案の定、運転手さんは「へー？」という顔付きで振り返ります。「えらい混んでるぜえ、いまの時間なら」というのに私は「お願い、行ってよ」と頼みこむように運転手さんの顔を近々とのぞきこんでやりました。「しょうない、ベッピンさんと一緒やから、揉まれまひよか」と笑う運転手さん。同じ料金で、なるだけ長く乗っていられるようにと考えた私の計画の第一歩は、まず成功したようでした。

前日、前々日の二人の運転手さんのだまり通しとは違い、この朗らかそうな人は、気さ

くに何かと自分から話しかけてきました。私の化粧と服装のセイだろうと思いますが、それを幸いに私もわざとハスッパに、映画の話などから、だんだん大胆な話題を冗談めかして口に出しましたら、運転手さんは、さして驚いたふうでもなく話にのってきてくれたのです。

職業柄、いろいろな人との接触が多い故でしょうが、虚飾を脱ぎ捨てた人間が一面をむき出しにして、客席で乱れた行為をする模様などの話題は豊富です。

私はその話を聞きながら、気持がグングン昂揚してくるのを覚えました。それに、今夜は用意してきた小道具がバッグの中で待っているのだという意識が、なんの抵抗も覚えさず私をプレイ？ に踏みきらせました。バッグから取り出したスポンジ・コケシを握りしめて、すこしずつ体をずらせて用意しながら、私の狙いの核芯に話を持って行こうとしました。

「新聞で、お客の娘をどこかへ連れて行く運ちゃんがいる、なんて読んだことあるんだけど、ホントなの」

「アホなこと、そんなことしたらいっぺんに手がうしろに廻るがな」

「なら、あの記事はウソなの？」

「もし、そんな事件があったんやったら、営業車やのうて、たちの悪い白タクやろ」

「白タクやと、そんなこともあるの？」

「カモ探しのヤツやったらやりかねんナ」

すでに、プレイ？を開始していた私は、

その一言が被虐の連想に連なって、気持をつき上げられた想いになりました。

「連れて行かれた娘さんは、どうされるんやろネ」

「サア、まさか殺されはせんやろうが、ま、そんなのにかかったら、無事ですむいうことはないやろナ」

「お、おもちやに、さ、されるの？」

私は身心共に燃え上って、つい声も喘ぎの調子が出てしまいます。運転手さんはじっと前方を見詰めたままハンドルを握っていましたが、少し間を置いて返事してくれました。

「やろうナ、きつと」

「に、にげ、出せばいいのに……」

喘ぎたいのを押えるのは楽ではありませんが、私は出来るだけ平然とした口ぶりです。たつもりです。

また、一息、間をおいて答えが返ってきました。

「そんなヤツらは、はじめからそのつもりでいよるんや。カモツタ女を、そう簡単に逃げられるようなことはせんやろ」

私の昂揚は、その言葉でますます激しさを増してきます。

「あば、れたら、ええやない、の」

「フッフフ、あばれられんようにするんやろナ、きつと」

「でも、一人と一人やったら……」

私は運転手さんの口から「縛る」という言葉がとび出すのを、心のどこかで期待していたようです。

「そう、思うままに、は、されること、ないで、しょう」

運転手さんの顔が、チラッと振り向きかけたようですが、すぐ前方注視に戻ります。

「手足を動けんようにすることぐらい、ヤツらには簡単なこっちゃ」

期待する言葉は出てきません。恍惚の一瞬が、もう一步のところピタリと止った感じで私はいらだたしい思いがしました。

「声を、大声を出せ、ば、いい、じゃない」

「叫べないようにするやろナ」

私はじりじりするような気持で黙りました。が、脳裡一杯に「花と蛇」の静子夫人の、縄

によって強制されている華麗な姿勢が浮かび上っていたのです。

ガクンと車が停りました。その僅かな衝激が、私の強い体臭を一層強める手伝いをした結果になったのでした。

しばらくの間は、私をとり巻く周囲のものがすべてが姿を消しました。いえ、私自身ですらどこかへ消えた感じでした。

ゆらゆらと揺られるにまかせている私の耳に、どこか遠くの方から呼びかけているような声がとび込んできました。

ハッとなって聞き直すと、

「いや、もうすぐ着くっていうたんや」

と答えて運転手さんは相変わらずハンドルを握ったままでした。

指定した場所に着いた以上は、降りなければなりません。私は仕方なく身仕度をしました。いくらなんでも、そのまま引返してくれるよう頼む心臓はありません。

「激しいナあんたは。危いぜ、氣いつけナ」
運転手さんは、降りた私に窓からいうのです。気付いていたことの明示です。

「悪いヤツに縛られたりせんようにナ」

カーッと火照る私の前を、車は大きくUターンして走り去って行きました。



(男性ファッション後記)

セックスレスファッション二題

松山壮吉

本誌の昨年十二月号に「男性ファッションについての一考察」という小文をとりあげて貰った。その中で私は、男女の服装の同一化特に男性の服装の女性化についてやや具体的に考察し、ユニセックスモードの深化と普及の為の若干のアイデアを記した。

私としては、時代より半歩位は進んだつもりアイデアだったのだが、十一月の半ばには新宿の、続いて渋谷の各一流百貨店でセックスレスコーナーが開設されてなかなかの売行きを示し、一流誌にデパート支配人の、私の小文で「何れはそこまでいく筈のもの」と、ごく控え目に記した男性用パンティ・ストッキングについて、既に新製品の開発中であると述べた談話が出る仕儀となった。

世の中は三日見ぬ間の桜花。変化のスピードは予想以上に早く、何事も昨日の異常は今日の正常で明日は陳腐となる兆しかも知れない。とにかく次に二、三の記事を御紹介して

みる。

第一は文芸春秋社発行の「諸君」(四四年度の創刊だが、日本文化会議がてこ入れし、月七万の安定部数を持っている硬派の有力誌である)四五年一月号の「セックスレス時代の開幕」と題する記事の中から、デパート支配人の談話を要約してみる。

「セックスレス売場とは、男性のお客様も女性のお客様も、衣類から装身具その他に至るまで、同じものをお求めいただけるような売場です。一九七〇年代のファッションの方向は、男性の女性化ならびに女性の男性化、すなわち人類のセックスレス化であるという結論が、マーケティング・リサーチ部門から出されましたので、セックスレス売場の開設にふみ切った次第です。

男のハンドバッグは、ほんの数年前でしたら全くのアンシンカブル・アイデアだったわけですが、研究開発の結果、今日では立派な

商品として売行きも伸びています。近い将来には男女どちらが用いてもよいハンドバッグがつくられるようになります。

女性用のワイシャツは、デザインなど男性用と全く同じになっていますが、ボタンのつけ方も男性用のものと統一したものは、当然セックスレス時代のワイシャツとして売行きが増してゆくことになります。

下着類も生地からデザインまで男女両用のものとなります。パンティ・ストッキングも男性用の新製品を開発中です。はきものの方も、もう今でも婦人靴が男性的になり、男子靴が女性化しています。セックスレス売場では男女両用の靴を売出し、コストダウンから消費者価格も幾分下げられるものと期待しています。

たとえば高校生の男の子と女の子のいるような核家族を考えると、セックスレス売場の商品が、家族の誰でも使える事になります。

リバーシブルの巻スカートなど御夫婦で御共用いただけると存じます。化粧品の方でも、セックスレスコロニーなどは、主婦の方がオーデコロンとしてお使いになり、御主人はアフターシェーブローションにお使い下さればよろしい寸法です」

第二は週刊新潮一二月二七日号「第三の商品『セックスレス』で勝負する人」から、

ある衣料品メーカーの宣伝課長氏談

「薄い靴下を通して見える男の臍毛、これがたまらなくいいらしいんですね、むろん女の子に。それで最近では女のシームレスと同じ材料で、ピタッと脚に吸いつく男の靴下を作っています。色は黒ですが、これが冬でも結構売れているんですよ。」

ステテコ、モモヒキのかわりに、女物のシームレスをはく傾向はだいぶ前からあった。これだと靴下留がある。そこで、そのいらぬないパンティ・ストッキングのファンが、ここ二年ぐらいの間にふえていますね。小便をするときにどうするのか、私にもちょっとわからないが。かと思うと、男のパジャマのサイズの小さいのを女のコが買っている。その方が断然カッコイイというんだね。ジーパンも男物の、前にチャックのあるのを買う。女物のジーパンの売行はさっぱりですよ」

新宿の百貨店の広告課長氏談

「男の着るスケスケ・ブラウスや、パンタロン。小さくてピッタリするのが、世界的な流行です。去年の秋頃から話はあったんだが、この五月に向うへ行くと、アメリカ、フランス、イギリス、どこに行ってもそういう店があるんですよ。それで、日本でもこれはいけるんじゃないか。カンですよ。雑誌なんかにもそういうコトバが出て来だした。それは何故か、どういう意味があるのか考えていたら何もやれない。カンの商売ですよ」

ある衣料品メーカーでは、従来、男物の課と女物の課の二つに別れていたが、最近この双方で扱う品物がほとんど同じものになったため、二つの課を廃止して一つにしてはどうかという話も出ている由。

○
こういう記事がパツと出て来たのが十一月から十二月、私の小文が活字になったのが十月下旬だから、まあ多少は流行に先んじたことになるとは知れない。

私の小文を本誌に出していただいて一カ月ばかりしてから、ほぼ同趣旨の私の文がSMマガジンにも掲載された。これは全く私の不行届きで、本誌にもマガジンにも御迷惑をおかけして、あいすまなく思っている。

不始末の上、不服をいってはずまぬことだ

が、マガジンで私の文にふんだんに添えて下さったイラストは、むくつけき中年のゴリラ男がニタニタ笑いながら女物の下着をつけつつある様な、何とも醜怪、グロテスクなものであった。編集者にもイラスト氏にも、大の男が女物の下着や女性的服飾に興味を持つなど、醜怪なる「変態」であるとして受け取られた事がよく表われていた。カッコイイ若者達の間で、パンティ・ストッキングやスケスケブラウスが、イカしたお洒落になっている時代に、案外に古い感覚である。

この分では、縛りや鞭に対する理解もどうであろうか。

ボロは下げても心は錦、身過ぎ世過ぎにSMを扱ってはいても、心底には古き良き時代の修身教科書が、ちゃんと生きています、と云うのも、邦家の為には慶賀すべきことかは知らず、そういう角度から捉えられるSMF一般が結局、泥臭く暗いものとなり、明るく都会的なSMFの本質が、見失われるのではないだろうか。

マガジンに限らない。SMF関係各誌、大人の玩具各店、当事者はごくノーマルな感覚の持主だろう。経営者や編集者が趣味人でも企業として成立し難いだろうが、出来得ればSMFに関係するほどの人は、SMFに関する現代的なセンスと明るい自信を持っていてほしいと願うのである。

珍 書 探 訪

夜

這

奇

譚

 一名
 (変態猥褻往来)

斎 藤 夜 居

文芸市場社本には今日でも入手し易いものと、仲々被見し難いものがある。保存佳良の美本は別として梅原北明の市場社のすべてが高価になっているとも云えない。然し市価は以前にくらべると随分たかくなっているのは事実である。

これから紹介する『夜這奇譚』は知られている割合には現品の残存数が少なく、既に発行当時から珍本視されていたという。書狂城市郎さんも最近お会いした折にきいたがこの書は見たことも勿論読んだこともないと云った。『夜這奇譚』は我国の艶笑本には珍らしくユーモアに富んでいるが、もとより全話

が滑稽譚というわけでもない。

記録によれば、原本はピンク色総アート六十斤使用、十三行四十三字詰、四六版。カットは巻頭のみ。奥付に中華民国十七年三月一日印刷(非売品)、編輯発行兼印刷人張門慶發行所中華民國上海法界霞飛路、となつてゐるが勿論これは例によつて北明一流のヨタで本当は昭和三年三月頃、東京市小石川区大塚窪町時代の文芸市場社の発行である。

中野栄三氏の『新稿・奇書集覧』の「へ」の部の「変態猥褻往来」には次の如く記載されている。

「文芸市場社の上海版と称せられるシヤス

トラ社刊で、この名で次の通り各篇刊行の発表があつたが、第一巻きりで以下未刊である。よつてこの変態猥褻往来は恰も別名『夜這奇譚』と同一の書と思われている。

- (1)夜這の巻(昭和3・4)
 以下未刊 (2)魔窟の巻 (3)寄席芸人の巻
 (4)泥棒の巻 (5)浮浪淫売婦の巻 (6)御座敷落語の巻 (7)カイヤの巻 (8)乞食の巻 (9)タカモノの巻 (10)男妾の巻 (11)不良少女の巻 (12)香具師の巻

昭和十一年には大阪の軟派屋から、この書が『浮世綺談』と称して複製頒布されていた。また同年東京の世界文学研究会では、

『征服された貞操』とて四六判二四〇頁のものが頒布されているが、これも同書の改題本である。」

一連の叢書として、刊行を予定したものが、第一巻のみでおわってしまった。その後に偽版が二種でていることでも、この書の流布が尠なかったことを物語っている。

これは更に戦後になってからも孔版印刷による復元版が、昭和二十八年三月に普及版一四八部特製五部を限定発行されている。東京神田神保町参誠堂書店内愛雨恵雄文庫の刊行

となっているが、勿論真つ赤な嘘で、関西在住のある趣味家の発行にかかわるもの。勿論売品ではない。本文三度刷で手数をかけた孔版印刷であった。原本は入手できなかったもので、以下この愛雨恵雄文庫本によってご紹介する。

第一話より

（巻頭に二頁程夜這論が付いているが、これは省略する）

これは或る男の話である。

本郷真砂町（註・現文京区本郷四丁目）辺りの下宿屋に宿泊していた時分のことで、その晩は可なり蒸し暑い晩であった。彼は廊下づたいに夜更けてから便所に行った。行く時は慥かに開いていなかった障子が、不思議にも二三寸開け放されてあった。

彼は何気なく中を覗いて見た。彼の胸をひどくづきんと打った。それも無理からぬことであった。蚊帳の

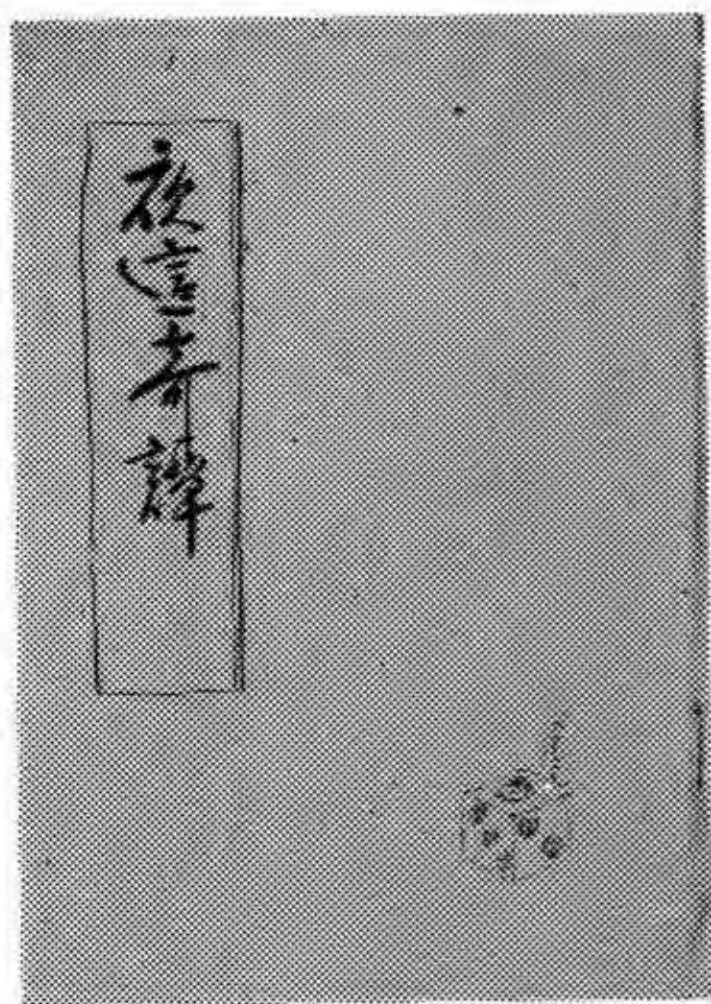
中には、二十歳をちょっと過ぎた許りの小づくりな、丸々とした娘が、腹から腰は薄い布団でかくされていたが、その他の部分は点け放しの電灯で、真っ白に照らされているのであった。彼はそこまで確かめると、一時に血が逆上して、危ぶなく倒れそうになった。が、併しそれでも懸命に眼をこすり見直そうとした。

そう努めることによって、彼の眼は益々かすんで行った。でも女は殆ど無関心の如く安らかに眠っていた。それが本当に眠っていたのか、狸であるか、逆上した彼には解らなかったが、動かないことだけは慥かであった。

彼は幾度か這入ろうかと決心したが、ついぞ見たことのない女であるのと、余りにぶしつけな行動とに、すっかりおじけ込んで、容易に這入れなかった。二分、三分、五分と経っても彼はちいっと女の寝相の美しさに見惚れていた。処が、突然どこかの部屋の障子が開き、ばたばたと足音が便所の方に消えて行った。彼は驚いて自分の部屋へ駆け込みそのまま寝てみたが、とても寝つかれるものではなかった。

彼は再び起き上って、それも抜き足差し足で、問題の部屋の前に来てみたが、何時の間

復元版『夜 這 奇 譚』扉



にか障子がびっしり閉め切ってあった。彼はそれを開ける勇氣もなく、暫く立っていたがやがて又その足で用のない便所に行った。

間もなく引き返えして見ると、閉まっているべき障子が、前よりずっと広く開け放されてあった。彼は、その意外な出来事にすっかり度胆をぬかれ、忍び足でその前を通り抜けたが、併し内部の光景を見ることだけは決して怠ってはいなかった。通りすがりに横眼でにらんだ時、彼が直感したことは、女が上を向いて寝ているということであった。そう確かめると、急に元気づき直ちに引返した。そして、息苦しさを抑えながらよく見ると丁度お尻の処から下が丸出しであった。そう思うと又しても眼がかすみ全身がしびれ渡った。

突然、女が「うん」と極く微かな唸り声を出したと思うと、もぐもぐと布団を蹴り大の字形になったが、それは文字通りの素裸で、ズロース一つしていなかった。女の本当の美しさを見せつけられた彼は、夢のような快感にもてあそばれ昏酔してしまった。と云うよりは寧ろ意識を失った狂人の如くになった。殊に真つ白な肉体に、ちょんぼりとほんの少しではあったが、……彩られているのを見ると、たとえどうあろうと肉迫せずにはい

られなかった。彼は何時の間にか四つ足になって、女の寢床の傍に寄った。そして、又暫くその美しさを見ていたが、やがて堪えがたくなって、ふるえる手をももの処に持つて行った。けれども女は無言のまま、すうすうと微かな寝息を立てていた。彼はその手をふっくり盛り上った部分にはこぶと、……。女が彼を迎えていることが、段々はっきりして来たので、彼は堪らなくなって、女に嚙尻りついでしまった。その時、女が不意に眼を開けた。そして微かな声で、

「閉めときなさいよ」

と囁いた。全く彼は余りひどく興奮していたため、すっかり忘れていたのであった。彼は障子を閉めると、再び女の傍に寄って、先ず乳房をなめてみた。女は熱情的な眼で彼を睨んだり、力限り抱きしめたりした。そうこうしているうちに、彼はいつの間にか吸い込まれるように、ずるずると奥深く……。んでしまっていたが、余りに準備が長が過ぎたために、いざという時になって、最大急行で目的を遂げてしまった。門前に意気地なくもヒレ伏したという始末だったが、女はまだ情熱的な眼で彼を見つめながら、

「ね、貴方。あたしに五円かして頂戴な、い

いでしょう、ね、五円だけ」

と訴えるように云った。そう云われてみると、罪惡を犯した彼にはそれを否定する何ものも持っていなかったたので、要求通りに女に金を渡したのであった。

翌朝、彼は恐る恐る女中に昨夜の女のことを訊いた。女中は皮肉そうな眼を彼に向けて「あの女は泥棒よ、夜逃げしたの。ずいぶんひどい女ね」

と云った。「本当か！」と彼は衝動的に叫んだ。そしてすぐに顔をそむけたが、何んとなく心恥しい気がしたのである。

この話は説明するまでもなく一種の新手の密売淫であって、空想ではこうまでは書けないから、事実あった体験談であろう。男はあくまでも夜這行為として信じ切ってしまった所におかし味が、「余りに準備が長が過ぎたために」とある過般の心理と行為が、まるで手に取るようにわかって滑稽風流譚としても上々の作である。原文一部省略以下も同じ。

第二話より

「夜這は必ずしも変態性欲とは云えないが、併しながら、夜這に習慣づけられると、往々にして変態性欲者になる場合がある。そ

の中でも、殊に甚だしいものは、夜這をしな
ければ、性感が起らない。越後の或る部落
に妻子もあるのに、殆ど三日にあげず夜這
をするので、その土地では可なり危険人物と
看做された男があり……」その男との夜這問
答だが、

「忍んで行く時の気持が何よりもいいんだ。

忍び足で、もづもづと行く時の気持ったらあ
りゃしないよ」

「それじゃ、じぶんの嫌アの処へ忍んで行っ
たらいいじゃないか」

「駄目だ！ 他家へ行かなくちゃ」

「ああ、それじゃ何んだね、刺戟がないから
だろう」

「何んだか知らないが兎に角、厳しい家ほど
いい感じがするんだ。おい誰だ！」と叱られ
た時なんかよく射精するよ」

「随分また気の早い奴だなあ」

「もっとも、夜這に行くという気持ちだけで
もう堪まらないんだ。だから忍び込んだ時は
モウ快感の絶頂なんだよ、アハハ……」

等々。今日のように人権問題がやかましく
なつてはこんな放言はゆるされないが、危険
もまた性的興奮を誘う手助けとなること、し
かも通常以上の快感度が得られる、というこ

とになってしまつたら、その性欲にはやはり
病的なものがあると云うべきであろう。

第三話より

輪姦（多人数の男たちによって、女が犯さ
れること）の話で夜這談ではない。明治時代
にある山村における出来事だと語り始める。

お福という娘が村の若者達にひどく憎まれ
ていた。どういう訳かで憎まれていたのか、
その辺のことは一切わからないが、機会があ
れば彼女をとちめて呉れんものと幾人かの
青年達がその時期の到来を待ち構えていたの
であった。

処で、彼女が隣村へ使いに行った帰り途、
村中で最も好男子として知られた清太郎とい
う青年が待ち伏せしていて、突然あらわれ、
「お福さん、待ちなよ、一緒に行こうよ」

と熱情的な態度でよりかかつて行った。彼
女は青年に深い思慮があらうとは無論、知ら
なかった。

「だし抜けにびっくりするじゃないか」と云
つては見たが、日頃恋慕っている男のことと
あるから、すごい態度も見せなかった。と
云うより彼女の若い血汐は歓喜の高鳴りでワ
クワクと躍っていた。殊に頑丈な男の右の手

がふっくりとした肩を抱きしめ、左の手で乳
房をなぶっているのが堪えがたい興奮材料で
あった。

「よしなよ、清さん」と云い云い男の手をと
つてかたく握った。

「いいじゃないか」と男は女の前を着物の上
から抑えた。

「厭よ、こんなところで」

「じゃ、向うへ行こうよ」

男は女の肩に縋りつくように歩き出した。

「どこへ行くのよ」

それでも極りわるげに男を横眼で睨んだ。
青年は無言のまま女を引きずるように洗い流
された美しい河原に出た。夏の月は気持ちよ
く二つの影を残しつつ松原の中に消えて行っ
た。さらさらとした小砂の処へ来ると二人は
突然、停った。

「まあ、ここにすわれよ」と男は女の手を強
く引いた。都会の女のように着物を命から二
番目の如く考えている者には到底出来ない芸
当だが、そこへ行くと田舎娘は無頓着なもの
である。云わるる尽に小砂の上に坐った。女
が坐ると同時に男は女を押し倒した。彼女は
反抗もせずされる俤に身をまかせた。……彼
女は、殆ど意識を失つたように、顔に両手を

あてたなりグツタリとされるままじっとして
いた。若ざかりの清太郎は間もなく……「も
う少し、モウちょっ……」と追いすがり抱
きつく女を突き飛ばすように逃げ出してしま
った。お福は生憎紙の持合せがなかったのだ
しかたが無いので湯もじでぬぐっていると、
突然、樹影から手拭いで頬かむりをした男が
現れ、無言のまま彼女を押えつけたのだ。

お福は余りにだしぬけなので、可なり驚い
たが、月光でよく見るとやっぱり村の青年で
あったから、「万さんじゃないか、何する
の」と叫んだ。その時男はもう既に頑丈な身
体で彼女が身動き出来ぬ様にしてしまった。

「厭だよ、何するんだ」

「いいじゃねえか、清公にさせておいて己れ
にはさせないって言うのか」

……続けざまなので、そのうち彼女は全身
がしびれ渡る程烈しく興奮し、昏酔してしま
ったが、それで済んだのではない。第二の男
が又しても逃げるように立去ると、更に別の
青年が現れたではないか。この時になって初
めてやっと気がついた。「清さん、よくもあ
たしをだましたね」と恨みごとを言った。

いつの間にか疲労の中に激烈な興奮が彼女
を支配し恐怖からくる快感のために、すっか

り降伏してしまったのである。

そして次、又次と青年たちがおそいかかっ
て来るので、もう彼女には明瞭な意識が残ら
ず、時々烈しい頭痛を感じることもあったが
しかしそれさえまるで夢の中の苦痛に過ぎな
かった。

彼女が全く意識を失ったのは夜明け近くで
あった。夜が明けても、彼女の意識は回復し
なかった。大の字形になって、まるで死人の
如くスウスウと微かな鼻息を立てて深いねむ
りに入っていた。夜が明けると間もなく村の
者が野良へ行く途中、彼女の醜い、いたいた
しい光景を発見し、大騒ぎを始めた。

第七話より

この話は実際に体験したという男の話であ
るから嘘ではない。場所は伊勢国一志郡のあ
る山村の尼寺に起った事件である。

尤も明治時代はこの土地に限らず田舎芝居
の多くは、随分いかかわしいものが多かった
らしい。大抵は小屋掛けか、さもなくば神
社の御堂とか、乃至は又は寺院とかを借りて
そこで興行をやるのが普通だった。

その時も矢ッ張りその例に洩れず、ある尼
寺を借りてそこで幕を開いたのであった。而

かも本堂が舞台で見物席は屋根もない処に筵
を敷いたものであった。だから舞台裏はちょ
っと勝手がちがいが如来様や、阿弥陀様が厳め
しく控えて居られると云うそれ自体が既に劇
的であった。先ずこうした設備で幕が開けら
れた。

そこで体験者の一人である役者の某が幕あ
いに小用の必要を感じ不案内な本堂の裏の廊
下づたいにマゴマゴしていると、急に人の囁
く声がしたので、案内を求めるつもりでその
方面に近寄ると、それが高い女の声であった
から彼は急に変な感じにかわり、聞くとはな
しに衝動的に停り、ちょっと聞耳を立てた。
が、とてもその声が病人かなんかのように、
息苦しく感じられるので、戸の隙間から中を
覗いてみた。そこには薄暗い光線に照らされ
た二人の男女がびったり寄り合い固く抱擁し
キッスをしている最中であつた。

男は四十前後で村の者であり、女は、いう
までもなく頭を丸めた二十七、八の尼僧であ
つた。彼はその情景をみると小用などは何時
の間にか忘れ、息づまるような苦しさで二人
の行動を見入った。村の男は仲々直接行為に
入らずしきりに前奏曲で尼僧をじらせている
ので、尼さんはだんだん興奮してきたところ

だ。

「裸になれよ」と突然男は言った。

「だって、誰れか来やしない？」

「誰れも来るもんか、己れもなるから」と手早く帯をといた。尼僧も急に思い出したように素裸になった。女の肉体はあぶらぎって美

しく艶々していた。どうしてこんないい肉体の持主が尼僧などになったかと疑がわれる程美しくしなやかだった。女は裸になるとそこに坐った。男はそれをいきなり突き倒し横にさせて、始めるのかとおもうと又、……芸当で尼僧をさんざもてあそんでいるので、女は

私感 テレビとS M

予世場 良三

放映されてから、毎号のようにK誌上に讃美されている「秋山夫妻の残酷ショー」だが、私も「変態」の一人として、ノーマルな人達には恐らくわからないであろうところの期待と好意のもとに視せて貰った。

しかし、いざ始めてみると落着けなかった。好き者がズバリのものを見るのだから落着けないのが当然……という落着けなさとは質が違う。正直いって、眼を閉じてしまいたい気持ちにかられた。もちろん、女々しいことは自覚しているから、そんな気になっても、その眼を男らしく閉じるどころか益々ヒッパリ開けて視終ったのだが、あの何分間かが非常に長く感じられた。

後でなぜかと考えてみたのだが、帰するところは「テレクサカタ」ということらしい。わが家の茶の間だから、いくら理解

のない女房とはいえ、何も遠慮することはないんだが、ちょうど、まっ昼間にピンク映画やストリップ劇場へ出入するときのようなテレクサイ思いと同然だったのだ。

テレビの性質上、知人のだれかれも視ていようが、その人たちに自分の恥部を晒しているような面映ゆい意識が働いていたようだ。結局、どうごまかそうと縛りに対する背徳感が根強く、大手を振ってのSEX謳歌にはつい抵抗を覚える中年男の悲哀が、私に泌みついているのだろう。

しかし、私がそうだから云うのではないが、やはりS Mは表街道を濶歩すべきものではないように思う。ヒッソリと陶醉すべき性質ではなからうか。ノーマルな性解放は必要事と論じられる先生方でも、本番は公開出来ないだろう……ように。

たまりかねて……とせがんでいる……。役者の某はそれから展開される痴態のいちぶしじゅうを眺めおわって、まるで狂人的な男女の醜行に堪りかねて、思わずよろめいた。そのとたんに戸がガタンと音を立てた。彼は心のなかで、「失敗った」と叫んだ時、尼僧がおどろいて、

「誰方ですか。こちらに来ちゃあ不可ませんよ、ここは今おっとめしている最中なんですから、あっちへ行行って下さい」と、叱りつけた。

随かに何かのおつとめをしているには違いないが、余りにも変ったおつとめなので、役者の某はど胆をぬかれ、すたすたと逃げ出したと云うのである。

元来この種の作物の多くは刊行所は判明するが、作者がはっきりしている場合はいたって少ない。軟派文獻界の宿老坂本篤氏（有光書房）の談話によれば、『夜這奇譚』の作者は石角春之助氏だという。

石角氏については小著『大正昭和艶本資料の探究』（芳賀書店）の一〇六頁から一〇九頁を参照ねがいたい。

創

作

調教師たちの

昼寝どき

宇 光 仙



カット・柴田 貢

第一景 餌

世の中には、人を喰った悪人どもが掃いて捨てるほどに右往左往していることを、知らずにいたわけではございません。だてに年だけをとってはまいりませんでしたが、わたしがその悪人どもの中の最もたちの悪い新米の悪人の手ごめに落ち入ることになるとは、考えられなかったことでございます。

特にわたしの場合は多くの知名の高い方々から祝福されて純白のウエディング・ドレスを

身に装ってまだ三月とたたぬ新妻なのです。

それはそっかしい程唐突なのです。しかしそれだけなら、たとえば、多くの手続きが省略されていきなり結果がもたらされたとかいうように考えることによって、気をしずめることもできます。でもわたしは不可解なままでにうろたえなければなりません。どうもこの企みに夫も一枚かんでいるらしいのです。

夫は三十歳で、一流会社の課長の椅子にあり、仕事一本の堅物というふれ込みでした。お仲人の方のその時のお言葉では、「女の手ひとつ握らずに生きてきた男」なのです。わ

たしは「はい、はい」とただただうなずきました。そんな風に些細なことが、ひとつのキッカケとなり、後はずるずるべったりになり出し、いわゆる平凡な見合い結婚に踏み切る決心を、わたしは自らにうながしました。なぜならわたしは二十五歳の誕生日を迎えようとしていましたし、BGとしてそろそろ見切りをつける機会であることを、丁度、自覚していた時でもあったのです。

「あなたの彼、課長さんですってね。おまけに背が抜群に高くてスマート。あなたはこの世で最も素敵な男性に見染められたわ」

と、目ざとく、わたしの婚約をかぎつけたお友達の誰もが祝って下さいました。わたし自身もそのことを強く信じて彼女らに対して或る種の優越感を持った程でございます。結婚生活に入りました時に、わたしは予想以上に夫が真面目でやさしく、心配ごとなど、どこからも見つけ出すことができないことが、むしろ不満の種でありました。夢のように日が流れました。夫は、世界中の「愛」の歌と「愛」の花と「愛」の言葉を、わたしだけのために捧げて下さいました。

でも一月、二月とかさむにつれ、どうしたことかわたしは『これでいいのかしら?』とある恐ろしい不安を未来に感ぜずにはいられなくなりました。それは夫婦生活についての不安であります。わたしは純白に装うのがふさわしい身であったとはいえ、長い間、現代BGの生活を体験した女性であって夫婦生活に関しては、たとえ誇張があるにせよ、かなりの知識を貯えておりました。したがって、メタルの裏側より勘ぐりますなら、そのような生活に何らかの期待を持っていたればこそ結婚に踏み切ったといっても過言ではありません。

ところが夜ごとの、このようなことは本来

において口にしないのが慣らわしかも知れませんが、そのことをお許し願いますなら、夫との交渉にそれほどどきどきを感ぜられなくなりました。その上にわたしを窮地に追い込んだのは、夫の態度が日々、ひどくそっけなくなったということであります。愛の「あ」の字すら口に出さなくなり、ベッドの中の夫の話題は宇宙の構造にかかわることばかり。わたしは思いあまって、胸の内の苦しみを涙ながらに告白しました。すると夫は実に甲高い声で高笑いをしたのであります。そして翌朝目がさめた時、わたしは見も知らぬ総鏡張りの部屋の中にすえられた檻の中に閉じ込められていたのです。

目ざめました時にわたしは頭がまさにずきんずきんと形容したい位痛むのを感じましたが、それ以上に身体全体、特に手と足が、激痛を伴ってくることに気づきました。そしてわたしはこともあろうに一糸纏うことなく、檻の中のマットレスの上に両足を宙に躍らし倒れていたのです。さらに驚かずにいられたかったことは、右手首と右足首、左手首と左足首がそれぞれ鎖でくくりつけられているのです。しかもそんな様が天井の鏡に鮮明な像となって結ばれているのです。わたしは目

を閉じてしまいました。衝撃的なことです。悪夢にうなされているとしか思えません。その時に、すでに、わたしは新米の悪人の餌となっていたのでございます。

第二景 教練

「二号が気を取りもどしたようだけど」

そういう若い女性の声が近くで聞こえました。そのことによって、わたしはこんなにもあられもない姿を、かなり長く誰かに監視されていたことに気づいたわけですが、羞恥心のたかぶりのために、目を開くことができませんでした。異様なことです。このようなことはありえてよからうはずがないのです。狂っています。わたしに一体どんな落ち度があったというのでしょうか。

「そうだね。じゃ、おれは一号の朝の調教に行ってくるから、ごく簡単に、かつ手短かに心得でも教練してやっておいでくれるかい」若い男の声が、ぼそぼそと聞こえました。

「ええ。結構よ」

という、若い女性の声がさらに聞こえました。しばらくして檻の錠前をはずす音でしょうか、金属音が低くきしみました。そっと目

を少しだけ開きましたところ、まだ少女とおぼしき、あどけなさの残った顔をした女性が檻の中に入ってくる様子がわれました。

でもすぐに目を閉じてしまいました。なぜなら少女は高いハイヒールをはき、クリーム色の袖なしのセーターだけを身につけているきりなのです。わたしはそのようなことに対処すべき習慣を持っておりませんでしたから、一層身体をこわばらせる以外に、なすすべはありませんでした。しかし次には、左手首と左足首とをくくりつけられた附近に痛烈な足げりを食らい、思わず目を開き、悲鳴をあげずにいられませんでした。

「お目ざめのお時間よ」

少女はうすら笑いを口元に浮かべて、動作とはうって変わった甘ったるい口調で、いつてきましたが、どうして返事などできませんでした。わたしの緊張しきった気持は今にも卒倒しそうですね。少女はそんなわたしのことなど全くおかまいなしでした。

「あなたに入校の心得を教練するわ」

と少女はさらにいい寄ってまいりました。わたしには何のことであるのかつゆわかりません。おしだまるより手がありません。すると少女は、先程とは反対の方に足げりを食ら

わせながらも、

「よろしいわね」

と、白々しくもおしとやかぶっていうのです。何という悪人の手先でございましょう。わたしは自由を得ましたら、真っ先にこの少女を告発するでしょう。

少女はわたしの足元にかがみ込みました。そしていきなり、許されたいことを始め出そうとしました。わたしは身体をよじって、そのことを拒絶しました。

「あら、そんな風に人見知りなさるもんじゃないわ。時を無為に見過ごすことは老いを早めるばかりよ」

と意外な顔でわたしの顔を見下しました。

「けがらわしい。触れないで。けだもの」

とわたしはついに、いたたまれずに口走ってしまいました。すると少女は「おっしゃったわね」といわんばかりに肩をすくめながら立ち上がりました。そして、

「けだもの？ けっこうよ」

とそっけなくいうなり、少しの手かげんもなく、ハイヒールの踵でぐいぐいとわたしのお腹をくじり始めたのです。わたしは少女の物の怪にとりつかれたような目付に、てっきり「殺される」と思いました。口惜しい。こ

の上なくも身の上になりにふりかかってきた不幸を悲しまずにいられません。わたしは背筋に冷たいものを感じ、はっきりした口調で許しを請うてしまいました。

「あら、そうお」

と少女はまた肩をすくめてから、ハイヒールをわたしのお腹からどけました。そして親しい友人にでも会った時のようににっこりと微笑してから、わたしの右手首と右足首をくくりつけた鎖だけを解きました。わたしはくじられたお腹をさすって、遠のいて行こうとする意識と戦わなければなりませんでした。

「あなたはわたしの教練通りになさるといいのよ。よけいなことに気は使わないでネ」

と少女は、ふたたびわたしの足元にかがみ込みながらいいました。少女はわたしを畳み込むことをもくろんでいるらしいのです。わたしは抵抗力を失い、そのことは少女を上気嫌にさせました。でも少女が、わたしに髪をまさぐらせながら、

「処女でないということは、とても素晴らしいことだわ」

と呟いた時、わたしは今、自分のなした恥じ知らずな行ないをすべて思い起こし、きらびやかな快感を覚えてしまったのです。わた

しの不用意な息使いからそのことをさっした少女は、いきなりわたしの身体をひき寄せました。わたしは少女の背を両手で囲い、愚かしくも、その嫉妬せずにいられない位の若々しい弾力のある身体と、自分の魅力の及ばない身体の違いを思い知りながら、気を失ってしまったのです。

それは、わたしに対する教練という名の、虐待の第一日目における、ごく軽い肩のみほぐしにすぎなかったのでございます。

第三景 仕込み

わたしを眠りから叩き起こしたのはドラのような金属音でございました。その時にわたしは鎖は解かれていましたので、わずかばかりの自由をば得ていたことになります。

「お食事のお時間よ」

と少女が洗面器のようなボールを檻の中に差し入れていました。そのボールの中には残飯らしい食物が入っている様子が認められました。もちろん、お腹がすいていてもすぐ手が出るわけもなく、わたしはただ眺めているだけでした。そんな風に十分ほどもたった時でございましょうか、

「お食事のお時間は終わってしまいました」

と少女はボールを手にしてさっさと部屋を出て行ったのであります。食事はこの第一日に限っては、一日について一回きりでありました。そのためわたしは、さめざめと、ひもじさに苦しまなければなりませんでした。そんなわたしの事など知っていないかのよう

に、わたしは少女によって部屋から連れ出され、隣の部屋に押し込まれました。そこは真つ白な壁と床の部屋で、中央に人の丈大の姿見ひとつがあるだけです。わたしがおろおろしています眼前に、年の頃は二十五位の若者が待ち構えておりました。若者は全身を黒い衣装でつつんでおりますが、手には鞭がしなうとせんばかりに受けとられました。

「奴隷よ。おれはお前の調教師である。それはゆるがすことのできない事実であって、今後お前は、おれのすべての命令に従わなければいけない」

と若者は、わたしにさとすようにいいながら、舌足らずを補うかのように鞭を「ピュッピュッ」と空を切るために使用するのです。しかしこのような若者に何ができるといえるのでしょうか。所詮、脅迫を背にする以外にわ

たしを従えることなどではしないのです。

「お前はそれのこと、これから六週間耐えるのだ。お前は奴隷にふさわしく、犬畜生のたしなみを自分のものとするのだ」

と若者はさらにいつてから、

「さあ、両手を胸からはらいのけて首の後で組め。そしてひざ立ちになるのだ」

と命令し出しました。わたしがどうしていいものかと戸惑っておりますと、いきなり鞭がわたしにおそいかかってきました。わたしは逃げ出しましたが、身体を隠す場所もなく部屋の隅に追いつめられ、二十発ばかりの痛みに耐えなければなりませんでした。鞭がやみ、おそろおそろ顔をあげますと、若者は姿見の前に立って手招きをしていました。少女は部屋の中にはおりませんでした。わたしは手招きの通り進み、若者の足元にひざ立ちになり、手を首の後ろに組みました。

「朝の『挨拶』から始めていたかどうか。奴隷よ、心をこめて欲しいものだ」

と若者は命令しておいてから、言葉でその「挨拶」の仕方を説明し出しました。わたしはぶるぶる震えてしまいました。

「奴隷よ。おれを怒らすとどうなるか、予想位つこうものなのに、聞きわけがない」

と若者は冷やかに言葉を続けました。その言葉が終わらない内に、天井からジャリジャリと鎖の綱が幾条か降ってきました。若者はそのことには知らぬ装いで、

「今あなたは、おれに同意した」

と叫んだのです。どうしたことかわたしは暗示にでもかけられたように、首の後ろに組んだ手を解いて、若者のタイトの、それは中世の騎士たちのような作りを応用したものなのでしょう、布切れに手をかけました。布切れはホック止めになっていて、難なく取りはずすことができました。

「目を閉じるな。手を首の後に組め」

と、若者はわたしに唾を浴びせ、わたしが服従したと見るや、

「奴隷よ。朝の『挨拶』だ。いまさら主人がくどくどと説明するまでもないことだろう」

と、高らかに宣言しました。わたしが『挨拶』を、それこそ死ぬ思いで涙ながらにいたしましたところ、若者は細かな注文を出してきてわたしを虐め、わたしを一層羞恥にかりたてることをやめませんでした。

「奴隷よ。お前の挨拶は、おれの肩のこりを増すが、実に香ぐわしくご気嫌である」

ところが、そのようにしてようようの事で

「挨拶」をすませてほっとする間もなく、わたしの胸に鞭をひと打ちして、

「ぐずぐずせずに四つん這いになれ」

と、新しい命令を発しました。そして、わたしにそのような耐えがたい姿勢で、

「部屋の中を三十周しろ」

と命令し、自分は後ろについて回って、それこそ馬に鞭をくれる感覚で、わたしのお尻に鞭を打ちつけることをやめません。

「床をなめろ。尻をふることを忘れるな。もっと高く尻をあげろ」

と矢継ぎ早にわたしを苦しめます。それでわたしは三十周し終えますと、さらにわたしを悩ますことを忘れずにいたのです。わたしの両手は頭上でひとつにして天井からの鎖にくくりつけられました。それから両足を、左右の壁から出ている鉄の輪につらなっている鎖にとられ、全くの人の字型にされたのです。天井の鎖が一メートルほど上昇し、そのことによってわたしは宙吊りになりました。

「実に美景だ」

と若者はうそぶきながら、わたしに下を見ることを求めてきました。どうしたことでしょう、か、姿見は斜めにわたしの足下に位置を替えていたのです。わたしが目をそむけます

と、鞭が飛んできます。そして自らを讃美せよと強要するのです。

「実に美景です。でもそれは、このわたしの姿なのです」

わたしがそういういきりますと、若者はすっかり喜んでひどくおしゃべりになり、何やら修飾語句の多い言葉を浴びせていましたが、わたしはもうお腹がぺこぺこで、なかば気を失いかけていましたので、何をどう受け答えしたのか、一語すら記憶しておりません。

わたしはようやくのこと床におろされましたが、鎖は解かれることもなく、ですからわたしは両手を鎖にしばらくつけられ、さらに両足の自由も失ったままです。そのような姿でわたしはまる一日近く放置されることになったのでございます。このことによって若者は、わたしをすっかり仕込み上げたつもりでいたのかも知れません。

第四景 受講

わたしは少し眠っては目ざめ、さらに眠るということをくりかえしていましたが、とうとうすっかり寝入ってしまったらしく、誰かにこづかれて目がさめました。わたしは鎖か

ら解放されていました。でもわたしは身体をすくめざるを得ませんでした。それは昨日、わたしが粗相をしてしまったことに対する羞恥心なのです。

「いいの、すっかりきれいにしてあげたわ」と少女が、ほほえんでいました。わたしがそれでも、なお震えていますと、

「さあ、檻の中へお戻りなさい。もう朝なのです。もう少しでドラが鳴り、お食事よ。あなたは入校の手続きをすべて終えたわ。今日からは、時間刻みの講座を受講するのよ」

といいながら、わたしをふたたび檻の中に閉じ込めてしまったのです。それから事は昨日のように不規則ではなく、実に整然と運び、少女の言葉通りになりました。まず真っ先にお話し申し上げなければならぬことはドラが鳴った時には、わたしの口の中に湧き出る泉のように唾液が分泌されたということです。そして少女がボールを檻の中に入れてくれた時、わたしにそれに飛びついてすっきり空にしてしまったのです。それは犬も見向きもしないような粗末なものでしたが、わたしはそのことを承知の上で喉に押し込みました。それでも空腹が満たされ、わずかながらに精気がよみがえりました。

チャイムが一つ鳴って、わたしは檻から引き出され、朝の『挨拶』のために、先程まで眠っていた部屋に連れて行かれました。もはやわたしは命ぜられるままに従うのみです。そしてわたしは、そこでの講座は、その目的さえとげると予定された時間前であっても終了するという知恵を得たのでございます。

チャイムが二つ鳴った時に、わたしは少女の手解きで姿見に向かってバレーのレッスンのように片足をけりあげることから始まる、もろもろの踊りの訓練を受けました。わたしの最も抵抗を覚えたのは、ベェリー・ダンスの訓練で、それは、若者のいう「キャンデー」に似せた物に相對する形で行う必要があり、しかも大変に激しい動きを強いられるものでもあるのです。その間、少女は部屋の隅の寝椅子に横になって、わたしを監視するのみです。でも時々側に来てきて、

「何よ、あなたは、とても不真面目ね」

と、なじるのです。そこでわたしは、この講座の目的は、「汗」でまみれけることにあるという知恵を持ったわけでございます。

チャイムが三つ鳴り、どうしたことか部屋の中にズベ公とおぼしき若い女性が六、七名でありましょいか入り込んできました。わた

しが思わず身体を小さくしておりますと、

「何よ、お上品ぶって」

といきなり少女に平手を数発も浴びせられました。少女は驚いているわたしにはかまわずに、壁のボタンのひとつを押しました。すると壁の一部が開いて、そこにカラー・テレビが現われました。わたしは少女によってテレビのすぐ側にすわることを命ぜられ、少女はズベ公たちと一緒に、テレビとわたしを取り囲むように腰をおろしました。

「これから、あなたが昨日わたしのために色々と作業して骨折って下さった場面が、テレビの絵になるのよ。この方たち、そのことを教えて欲しいんですって。ですから微に入り細に入り説明してあげて下さる？」

と少女はいいました。すると、座の一同はどっと笑い出しました。わたしはおろおろするばかりです。テレビの絵は一時間も続き、しかも絵は常にわたしのみをクローズ・アップしているのです。ズベ公たちは「あれー」とか「まあー」とか、あるいは「よっ、よっよ」とからかいの言葉を投げつつ拍手喝采をしながら、絵について色々質問を浴びせてきます。そのことはご説明するまでもなく、わたしに吐き気を催させずにいられないこと

ばかりです。

でも絵が終わったとたん、どうしたことが彼女たちは一斉にわたしに飛びかかってきたのです。いわゆる、こねくり回すとかいう表現がびったりなほどに彼女たちの手。ですから十数本にいたぶられるのです。最後には少女が手をくだし、マニキュアされた細い爪が束ねられ、ヒ口のように鋭くわたしに襲いかかってきたのです。ものすごい痛覚に襲われたわたしは、記憶の向こうに、

「これからの二時間は、調教師たちのお昼寝の時間よ」

という少女の声を聞きました。わたしはボロ切れのように横たわったまま、彼女らが部屋を出て行くのを見やりました。でも少女だけは、あたふたともどってきました。そして少女は、手にしたボールをわたしの顔につきつけるようにして、

「おトイレはこの中になさるといいわ」

というなり、ぶいと帰って行きました。わたしは事実、尿意を覚えていました。しばらくの間は歯をくいしばり耐えましたけど、ついにいたたまれなくなり、恥も外聞もなく、ボールを手元に引き寄せていました。

うとうとしていたわたしは、チャイムの四

つの音に目ざめました。わたしの前には若者が立ちほだかっていました。

「奴隷のぶんざいで、ボールなどを借りるとは全くけしからん。第一、臭くてたまらん」

と若者は目の前に、先程のボールをつきつけてくるのです。わたしは後ずさりしましたが、壁に行く手をさえぎられました。

「ご主人様、お許し下さい。わたしが悪うございました」

それは、わたしが初めて自分を「奴隷」と認めさげすんだ濃密な一瞬であります。しかしそれは、わたしでないわたしの言葉であるにすぎません。でも若者は「それならば」といわんばかりにわたしの髪をつかみ、わたしに立つことを命じました。

「何ひとつこわがることはない。おれはお前に噛みつくことはあっても、食い切ることはない。お前は奴隷でおれは主人だ。奴隷もどきの肉はおれの胃袋が受けつけはしない。楽にするがよい。すべて主人の指し図に従うのだ」

わたしは廊下をへだてた部屋に招かれ、そこで片足吊りの姿勢で、鞭を五十回も浴びました。わたしの身はあちこちに破れを生じ、青い痣だらけとなってしまします。若者はた

ばこをつけて一息を入れてから、鎖をさらに引き上げて、わたしの身体を完璧な宙吊りにしました。そして、

「おれは隠花動物の権威である」

などとうそぶきながら、わざと奇妙な責めかたで攻撃をしかけながら、わたしの反応ぶりを喜んでいいます。それでもわたしが序々に幻覚の中に溺れこみ、いまま少しで苦痛を忘れたかた時にいきなり別の手痛い攻撃に切り替えるのです。わたしは地団駄を踏み、若者を「きつ」と睨みつけますと、

「今のあなたは非常に魅惑的だ」

と憎いことをいつてきたのです。その時でした。わたしはわれとわが目を疑ったものでした。少女が入ってきて、少女の手にする鎖は首輪にすらなり、そこに三十年配の一人の婦人が現われたのです。

ご婦人は四つん這いで、しかもそのことに苦痛を感じていらっしやらないようでした。

ご婦人は五十センチ位の高さの台の上にあがるように命令されました。その時に若者は

「この犬はお前の先輩である。そして今おトイレから出てこられたばかりであられる」

と淡々と語り、最後に、

「お前が清めてあげるのだ」

と宣言してきたのです。でもどうしてそのようなことができるでしょうか。正気の沙汰ではございません。それでも若者に強いられわたしはおそろおそろ近づきましたが、顔をしかめずにいられることでしょうか。

「どうだ。お前の先輩のかぐわしい香りだ。この世の香りとは思えないだろう。信じられないだろう。お前の先輩は実に後輩思いだ。本来なら、お前なんぞは姿をおおぐこともかなわないところだが、おれが特別に計らってこの機会をつくっていただいたのだ」

と若者は、わたしの両手を台の上にはりつかせました。そしてわたしがためらっておりますと若者は鞭をしならせて、わたしの背後からおそうのです。わたしは「へえーい。へえーい」と悲鳴をあげ続けてしまいました。その時にわたしは犬畜生になったのです。

二日目の講座はそれで中止となり、わたしは風呂に入ることとを許され、ベッドに眠ることとを許されました。でも食事は例によってボールに投げ込められた残飯です。

第五景 企み

わたしはベッドの上で三日目の朝を迎え、

講座に従います檻の中に連れ込まれました。

チャームが一つと二つ目までは、昨日とそれほど変わりありませんでしたがチャームが三つ目の時にわたしは犬畜生にさせられた部屋に連れ込まれて、例の台の上にあがらせられ、そこで目隠しをさせられたのです。間もなくわたしは若者の荒々しい手つきで、この悪者の根城に連れ込まれた時のように、右手首と右足首、左手首と左足首をくくりつけられました。

「よおーし。完璧に準備はできた」

という若者の張りのある声と同時に、何やらぼそぼそという話し声とともに誰やら、それは五、六名でしょうか、部屋に入ってくる気配がしました。声はすべて男性であり、しかも声の質から押し計りますなら、年はかなりの中年ということに思われました。

「皆さん。皆さんは先程から落着きを欠き、それぞれご自慢の責め方でここにいる奴隷めをたっぷり虐げ得ることに、少し血走っていらっしゃるようですけれど、あわててはことを仕損じます。きつとお守りいただけますこととでしような。皆さんは奴隷めに直接は指一本なりとも触れてはいけません。ここにいる奴隷めはわたしの奴隷であり、わたしが

皆さんをここにお招きしたのは外でもない、誇らしいわたしの奴隷めを、皆さんに見せびらかすためなのです」

と若者が演説めいた口調で仰々しく一席を打つと、矢庭にわたしの両ひざに手をかけて力を込めました。わたしは唇を噛みました。消え入りたいほどの恥ずかしさです。そしてそのままの姿勢を崩さずに、固定されてしまいました。「おおー」とか「うーん」とか、「へえー」とかいう男たちの感嘆の声が、わたしの肌を痛めます。

「時のたつのは矢のごとし。さあ、それでは先程のくじで『1』を引き当てたお方より始めて下さい」

と若者がいいいますと、

「わたしが『1』を引き当てました」と老人の声が聞こえました。

「ご老体、お目は確かでしょうか」

と若者が冗談のようにいいますと、

「見えない目も見えますよ」

と老人の声が答え、座の者を失笑させたようです。

「ご老体はお筆ですか。これは風流な」

という若者の驚いた声が響き、

「じゃ、始めさせていただきます」

という、老人の浮き浮きした声が続きまして。わたしの喉元に筆先のふさふさした感触が感じられましたが、すぐそこにとどまらずよろけるような移動のしかたで肌が擦られ始めました。わたしは、知らず知らずに身を締めようとしたが、すでに鎖は堅く張り、少しとして狭ばめる事もできませんでした。

「時間は三分ですぞ」

という若者の声が、わたしの耳元で響きました。

「そう、がつがつといわんで下さい」

という老人の不気嫌な声が響きました。筆先は予想できたところで予想できたように道草を始めましたが、どうも老人は、手かげんをしているというよりは、ためらっているらしく、逃れ得ないことを覚悟したわたしは、どうとも感じませんでした。その内に、

「じゃ、お次の方」

という若者の声がかかり、老人のみれんな声と、次の男の、

「さあ、どいて下さいよ。ご老体」

という声が交叉いたしました。二番目の男が手にあるのは、パイプ・レーターのようなしるものでした。この男の直線的な責め方はむしろ、わたしをほっとさせました。しかし

三分という時間は、まことに短いと申し上げねばなりません。

三番目の男の番となりましたが、わたしは微かに人の気配を感じるのみでした。『どうしたのかしら』とわたしが不審に思っておりますと、そのことに解答を与えるかのように若者の声が響きました。

「どうですか。天眼鏡の具合は」

「これ以上のことを許されないのが、この上なくもどかしい」

という、多少、若々しい男の声が答えました。その男は、さらに言葉を続け、

「しかし、ぼくの空想力は今まさに翼を得たのです。ぼくは一生涯、忘れることのできない素晴らしい夢を、今まぶたに灼きつけ終えたところですよ」

と熱っぽく結びました。

「あなたは詩人だ」

と若者が決めつけた時に、若い男は、
「神秘的な虹がぼくをいざない、ぼくは、そのいざないに答えなければなりません」

と一人よがりに語り続けましたが、

「時は過ぎた。次のお方は、どなたかな」と若者が断を下しました。

「わたしだ。わたしは、これだ」

と答える男の太い声が響きました。

「お食事ですか」

と、笑いを噛みこらしたような若者の声がしました。

「こいつが何よりの味覚でして」

という太い声が嬉しそうです。間もなく、ヒヤリとする冷感に、ゾーッとしたわたしは正に仰天しました。実際のことを申しましてわたしは嘔吐を催してしまいました。男は十回程もわたしをゾーッとさせ続けたのです。

「実に愉快だ。次のお方は」

と若者が語りかけますと、

「わたしです」

と答える女の声が響きました。

「おう、女のお方で」

と若者は、奥歯にものの挟まったような口調になりました。ああ、何ということでしょうか。わたしはハッとせずにはいられません。でもそれは同性によって辱められることによるものではありません。

「いいえ。神崎の代理です」

とその女が申したからでございます。

第六景 夫

神崎とは、わたしの夫の名前なのです。わたしは何かの間違いであると信じ、そう願いました。でもそれはむなしく、しだいしだいに散々に切り裂かれ出したのでございます。

「そのことを、あなたは証明できますか」

と若者は質問をいたしました。すると女はためらうことなく、

「わたしは神崎の情婦で、この身体がそれを証明できます。さらに申し上げますなら、神崎の右肩の上には数センチの切り傷があります」

というのです。わたしは絶望せずにいられません。まさに夫なのです。夫には情婦がいたのです。「女の手ひとつ握らずに生きてきた男」であるはずの夫には、こともあろうにこんな情婦がいたのです。

「よし、信じよう」

という若者の、歯切れのよい声が響きました。

「お時間は三十分でしたかしら」

と女が質問しましたところ、

「さようでございます。神崎さまは私の大のお得意さまで、特別にお時間をお作り申し上げます」

と若者は、よく見かける、後ろであかんべ

えをする商人のような口調で答えました。

「ところで、あなたさまのお手の内は？」

と、いぶかしげに若者が尋問を重ねましたところ、女は、

「このトランクを、まず開いてから」

と答えました。事実、金具のはずす音がいたしました。すると「ワ、ワン、ワン」という小犬の鳴き声が響きわたり、座の者が「おっ」という嘆息をもらし、わたしは身の毛もよだつ思いにさせられました。

「この小犬が、真の彼の代理です」

と女は事務的に告げました。

「どうぞ。規則さえ、お守りいただけますなら、いかようにも」

と若者は答えました。その言葉の終わらぬ内にわたしの乳房にスプレーのようなものが吹きつけられ、わたしはそれがひどく生臭いにおいであることに気づき、おぞましい状況がわたしの脳裏をつき抜けました。

「三十分でしたわね、確か」

と女が、確認するかのように若者に尋ねました。

「お間違いございません。三十分です」

と若者は、女に答えるというよりはわたしに聞こえよがしにいつているようでございま

した。そしてわたしは、この講座がひとつの演出された芝居であるらしいということを思い知ったのです。時間がたつにつれて、スプレーのうるおす個所は場所を変えました。胸からお腹に下り、そして一転して足首に転じじりじりと太股を目指して前進を開始した頃には、わたしの神経はすっかりくたびれ果てもう虫の息でございました。しかし、そんなわたしが卒倒寸前に、思わずハツとなる事態が発生したのです。突然、ドアをノックする音がして、

「神崎さまがご到着でございます」

と少女が若者に告げたのです。「こんな姿を」と思う一方では、どうしてこんな所にとわたしは、気も狂わんばかりに悩乱せずにはいられませんでした。

「よし。お通ししろ」

と若者が声高く命令いたしました。とたんに、わたしは、くらくらするような得体の知れない錯乱に怒濤のようにおそいかかられてしまったのです。地位も金も愛も歌も言葉もいらない、じっと海底に沈みきっていた世界が頭をもたげ出しました。

夫がまさにこの部屋に踏み込もうとしている。夫はわたしをどう思うだろうか。わたし

をしめ殺すかも知れない。いや、そんなことはない。わたしを地獄に追いやるための最後の血の斧をふるうためにきたに違いない。

小犬が、わたしを責めにかかります。夫の足音がすぐそこに聞こえます。ドアがノックされました。ドアのノブが鳴ります。開きました。

「神崎さまがご到着でございます」

と告げる少女の声がわたしを暗黒の闇に引き落しました。わたしは知覚を失いかけてました。とその時、唐突に若者の叫びが、わたしの意識の向こうで挙りました。

「待て。時が悪い。いま時計は調教師たちの昼寝時を示してしまった」

第七景 昼寝時

若者のひと声とともに、ぞろぞろとわたしを取り巻く者たちが部屋を出て行く様子が、わかりました。わたしは、ぶたれたのです。

「何で奴隷ごときに陶酔の境地を与えられようか。天国の門にいま一步のところまで地獄へたたき落とせ」

そんな若者の吐き捨てるような声が壁の四方八方から響いてきます。『えい、何という

のろま』とわたしは一人あせってしまいました。時のたつのが、まどろっこしいのです。しかし如何に八つ当りをしようとも時はいいよのろのろと経過を刻むばかりです。夫が夫婦生活においてわざとわたしを欲求不満に陥らせたのは今日のことを見越してのことかも知れません。わたしは夫を許そう。情婦のことも水に流そう。わたしの求めていた夫婦生活はこのようなものであったのです。許すのではなくわたしは感謝せねばなりません。わたしは一人ながら、そんな肌ざわりのよい気分になり出しました。しかし突然、水をさすかのように、

「何て好色な尻軽女でしょうか、あの女」

という女のひそひそ話のような声が聞こえ出したのです。誰もいないはずの部屋に誰かいるらしい。でも大分長いこと耳をすましました。が人の息すら聞きとれません。気のせいかしらと小首をかしげましたところ、

「旦那さんに毎晩求めて、旦那さんがそれに応じなかったところ、この女は、ふ抜けとないったそうよ」

と先程とは違う女の、ひそひそ声が聞こえ「大変なシロモノね」

と、先ほどの女の声が聞こえました。でも

また長い沈黙が続く、わたしをいよいよ戸惑わせるのです。中傷です。誰かがそんなありもしないことを、いいふらしているのでしょうか。そんなことをして、どんな得があるというのでしょうか。

わたしは肌に息吹きを感じ、ごく間近かに人の気配をとらえ、間違いなく誰かがいることを確認しました。しかも、その誰かは、先程中断された仔犬の続きを受け持つかのように入るまい始めました。わたしは肌で、その誰かが同性ではなく異性であることを感じとり、そのことは、なぜかわたしをほっとさせました。

この男は一体、誰でありましょうか。先程わたしを三分間だけ責めた者たちの一人でしょうか。それとも若者でしょうか。それとも夫でしょうか。

この男が、わたしにさせようとしていることは暗黙のうちにも、よくわかりました。それは若者に教えこまれた、いわゆる朝の『挨拶』に似てはいましたが、あまりにも馬鹿でいねいな、念を入れすぎた『挨拶』のために少なくともこの男が、若者かどうかすら区別する余裕すらなく、息苦しさにあえいでしまったのです。それでもわたしはそのことに慣

れていたお蔭で、男の叱咤を受けずに済みました。その後、男の続行した仔犬の作業は、これまた入念極まるものでございました。わたしはそのあまりにもていねい過ぎる作業のために、知覚がすべてどこかへ持ってゆかれてしまったかのように、自分が不自然な姿勢でくくりつけられていることすら忘れて、クラクラする頭のなかで何か他人事に思っていたようでございました。それでも、その間にわたしは、ひとつの虹のような陶醉を自分のものとすることができました。それはここ数時間来わたしをおそうのが、ことごとく『無名の暴漢』であったことの積み重ねによって得られたものかも知れません。

「この女は奴隷ですってことよ」

と先程に似た女の、今度はひそひそ話ではなく、はっきりとした呟きが聞こえ、しかも声は、わたしのすぐ側にありました。

「ほら、ご覧になって。うっとりしちゃってるわ」

と他の女の呟きが、次いで同じく直ぐ側にありました。

「いやですわ。こんなに縛られてるのに」

と最初の女が、あきれたようにいい、

「でも奴隷にふさわしいくくりかたですわ」

と後の女がいい、「くっくくく」と笑い出しました。一体この部屋の仕掛けはどうなっているのでしょうか。わたしの前の軽蔑すべき女性はこのどいつでありましようか。わたしは、いかにくやし涙を流せど、自由を手の内にできないのです。

「でもあなた。この奴隷に見覚えなくって」
と後の女がいました。わたしは何事だろうと耳をすましたところ、

「あら、そうだわ。たしかに景子よ」

と最初の女がいきなりわたしの名前をいい当てたのです。ああ、どうしてわたしはこんなにも恥かしめを受けなければならないのでしょうか。最初の女は言葉を続けました。

「間違いないわ。この奴隷は景子よ。わたしあてに送られてきた写真の絵と、ここにいる奴隷とは全く一致するわ」

「誰がそんなことを」とわたしは死にたい思いにかりたてられました。しかし、休みなく責めは続き、あてこするように後の女の、

「確か写真には」

と声が足下に響き、

「あったわ。ほら、ご覧なさい。写真と全く同じだわ。ここに景子と入れ墨されているでしょう」

と歓声をあげたのです。

「顔を見てやりましょう。ひょっとすると、わたしたちの会社にいた子じゃないかしら」と最初の女がいい、

「そうね。きっと、あの子よ」

と後の女が同調いたしました。

わたしは女たちの声に聞き覚えなどございませんでしたが、ひどい恐ろしさのために身体をぶるぶる震わしてしまいました。わたしは女が目隠しを取ろうとした時に、頭を左右にふって拒み続けましたが、じきにはずされてしまいました。

わたしは堅く目を閉じて、最後の抵抗のために悲壮な決意をしました。そうなのです。いまは『昼寝時』なのです。わたしは眠る必要があります。そしてたとえ目をこじあけられても、『知らぬ存ぜぬ』で押し通し、悪夢にうなされているんだと自分をいいきかすのです。

今は調教師たちの『昼寝時』であり、それは同時に調教されるわたしの『昼寝時』なのですもの……。

(完)

と春太郎へゆさゆさと黒髪をふるわせつつ頬を押し当て、限界へ到達した事をうめくように告げるのだった。

「うまく、呼吸を合わせてやってよね。千代夫人」

春太郎は、夫人の脂汗をねっとり浮かべた乳色の肩を抱きしめながら、千代の方を見て片眼をつぶった。

「さあ、うまくいくかしら」

千代は、狂乱の態をあからさまにむき出している夫人を血走った眼で凝視しながら、攻撃を続行する。

「ああ——」と、これらの悪女達の心にまで泌み入るようなやるせない溜息を夫人は紅唇から洩らすと、その媚めかしいうなじをくつきりと見せ、寄り添っていた夏次郎の唇にびったり唇を合わせた。

狂ったように夏次郎の口を吸う夫人の、上へ吊り上げられた二肢が戦慄したようにブルブル痙攣する。

「さ、千代夫人」

春太郎に催促された千代は、仕掛けのボタンを押した。

「うっ」と、その瞬間、夫人はわけのわからぬ事を口走り、むっちりと盛り上った双臀を

狂おしげに左右へ激しく揺さぶった。

全身の骨までがどろどろに溶けくずれるような痛烈な責めの仕上げに、夫人は半開きにした唇をわなわな慄わせ、がっくりと首を横へ落としたのである。

「ぴったりとタイミングが合ったようね」

春太郎は千代の顔を見て、ニヤリと歯を見せた。

甘いミルクの匂いと蒸れた濃厚な体臭を発しながら、ひくひくと責められ終った体を波打たせている静子夫人を千代達は、してやったり、と眼を細めて眺めるのである。和枝と葉子は、女達に凌辱されているという精神的苦痛も忘れ去り、凄まじいばかりの狂態と羞恥を晒け出した静子夫人にふと圧倒されたようだ。

「如何が、奥様。今日のは、とりわけすばらかったでしょう。ね、どうなの」

春太郎と夏次郎は、陶酔の火照りに朱に染まった夫人の頬へ左右より口吻して、ぬけぬけと優しい口調でいうのだ。

静子夫人は、線の綺麗な瓜実顔をポーッと上気させ、しっとり潤んだ美しい瞳を柔らかく開いた。

「——体が、体がとけてしまうような気分

すわ」

夫人は、うっとり夢見るような気分で、ハスキーな声を出すと、次に、千代の方へ翳の深い濡れた瞳をそっと向け

「千代さん、かまいませんわ。もっと羞しい事をなさって、静子を笑いものにして下さいまし——」

四肢の隅々まで行き渡った深い陶酔の余韻に浸りつつ、夫人は、ふと心に甦った千代に對する不明瞭な敵意と反感を含ませてそう呟き、更に左右にまといつく春太郎と夏次郎に「お願い、いじめて。もっと、もっと、静子

をいじめて頂戴——」

熱い吐息を入り混ぜて、ささやくようにいうのだ。

千代は、そんな夫人をいじらしいような、

憎いような複雑な気分眺めた。

覆い隠す術もなく、羞恥の一切を露呈させ

ながら、しかし、その天性の美貌は少しも損われる事なく、優美で優雅な静子夫人の見事な肢態——。千代に對し、身も心も屈服した

事を示しながら、しかもなお、その美貌と優美な肉体を持って、相手を見くだしているような静子夫人の気位といったものを、千代はふと腹立たしく感じ取るのであった。

よし、それならば、と再び敵意を燃やした千代は、

「奥様が妊娠なされば、そうそうは、私達も相手になってあげる事が出来ないからね。今日は骨身にこたえる程、いじめてあげようじゃないの。ね、みんな」

と、和枝や葉子の顔を見て笑うのだ。

どんな方法がいい、と千代に聞かれて、和枝は、ニヤニヤしながら千代の耳に口を寄せて小さくささやいた。

「そうね。宝石を隠せる身体に仕上げてくれた春太郎さん達に、まず感謝の気持を示して頂きましょうよ」

千代は、うなずいて、うっすらと眼を閉じ合わせている夫人の優雅な頬を指でつつき、そっと夫人の耳に口を寄せた。

「いいわね、奥様。この前、川田さんと鬼源さんを楽しませた時のように、まず、このこと——」

千代は、静子夫人の花びらのような唇をそっと指で押すのである。

「いいでしょ、奥様。私達の前で、この二人のシスターボーイさんと肉のつながりを持って頂きたいのよ。御主人の捨太郎さんには悪いけど、人妻の浮気は今、流行してるじゃない

い。ここだけの秘密にしておいてあげるわ」

そういつて千代は声を立てて笑うのだ。

「それがすめば、ダイヤが隠せるようになったことこれとを使って、フフフ」

千代は、夫人の下半身の方へ回って、再び声を上げて笑いこけるのだ。

「どうしたの、奥様。黙っていちゃわからないじゃないの」

千代は、睫毛の長い瞳を静かに閉ざし口をつぐんでいる夫人を叱咤するようにいった。

「わかりましたわ。静子は、何でも、千代さんのおっしゃる通りに——」

ふと喉をつまらせながらも、はっきりそう口に出していった静子夫人を千代は満足げに見つめるのである。

「嬉しいわ、じゃ、私達、本当にこの静子夫人と秘密を持ってもいいわけなのね。千代夫人」

夏次郎は有頂天になって千代を見た。

「奥様のお許しが出たんじゃない。何も遠慮する事はないわよ」

千代は、含み笑いしながらそういった。

ざまを見ろ、とうとうシスターボーイとまでお前は肉のつながりを持つ事になるんだ。落花微塵に打砕かれた貴婦人の末路をとくと

見物してやる——千代は心の中でそう叫び、魔女のような形相になって、唇を舌でしめすのである。

「奥さん自身が頼んでるんだから、うんと羞かしい思いをさせてやるがいいわ」

和枝が追討ちをかけるようにそういうと、夏次郎と春太郎は幾度もうなずいて、持場を分担する。

ねっとり程よく脂肪が乗り、温かそうに輝いた二つの太腿に熱い接吻を注ぎながら、夏次郎はひっそり息づいている夫人をうっとり見つめていたが、そのわずかに顔を見せた微妙な愛くるしさを見た途端、夏次郎は思わず衝動的に唇を押し当てた。

夫人はその時、「うう」と悩ましい声を立てて、上に吊りあげられた二肢をしばらく悶えさせたが、その内、切なげな吐息を吐きつつ夏次郎のするがままに任せてしまう。

「さ、奥さんも」

春太郎は、夫人の象牙色の艶々したうなじにむさぼるような口吻を続けていたが、腰を起こして夫人の頭をあぐらに組んだ膝の上へ乗せたのである。

「実をいうと私達二人、奥様に以前から思いこがれていたのよ。この日が何時来るかとそ

ればかり考えていたわ。さ、私達の愛を受入れて頂戴」

春太郎が芝居じみた口説とともに夫人の形のいい気品のある鼻先へ迫る。

先程から身動きもせず、じっとこの光景に見入っていた千代は、眼をギラギラさせて

「何をしてるの、奥様。早く受入れて上げなきゃ、春太郎さんが可哀そうじゃないの」と、鋭い語気で叱咤するのだ。

静子夫人は、しっとり濡れた情動的な眼をぼんやり見開いて

「——うんとお笑いになって、千代さん。静子は、こんなことも覚えましたがのよ」

そして、催促がましく迫っている春太郎にちらりと視線を走らせ、アップに巻かれた艶々しい黒髪を揺さぶりつつ、艶々した柔らかないうなじをうねらせて、紅唇を差し出したのだ。

柔らかな湿り気を帯びた甘い唇と舌が、練絹のようにしっとりと艶を増し始める。

「ホホホ、どう、皆んな、あれが遠山夫人のフランス仕込みのベージュよ。なかなかうまいものじゃないの」

千代は、葉子や和枝の顔を振り返り、大きく笑って見せるのだ。

「ほんとにお上手ね。まあ、あんな事を」

夫人が熱い吐息を吐きかけつつ屈辱に耐え始めると、鬼女達は顔を見合わせて、キヤツキヤツと笑い始めた。

だが、夫人のそうした奉仕を受ける春太郎は気もそぞろになっている。気高いばかりに美しい静子夫人の心もしびれるばかりの柔らかな甘い舌触り。火のように熱い接吻をくり返される狂おしい陶醉。

やがて、夏次郎の方は、本格的な分担行動を開始した。

「ホホホ、これで奥様はとうとうシスターボーイとまで——」

千代は、狂気めいた笑い声を立てて楽しそうに和枝や葉子の肩をたたくののだ。

そうした屈辱にも今は驚きや狼狽をあからさまに示す事はなく、双臀に甘いうねりを見せながら、むしろ、夏次郎のあせりをたしなめるかのような、静子夫人の優雅なとさえ見える観念しきった態度であったのである。

千代や和枝達は、ふと嘲笑も忘れて、その凄惨な光景を息を呑んで見つめている。

時々、夢見るように薄眼を開き、涙ぐんだような哀しげな瞳を光らせる静子夫人——そして再び、綺麗な睫毛をびったり閉ざすと、

線の美しい象牙色の頬をふっくらとふくらませて息を吸いこむと、再びゆるやかに自ら屈辱の渦に沈んでゆくのだった。

「うまいものねえ。これが、元遠山家の令夫人とは、どうしても私、信じられないわ」

和枝が感に耐えないといった表情で首を振りながらいった。

やがて——夫人が再び瞳を見開いた時、口から血をしたたり流したような名状出来ない凄艶な表情を見せ、象牙色の頬をしいんと凍りつかせていたのだった。

それは男の生血を吸った妖婦の凄艶さにも似て、千代はふと恐怖のようなものを覚えたが、こんな女に負けてなるものかとキツとした表情になる。夫人を責めれば責める程、自分の方に敗北感がつのり、それを打ち払うかのように千代は声の調子を変えて、夫人の高貴な感じの美しい鼻筋を指で弾くのだった。

「お見事ね。感服したわ。これで、とうとう奥様は、シスターボーイ達とも秘密の関係が出来たというわけね。どう、御気分は」

二人のシスターボーイの醜さを眼尻にとめながら、そんな風に千代はからかったが、夫人は深い憂愁の色をねっとり浮かべた切長の瞳を薄く見開き、薄い靨のような一種微妙な

色合いを、美しい容貌に深々と湛えている。

そんな夫人の美貌にまたムラムラと敵意を覚えた千代は、今日はこのシスターボーイに骨身にこたえる程、なぶり抜かせてやるのだと決心して、

「一寸、あんた達、何をぐずぐずしているのよ。早く持場を交代して続けなきゃ駄目じゃないのさ」

と、畳にペタリと坐りこんで、間の抜けた表情になっている春太郎と夏次郎に声をかけるのだった。

「だって無理よ。男はそう立てつづけに続けられるもんじゃないわ。一寸、一服させて下さるなきゃ」

春太郎は口をとがらせていった。

「だらしがないわね、全く。色事にかけては人に負けないと大きな事をいつてながらさ」

千代が笑うと、春太郎は酸っぱい表情で、

「だって、今日のは普通とは違って、絶世の美人なんだもの。仕方のない事だわ」

と愚痴っぽくいうのだった。

「奥様の方は、そのままでしばらく持って頂くわ。それから一度——」

「——ね、千代さん」

静子夫人は、美しい睫毛をそよがせて、千

代の方へ翳の深い瞳を向けた。

「——お願い、もう静子、体が綿のように疲れましたわ。今日はこれで、許して。ね」

「あら、弱音をお吐きになっちゃ困るわ。今日は、シスターボーイの徹底したなぶりものになると、覚悟は出来ている筈じゃありませんか」

すると、和枝も調子に乗って、仰臥し、高々と二肢を吊られている夫人に近づき

「ねえ奥様、うんとひどい事をなさって、と口走っておきながら、だらしがないじゃありませんか」

と笑うのだ。

「これがすめば、また別の方法で、色々奥様をいじめる計画をたてているのよ。情ない事いわないでよ、奥様」

千代は、麻縄を上下にきびしく巻きつかせている夫人の豊満な乳房を、指で押したり、つまんだりしながら、狂気めいた笑い声を立てた。

千代や和枝達のそうした残忍な言葉で、自分の欲求はあきらめ、美しい横顔を見せて、哀しげに眼をそらせた夫人は、

「わかりましたわ。もう何でも、千代さんのおっしゃる通りに致しますわ」

と捨鉢の覚悟を示したのである。

「その前に、お願いです。一寸、静子に、うがいさせて、千代さん——」

静子夫人は、今、唇や舌に感じたいようなない不気味な感触を拭おうとして、千代に願ったが、

「あら、駄目よ。そんな事するなんて春太郎さんに失礼じゃない。ね、皆んな」

千代は和枝達を見て笑いこけた。

「鬼源さんに聞いたんだけど、男性の生血を吸うととても美容に効果があるそうよ。とくに眼の色なんかがしっとり潤みを持って、とても色っぽくなるってたわ」

そういった千代は、最近、夫人の瞳が、深々と潤みを含み、それでいて、凍りつくような凄艶さを持って来たのは、その故かも知れないと思うのである。

「御自分の美容のためだと思って、全部、胃の中へおさめるのよ。わかったわね、奥様」

そして、千代は、さも哀しげに眼を伏せている夫人の頬に両手をかけ、その美しい顔を枕の上へ仰向かせると、懐から口紅を出して夫人の紅唇に線を引き出した。

「今度は、夏次郎さんよ。フッフ、そこまでサービスしておけば、シスターボーイさん達

も余計に親切になると思うわ」

静子夫人は、うっとりとした情動的に眼を閉ざし、心持、唇を突き出すようにして、千代に口紅を引かれています。

「ねえ、いい事を思いついたわ。そんなに美容に効果があるなら、明日から、朝食のかわりにいつも飲ませてやったらどう」

葉子は横からそんな事をいって、キヤッキヤッと笑った。

「成程、それはいい思いつきだわ。そして、誰の生血を吸うか、奥様に相手を選ばせるのも面白いじゃない」

そんな悪女達の言葉を無視したように夫人は、柔らかい睫毛をそよとも動かさず、美しい頬を凍らせている。

「じゃ、奥様、そういう事にきめさせて頂きますわよ。早速、明日の朝から実行させて頂くわ。だって、私、奥様が接吻なさる時の顔が大好き。ぞっとする程、美しく見えるのだから」

葉子がそういった時、春太郎と夏次郎が、どうもお待たせをといった顔つきで近づいて来た。

「一寸、待ってよ。その前に——」

千代は、悪戯っぽい微笑をして、それぞれ

の持場につこうとする春太郎と夏次郎を押しとどめて、何か彼等の耳に小さくささやくのだ。

このままだけでは、面白味がないとして、千代は静子夫人に更に屈辱の一撃を与えようというのである。

二人のシスターボーイは千代の執拗さにただ呆れるばかりだが、いいつけを守って、観念の眼を閉ざしている夫人の耳元に口を寄せた。

「わかりましたわ。千代さんが、そうおっしゃるのでしたら——」

静子夫人には、もう何事にも反抗する気力はないし、もしあったとしても縛られた身の上ではどうしようもないのである。投げやりな口調になって、そういうと、春太郎と夏次郎の手で腰を持上げられ、再び、枕の下へべたりと官能味豊かなカーブを描く双臀を乗せたのである。

「さっき奥様は私達にうんと羞かしい事をおっしゃってと頼んだわね。今度は奥様自身の口で、うんと淫らな事をおっしゃって頂きたいのよ。そうすりゃ奥様がどれ程成長したか私達もよくわかるってものだわ」

千代はそういって、あからさまにさらした

夫人の豊満な、象牙色の肢体をしげしげと眺め、さもおかしように

「ね、奥様、元女中であつた私の前に、はっきりこんな姿を晒け出して、よく平気でいられるものね」

と得意のいたぶりを開始するのだった。

「羞かしくないの。ね、奥様、何とかおっしゃいよ」

「羞かしいわ。こんな姿を千代さんの前に、晒すなんて、死ぬよりも静子は辛いわ」

「嘘おっしゃい。本当は、男達をキリキリ舞いさせる御自慢の代物だけに私に見せつけたいんですよ」

千代は、陽気な口調になったり、陰険な口調になったりして、夫人を嘲弄しつづけるのだ。

そんな狂気じみた千代に対し、静子夫人は何と受け流していいかわからない。

「さ、正直におっしゃい。本当は見せびらかしたいんですよ。え、どうなのよ」

千代は、ますます狂乱ぶりを発揮し始め、

「ね、皆んな」

と、一座をガラガラする眼で見廻して、

「よほど御自慢のものらしいから、奥様の口からその呼び名や使用方法をくわしくお聞き

しようじゃないの」

それは、川田や鬼源などが何度も試みた事であったが、夫人にとっては最も辛い精神的拷問である事を千代は承知している。

「さ、奥様、教えて頂戴」

千代は和枝や葉子とつめ寄って、まずこれから、と中国の秘法を伝授された可憐な臀部を指摘した。

薄く眼を閉ざし、かすかに上気の色を美しい頬に浮かべて、女三人の貪るような視線に耐えていた静子夫人は、ようやく心のふんぎりをつけたように深く息を吸って、情感を滲ませた瞳を開くと、甘くすねたように豊かな双臀をゆさゆさと揺さぶって

「どうしても、どうしても、それをいわなきや駄目ですの——」

と、責め手の心を甘く揺さぶるような繊細なすり泣きを折りまぜつつ小さく口を開くのだった。

「いわなきや駄目よ」

千代に叱咤された夫人は、一層、頬に紅を散らしながら、むせび泣くようにその名を口に、つづいて、その用途の説明まで強制されるのだった。

「じゃ、次に——」

千代は、笠にかかって夫人を責めさいなんでいく。

今や、そこには当然起こるべき心の抵抗もなく、夫人は、性の妖気に酔ったような春太郎と夏次郎のいたぶりも甘受して、虚ろな瞳を泳がせながら、千代に指摘される一つ一つを小さく唇を開いて熱っぽい口調で説明するのだった。そしてそのような、いたぶりを受けながら、次第に情感を高めていく自分をはっきりと感じとったのである。

「ほんとに成長したものね。そこまでくわしく説明出来るとは思わなかったわ」

千代は、満足げに立上って、気もそぞろになっっている春太郎と夏次郎にいった。

「とても楽しかったわ。面白い説明をくわしくして下さった奥様に、御褒美をあげる意味で、今度はうんとあんだ達が楽しませてあげるが、いいわ」

千代は、煙草を口にして火をつけ、うまそうに煙を吐くのである。

これだけの屈辱を夫人に加えた事で、心の満足を覚えた千代は、あとは、この女と珠江夫人を秘密の関係にし、そのあと、例の酔いどれ医師をこの屋敷へ呼び寄せ、人工授精をほどこせば、それでいい、と北叟笑む。

ふと、顔を上げると、すでに春太郎と夏次郎はそれぞれ持場についている。

さっきとは逆に今度は、夏次郎の膝に頭を乗せられた静子夫人は、その気品のある鼻先を、夏次郎の弄ぶ手になくなるとすりつけながら、春太郎の方にも呼応している。

「今度は、うんと時間をかけて楽しませてあげるわ、奥様」

春太郎はニヤツとしてつぶやく。

「とうとう静子は、貴方達とも、こんな事になってしまったのね。誰も恨まない。悪いのは静子なのだわ」

夫人は、うわ言のようにハスキーな声でそういうと、切長の瞳より涙をしたたらせつづいたり夏次郎に唇を押し当てた。

やがて、夫人の湿り気を帯びた甘美な唇と舌とが、熱い吐息と一緒に優しく、甘く、夏次郎を有頂天にさせていく。

(未完)

△お願い▽ ○切手代用にて御送金下さる場合は必ず一割増の計算にてお願いします。但し端数計算で百円以下の場合には構いません。尚、汚れたものや折り目のついた切手などは御勘弁願います。

カット・野江 三郎



僕は先天的？ 加被虐、両嗜好性淫乱症を持つ完全無欠のSMistである。そして、その対象は若きも若き小学生の少女から草臥れ始める三十半ばの人妻に至る――。

てなコト言えば「何とマア便利ヤツだ」と思われるかも知れないが、そいつは些か早計だ。

事実は小説の如くスンナリうまくは運ばな

告白？とエッセイ？

そぞろなる空言

セ ト ・ ヨ シ ヤ

が持てないんだなあ。単刀直入に申し上げればオンナのヒトがコワイのである。

サディストのクセして女が怖いなんて笑止の至りだが、事実、オソロシイんだからスカタなかんべ？

おもんばかりに、女と云う動物、否、女と云うハイクラスの生き物は、そのメカニズムの複雑にして粗雑なるが故に、一旦走り出したら最後、坂道のトップギヤーでブレーキシューを損したるが如く、行き着く処まで行き着かなければ……と云う、読みの深い疑惧の念を抱くのである。

あまつさえ、女の残虐性は男のそれなど三舎を避けて遙か彼方の水平線だと聞く（蟻一匹殺せない顔して熊を平気でヒネリ殺す様なコワイヒトが居るそう――）。それでなくとも、僕はケーチョーフハクで、そそっかしくて、オッチョコチョイである。もしも、その最中にゴキゲンを損ねる様なエラーをやらかして、女性特有のヒステリックな責め折檻・リンチ・ゴーモンを執行されたら……なんて考えると疎然として戦慄する。何故なら僕は親孝行者だからである。つまり「身体髪膚これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」の言にのっとり、親から戴いた身

い。何と言っても現実ってヤツはキビシク出てくるからねえ。

さてもキビシき現実を、そぞろなるまま綴るとすれば……。

先ず――「完全無欠、両刀使いの宮本武蔵だァ！ なんて大言壮語していても、その実パーフェクト（ヘンな言い方）なのはS性だけで、M性には余り自信（ヘンな言い方）」

体髪膚を傷つけられるのも、傷つけるのも余り好きな方でない。

そんなこんなで、Mへの願望多く抱きつつも、現実には捕えられ責められ征服される、などと云う大それた？ 考えまでには至れず、憂慮煩悶・遅疑逡巡の今日なのである。『そりゃ、お前さん。過慮であり、杞憂だわさ』と笑われるかも知れないが、僕はマジメにそう信じているんだから此ればかりはイタシカタナイ。女性恐怖症型マゾヒスト？ 此れぞ真性マゾヒストだ。

おそれ多くも東区の女王陛下様や、かしこくも東京の春川さと子聖女様を始め、名高きサジスチン諸女史をお慕い申し上げるは、山より高く海より深いが、やっぱりダメなんだなあ。皆さん揃って短気な様でキビシイ様でほんでもって、お・ヒ・スになりそなコワイいヒト達ばかりだもんな（特に春川さんなんてのはスゲエや。二月号の通信文から察すれば、毎日ゲバ棒片手にキ・ド・ト・タイの兄さん連をヒイヒイ泣かして歩いてる様だ）。

何処かに、心が広くてスイートで、ほんでもって、ストイカルなサジスチンさん居ないかしら？ 無理な注文だよな。現実にはキビシイんだよな。

次に——好む相手の広きにしても、パー

フェクトSの観点からすれば、十三才に満たざる女性？ に対しては、譬えそれが同意を以て為したる行為であっても鉄の法（刑法・第一七六・七条等）に触れるに因り除余儀なくされる。又、十六才未満の娘はPTAの口がウルサイに因り敬遠せざるを得ない。更に、トシ上のヒトの場合には個人的僻好に因りミセス以外はダメなのである。ハイ・ミスには拒絶反応・アレルギー！ 況んやオールド・レディに於いてをや——。だが他人のニョーボがチョンガー相手に素直に言うコト諾く訳も無し、とどまる処、ハタチ前後の自称・ミスに限られる。

マッタク、この現実ってヤツは、キビシ過ぎるよなあ。

処がだよ。不思議な事にM感覚からすればミセスだろうがハイミスだろうが、てんで気にならないんだ。とするとS性よりM性の方が強いって事になるよな？ だけど、凡そ人間の性なんてのは理屈で割り切れるもんじゃないんだ。オツムの中で幾ら組み立てた処で空理空論、ムダなテイコーなんだな。その人自身が試行錯誤の学習方法（他の意見や書物に依らず、自己の實踐に依って何度もミスを

繰り返し乍ら正しいものを掴む方法）でしか感知すること出来ないんだ。従って極端な言い方をすれば、『僕はM性向も持っている』と言っても頭と心で感じていてだけで、実際には何でもないのかも知れない。何故なら、目下の僕は前述した通りの観念的・心情的マゾヒストに過ぎないんだから……。早い話、僕が初めて本格的？ S行為をしたのは高校二年の時だけど、それまで一端のサディストを気取っていたのに、まるでダメなんだな。ヒヤ汗タラタラ、脚はガクガク、手はブルブルと来たもんなあ。尤も、その時の行為は若気の至りってヤツで、それこそ法規スレスレの事後承諾？ プレイだったからビビって然りなんだけど——。

断わって置くけど事後承諾プレイと云うのは相手がM素質を持っていると判っきり見抜いてからの不法行為の意味だよ（そうでなければ七年以下の懲役だ！）。因みに僕の靈感的鑑識眼はバツグンだもんなあ。言ってみれば刻苦研鑽のタマモノってヤツだ。——余談は兎も角、話を戻し、

相手を求める場合に於て、実践的Sの僕には甚だ柵（しがらみ）多けきが、心情的Mの僕には障（さわり）の少なき現状なり——な

んだから、世の中ってのは何処かが狂ってんだよな。マッタク、キビシイ現実だ！

そして——僕のSMはすべからず「ノーマルな愛」に立脚するものである。つまり、

相手が如何に傾城の佳人と云えど、正常な僕をして正常な愛を抱かしむる能わない者であれば、異常な僕の拇指も食指も動かない（尤も、美人をソデにするほどモロクはしていないが）。パラフレーズすれば、僕に於けるSM行為はノーマルなラブの一バリエーションであり、一つのアペリチーフ的存在（SEXの方が薬味なのかも）と云う事になる。

無論、此れをプレイの中に具現するのは困難な場合が多く、社会的にも問題多き事だろう。併し、SMプレイの終着駅は、あくまでノーマルな愛でなければならぬと信じる。

不能者は知らず、五体健全な者ならばSMを以てSEXに至るプロセスとするのが最も好ましく、アブノーマルなプレイにのみ執着し、終始するのは病質的サド・マゾヒズム以外の何者でもない。

そこで、過般の拙論「余計なコトかも」で言い足りなかった内ゲバ的憎まれ口を、ホンの少しだけ……。扱て、御用とお急ぎの無いお方へ。

同じ倒錯の性でも、SMだけは他の如何なる性癖にも無い「特質」が有るということをお承知か？

即ちSMは個人生活及び社会生活に於いて最も害多くして、最も害無き性癖なのだ。そして此れは個々の持つS性（又はM性）に依って決められるのである。然りして、如何に時代が移ろうとも健全な社会にあっては、決して許容されるべき性ではなく、必ずや疎外されるを以て善しとすべき癖なのだ。何となれば人間の欲求（本能）には大別して「個体の生命保存の欲求」「種族保存の欲求」「社会活動の欲求」の三つが有るが、SMは此らの欲求を遍く無視しており、スポイルしつつあり、そして破壊するほどの蓋然性を有しているからである。

世のサディスト連の中には「嗜虐は人間の本性だ——だから苦痛（悦虐然り）に喘ぐ女の姿態は官能的で美しい」との論を吐く者が多々見受けられるが、戯言も甚だしい。一度SMなり自己の性向なりを客観的立場から冷静な眼で鳥瞰して欲しいものだ。人間を含めて森羅万象、生有るものにことごとく「自己保存と云う生理的欲求（尤も、草や木には欲求など無からうが）から来る自己防衛的メカ

ニズムは有しているが、理由無く他を虐使したり、まして、自ら苦痛を求めたりする性など持ち合わせてはいない。もし持っているとすれば、その者はサディストであり、マゾヒストに他ならない。

因みに、猫とネズミのように、動物には天敵と云うのが有るが、これとて単なる習性に過ぎず、小さな時から一つのオリで育てれば立派に異域同舟が為されるのである（近代派ネコ族の間では、ネズミを捕る方が珍奇な存在なのよ）。

況んや、人間は社会的欲求の為には、個人的欲求を無意識的に抑圧し意識的に抑制する機能を持ちそれに因って起こり来るフラストレーションを解消する為の「行動のメカニズム（適応の機制）」も有しているのである。

従って、世の良識者がSMやアブラブを嫌悪するのは至極当然と言わねばなるまい。

又、「SMから芸術美を見出し、SMを芸術化せよ」等の言も、SM性を持つ者が頭の中だけで自分好みのファンタスティックなラプソディを奏でているに過ぎない。つまり、現実とイリュージョンとが縋絡・錯綜した観念論に過ぎないんだ。

SM行為をしている最中に「こうやれば美

しい”とか“こんな風に縛ればキレイだ”等と計画的？ 考察に基づいて他人を虐待している者が居れば、そいつはホントのキチガイだ。多くは自己のS的欲情の趣く尽に相手を縛り、加虐しているのである。辻村氏や塚本氏の様に何十年ものキャリアを持ち、第三者に観せる事を主とした、謂わば職業的プレイをしている人達でさえ、常に美（良識から見れば醜だろうが）の探求と自己の欲情とのジレンマに陥ると聞く。そして此れが、人として、サディストとして当然の事であり現実なのだ。

仮りに社会から容認される程の芸術美を見出しうる者が居るとすれば、その者はSM性を全く持たない者であろう。ウソかマコトか著名な女体画家や芸術家は、女の裸（即ちマティリアル）に対しては不感症だと言うではないか……。

冷静でなければ社会に通る芸術美は生まれない。併し、被縛女体を観て冷静でいられるサディストなどは居ない。因って、SMから芸術美は生まれない。此れ即ち三段論法、簡単な算術だ……三段論法は兎も角。我々は——我々がヌード写真から「美」を感得しない以上に、一般大衆は責め写真から「醜」を憶

える——と云う事実を判っきり識らなければならぬ。俺達がこうだから、ヤツ等だって少しはそうだろう”なんて云う手前本意でアマच्छろい微温的な考えは一切捨てるべきだ。

例えば、我々サディストに、ホモの良さが分かるだろうか？ 無論、認めてはいるだろう。が、それは「同病相憐れむ」の情に過ぎず、心底では「ケツ、何てバカなコトやってんだい！」と思っているに相違ない。少なくとも僕はそう思っている。併し、反対にホモ愛好者の眼から見れば、僕も同じく「アホなヤツ！」なのだ。

此のように、同じ倒錯の性を持つ者同志ですら、個々の性癖を理解する事が出来ないのである。

まして一般人がアブを解せる道理は無く、畢竟、嫌悪し、ヒンシュクし、疎外する事になるのである。我々は此の現実を直視しなければならぬ。と言っても悲観的になれと言うのではない。性癖は性癖として眺めていればいいのであって、殊更、他人に認めさす事も、自らを卑下する事もないのである。此のどちらかを、敢て為そうとするから話がもつれるのだわさ。

そこで、遥かなる馬鹿は言う“SMistよ、すべからずオポチュニスト（日和見主義者）になれ！”……扱てオポチュニストになった処で、それでは“SMを一つの性愛とする”の論はどうなるのか？ 此れは単なる空言とは思わない。何故なら、僕は此の論を唱えた人が個人的に好きだから（僕にもホモッケが有るのかな？）。それに、此れは現実に行っている人が居るだろうから——。

でも、行きがかり上、ホンのちよっぴり愚考を述べさせて下さい。

先刻も申し上げた通り今一度、客観的立場から冷静に俯瞰して戴きたいのです。仮りためにSMを一つの性愛とするなら、それは著しく変則的・頹廢的・破壊的な性であり、殺伐・無法な愛だと言えよう。人間の基本的欲求は全て無視し、社会生活は無論の事、個人の生活の上にも一点一画毫ほどのプラスを与える体のものではなく、阿片中毒者の病癖の如く、只々、有機体の解体を約束せしめる背徳的な刺激を求め、刹那の快楽を貪るのみなのである。

因って“SMをして、一つの性愛たらしめる”とは些か言い難く、“SM行為を以て真の愛へのプロセスとする”が最上となる訳だ。

そして此れ以外にSMをジャ・ス・チ・フ・アイ（正當化）しうる術は無いのである……。此れらの論を更に詳細に展開すれば「新しい風俗文献誌」にも負けず劣らずの立派な本が出来ること請合ひであるが、それは何時かの機会に誰かが自費出版するとして、話を「告白？」の部に戻し、

早い話が（ちっとも早くないか？ スンマセン。実は僕もそう思っていたとこなんだ。マッタ僕の記事ときたら起承転結なんてものがまるで無いんだからな。ただオツムにチラホラ浮かんだフレーズを無暗に並べただけなんだから毎度乍ら支離滅裂もいいとこだ。でも最初から「そぞろなるまま綴る……」と断わってる処なんかは可愛いよな？ そんな訳でホントに読み辛いでしょうけど、もう少しですからトイレに行きたい人も我慢して読了して下さい）。

では、サディスチックな要求をした処で、再び話を戻そうよネ。

此の章の初めに触れた通り、僕のSM性は先ず相手に惚れなければモノの役に立たないものである。

名も知らぬ娘をつかまえて「ハジメマシテ——ではポチポチ」てな訳にはゆかないんだ

よな、これが……。」「はじめまして、アイラブユー」てな事は随（まま）有るが、フン縛るとなると性格だけでも知って置かなければキ・シ・ヨクが悪くて手が出ないんだ。つまり此れは個人的キ・ビ・シ・キ現状ってヤツだよな。

最後に——（最後だから気分直しにサロンプラス・ムードでリラックス）。——それではノンビリした処で、

僕はSM両性を持つ如く、自家撞着も甚だしき二重人格者である。マジメ？ なコトを考へ乍ら、ぶちこわしのフザけたコトを口走り、泣いたカラスがもう笑い、心配し乍ら他人をからかう。

そして、リアリストであり乍らロマンチストの僕は、現実的な行動の中にもポエティカルなムードを求めたいのである。若い頃（今でも若い頃が今よりもっと若い頃）、大きな？ アヤマチ？ を犯した事がある——

或る喫茶店（と云うかスナックと云うか）でカワイコちゃん、みーつけた。花のキャンバスもさること乍ら何よりもその初い初いしさに惹かれたのである。僕はSM以上にプラトニック・ラブの愛好者。そして「新生」及び「神曲」に於けるダン・テとベアトリチェ風プラ・ラブを愛の究極と見ている。だから異

性に対しては先ずプラトニックなものを感じるのである。

だが、日ごと夜ごと参詣する内、若き血潮がたぎりたち、朝の食事を御一緒にとの願いから、事有る毎に妙辞好言・美辞麗句を並べたて、遂に陥落！ 欣喜しつつ、いざHOT ELへと御案内に及んだ。無論、相手はその道を知らぬ者にてマトモなオサソイである。が、旨く行けばの期待も有った。

だからと言って僕を、良識有る？ ジャーナリズムとマスコミが育てた、頹廢的欧米風ヤマト式サルマネ流犬畜生型フリーセックスを、地で行く不貞なハレンチスト（こんなコトバ有ったかしら？）だと決めつけないで戴きたい。

文章で見れば（簡潔直截にして諸譴的センテンス故）、ともすれば誤解を招くが、実際には用意周到、至ってマジメなものだった。

（ノンキな様で如才が無いのが僕の美点？）それに若さ故の事として少しは大目に見て欲しい。間違ってもケーベツのマナコで見るなこれ（何だ？ 既にケーベツ済みだ？ ニャロメ！）。——ニャロメは、さて置き、

件のカワイコちゃん。部屋に這入るなり、営業用？ オボコ顔をかなぐり捨てて我が眼

前にてストリップショーを演じ始めたではございせんか。明智光秀、正にムホンのウラギリ行為！ 先天的H症ではあるが、後天的大テレ屋の二重人格者は思わず知らずサクラ色。

と、彼女の曰く「あら、どうしたの？ フフ、あんた、ハジメて？」とか何とかおぬかしあそばされた。

マツタク、曖昧宿の女でも、もっとマシなセリフを言うよ。ムードもヌードも有ったものではございせん。此のひと言で僕の男は一挙に玉碎！ さりとて女性に恥をかかせるは、とりもなおさず男子の恥辱。それかあらぬか、敵の氣勢は破竹のイキオイ。とても示談？ で済みそうにない。退くに退けず、三月ネコのシッタゲキレイ・バリゾーゴンを浴び乍らも、どうにかこうにかメンモクヤクジヨ、一応の御挨拶だけは済ませたものの、スキを見て遁走！

もし、筋金入り？ 助平根性具備の僕でなかったら、陰萎となるは必定、的一幕であった（実際、女の人は言動に気をつけて戴きたいものだ。女と違って、男はデリケートに出て来んだからよ）。
そんなこんなで、爾後は殊更？ ストイッ

ク？ になったのである。

畢竟するに、Sの僕が最も愛でる女性とは野卑な言葉を浴びせただけで頬を染め、スカートの裾をチョイとメクレれば真っ紅になって悲鳴を挙げ、ブラウスの丘にアタックすれば真珠の涙をホロホロ落とし。ハダカにムけば蹠天踏地の体（テイ）を見せ、縛り上げれば失神するような女の子——つまりは羞じらい多くして、ムード溢るるタオヤメである。そして此れが最小にして最大の希望なのだが、此処に於て実状のキビシさを思い知らされる今日此の頃である。

でも、Mの僕からすれば実にヨロコバシき今日此の頃なのかも……。

二律背反、アチラ立てればコチラが立たず犬が西向きゃ尾は東、と云うか、兎にも角にも現実ってヤツは、どこまでも意地悪く出来てるよなあ。

皆さんも、そう思はるでしょ？ せやなかったら奇ク誌なんて、ちよっとも必要おへんやん——なあ、そうどすやろ？ ケツタイな顔してんと判っきり返事しよし——え？ お前、アホと違うかてか？ イヤかなわんなあ、アホなジョーダン言わんといて欲しいわ——せやけど、ウチ、ホンマにアホとちゃう

やろかしら？ もうアホな本読むのやめよかなあ……。

でも、いいさいいさ、何とかなるさ。

座頭市じゃないけれど、俺達やなあ、御法度の裏街道を行く渡世なんだぞ。謂わば天下の嫌われもんだ。なんてコト言い乍らケッコウやってるヒトも居るんだもん——。

以上、遥かなる馬鹿の、そぞろなる空言にて、御海容給わらんことを……。

× × ×

それはそうと、毎月、その華麗な艶筆で本誌に花を添えて来た一女性へ——今月号（二月号）ではお目にかかれませんでしたか？

したの？ お風邪でも召されたんですか？ もしも「余計なコトかも」なる一家言の「名木も鼻につく」なる戯れ言で乙女心を損じての事ならば、それこそ余計なコトですよ。

僕の皮肉は常に好意の変形なんだから。それに、何時も見顔が見えないと云うのも、やっぱし淋しいものだ——。

此れは貴女ファンの読者に恨まれるを嫌っての、自衛的且つ予防的訂正では有りませんよ。そりゃマア、それも少しは有るけれど、殆どの処は見知らぬ君に恋を感じし我が赤心から出たセンチンスだ。キミ誤解曲解するな

かれ、アーメン……。

四十五年睦月一日丑の刻

そぞろ運びし筆を擱きて小窓をめくる。

冽々たる寒気にしとど咳(しわぶ)けば

つれづれに嗜みし酒の香ただよう。

寂黙たるおおそのしじま

凍てつきし穹天に月は見え

二等星のまたたきのみいさぎよし。

あらたまの年のはじまり

百八煩惱を払い給いし鐘の声

いまだ耳に在り――

と、階下より、かまびすしきメゾ・ソプラ

ノ。「ヘイ・ユー! 年越しラーメン食べナ

イアルカ?」だってよ。

マツタケ嫁入り前の若い娘が何たることを

サントルチアだ。タマには花でも活けてみる

ッ! それにつけても此家のヤツ等ときたら

――ご投稿下さる方へお願い――

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に氏名を書かれずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作(イメーヂ画も)毎に、住所氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用縦書きと共にお願い致します。

六日のアヤメと十日の菊で、やることを為すことワン・テンポずつズレてんだからなあ。正常なのは僕ひとり。ほんじゃマ、年始ソバなど食らって寝るか。

○

独り言――美の探求者Vと云うコトバを

ケチったら、早速「異常美の探求者だ」なんて居直る人が現われたなあ。

△美Vにも正常と異常とが有るのかなあ?

ただ我々異常者が△醜Vから△美Vを感じ取

ってるって事だけなのと違うのかなあ? それを素直に認めずに自分を正常な位置に置こ

うとするから、△異常美の探求Vなんて、クルシイコトバが出来上がるのとは違うのかなあ?

美の探求なら美の探求でいいんだけど

なあ。その方が、遥かに自己に対して卒直だ

と思うんだがなあ。

御当人さんは断乎として「自分はSでもM

でも異常性欲者でもない! 異常美の探求者

その人である」なんて、オツに高いところで

取りすましているようだけど、僕は敢て「汝

自ヲヲ知レ」と、言いたいなあ。奇ク誌の愛

読者なら多少なりともヘンなクセを持ってる

筈だもんなあ、――なんてなことをいうと、

御当人さんは気を悪くするだろうなあ。僕が

やられたって喜んではいられないもんなあ。

オマケにヤロウが相手ときちゃあ――とはわ

かるんだけどなあ。でもさあ、あれじゃあ

「おめえたちはヘンタイだが、オレはそんな

ヘンな種族じゃねえぞ」といわれているよう

で、こちとらもあんまりいい気分とはいえね

えもんなあ。

第一「SでもMでもない」と言った傍から

SMについてのウンチクをシタリ顔して並べ

たててんだから「異常でなくて何ですか?」

と、言いたくもなるよなあ。実際、自家撞着

もあれだけのものになると白眉秀逸・空前絶

後って感じだよなあ。僕なんかマダマダ修行

が足りないよなあ。全く以てオソレイリヤの

訶梨帝母でござんすだよなあ――。

兎に角、日常は正常を気取っていても、奇

ク誌を相手にする時ぐらひは正直に、大きな

声で「我輩は異常者であるぞよ!」と、リラ

ックスして言いたいもんだよなあ――と、言

ってみても、所詮、他人は他人であり、我輩

は我輩でしかないんだからなあ――と、マア

此んなヒトリゴト。

――おやすみなさい――



カッ・五屋 和十

創 作

— ある女の手紙 —

奴 隸 志 願

梶 天 平

あなたのお作を拝見し、いきなり、このようなぶしつけなお手紙をさしあげずにはいられない愚かしい女の胸のうち、いちぶなりともおさし下さい。私がしのお恥も、あなたにはかわりのないこと、よく存じておりますが、いつときのくり言お聞きただけるあなた様の広いお心を信じた女のエゴイズムをお赦し下さいませ。

私、都心の商社に勤めております二七才の婚期のおくれた女でございます。といって、オールドミス・タイプの女をご想像下さいませぬよう。容姿の点では、とりたてて美人ではございませんが、小柄で目鼻だちの小さいことでトシよりも若く見られること、うぬぼれではないと存じております。ひと並に恋人

らしき人も、おりました。結婚の話も、ございました。けれど、私の胸の内には重い石のかたまりのようなものが居すわっており、世間なみの浮いたお話にも、いっこう心が弾まないまま、うかうか春のさかりを過ぎてしまいました。重たい石に刻まれた印は「M」と申しあげれば、もはやお察しいただけると思います——でも、正真正銘、私はマゾヒストなのでございましょうか、はっきりした事は自分でもよくわからないのです。

一度だけ、私が処女を与えました彼に、肌を縄をかけてくれる事をせがんだのでした。びっくりしたような彼。それでも縄をかけてはくれたのですが、まったくのおざなりでした。関心のない彼としては、私の醜悪な情熱

にすっかり呆れてしまったのでしょう。それまで私としては、漠然と殿方はだれでも女の被虐的な姿は好むはずだと思いこんでいて、だから思いきった頼みもできたのですが、けっきょく後に残ったのは二人とも妙にぎこちない白々しさだけでした。そして、彼は私をもてあますように避けはじめ「恋」は終りました。

そんな失敗があり、私は以前よりも臆病になったのです。以後、交渉のあった相手の人にも、いいだすきかけもつかめず、中途はんばな想いと、未練気で、ぐずな自らを嫌悪する気持だけが積み重なって、今日に及びました。

四畳半ひと間のアパートのひとり暮らし。は

た目にどううつっているかは存じませんが、自由といえは自由な夜の時間、私は空想の世界に自分の裸身を縛りつけるのです。

家出娘になった私は、やくざ者にたぶらかされ、無理無体おかされた上に、逃げられないように手足をくくられ、一室に監禁の身となり、性的なしこみを受けるのです。

やくざの兄弟分や、チンピラなどに思うように恥ずかしめられ、衣服をあたえられぬまま一週間。

売春専門のバーの女給にされ、ひもにつくす日々。かせぎの悪い夜は、バーのはねた後店でリンチされるのです。肌にとりぎり縄をかけられ、無防備にされたお臀をびしりびしり鞭でうたれ、そのまま床に転がされて一夜を、ふるえながら過ごされ、翌日、パーティーに床にそうしてしまったところを見つけれ、またお仕置されます。浣腸され、排泄を、見ている前で強制されるのです。

やっとな縄をとかれても、衣服はあたえられないまま、掃除に追い使われます。便所や床の水洗い。やり方がなっていないといわれては、這いつくばったうしろから棒でこじられ突っつかれるのです。

それから後日、わずかなばくちの借金のため、ヤクザの親分を買われて、その家でくらすようになるのです。台どころの土間におかれた犬小屋が、それからの私の寝ぐら。意地

の悪いお婆さんがいて、犬の首輪に鎖をつけられ、竹の棒でたたかれながら、広い家の掃除や、多人数の炊事に使われ、ヘマをしたといっっては、小意地の悪いお仕置でいびられ、夜は、若い衆部屋に連れこまれ、多勢の荒らくれ者たちになぶられなければなりません。食事は残飯があてがわれ、手を使えず、きかないボールヘ口を突っこんで食べるのです。

一度酔った親分に弄ばれているところを、若くておキヤンな姐御の目にとまってしまい牛の鼻環のような太いリングを貞操帯がわりにし、鍵がなければあかないようにされるのです。それでも安心がいかず、夜は秘密クラブの奴隷ホステスとして働かされることになります。

ひたいとお臀に番号を書かれ、例のリングから針の突きで鉄丸をぶら下げられ、ガニ股で、気まぐれな鞭に追われながら客席をまわり、お客のいたずらに誠意をつくしたサービスをしなければなりません。

ショーになると舞台にあがり、し得る限りの卑わいな身ぶりで踊り、露骨な言葉で野次られ、相手役の男に今度は両手吊りにされ、足も一文字に広げられて、全身に鞭をあびます。浣腸、排泄シーンもあります。

そうした女奴隷の一日、一年、一生、さまざまな瞬間を自分に重ねながら、私は自分を

縛り、鏡に裸身を写し、やがてもの狂って行くのです。ほとんど毎夜、そうした独りプレイをせずにはいられません。ほんとうに、みだらな女です。

狂おしさから醒めた時、なんとも救いようのない、いやな気持ちになる時があります。けっきょくは、だれに受けいれられることもない、情熱のない結婚生活を、と思うと、生きることの虚しさに打ちのめされてしまうのです。そうであってもやはり私は夜がくればもの狂うでしょう。一生そんなままで過ごしてしまふのか、と考えると、情なく、自分があわれでもあり、一そう狂おしく身もだえる想いがせまります。

あなたの小説のヒロイン、やす子がうらやましくて仕方がありません。彼女はあなたのこしらえたイメージで、実在のモデルがあったものかどうか私には判断が付きませんが、私にとってはやはり実在をはっきり感じるこのでさるひとです。

やくざのヒモと流浪の生活を送る女！温泉地でサディスティックなショウをつとめ、ヒモの筈の下で悦虐にむせぶ女。無知で、奉仕的で、純一な情の女。二人が、どうして温泉地をめぐる秘密ショウの芸人になったかは私のいつも空想する私自身のさだめの物語と少し違いますが、まったく気にならないので

す。貴方そのひとがヒモで、奴隸の私をお責めになるような興奮が私をとらえてしまいました。

前後もわきまえず、お手紙さしあげる氣になつてしまったのも、あなたのお作の罪だと申しあげたら、勝手な女のいい分にお怒りでしょうか？ 例えお怒りであっても、この手紙にいくらかのあなた様の感情のお動きがございますれば、私の倅せです。お怒り下さいませ。みだらな奴隸に罰の鞭をひとつなりとお与下さいませ。

是非ともご返事がいただきたいのです。あなたがお作のなかのヒモのような男のかたとは思えないこと、ひとつの不幸でございますが、またあなた様にはご立派なご家庭があり、見ず知らずの女の氣まぐれなど、構つてはおられない、とおっしゃられるかも知じませんが、おしてお願いいたします。一人の女のあわれな思ひに、ひと言の納得をお与えいただきたいのです。

お会いできぬまでも、人の口笛に耳を立てる一匹の雌犬に、どうぞお声のひとつ、おこぼし願わしゅうぞんじます。かしこ

○ 思いがけない早速のご返事入手いたしました。まこと夢見るこちです。あなた様のあて書きの私の名、手紙受けに見つけた時の私の胸はしぼられるように痛く、封あける手

がまるできかず、ぶるぶる震えました。

お優しいご配慮のうかがえますご文面、かわいた私の心にしみこむよう。やはり思ったとおりのお方、という何か安堵の氣が広がつて行きます。けれど、またそれがちよっぴり私には不満、もの足りなくもあるのです。なにと申し上げると、返事だけでも過分であるのに不満などと、すぐ女はつけ上る、と、ご不快になられるかも知じませんが、ごかんにんの程。お願い。拝みます。

あなた様のお優しさ、もとより私の乞うたところですが、私などの情動、氣にもかけずあなたのご勝手に、ご意志があるものならご成敗、していただけるような、荒ぶれた男ぶりを内心、私のぞんでいたのです。

プレイを私が望むか、とのお問いあわせ。考えてみますと、それ以外に現実、夢魔の世に近づける方法はないわけでございましょうが、その点は素直になつてご返事申し上げます。いわゆるプレイという形の人の触れあいには私は興味がもてません。それがどうしても通らなければならぬ関門であるなら、私としてもくぐる勇氣を持ちたいと存じますが、プレイだけで終ることならば、あえてその場にいたろうとは思えないのです。

私の望んでいるところのものは、救いの手などからは見放された悲惨な境遇、動物にとされ恥ずかしめられた生活そのもの、なの

です。その点では私はまずマゾヒスティックな状況を欲しているの、二次的にそれらを助けるものとして裸にされ、縛られ、監禁されたい訳なのです。一次的な状況にならなければ二次的なものは意味がない、とは申せませんが、意味が薄いといえます。お金で売られるかして、二重三重の制約のもとに、からだには刻印をうたれ、雌としてなぶられながら、生きて行く奴隸こそ私の理想像です。

プレイという言葉も中味が軽すぎて、私にはつまりません。あるいは心に余裕がもてないせいでしょうか、私はすぐ真剣になつてしまい、遊ぶルールをはずしてしまひそう。無器用なのです。とても。

といて、そんな状況が、街に住んでいる二七才の平凡な女のところへ訪れると考えるのも、やはり愚かでありましょう。とすればあなた様に投げていただいた「プレイ」という言葉に、私の望むところのただひとつの入口の鍵があるのかも知れません。

私は今、激しい迷いの渦まく淵を足もとにして目がくらみそうです。今さら、プレイという言葉にこだわるのはあまりにも自分のいじけた事に対して、卑怯というものでありましよう。決断は、すでに私のうちに昔からなされていることを、私は知っています。その声に裏切れないことも、承知しています。けれど、やはりいざとなるとからだが痺れ

たようになってしまつて、いま一步の淵へ、とびこむ事ができないでいるのです。

女の煮えきらない、ぐずな気持をお笑い下さい。もしかすれば、その作用があるから、私はなおのこと、とどかぬ世界にあこがれて身をこがすのかも知れません。

前の手紙で、私は自身がほんとうの意味でマゾヒストであるかどうかかわからない、と申し上げました。体験があまりにも貧しいので、そのところの判断がつかないのです。あるいは体験があつてはじめてひとは性向がきまるのかもしれませんが。想像だけのうで、いくら恐ろしそうな事を考えていても、それが「M」だとはいえない事でしよう。

自分で縄を巻いていて、急に痛くなり、ほどくの慌てる時があります。後になって、この程度の痛さにもうろたえる私が、どうして鞭うちなどに耐えることができよう、と変な暗い気持になります。心の中だけでは、私はかなり重症なMです。そしてもっともっと重くなりたいと願っている病人なのです。

子供のころ、小学校にあがる前のときの春だったと思いますが、私の家の二階で数人の子供——かなり年上の男の児もいた記憶があります——と、例のお医者ごっこをはじめたのですが、女の児のひとりが泣いていやがり男の児がどうしてもやらせるんだときかず、とうとう紐で女の児を縛ろうとするのです。

押さえつけられてヒイヒイ泣いている女の児を見ているうちに、私は頭に血がのぼってしまい、「やめて、やめて」と叫んだのです。

「縛るなら私を縛って」……と。

このとおりにいったかどうか知りません。とにかく、私が女の児のかわりに縛られることになりました。男の児達がひとりではなく皆が妙に意地が悪いような手を伸ばし、私を縛りながらいじめました。下をうつむいていた私の目に、畳にさした陽光がぼんやりした感じでうつりました。その時の気持。どう申し上げたらよいでしょう。女の児を助けようとしたのではありません——憎しみ、が私をかりたてました。

今、心の中だけで悶え、わずかな自慰にまぎらわせている自分自身に、あの時の女の児に向けられた憎しみと同じものを覚えます。自身そのものを私は憎しみ、満たされない憎しみに焦だち悶えるのです。

そういう心理が、どうマゾと結びつくものか私にはわかりません。悶えることによって私は自身に罰を与えつづけているのでしょうか？ あるいはもっともつと私は罰させられなければ駄目なのでしょうか？

私の生いたちを現在まで、とりまとめ申しあげますと、父は商船の機関長でした。留

守が多く、山の手の家には長男と、後妻と長女（私）がおりました。兄が予科練に行き、家をでたあと、私は集団疎開に行きました。

空襲で家は焼かれ、母、行方不明。父の戦死の報、とつづき、戦後は兄に養われ、兄は闇屋で少しもうけて大学へ行きました。土地を売り、私も大学まで行き、卒業後現在の商社に勤め重役秘書をしております。兄の家を出て、ひとり暮らし。この一、二年お酒を少し飲むことを覚えました。男のひとにいわせますと、私は酔うとからみ癖になるそうです。でもともと女としては理屈っぽいのです。だけど、私が酔つておぼえている気分は、やはりあの暗い、いやな感じのものなのです。

ひとり涙をこぼして、酒を飲む悲しみ。という歌の文句と違った「悲しみ」ですが、気分的には同調できます。

今、父母の情愛もはっきりした感覚として思いだせません。戦後の兄とは、つまり生活の協力者という感じ。冷たいのかどうか知りませんが、肉親の情は、ごく薄いのです。恋も、いいかげんなものでした。

つまるところ、しょうがない、とるところのない女なのです。やはり私は罰をうけたいのです。それ以外に何もないのです。是非、お呼びかけ下さいませ。

あなた様のご都合のよろしい時と場所。

私は、主人のあとをしたう犬のように、そこをさがします。あなた様の足もとで、私はすでに震えて、罰をお待ちしております。

○

ご指定、ありがとうございます。
受けさせていただきます。

それまで少しまだ日時がありますのネ。
よけいな手紙にお心をわずらわされておいやかもしれません、何か今、書かずにはいられません。お赦し下さい。

プレイと申しますのは、そのつもりになれば私はあなた様の何にでもなれるということですね。もう、私はあなた様の奴隸になっております。めす奴隸タツコはあなた様——ご主人様の足もとに這って、足に唇をつけ、ご挨拶させていただきます。

それまでの私服を脱ぐことをご主人は命ぜられるでしょうか。それとも、乱暴に乳もとや、下ばきだけをむかれて、ご点検になられるでしょうか。一切をむきだして、もっともお目にかけやすい姿勢を奴隸はとります。

「ケツをもっとあげろ！」

とか

「思い切って、ひろげんか」

とか、ご主人様のご叱責がいただけます。奴隸は無理な姿勢に汗をうかべて、喘ぎだします。ご主人様は、口ぎたなくののしられ

ながら、くわしくお調べになるのです。それから、あたらしくあなた様に奴隸となった身の誓いをさせて下さいませ。

1 本日、金××円でお買いあげいただきますしたうえは、以下のことをお誓い申し上げます。

2 私は今後、人間としての資格をいっさい失いましたので、番号などでお呼びください。番号などは、乳の谷間、内腿などに刺青で記入して下さい。

3、特にご命令などで着用する以外は、昼夜四季の別なくいっさいの衣服は、いりません。所持の衣服は、おとりあげ下さい。

4、私の肉体のすべてはご主人さまの所有です。いかように使用され、苦痛をお与えになってもかまいません。

5、私が生きていられるだけの食物をお与え下さい。残飯その他の不要物で、かまいません。

6、私を他人にお貸しになってもけっこうです。ご主人さま同様に奉仕いたします。

7、私を商売用にお使いになってもけっこうです。その利益は全部ご主人さまのものでございます。どうぞ、秘密クラブのショウなどでお使い下さい。私の特技は、現在、縛られたり浣腸されたりする程度ですが、その他の演技なども、たくさんつけて下さい。

8、ご不要になった場合は、他人に譲渡されてもかまいません。

9、手足を失うなどの不具にされない限り、肉体に傷をつけられてもかまいません。鼻などにリングをぶら下げて下さい。

誓いの言葉を奴隸がまちがえると、お臀をその度にぶたれるのです。涙声になって口ごもっても赦されず、誓いが終ると、ほんとうにあなた様はご主人、私は奴隸の身分となることでしょう。

ご主人様は、これまでの奴隸の態度、言葉使いなどをおとがめになり、身をもって分をわからせるため、はじめてのお仕置をお加えになります。うしろ手にまわし、首をたれた奴隸に、縄をおかけになるのです。びしびしと容赦のない縄目が肌に喰いこみ、奴隸は思わず身もだえてお赦しを乞います。

縄尻をぐいとひかれて床にころげた奴隸に鞭をおあてになり、縄をひいて這い廻る奴隸は、顔や肩にご主人さまのおみ足をうけて、舌を出してあえぎ、浣腸をこらえて、ブルブルと肌がおののきます。

それからしばらく我慢しなければなりません。敏感になった神経をご主人さまは気まぐれにおなぶりになります。

「ごめんなさい。お赦しになって」
叫ぶ途中で、衝動はいっきに腸をかけくだ

り、もうとめようありません。

ぶざまな姿をさらけ出したあと、そのことについていろいろとご批評をうけながら、始末をお願いいたします。

そんなご主人さまとの出会いを夢にみては今日もまたひとり勝手な陶酔に浸る奴隷の、めす犬——にあなた様の鞭をお加え下さい。

あなた様のお宅の台所のモルタルのタタキの匂いが私を呼びます。できれば、犬小屋のような檻をご用意していただき、あなた様のご用のない時、きめられたお掃除や台所仕事を終ったあとは、どうぞ追いこんでおいて下さい。あなた様のお命じがなければ、勝手な排泄など行いません。どうしても我慢ができず、そそうなどいたしましたら、ほんとうに私にも耐えられない微罰をお加え下さい。

焼け火箸をあてられたり、大きなお灸をすえられる事は、私がいくらMでも飛びあがって、ひいひい泣いてしまおうと思うのです。

刺青のほかにも、どうぞひたいや腹部、お臀などに卑わいな言葉をお書き下さいませ。

縄をかけるにも、さまざまな形があると思うのですが、色々となさって下さい。写真をおとりになってもけっこうです。それを他人にお分けされても異存はありません。あなたがお望みでしたら、どんな時どんなところでも奴隷としてお仕えいたします。

昔風の拷問、刑罰もお与え下さい。汚らしい囚衣でいましめられ、身に覚えのない罪状で責められ、処刑されるのは本望です。

どうして私は今の世の中に生まれてきてしまったのか。江戸時代や、つい戦前まで警察などがいのように女を恥ずかしめた時代に生まれあわさなかった不運を、おもう時があります。そんな時代なら、うまく工作すれば無実のあるいは適度の罪で縛られ、責め問いをうけ好運ならば日本橋の畔へなどさらし者にされて、遊女や非人におとされることもできたでしょう。

遊女や非人などという身分は、それじたいMですし、日常M的なこともいっぱいあったろうと思います。さらに、そこから逃げられないということがすばらしい事です。私ならわざと逃げて、へたなつかまり方をするかも知れません。人に唾を吐きかけられ、ののしられ、そうして何の救いもなく生きて、醜く老いて死んで行くのです。身よりもなく、寒い巷で行き倒れになって死ぬ運命こそ私のえらびたいもののなのです。

現代は私に夢をもたらしません。トルコ嬢とか、場末のバーのホステスとか、ストリップの旅芸人とか考えられるのですが、何かひとつ、もの足りません。

やはりプレイのほかないのでしょうか。そのプレイ、といっても実際、機会はめっ

たにおとずれませんし、私自身臆病すぎて機会もつかめなかったのです。

あなた様にお手紙さし上げ、恥知らずなことで述べてしまったのは、まったく突然の嵐のようなもの狂いの結果でした。紙に文字を書いていても、これが現実で、あなた様という男の方の手に確実におちるものであったものか、信じられない気持ちになります。

だけど、私が変わることにつかれている、どうしようもない淫らな女であることは、まぎれない現実の事実でありますし、ほんとうに正直申し上げたことなのです。

例え嘘であっても私はもう、あなた様のものとへ行かなければならないことは、とくに心にきめております。

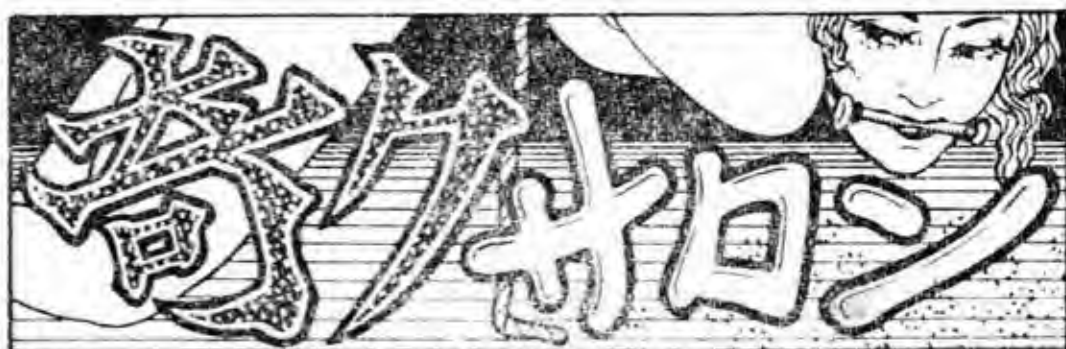
お会いするのは、だけど恐ろしい。緊張のあまり、あなた様に失礼申し上げるのではなにか、と思わずらったりいたします。奴隷がとり乱しましたら、どうぞご容赦なく、おとり扱い下さい。

お仕置をうけさせていただきます。

ご主人さま御もと

奴隷 タツコ

（作者記）——二月号の奇クサロン、安沢達子さんの一文「私を奴隷にしてください」に触発されて駄文をろうしました。アイデアのみではなく、お名前まで無断、盗借用いたしました。ご無礼の段、お赦し下さい。



人妻の浮気と売春

滝川 良平

世の男という男は常に女を愛したい愛されたいという強い気持を抱いているものである。女にしても同じことであって、男に愛されたい愛したいという限らない憧憬を抱いているものである。しかし中には異性ではなくて同性が好きだという者もあるが、それもまたイメージとして異性を恋慕してい

ることに変わりがない。

殊に男性にとつては、出来るだけ多くの異った女性と交りたいという気持が生理的にも強い。それは花粉を広範囲にまき散らすように自分の種族を増やしたいという念願が必然的にそういう行動をとらすようになったのだろう。男性の浮気というものが、ここに胚胎するのは論を俟たないのだが、最近男女同権思想の普及からか、否むしろ女性上位時代の当然の帰結としてか、女性特に人妻の浮気も珍しくなくなっている。

昔であつたら貞淑な妻という桎梏によって泣き寝入りしていた人妻が勇敢にもその鉄鎖を打ち切つて敢然として自分の好む道を往くというのが現実の姿である。

それともう一つ注意しなければならぬのは、人妻による売春の頻発である。摘発された売春宿とか売春旅館などの中で、人妻ばかりを使つていたという事例が全国的に非常に多い。中には結婚間なしの団地の若妻などがアルバイトとして売春を楽しんでいたという例もある。彼女たちにしてみれば夫や世間に知られさえしなければこのアバンチュールは楽しくて仕方がなかったらしい。

簡単にまとまつた金が入る事も魅力だろうが、何人もの変わった男性と接するという点に楽しさ倍増という気持を味わっていた事だろう。これは人妻の娼婦性があからさまに露呈された事実であるが、世の多くの人妻も、心の奥底には、そういった願望を秘めているのではなからうかと思う。

戦後姦通罪というものが廃止されたので人妻といえども『自由恋愛』をすることは認められているわけであるから、それが売春という犯罪につながらない限り、その娼婦性は大いに発揮されているとみてよいだろう。多くの男性に愛されたい愛したいという女性が増えつつある事実は、世の男性にとつては一つの福音であると共に、また反面、脅威でもある。

ここで一人の女性に登場を願おう。彼女は二十六才、結婚後三年になる人妻で子供はない。夫は真面目なサラリーマンで二十八才。或る日、彼女は実家の母から無心されてまとまつた金が入用になり生まれて初めて質屋へ行った。着古したスーツと着物を持っていったのだが希望した金額はどうしても貸してくれない。しつこく頼んでいると質屋の主人が言った。

「アルバイトしてみませんか。貴女の器量だったら、それくらいのお金はすぐ手に入りますよ」

翌日の昼、彼女はホテルの一室で中年の紳士と逢つていた。色白で肉体美のまだ開き切っていない若妻の身体を、その紳士は満喫した。この真昼の情事は、彼女にとつても、自分の肉体の価値を自覚させた。彼女は日を追つて美しくなつていった。二日目か三日目毎に質屋の主人から電話がかかってくる、彼女は化粧も念いりに、白い肌にしつとりと脂がのつて一段とコケツトリになつた彼女に夫も目を瞠つて家での夜の生活も楽しさを増した。それでも、十日も電話がかかつてこない、彼女は何となく、いらいらした。

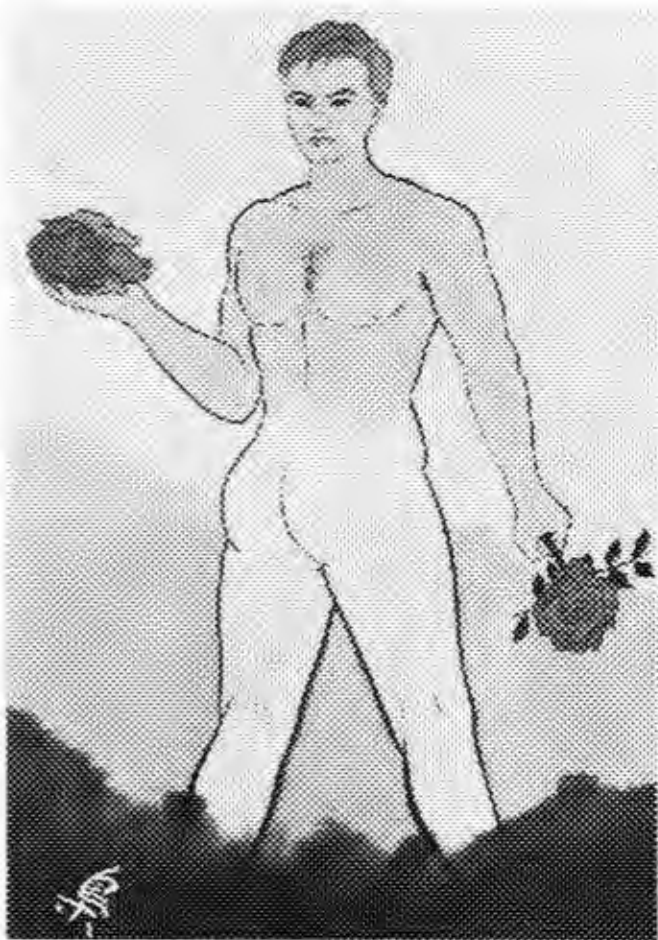
今日はどんな相手だろうかと考えると、彼女は自分の肉体の前に拝跪する男性を考えて、全身がしびれるようにふるえた。

お互い、住所も名前も明かさず現実の身体と身体をぶつけ合つて楽しむひとときが、彼女にとつては最高の悦楽であつた。

私は『人妻浮気一代記』として彼女の経験した実話を一度筆にしたいと考えている。

…… 一月号を読んで ……

「雑感」 辻 梟 太郎



まず御詫びしなければなりません。それは私が本誌を精読していなかったことです。私が、自分の絵を皆様に見ていただきたいと願うのと同様に、投稿される方々もまた、作品を読んで貰いたいのだという簡単な事実にも思い至らなかったのは、なんとしても迂闊でした。そして、それを教えて下さったのが、ほかならぬ小杉千恵さんだったのです。生まれてこのかた一度も下げたことのない頭を？

こうして深く下げるのは、いまいまいましいような恥かしいような気持ちですけれど、まことに、やむを得ぬ仕儀と云えましょう。(こんな殊勝なセリフを云いながら、実のところはタバコの煙で輪をつくっているかも知れません)

そこで、早速、改心の証として一月号を読んで感じたことを、思いつくままに書いてみます。

先ず麒麟田欧二さんから……。むずかしかったですなあー、あの人間探求は。元来が頭の弱い私ですから苦心しましたが、本箱の奥をひっくりかえして、あなたの発表された全作品を読んだほどですから、何となく解ったのでしよう。

次の作品を期待しています。

カメラオンさん……。間合を違えないように、すばらしい女性を捕えなさい。オヤ、もう五、六匹つかまえたって？ これは失礼。

妹さんは、絶対に編集部のワルイ野郎どもに引渡してはいけません。この私にモデルとして貸しなさい。なに、駄目？——いいじゃない、友達じゃない。やっぱし駄目？ 「ガックリ」。

葉月由紀夫さん……。『ケント紙の彼女』というヤツを思い出しました。お互い、絵では苦労しますね。特に私は、小学生の頃から図画と綴り方が一番の苦手だったのですから呆れたものです。病、膏盲に入る、というのはこれでしょうな。

小杉千恵さん……。一月号に採用していただいた絵は、あなたに刺激されて描いたものですが、あまり私を、興奮させないで下さいな。もしも、ですよ。もしも、私が睡眠不足から病気になる、死んでしまったら、みな、あなたの責任ですぞ。私が死んだら、きっと「魂魄この世にとどまりて、恨み晴らさでおくべきか」と、想像もできないような恥かしい縛り方を開発し(幽霊なら多分できるでしょう)あなたに試みますからね。

今から覚悟していなさい。犬とたわむれるのも良いでしょうが、お化けとのプレイもちょっとオツなもんでしよう。

花柳龍さん……。その芸術作品を創れるのが、数ある自称芸術家の中で、幾十万人に一人しかいないのですからねえ。でも、あなたの云われるように、努力だけならば凡才にもそれなりにできるでしょう。心、清ければ作品もまた清し。ですね。

中村純子さん……。これは大変な美女です。膝のあたりのお色気も満点。ところで、あなたは自分で自分を後手に緊縛する方法を知っていますか。昔、本誌にその方法を投稿された方がおりましたので、もし御存知なければ、編集部にも問合せをしたらどんなものでしょうか。きっと、もっともっとすばらしい写真ができるに違いないありませんよ。

辻村隆先生……。私はカメラハントの写真と文は、それぞれ独立した作品として見ております。聞けば御病氣とのこと、一日も早く快癒され、往年の若々しさを取戻されますように……。

まだ御呼びかけたい方は多いのですが、あまり冗長に過ぎると没になる恐れがありますので、今回はこの辺で……。えッ、短くとも没だ。ですって……。そりゃ、きこえませんが、編集長さま。



—〈第六十九回〉—

辻 村 隆

三億円犯人と誤認されて、別件逮捕された草野さんの事件で一番痛切に感じたことは、無辜の人間でも、別件逮捕という名目で、捜査された場合、どんな些細なことでも、それが何らかの法令に引っ掛け得るということである。仮に若し私が、そうした誤認によって捜索されると、刑法一七四条乃至一七五条によって、どんな名目でもつけられて逮捕されるし、M新聞のように、容疑者という観点で見れば、白い人間も灰色か黒く見えよう。私がいつも一匹狼の存在

でいるのも、過去二十数年に亘る蒐集が、そうした刑法に触れる事を懼れて、唯我独尊的にならざるを得ない理由でもあるようだ。ごく微小な事件や、他人の犯罪に巻きこまれて、汗と脂の累積を失いたくない気持に外ならない。

掲載当時は、一般大衆や批評家等から問題にされなくても、やがて日が経てば、その努力の結晶が認められてくるものがある。

沼正三氏の『家畜人ヤプー』が一月中旬、都市出版社（東京都渋谷区代々木四一二）から単行本（一〇〇〇円）として発売されるのは慶賀にたえない。惹句にこうかかれてある。（十年前『奇譚クラブ』に連載されるや、三島由紀夫・渋沢龍彦・遠藤周作・奥野健男の諸氏を睽目せしめ、その後幻の作者による幻の奇書として、完結を待たれていたマゾ中心のSFの力篇、漸く刊行なる。解説は奥野健男と倉橋由美子の二氏であるが、この惹句を裏返せば、こうした文士諸氏に、汎く奇クが読まれていたし、今も読まれているという事実を裏書きしているのではなからうか。

沼正三氏の正体は、遂に私にも

解らずじまいであったが、あの緻密な文章、広汎の博識、一字一句ゆるがせにしない几帳面さから推察して、大学教授めいた匂いがするものである。最近こそ奇クの誤植も少なくなつたが、十数年前となると、印刷所も馴れておらず、校正も多少ルーズだったせいだ、かなり誤字、誤植がひどかった。沼氏は、奇クの活字に目を通され、誤植があると、必ず、何頁の何段何行目の何文字目はかくかくしかじかと、訂正の手紙を編集部に送り、適確に誤りを指摘されたそうである。箕田編集長も沼氏の原稿には人一倍気を使うと話しておられたが、そうした愛着の心遣いが後世に遺る奇書となつて、今再び、陽の目をみるようになったのである。奇クの為にも拍手したい様な欣快事である。

以前のことは、もう再び愚痴めいて繰り返したくないが、それに付けてもフト心をよぎるのは、ノール書房の『伊藤晴雨伝』である。秋に出版といっておられたが一向にその気配もなく、編集部からお礼のシルシとかいって、竹久夢二集を送ったという手紙が届いたのに、今に至るも現品は到着し

ない。難航を続けている事は推察されるが、一事が万事、送りもしないのに送ったなどと書いてよこされると、尚更不信を感じるものである。

デラックス誌『血と薔薇』も、数号であえなくなつたようであるが、一読して、かつての『アマトリア』『人間探求』の線を感じ、いかにも神秘的なもののや、もっともらしい絵画やフォートを掲載していたが、内容はトツツキにくく稍難解である。わざとそうした高級めかしたものにしたのかも知れないが、予告の『家畜人ヤプー』の連載は、見事前記の都市出版社に奪われてしまった。SMめいたものはあつても、所詮、頭の産物の抽象的なものが多い。『血と薔薇』がチョコレイトぐるみの豪華なキャンディに例えるならば、奇クは、昔ながらの駄菓子かもしれないが、チクロを使っていないだけ、素朴でナマの味わいがあるのではなからうか。

前月号の巻頭で、「一寸一言」の義憤生氏が、私のカメラ・ハントや、過去の小説について、山本八郎氏に反発されていたが、よくぞあそこまで私の拙ない文章を愛



『宙に悶える』

柴田 貢

読せられ、分析されたものだと、書いた私自身つくづく敬服した。緑猛比古のペンネームで時代小説を書き、大判当時、信士寒郎の名でユーモアを書き、辻村隆で現代物やルポを書いて、私自身ひとかど、林不忘・牧逸馬・谷譲次の三ペンネームをつかいわけた長谷川万太郎氏気どりで、一時は作家への登竜門を志したものであるが、所詮当時のカストリ雑誌相手ではメシも喰えず、作家を断念して今の本職を持ち、傍ら細々と好きな道のSMを、辻村隆で追求しつつづけている現状である。既にあれやこれや書き始めて二十五年。紅顔血の気の多かった私も、今年はどうやらオジイちゃんになりそうな長女のおメデタのシルシである。感慨も変化すれば、構想も迂余曲折しよう。人生五十年といわれた峠にさしかかり果して何時までS

Mを探究してゆくか、私自身にも分らないが、所詮はもって生れた好きな道、雀百までの例え通り老軀を引っ提げて汲々としているかも知れない。義憤生氏には、私的に目にかかって、一度私の過去の膨大な蒐集を、しみじみお見せしたい気持である。よかったら、箕田氏まで御連絡下さいませんか。

× × ×

作家で長命な人は案外に少ない。そうした無理の祟りだとは思いたくはないが、どう考えても超人的である。というのも、私の場合、SMカメラ・ハント一篇書くのに実に難行苦行、汲々としているからである。

義憤生氏も仰有った如く、ハントはルポタージュである。同巧異曲、似たりよったりのSMハントを、如何に変化を与え、如何に多少でも興味を持ってもらえるかというところに腐心し、それがつい長くなってしまう結果になつてくる。唯、出会って縛ったというだけなら、いとも簡単であるが、それでは飽きられるのは火をみるよりも燎らかである。私自身簡略に簡潔にと思いつながら、最近はいつも、六〇枚から八〇枚になつてしまふのは、過去五年半に亘って、管々孜孜として続けてきたハントが、同巧異曲にならないよう、努めて相手の素性をきき出したり、精神面までつきつめて書き現わそうとしていくからでもあるうか。

鬼六氏がピンクプロの製作に手を伸ばしたり、あれこれの仕事をし始めると、つい「花と蛇」まで手が廻らなくなるように私もチラホラとあちこちから懲憊されてい

る雑文や小説に手を出すと、恐らくハントは中断せざるを得ないのではなからうか。私にとっては、本職の作家のようなスタミナは到底ないし、もう少し私自身を大切にしたい長生きしたいからである。そういつた意味からも、乱作のゲバゲバ作家になるよりも、一作だけのSMカメラ・ハント作家でいたいのである。生活が安定しているせいで、欲が出ないのかも知れない。

× × ×

プレイはしたいが、フォトは撮られたくない——。そんな女性とのハントが、過去数年の間に十指に及んできた。一応カメラ・ハントと銘打った以上、フォトのないハントは割愛しているが、フォトのとりハント以上に面白い、事実ハントよりも奇なりというのが交じっている。大半はプレイのあとハントはセックスに走るが、女性の貞操の觀念が日増しに変貌しつつあって、自己の快楽を求めてという傾向が非常に多い。ましてプラス報酬となると、M女性にとっては、一石二鳥というところなのだろうか。大正生まれはもうついて行けない気持、しきりである。

六〇翁の願望譜

風流粹人

私はこの歳まで、ただ一途に女の美しさを求めて来た。そして、辿り着いたのが、SMの中の女羞恥責めの耽美感である。

既に生殖本能を虚脱したに近いが、決して私自身の儚ない性をかきたてる為に、SMを求めているのでは無い。しかし云うまい。所詮自己弁解に過ぎぬ。要するに私は女の美を求め、讃美したい。

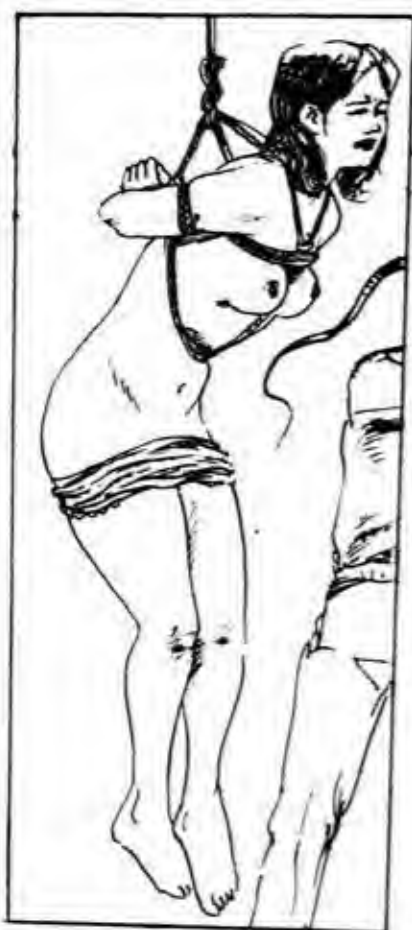
私の望む女の魅力は、可憐であること、と、その可憐さが羞恥に悶えることに存在する。

六〇翁が求める女性とは、可憐であることが必須条件であるが、何も可憐であるというだけでは少女であると定まったものではない。近頃は、人妻の方が可憐である場合

も多い。

相抱擁する女は、相手の存在がその羞恥を柔らげ、私には物足りなく感じられ、本当の女の美を発見できかねる。

私の願う女の羞恥美の祭壇は、白い陶器なのである。この意味に於いて、奇ク旧号の小池美喜嬢も川路叢子夫人も、またとない美しい肢態を晒し、私をして、夢の世界を味あわせてくれた。顔といい、体といい、二人共、満点の女であり、表情も姿態も申し分なかったが、惜しむらく、何かが不足しているように思えてならなかった。これは私の欲かも知れないが、次の点を指摘し、今後の課題として戴きたい。即ち、美喜嬢は全裸に



イメージ画

『揺れる花』

山岸三郎

因って救われ、叢子夫人は縄によって羞恥心を削減されている。私は羞恥の美しさを、ひきずり出すためには、女に「女であることを強く認識させる」ことが当然に必要であると考え。緊縛は上半身に止めて、下半身は膝小僧にまでまっ白なズロオスをずり下げた姿が望ましい。白い陶器の上で白いズロオスをずりおろす時、その一枚の布ぎれが女の認識を生み、被虐の悦びを垣間見せるように思える。

次回に対する望みは再々度の関谷富佐子の登場希望である。ヌード雑誌でない奇クにあつては、評判の良い女は何度も誌面を飾る義務がある。美しいモデル嬢がポーズを変え、ムードを変えて現れ、何度も同好者と接触してこそ、本誌の真価が発揮される。愛読者の共通の宝物である美女は何度も登場するうちに我が女囚のように感じられるようになる。そこに意義があるように思う。

富佐子の女ざかりの、むっちりとした女体の太腿に、まるめてずりおろされたズロオスから、私は羞恥の美しさを嗅ぎとった。富佐子が可憐にも白い陶器の祭壇に昇り、ズロオスを太腿にまといつか

せて、私の意識の中に悶えるのを待ち望む。

編集部だより、塚本鉄三氏が関谷富佐子の撮影の助手を求めているとあり、且つ、別途、小人数ながらも色々な会合が催されていると記載されていたが、これは同好者として大いに悦ぶべきことである。よしんば世間体をはばかって、熱望しつつも名乗りでることの不可能な大半の読者が居たとしても、私同様に、そこに奇クの身近かさを感じ、淡い夢をみることに幸福を感じているに違いないと私は思う。しかし、出来得ることなら、通信文が我家に舞い込むのを怖れる者のために、日時を定めて電話の照会を許可願いたいものである。

一糸も纏うことを許されぬ関谷富佐子が、今の今まで彼女の女であることを強調し続けてきた白いズロオスを、目の前で嗅がれ、触れられ、舐められるの羞恥に美しい体を火照らせたり、悦虐の洗面器を配置されて悶える美態を非情なレンズで捕えたい。私は、彼女が歯の間より可愛い舌尖を覗かせて涎を垂らす表情をアップで撮りたい。六〇翁のささやかな夢を叶えて欲しい。

茶の間のプレイ風景

私の引廻し

早木 夢二

全裸に菱縄を打たれ、股間縛りを施された女囚が、裸馬に跨ってゆらゆらと揺られながら江戸中を引廻されてゆく……。

私は、そんな姿を思い描いて、四つん這いになって彼女をのせ、のっそりのっそり部屋の中を動き廻るのである。



イメージ画

『処刑近し』

倉 真砂

引廻しは女囚にとって、最後の晴れの舞台ではないか。

長い牢生活と拷問の責め苦に、やつれ果ててはいるものの、かつての美貌と、豊かな肉体の面影をいま、きびしい縄目にせかれた裸身に偲ぶことが出来る。

女の身に、あられない緊縛姿への羞恥と、引廻しの果てにやってくるお処刑への恐怖よりも、お調べのため、番にのせられて奉行所へ通ったときに僅かに吸った空気を、いまは誰はばかりことなく、胸一ぱいに吸い込むよう、ぐっと胸をはって、顔をきつと立てている。菱縄に締めつけられた双の乳房が、最後の生の息吹きを伝えるように、ふくらと盛り上り、沈んでゆく……。

彼女が両足で、ぐっと私の胸をしめつけた。縄の、あるかなきかのとげが、私の背中に、縛られた時の感触を思い出させてくれる。彼女が、ぐっと胸をはったのが判る。

縄尻が私の動くのにつれて、畳の上でサラサラと音を立てた。ちよっと……。

鏡の前で、彼女が言った。裸馬はピタリと止まった。馬は頭をもたげて、のぞき込んだ。

ちよっと赤らんだ彼女の顔に、うすい汗が光っている。思いきり反らした胸に、真新しい菱縄が、がっちり喰い込んで、喰い込んだ辺りの肌が、ほのかに赤い。ぼーっと、うるんだ彼女の目がいまや彼女も、江戸の町々を引廻された女囚の最後の哀歎に陶醉しているようである。

彼女がポツンと、呟くように言った。

引廻しが済むと、ある深夜、近くのお寺の境内まで引かれていて、墓石を抱かされたこともあったのを思い出してでもいたのだろうか。

行って……。

彼女の声が、かすれている。

裸馬は、のろのろと動きはじめた。彼女の体の重みが、段々加わってきた。

ふと気がつくと、ぐったりと顔を垂れ、上半身を伏せている。

お処刑場が近いのを知ったのかも知れない。

裸引廻しの女囚の胸に、はじめてかすかにお処刑への恐怖がよみがえったのであろう……彼女が、私の背の上で、ぴくっと震えた。

(了)

◆◆◆秋山夫妻の熱演に想う◆◆◆ ◆◆◆S M S の 確 認◆◆◆ 柏 青 風

千葉県下には関西ヌード常設館が最近増加し、その大胆な演出はとみに評判となっている。私の住む松戸市にも有名なストリップ劇場がある。

踊り子も比較的若く粒がそろっている上に演技は大胆である。いわゆるオープンな勿論であるが、赤、青、ピンクなどのライトが女体に乱反射して、あるいはキラキラと、あるいはヌメヌメと光り、またうごめく。

観客は忘我の境地で、あくことなくその七変化に見惚れる。踊り子の白い肌は、照明に赤く、又、青く染まり、その瞳は照明に映えてキラキラと輝き、観客の熱っぽい視線に應えて艶然と笑い輝く。

といった風景が毎日続いているが、このうちの明星劇場で、先程変わった出し物があった。

秋山夫妻の登場である。

明星劇場での秋山夫妻の「残酷ショー」は、十月二十八日の11PMに出演された直後であったためか、宣伝広告にも「テレビ出演の

秋山夫妻」とド真中に宣伝されていた。

この道一筋に励んで来られた秋山夫妻も、ストリップの世界、SMの世界のトップスターの座を確保された模様で、誠に御同慶の至りである。

秋山夫妻の「残酷ショー」は奇クのカメラハントでそのようなショーがあることを知ったのみで、実演に接したのは、11PMのテレビ放送が最初であった。

その日の朝刊で「サド侯爵もびっくり？」のタイトルを発見し、ゲストに辻村隆、秋山夫妻とあったので一日中仕事に手につかず、十時半からテレビにかじりついて今や遅しと待ち構えていた。

前座のSMショーは所詮は作りもので、私の琴線に触れるものはないが、何回も見慣れた辻村先生と共に登場した秋山夫妻を見て、これは本物だと思った。

長い黒髪に網タイツのローズ秋山は大変魅力的であった。秋山夫妻の演技にシビれるよう

なショックを受けたのは、単に私一人に止まらないであろう。もっとも、テレビの画面は故意に焦点を外してのピンボケ放映であったが、音声が生々しい迫力を伝えてくれた。

汗まみれで息を弾ませながらの秋山夫妻のインタビュを興味深く視聴させて頂き、ローズ秋山の「妾達は舞台がSEXと考えている」との言葉に、一層感銘を深くした。

しかしながら、実際の秋山夫妻の舞台の上で演ずるSM残酷ショーの迫力は、テレビのそれをはるかに引離していることを先日わざわざと見せつけられ、その強烈な印象を私は今でも反芻し、回想している。

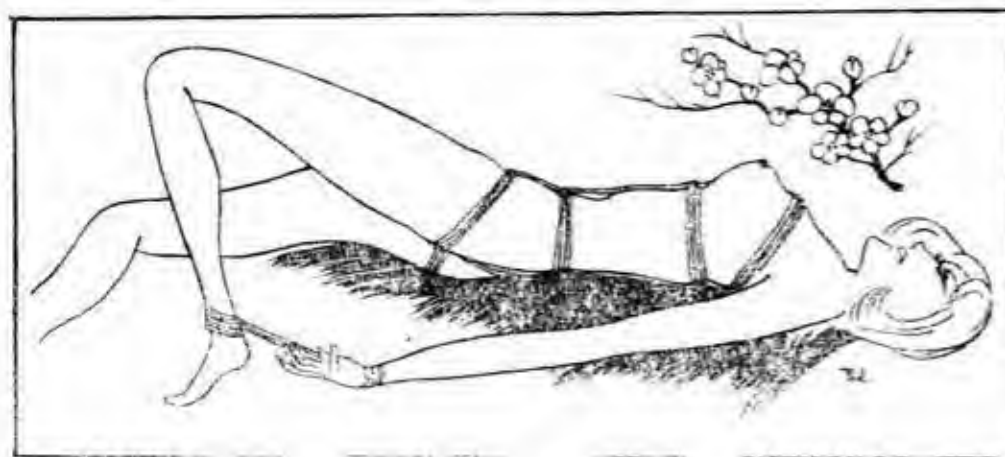
テレビと異なり何の制約もない舞台のかぶりつきでの鑑賞と生の演技とで、秋山夫妻の魅力を十分に感得することが出来て大変幸せであった。

明星劇場のすべての踊り子のすなる冒頭の演技はローズ秋山にとっても例外は許されないのか、私はローズのオープンに接する事が出来た。照明に映えるローズの豊かな白肌を、やがて受ける残酷な責めの犠牲として身ぶるいを覚えて

編集部だより

○年頭に際しまして寄稿家、執筆者の方々から多数の賀状を頂戴しましたことを誌上を以て厚く御礼申し上げます。熱心な読者の方々から新しい年を迎えた本誌に対しまして益々発展するよう激励の通信に接しましたことは誠に心強い限りでありました。本年は一層充実した内容の本誌を以て皆様の厚い期待に応えたいと思います。

○先月号のこの欄で塚本鉄三氏が関谷富佐子さんの写真撮影に際し撮影助手兼責めの助手を募集しているということを書きましたが、発売以来間もなく実に数多くの各地の読者の方々から我こそはという熱意のこもったお申込みが殺到し編集部でも驚いております。早速塚本氏に転送しましたが彼からの連絡に依れば関谷さんも二人、三人の数多くの人から責められる方が興味があると大いに乗気だったそうで、いずれ新しいフォトで誌上を飾れることと思います。○写真撮影といえは最近本誌のモデルになりたいという女性の志願者が比較的多く便りを寄こしてお



イメージ画 「Mのエンジェル」 与田末聡夢

つ凝視した。

テレビ出演の時と同じ網タイツを惜しげもなく脱ぎ棄てたローズの姿態を見て、やはりテレビとは違うなと感じた。

秋山氏の縄さばき、答さばきの絶妙さには改めて舌を巻いた。これがプロフェッショナルというものかと、唯々感心の他はない。縄掛けの早技とそれを使っ

責めの迫力は、まやかしのない演技をする秋山夫妻の独占するところであろう。責めに呼応するローズの呻き声は悩ましく、私の耳に残っている。そして悦虐を晒け出して激しく悶えをみせるローズの裸身は、SMショーの舞台で観客にセックスの臭いを感じさせた。

かねてから「SM」とは「SM S」つまり「SMセックス」であるべきで、セックスと無関係なSMは無意味であるとする私のSM観を、眼前で火柱と化して燃え盛るような秋山夫人の熱演が見事に証明してくれた。

縄によって強調されたローズの柔肌が、SM演技の進行につれてしっとりと潤い、羽毛の刺激を受けて艶やかさを増した時、ローズの瞳は輝きを増して、苦しげに、又、悦楽を耐えるかのように激しく息を吐き出すのが感じられる。

最後に、燃える蠟燭の攻撃に大きく一声呻吟して果てたローズは本当に失神し、「SM S」の極限に没入しているのではないだろうか。

秋山氏が、失神したローズの縄をものうげに、いとしげに、しかもゆっくりと解く時こそローズのいう『舞台がSEX』の境地では

ないかと思う。

日頃の念願が叶ってSM Sの実際をこの目で見る事が出来た私の幸運を喜ぶと共に、日毎にSM Sの極致を体験しているであろうローズ秋山の幸せと健康を祈ってやまない。

何度か、楽屋へ秋山夫妻をお訪ねしたいとの衝動にかられたが、どうしたら会っていただけものやら勝手がわからず、楽屋訪問はあきらめたものの、劇場へは三度も鑑賞に通ったが、既にテレビ出演のスターとなられた秋山夫妻の人氣はものすごく、二度とかぶりつきに陣取れなかったのが残念だった。

秋山夫妻がお元気で、又、当地へ来演されるのを首を長くして待っているのである。

○——

拙文を書いた後で、奇ク一月号を買ったのですが、香川実乗様の素晴らしい「秋山夫妻残酷ショー見学記」が掲載されており、拙文とは比較にならない鑑賞描写、しかも写真入りで、全く赤面の至りですが、私にとっては初めての投稿です。のでお許し下さい。それにしても、秋山夫妻は素晴らしいです。

ります。目下手紙や電話で交渉中ですが新鮮な女性の緊縛姿態を皆様に知らんに入れられるかもしれない。長らくグラビア集の刊行も中絶しておりますが新人の登場を機会に今年は絢を競う美女緊縛オンパレードが展開されたら、さぞ楽しいことだろうと考えます。尚、この際、私こそは緊縛のモデルとして或はSの女王として登場してみたいと思われる女性の方がありません。年齢、職業、身長、体重など御記載の上編集部宛お便り下されば報酬その他条件につき詳細お返事申し上げます。

○今回箕田氏が台湾取材旅行に出かけた際、台湾での本誌の読者から日本の女性読者の方と文通したという依頼を受けました。彼は三十五才、責め並に緊縛に興味があり日本文の読み書き並に会話が出来ます。若し御希望の方がありませんたら編集部宛通信を下されば仲介の労をとります。

○東京都大田区の春川さと子さんからM男の方々に送呈したいといって十数個の贈物を届けておられますので御希望の方は送料同封の上、編集部宛お申込み下さい。先着順にお送り致します。

…… 私の夢 絵 と 文 ……

「やったぜ、ベイビィ」

東京
赤ちゃん



「ふふん、くやしかったら揺すり落としてみなよ」
私の肩にまたがって嘲笑するみどりの声も、どこか遠くから聞こえてくるようだった。二人掛りで滅茶苦茶に叩きのめされ、蹴とばされて、私の意識はすでに朦朧としていた。だから揺り落とそうなんていう大それた力も意欲も湧いてくるはずがない。ただ汗と涙にまみれて私は明日からもうこの仕事を辞めようかななどと、ぼんや

り考えていた。
その時、ガチャン！ という激しい音に私はハッとして眼を見開いた。見ると玲子の右手に、割り碎かれたビールビンが握られていて、ではないか。ぼんやりとしていた間に、玲子が飲み干して空にしたものを、今、何かに叩きつけて割ったらしい。私は、再び恐ろしい事が自分の身に襲いかかろうとしていることを本能的に悟り、思わず全身を震わせた。

お前はいったい何なのだ。血をみていっそう美しく、男の絶叫を聞いていっそう妖しい魅力が溢れるお前は！
夕刊に、チンピラ同志のケンカがあり、割ったビールビンで相手を刺し殺したという男のことが出ていた。玲子もきつとそれを出したに違いない。それじゃあ、私を殺そうというのか!!……ああ鬼め……。いや、丁度いい。やるならひと思いにやってくれ！ も

ああ、何で自分ばかりがこんな目に……。毎晩、仕事が終わった後でこんな屈辱的な仕打を受けながら、抵抗ひとつできずに言いなりになっている自分が、本当に情けなかった。これじゃ虫ケラ同然じゃないか。いっそのこと死んでしまった方が……。
「透明な涙が、真赤に染まるよ、きつと」私の目の前に立ちのはだかった美しい玲子の瞳が、ギラギラと輝いている。お前の気持なんか見透しだよ、とでも言うように、その切れ長の眼が脅かすように私を見据える。

チクショウ、人でなし！

うたぐさんだ。本当にもうこんな目にあうのはいやだ！ 私は。
「大丈夫。殺しゃあしないんだから」
そんな私の気持を見抜いてか、みどりが笑いながら言い、私の肩の上で体を揺すって体勢を立て直す、両脚で私の首根ツ子をがちり挟んであぐらをかいた。私の全身は完全にみどりの征圧下におかれた。
「玲子、時間が無いから、ひと思いにやっちゃいなよ」
「OK！」
玲子は逞しい両脚をグイと踏みしめて身構える。
「ああ……」
私は苦しさで恐ろしさで呻き声をあげた。
「この野郎、ガスの漏れるような声を出しやがって」
そう言いながら玲子の右手が振り上げられた。肩に垂れた長い髪が大きく翻り、天井の裸電球に反射して、ビールビンの先端がピカッと光ったかと思うと……。私の目の前が一瞬真赤になった。次の瞬間、全身を貫く激痛に私は、自分の声とも知れない絶叫を上げ、身をよじらせた。みどりの両脚に力が入って、更に私を締めつけ、

私を動かさせまいとする。

「やったぜ、ベイビー！」

私の顔面は見事に中央を切り裂かれていたのだった。

× × ×

「きょうはこのぐらいでカンベン

してあげるわ……。わかってるわね、明日、仕事を休んだりしたら承知しないから」

「休みやしないよな。生活かかってんだもん、お前」

生活がかかってる……。その一言



ドレイ犬の一夜

犬 畜 生

その夜、私は飼い主である女ご主人様のご機嫌を損じてしまいました。べつに失敗をした覚えはありませんが、女ご主人様には、何かがお気に入らなかつたものと思われまふ。

玄関のタタキの上で、首輪のクサリで吊り上げられた形での一時

間あまり、爪先立ちの足指からしみこんでくるふるえ上るようなコンクリートの冷たさ。

全身の皮膚を包みこんで、ぞくぞくと体温を奪ってゆく冷氣。少しでも足の力を抜くと、たちまち首輪が締め、息苦しさが増してきます。それだけでも充分に苦しいのですが、女ご主人様は、更に鼻梁に食いこむように鼻輪をかけ、両手首に手錠を、そして両足首にもガッチリと足錠を噛みこ

ませ、五体の至るところに、マニキュアを施した長い鋭い爪先によるウップン晴しをなさり、呻く私をそのままにして、浴室へ行かれましたが、犬としての私は、それでもその神聖な義務を果たすことに喜びを覚えておりました。

やがて入浴をおえられた女ご主



が、私にクギを刺す効果を持っていた。そうなのだ。私のこの肩には家族の生活がのしかかっているのだ。いくら毎日虐められるからといって、こんなことで自殺するなんて、一家を背負うこの身に、

人様は、犬の吊り責めにも飽きたらしく、首吊りは許していただけましたが、手錠を外されるのにホッとしていた私の両手は、そのまますぐに後に廻され、後手錠

とうてい出来るわけがない。ああ、また明日も……。

数十分後、私は全身をひきずるようにして食品工場の女子寮から這い出そうとしていた。

に縛られてしまい、別室に引かれていって正座することを命じられました。

お行儀よく坐った私の膝の前に女ご主人様のスナリした足先がお皿を蹴り押すようにして寄せてくださいます。ドレイ犬の私に、ミルクを下さるのです。私は大変嬉しく、そのお皿に注がれるミルクにのどを鳴らしました。

しばらくお預けをしたあとで、女ご主人様は首輪の鎖をグイグイと二度引っぱって、おあがりの合図をしてくださいます。

もちろん、後手錠のままですから手を使うことは出来ません。ようやく舌の先がミルクに届く程度に首輪の鎖をゆるめて下さるごとに、犬は、思いきり長く舌を伸してペチャペチャと吸い上げるのですが、そのおいしいミルクの味に女ご主人様のご慈悲を感じ、心の底から有難いと思い、幸せに酔う私なのです。

短 信 往 来

英 堅 守 両氏へ
苦木桃太郎

夢 野 虹 二

英さん、苦木さん。私もあなたがた同様、少女趣味にとりつかれて、永年、満たされぬ想いに悶々としてまいりました。しかし、お二人の「勇気ある告白」に接し、私の暗い心に光がさしかけた感じが致します。

折りも折り、思いもかけぬジョッキングな写真集に接しました。週刊誌でもさわがれたノーベル書房刊「12才の神話」がそれで、モデルは中学一年の可愛らしい少女で、青い果実のすべてをさらけ出して、自由奔放なポーズの数々を見せてくれました。

これまで、成人のヌードと共に幼児のハダカはよく見受けましたが、女の過渡期ともいうべき中学生の裸身は、微妙な年頃だけに、写真に撮ったり、公開されることなどは想像もされなかったものです。それだけに、お二人もきっとそうであつただろうと思いますが

私の苦しみも深かった訳です。この度、そのタブーが遂に破られたということは、やはり、昭和元禄の性解放の一つの現象といえるのでしょうか。いずれにしても画期的なことといえるには相違ないでしょう。

私は、新聞広告を見て、一瞬、激しい興奮に襲われると共に、なにか、私の心の中で暖めてきた珠玉の財宝が、世間一般の下卑た興味の対象にされたような、一抹の寂しさを禁じ得ませんでした。事実、週刊誌などの書きぶりはかなり煽情的で、モデルになつてくれた清らかな少女に対して、私はいたましさを感じたのでした。

書店へ日参してやっと手に入れた写真集。モデルの梅原多絵ちゃん(12才)はホッソリした体。子供らしく、おなががプックリとふくらみ、胸はまだ平ら。近頃の12才にしてはやや成長が遅いほうのようにも思います。

しかし公開のものだけに、普通のヌード同様に修正が施されています。きつと編者としては、ありのままの姿を伝えたかったのだし、ようが……。その善悪はともかくとして、モデルが折角のけがれない天使のような少女だけに、修正



イメージ画 並 田 新 二
『いったい、どうすりゃあ、それを治す気になるのッ』

はかえって不自然な感じがしてなりません。

しかし、童女そのもののあどけなさを見せているかと思うと、ふと「女」を感じさせるポーズがあり、かすかに張りをみせた腰の辺りの曲線が、微妙な雰囲気を漂わせているように思えます。また、うれしいことは、水牛? の角をかかえたポーズの扉の写真は、そのまま奇巧のカットにでも使えそうな妖しいムードを発散させてくれていると感じられることです。

奇巧も、今後、こうした分野に僅かでもページを割いて貰えれば……と願わずにはいられません。まだまだ隠れた同好の士がいられるはずだと思いますから……。ところで苦木さん、コレクションを是非交換して下さい。私の妹は多絵ちゃんより二つ年下ですが、多絵ちゃんによく似た姿体で、い写真が何枚かありますから。苦木さん以外の方でも、同好の士は是非お願い致します。

「少女ヌード集」について

苦木桃太郎

英堅守氏、他同好の諸子に同意を求めたく矢も楯もたまず敢えて筆を採る。

ノーベル書房刊「ニンフェット12才の神話」の美しさに魅せられた者として、少女美を愛する諸兄に、大方はご存知を承知で書いてみたと思う。モデル梅原多絵は12才の美少女。12才のヌードには、男でも女でもない妖精の美しさの中に、やがて目の前に開かれる女

のさがの神秘的な美が、恐ろしさと期待のうちに息づく思いがする。山や海や草原に謳歌する12才の輝くばかりの裸身に、妙なる牧歌を感じなければ、その方が変であるといえないだろうか。

小さく盛りあがり始めた胸の隆起。既に丸味を帯びたお腹や腰。さすが中一、臀部だけは、もう完全な女の美しさ。未完成の女体の美しさを秘めた情熱の双丘は未来



イメージ画

『令嬢檻禁』 志羽利也

への耽美を秘めて悶えるように私には思えた。少女の丸味を帯びた太腿から脛にかけての二頁にわたるフォートのかけりに、私は少女の甘い甘い匂いを嗅いだ。次には乳房、臍、太腿から膝小僧にかけての正面フォートの中に、私は世界中で一番美しいものをみた気がした。太腿を密着させて正座状の姿態をとる少女のお腹と太い腿の描く柔らかな甘美さの中に、私は妖精の中に生きる女を感じた。最後の頁を飾る海辺の彼女は、一糸も纏わぬ裸身を膝小僧まで海水につけて、はにかむように恥じらうが如く笑っていた。上段の三葉のフォートが、彼女の下腹部の丸い丘を、見事に耽美の極致をもってうつし出していると思う。私は彼女が、おそらく、剃髪されたに違いないと想像してみた。

私はこの系統の耽美写真が、どしどし発表されることを祈ると共に、奇クが世俗に遅れず、どんどん、新しいジャンルを求めて、女の美しさを見出してくれることを望んでいる。私の願望する夢は、「お小水をとばす妖精の羞恥美」である。

多絵嬢は実に美しい少女であった。昭和元禄の風潮が遂に、美を

求めに求めて、来るべきところへたどりついたと云う外はない。現代のような憂鬱きわまる社会規範とかいう抑圧がまだ生まれなかった頃、女は男にとって単なる所有物にすぎなかった。多絵嬢ぐらいに育った少女達は親の指図によって、嫁や側室に貰われたり、恵まれない環境の少女は人買いに買われたりしたという。美少女達は愛玩用としての女に育てあげられたと聞いている。当時の幸福な男達に較べ、現代の男達が女上位の、けたたましい女性共に愛想をつかして、せめて、美少女のフォートの内部にフラストレーションを結びつけよう試みたとしても不思議ではないと思う。

美少女達よ、限りある美しさを朽ち果てさせないで舞え、踊れ。美しいものを、隠すことこそ悪徳である。美しかった多絵嬢にまげずに、もっと大胆に美を開陳するのが世の美少女の務めであると思う。奇クも世俗にまげずに、美しい少女の羞恥の中に耽美を求めるべきだ。岩の上にしゃがむ美少女の肢体。足元の岩がしつとりと何故か濡れている。美しい、美しい極限の美が、そこに存在するのだと思うがどうであろうか。

映画の 浣腸シーン 評

羽出

たいぶ、以前のことになります
が、日活映画『東京女地図』のス
クリーンに「流腸シーン」の登場
があったことは、流腸マニアなら
皆さんご存じのことでしょう。

その方々の中で「こうすれば、
もっとよかったのに……」と思わ
れた人がたくさんあると思い、そ

ういう意味での批評？　が掲載されるだろうと心待ちにしていたのですが、ただその場面があったという事だけで、どうも済んでしまいうような気配です。あの映画を見た時に、待望のシーン実現に胸おどらせ、そして物足りなさを感じて、次の回の演出場面に期待したい



『ガラスの挑戦』 豪城二

と念じた私としては、遅ればせながら、注文をつけたく、いな、実現するしないにかかわらず、一言云って置かねば納まらぬ気持ちになつてきました。

まず、問題のシーンを回想する
必要があります。

、台の上にうつ伏せになった女に強制浣腸が施される。さらに衆人環視のうちに、ガラス製の便器に腰をかけさせられ、極限まで耐えさせられる。あるいは……と思つたところでチョン。

考えてみれば、たったこれだけのシーンに血を躍らせるマニアも哀れ？　なものですが、いくら期待をかけても、まさか映画で実際に排便までも望めるとは思っていないにしろ、せめてこのくらいはと希むところを書いてみます。

最初は浣腸の施される場面。
浣腸器内に入っている液に着色
されていたのは賢明だったとして
も、後に男が二、三人立っていた
にもかかわらず、なぜ、誰も女を
押えつかなかったのでしょうか？
私は「強制浣腸」という手前、不
思議でならなかった。私としては
ガンジガラメに縛り上げたうえで
浣腸を……ということにしてみら
いたかったくらいですが、そこま

では出来ないにしろ、羞恥責めとしてはあまりにも芸がなさすぎたといえましょう。

このことは次のシーンでもいえると思います。

次のシーンとは、便意をこらえる場面のことで、ガラスの便器に腰かけさせられるところは、数人の男がいたからいいとしても、腰かけさせると、そのまま何もせずスーッと引き揚げてしまうのはあつけなく、まことに芸のないことでした。私は、テッキリ女を後手に縛るとか、足を固定させるものだと思っていたから、よけいにあつけなく見えたのかも知れませんが、その後の女の耐える表情がよかったですに、尚更惜しまれてなりません。

だいたい、多数の人の見ている前で浣腸されて排便を強要されること自体が、女性にとっては、最大の羞恥だと私は思っているが、それが諸条件の設定にもかかわらず、被害者たる女性がじっとして甘受しているのはどういうことだろう？　と思わざるを得ません。よほど「場慣れ」した女性でも、もう少しは拒否的態度をとるのである……。

私は映画終了後にそう考えて不



私の夫婦プレイ

素肌にコート

東京・K 生

コートを着て外出するようになると、私たちにとっては、露出責めの絶好の季節です。極端な事を申せば、素裸にコートをまとっただけでも外出出来るからです。

女性の場合はこれは別におかしい事ではありません。スカートを穿いていてもコートの下から出ているのは二本の足だけですし、前もって素裸の時の寸法に合せたコートを用意しておけば、それこそ体にぴったりで、スマートに見えるのですから、又とないチャンスです。

私は毎年この季節になると土曜日の午後は、妻と二人で外出します。勿論妻は出来るだけコート以外は纏わず、せいぜいナイロン靴下を留めるためのガーターと、たまにはビキニ褌か水泳褌をするくらいで、ブラジャーはスタイルの

点から云って、大抵致しますが、これは自作の特製の品物で、硬目の布でカップを作り、左右を出来るだけ、寄せ合わせるようにしたもので、背中のホックは充分締付けることが出来るように、三カ所程、寸法を変えて取付けてあります。

生ゴムブラジャーも、NP社のものを購入し使ってみました。汗をかくので、街中でかゆくなつて、いやだと申します。これはもするときは使いません。これはもっぱら家でプレイをする時に使っています。

コートは薄いもの一枚では、電車の中などで触れた時、下に何も着ていないのが判ってしまうと困るので、厚地の物にしてしましますが、スリーシーズンコートの様に、中に別の厚地の布を、ホックで取付けられるようにしたもの。薄地のものを着せることもありま

す。

保温の点からは、毛皮を中につけると最高で、又、毛皮を素肌に纏う感覚が、妻は大好きなので、安物ですが、背中の上の方とヒップまわりにホックで取付けられるようにしています。

全部を毛皮にするのももちろん最高ですが、こうすると、安物でも四、五万円ぐらいかかりそうなので、今のところ手が出ません。

妻は一人では、このスタイルでは外出出来ません。私が一緒に、ついて行かないと不安で、ひざがガタガタして、どうしても歩けないそうです。

出掛ける所は、銀座、赤坂、六本木とか原宿のあたりです。赤坂の夜は、ものすごいミニスカートの多いのですが、それよりも妻はブラジャーと三角褌にガーターをして、ナイロンストッキング（大低黒とか銀色ですが）だけに、特製コートを纏って歩く方が、スリルがあつていいそうです。

東京のデパートでは、女性用のナイロンのビキニパンティや、太もものあたりまである皮のブーツや、皮のストラップス等、S・M的なものが、堂々と並べられて売っています。この点地方の方は入

手するのに不便だと思います。

夜の赤坂あたりでは、ストッキングの様にぴったりした皮ブーツの、ひざより上まで来るのを歩いて歩いている若い女性や、皮のストラップス（ベルトの位置はおへその下）を穿いたり、ひざ上30センチの皮のミニスカートや、はち切れそうなGパンのお尻等がいっぱいで、こんなのをみています。奇くあたりでさかんにS・M的な特徴として取上げる服装など「別にどうってことはない」と感じる程です。ですから、皮のストラップスなど普段穿いて歩いていても何んでもないのです。

やはりそんな一般的になったものより、一歩進んだ？皮ビキニや褌褌ぐらいしなくては、といった感じがします。

でも今年の夏は、一流デパートで皮の水着（ワンピース型とビキニ）が売られていましたから、これらもう一般的になってしまったのかも知れません。

男のブリーフにしたところで、ビキニ型（腰の所の中が5センチぐらい）のナイロンやメリヤス製が売られていますし、この分では来年は、ビキニ型型のブリーフもデパートの店頭姿を現わすかも

童貞散華の思い出

青

井松

造

その時、私は困った。小さな洋服店をやっていたオヤジに、自転車で一時間程もかかる得意先へ集金にやらされたのだが、その若

奥さんが「主人の帰るまで上って待ってて」というのであった。その若奥さんが、当時十七才の私にはまぶしいほどキレイな人だったから、多少、

色気づいていた私は、ドキドキで落着かないことこのうえなかったが、手をとりられて上り応接室で小さくなっていた。

今思うと、この奥さん、若いのになかなかの好き者だったらしくて、私を引きとめたのも、狙いがあったからと肯けるが、当時の私にはわかる筈もなかった。お茶よ、お菓子よとすすめてくれる間は対座していたが、いつの間にかソファにならんでいて、何か訊い

ては、「ハァ」とか「そうです」とかしこ答えない私の肩を、叩いたり揺すったりして一人高笑いしていたが、いきなりけしからんことを仕かけてきた。

私も、自分の部屋での孤独のけしからんことは既に経験はあったが、その時には兆候が現れていただけに大慌てで払いのけようとした。だが、その拍子に触れた柔らかな手や腕に、余計に兆候は激しさを増した。

奥さんはグイグイと私を抱き締めていたが、離れた時には、私の胸に腕もろとも綿ロープがかかっていた。驚く間もなく床に押し落とされて、柔軟な重さを掛けられ押しつけられて横向いた顔に柔らかな頬や唇を感じた時、全身の反発力が失せ、「縛らせてネ」という囁きに、両手首を背中にとられるままになっていた。

今、私はもっぱら縛る側にいるのだが、あの時の綿ロープの味は印象深い。恐らく一生忘れないだろうと思う。あの若奥さんの柔肌と共に……

その奥さんとは、以後二度ほど逢ったが、二人きりにはなれぬまま日が経った。先日、一昨年死んだと聞いた。

知れませんか。

話が半分、主題を離れてしまいました。ですが、デパートに並べられているような品物など身につけるぐらゐのことは、大して以前のように秘密的？な感じがしなくなりました。

禪なども昔は、水泳のときはみな白や赤、黒などの六尺を締めたのに、今では一部の人たちが、禪愛好者ですとか、風呂屋にも締めて行くとか云っておられるのは、世の流れと云いましょうか。世間一般的に、流行していかないことをするところに秘密的な、特殊な感じがして、それが一種の露出的な感じを与え、愛好者云々と云うことになるのではないのでしょうか。

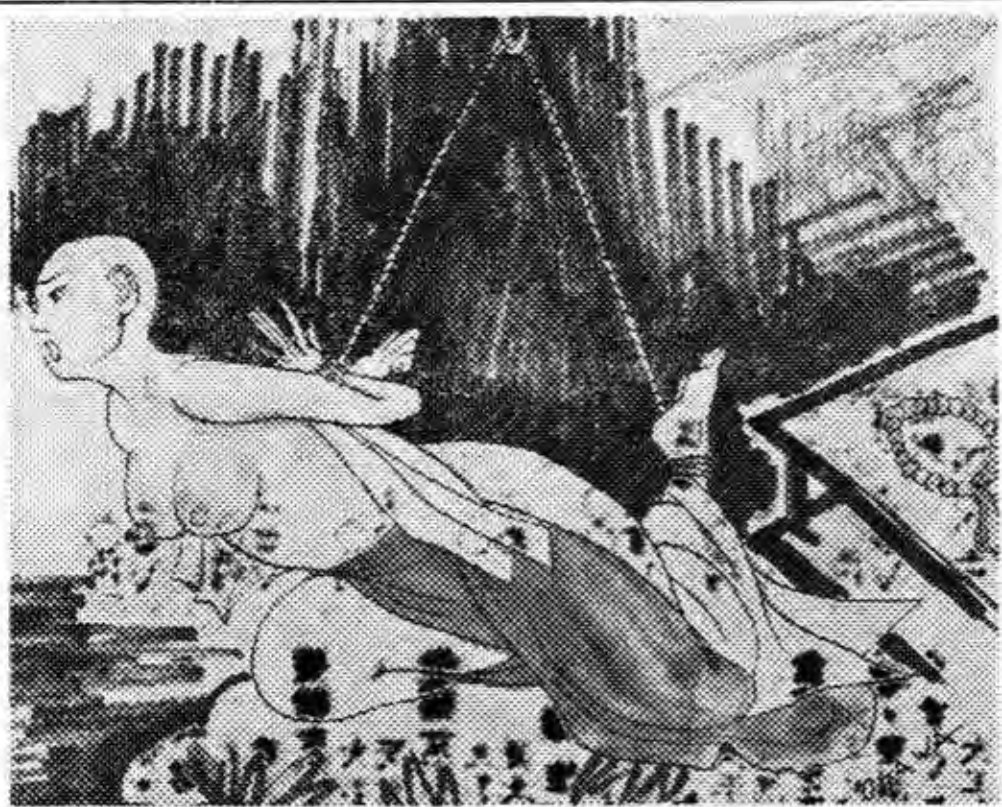
妻が今現在、おそらく誰もしてない素裸にコートだけを纏って外出すること、これが流行してしまえば、きっと興味を失ってしまい、私たちは、こんなことはしなくなるでしょう。

でもある程度一般的になって、大ぴらに出来るとううことは楽しいことですね。

世の中の流行に追いつかれないように、これからますます工夫して新しいものを生み出すようにしたいと思っています。

『仏賞か？』

小川 茂正



〔秘蔵版特選 S M 資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひ▽

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせ▽

女賊笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆ▽

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめ▽

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よす▽

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よも▽

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よき▽

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさ▽

女囚拷問 木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もと▽

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへ▽

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もに▽

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もち▽

美人女囚笞打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほ▽

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬ▽

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もり▽

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もは▽

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なの▽

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむ▽

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあ▽

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きす▽

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせ▽

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそ▽

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きて▽

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きと▽

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きな▽

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあ▽

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めく▽

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆ▽

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めや▽

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえ▽

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひ▽

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あは▽

素足を縛られる快味

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふ▽

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこ▽

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るね▽

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえ▽

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそ▽

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はね▽

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はた▽

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てら▽

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いね▽

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつ▽

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこ▽

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみ▽

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろ▽

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほか▽

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほき▽

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13種) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇〇円

十組十枚 一〇〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 遅ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剝く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剝がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの裸女(左近麻里子)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

長野 良子 略号(てい) 四〇〇円

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

長野 良子 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

果本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円

乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色縛の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

長野 良子 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 四〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原・鈴木 略号(はた) 二〇〇円

碧玉裸身緊縛

刑部 典子 略号(のん) 四〇〇円

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

東浦ひかる 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(かみ) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号(かく) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(かな) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号(かむ) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(れち) 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(きか) 四〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(いるり) 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(かふ) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号(ほの) 四〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(るい) 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(るは) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 略号(ほは) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(ほい) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号(へき) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(へか) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(かろ) 四〇〇円
山原 清子 略号(かろ)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(かへ) 一三〇〇円
山原 清子 略号(かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(かに) 一二〇〇円
山原 清子 略号(かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号(けか) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号(けひ) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(けひ)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号(かも) 一五〇〇円
山原・東浦 略号(かも)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号(けま) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けま)

浣腸後カパー装着

大手札五枚一組 略号(けさ) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号(のけ) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧 空気浣腸

大手札三枚一組 略号(むい) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号(むは) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号(むろ) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号(ちぬ) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(ちり) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号(ちら) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号(かね) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号(かて) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かて)

シリントナーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(かた) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号(かち) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(かの) 七〇〇円
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(うも) 五〇〇円
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(うわ) 五〇〇円
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号(ぬる) 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号(ぬか) 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

捜入された嘴管

大手札四枚一組 略号(るて) 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号(るち) 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号(ると) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)



神戸の磯部美加様、お元気ですか。私は妻のある二十八才のS的男性です。貴女の文を読んでいてと今日でも飛んでいって御会いして二人だけの秘密プレイを楽しみたいと思います。編集長の御許可の上、ぜひ文通出来れば幸いに存じます。車もありますので、どこへでも、いつでも御会いに行けます。勿論秘密は固く守ります。編集部の方、よろしくとり計って下さい。

(愛知県一宮市・伊藤豊)

私は奇ク十年來のファンです。投稿は中々勇気がなく、奇ク通信をたのしみにしています。分譲フォトはヨダレの出るものばかり山程あり全部欲しい位です。少しずつたのしみにコレクションしています。カメラハントは素晴らしい。あれで写真がもっと鮮明であつたら、申分ありません。奇クを読めば、全身がカッと熱くなります。一日の勤めで疲れて帰ってきて、体力的に弱っていても一ぺんに勇気が出ます。とても元気に、あの方がしつかりするのが、不思議です。ときにはグロテスクと自分で自分を嫌悪するが、やはりやめられない。カメラハント集を作成して下さい。現在、自分でそれらを集めて作成していますが、もったいないです。緊縛フォトは素晴らしい。佐々木真弓、左近麻里子、長井はつ子等、とても素敵です。やはり、素人の娘さんや、夫人のものが身近かで好きです。余りどきどきしたものはなんだか造り物のようで好きになれません。好きなフォトは大切に大切に保存して、独りなぐさめにしています。カメラハントの出来る辻村先生やその他の方々は、全く幸せだ

と思います。糖尿病があるため第一線を越えないということですが、さぞや越えたいでしょう男ならば。私ならば必ず決行するでしょう。私達読者にハントの見学を許してくれれば、どんなに最高だろう。有料に見学料をモデルさんに差し上げて、私達にも喜びを与えては如何ですか。奇クの写真はハントの写真だけで、淋しいよ。ナマで見た。第一に読むのはカメラハント、奇ク通信、映画の批評等です。モデルの縛りの案内欄もたのしいものです。

(愛知・根本陽一)

めっきり寒くなってきました。モデル志願のお便りを出しましたところ、早速返事をいただき有難うございました。私も若くて容姿容貌に恵まれておりましたら、すぐにでもモデルになりたいと思います。お手紙に依りますと、公開されないプレイも実施されておられます。出来たら私も参加させていただきたく存じます。又、私のようなものでよろしければ身体を提供させて下さい。SMについて強い関心を持っています。どのよう

身体を取扱って下さってもかまいません。只、前にも申しましたように容姿に自信がありませんので写真を公開されることだけはお許し下さい。公開されないのは、むしろ私の望みです。ご参考までに年令は三十五才、独身、身長一五〇、バスト、ウエスト、ヒップいずれも一〇〇を越え、体重は七〇キロの肥満体の持主です。万一、私のような者でも、お相手下さる読者のお方なりグループがございましたら、御紹介下さいますようお願い致します。傾向はMでございすが体験も実態も知りません。只、活字で拝見した範囲の中で、胸をもやしております。例えば、六月号の「或る女優の話」の文中の糸田様が好まれておられる、肉体的苦痛より心理的恥辱を感じるような剃毛、責めにひかれますがそれはあくまでも私の理想でありまして、実際は浣腸でも逆さ吊りでも、おこがましい言い方ですが責められるお方の自由でございします。

(福岡県直方市・田口利子)

藤原明子様。お呼びかけ下さいましてありがとうございます。貴

女の住んでおられる大館とは、汽車で一時間ほどの距離。今すぐにも、とんで行きたいような心で一杯です。貴女が希望しておられるように太ってはおりませんが、一応、私のサイズを書かせていただきます。身長一七〇センチ、体重六七キロです。ご想像下さい。おつき合いたいとのことですが、ご連絡下されば喜んで参ります。

(弘前市・牧田静夫)

十二月号より始まった「SMカメラハント回顧」は、私のように奇クを読みはじめて日の浅い者には、奇クに以前どのような女性が登場したのか、また、これから分譲写真を買求める人にも、どんなタイプの人の写真か分かるなどいろいろ参考になり、大変に興味あるものだと思います。これからこのような特集？が増え興味

御送金についてお願い

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願ひ致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さる封書の場合には切手代用で結構ですが、なるべく小額切手に願ひます。

のあるものになることを心から祈ります。これに似たようなものですが、カメラハントに登場せずに分譲写真に登場している女性を毎月二、三人ぐらいつつ登場させてほしいと思います。以前はグラビア写真があり、分譲写真があり、買うにも色々参考になったと思いますが、グラビアが廃止になってからの読者には、参考になる資料がカメラハントだけで、ほかにありません。SMに興味がある人といっても、いろいろ好みのタイプがあり、目録だけでは買求めるにくいと思います。いろいろなタイプの女性の代表的ポーズを二三枚ずつ掲載してもらえると、だいたいの傾向がわかり、大変に参考になると思いますが、いかがでしょうか。

(埼玉・鈴木太一郎)

サロンに私の手紙採用感謝す。英堅守氏喜べ、共に。ニンフエト12才の神話。来るべき大人への成熟を前に神秘的な怖れと妖しい光を宿した……少女自身が出ている写真を目にするとき、私達は酔いしれる。少女ヌード写真集、美を求めて万才だ。奇クもやっただ。ミキの洋式便器に跨つての……最高だ。ミキの少女ばい顔が好きだ。

小柄なムチムチした体も素適だ。サロンの浅田さんのペット、N嬢も全く素敵である。上半身、芋虫縛りにして、便器を跨がせたのを発表して下さい。中村純さん、貴方は美しい。一つ、その美しさを生かして女装オトイレポーズを載せて下さい。邪魔物を縛り上げて臀部の方に引き上げておけば、中心露出の女装責め可能と思えるほどに貴方は美しい。プレイを一緒にやりましょうか？

(神戸市・苦木桃太郎)

△飼育の愉しみ▽小池美喜嬢分譲写真

本誌九月号のSMカメラハント紹介された純情可憐な小池美喜嬢での緊縛姿態を好事家に限りごらんにいれます。女優とかヌードダンサーにない素人じみた初々しさを彼女の中から見つけて下さい。

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 略号八れろV
小池美喜 四〇〇円

羞らいた含んだ幼い膨らみに情容赦なく縄目が喰い込んで素肌がわなわなとふるえている。

柔肌の高手小手縛

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池美喜 四〇〇円

御名前が出ておりませんでしたので、どうお呼びかけしてよいかわからないのですけど、貴女は新婚一年目で夫婦交換という凄惨な経験をなさったとのこと。実は私も現在まだ二十一才の若妻なのですが、とてもひどい体験をしてしまったから、お恥かしいことに、あの苦しみ忘れられないで悩んでいます。私の場合は夫婦交換

生れて初めて縛られる高手小手に後手首を高々と掲げながら、むちむちとした全裸の肌を染めた。

後手首を縛られて

大手札三枚一組 略号八れろV
小池美喜 四〇〇円

瑞々しい全裸の肌を惜しげもなく晒らして柔軟な後手首を背後で背負った少女のあどけなき表情。

飼育された美少女

大手札一組 略号八れとV
小池美喜 四〇〇円

自分の裸身を縛られるという好奇心がいつとはない興味に変化してきた美喜嬢の縛られ姿態。

ではなくて、田舎で四人の男に責められたのです。私は、それからというもの、女の業火に悩んでおります。どうか御夫婦で私を責めて静子夫人のような体に調教して下さい。(大阪市・瀬場良子)

○
ゴムマニヤの皆様、すっかり寒くなりましたが、お変わりございましたか。先月号で報告しましたニューポート社の件ですが、十一月中に再び上京の機会を得、早速お店に立ちよりました。このたびは御主人? か誰か男性の方が店番をしておられました。幸い来客もなく、色々この種、商店経営の難かしさや裏話をお聞きしたりして大変たのしく一刻を過ごさせていただきました。そして真面目な経営ぶりがうかがえ、ひやかしや興味本意の来客は困ったものだと同情したりしたものです。十一月二日に参上した折、購入した総ゴムのズロース型メンスバンドは勿論、当てて参りました。大変な気に入りで片時もはなせません。行きは飛行機でしたので、つまりませんでしたが、帰りは朝風の寝台で、また例によって総ゴムのオムツカバーを当てようと、誰もいないと思ひ安心してカーテンを引か

ずんやうてましたら、中年の婦人に見られてしまい顔から火の出るような思いをしました。どこかお悪いのですかと聞かれ、仕方なくハイと返事をしましたら、オムツカバー持参で旅行とは、大変ですね、と笑いをこらえて同情されました。全く冷汗ものでした。二度目の訪問になったニューポート社で、今度は前開きのピンクの総ゴムオムツカバーに、内側をメンスバンド用の特別加工をしていただくよう、オーダーいたしました。でき上るのが待ち遠しく、新コレクションとして毎日、愛用するつもりです。

(山口県徳山市・安田隆夫)

○
緒方君子さん。まだ二十才になったばかりの貴女が求めていらっしゃる悦虐の世界への夢を私は理解できる気が致します。私は貴女の父親に近い年令の男性故に、落ち着いて貴女を夢の世界へ案内できると思ひます。決して、貴女の純潔を犯さずに対処し、羞恥愛情責めの素晴らしさを教えてあげましょう。自分の手によるイチジク注入なんて被虐のヒの字にも、ほど遠いことがわかんと思ひます。最後の白い布のゴムに私の指が、

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フオート

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 髪吊りで強烈ムチ打ち 略号 五〇〇円

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 片足首引きつけ縛り 略号 五〇〇円

安井喜久子 尻立て鞭打ち艶姿 略号 五〇〇円

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 柔肌に炸裂するムチ 略号 五〇〇円

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 エビ縛りの鞭打ち 略号 五〇〇円

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 貞操帯着用鞭打ち 略号 五〇〇円

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 痛打にもかく美女体 略号 五〇〇円

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 あぐら縛りの羞恥責 略号 五〇〇円

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 片脚挙げて晒す裸身 略号 五〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 膝頭縛り開股竹棒責め 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 竹棒開股足首縛り 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 股間縛りの裸身表情 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 菱縄縛り猿ぐつわの表情 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 乱痴戯騒ぎの結末 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 菱縄縛りで床に喘ぐ 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 浣腸責めの甘い恐怖 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 浣腸液の注入直後 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 強制浣腸の各姿態 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子 浣腸責めの美態開陳 略号 四〇〇円

中河 恵子 浣腸を待つポーズ 略号 四〇〇円

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円

かかったその瞬間、貴女は体中が燃えつきてしまうのではないかと
思うぐらい、異常な官能の業火の
中に狂いまわることでしょう。お
しめを替えて貰う赤ちゃんそのま
まの姿を晒し、前後に尿管を揺ら
れた挙句に冷たい液体がしみこむ
のです。
(明石市・工務菊真)

横浜の藤田春枝様。貴女の告白
を新年号で知りました。私も奇ク
を知って早や十年、現在二十九才
になり、本誌の移り変りと同様に
色々のことを見聞きいたしました
が、貴女のようにマゾ女と自称す
る人は少ないと思います。私もS
男と自称しておりますが、まだ本
当のマゾ女にあったことはありま
せん。さて貴女は浣腸と除毛が愛
好のようですが、私ははつきり申
し上げて、まだ浣腸の経験はあり
ません。しかし除毛と聞いて胸お
どらされたことは最近にないこと
です。貴女をがんにがために縛っ
て除毛する等とは、思っただけで
も感涙にたえません。ぜひ一度お
逢いして、お互いにS、Mの交換
をしたいものです。私は身長一
七三センチ、体重六八キロ、丸顔
でスポーツマンタイプと申してい
ただければ良いと思います。私は

大学を卒業したエリートと自負し
ておりますので、貴女のお好みに
満足するよう努力いたします。よ
ろしく。
(東京・島村一夫)

私は世田谷に住む奇クファンで
すが、この素晴らしい世界の一人と
してお便りさせていただきます。
結婚一年余りの私たちのプレイは
プレイと呼ぶには余りにも幼いか
も知れませんが、除々に深く広く
知識と感覚とをつけて行きたいと
思います。まあ好奇心だけは人一
倍、強い方だと思っています。私
たちのプレイには、これといった
特色はありませんが、妻が最近、
フンドシに引かれていたのではな
いかと思います。さすがに、室内
ではフンドシだけという私の要求
は今のところ納得しません。外
出時には下着のかわりにことさら
強くしめてやる必要があります。
現在、住んでいるのがアパートで
すから、なかなか思いついたプレ
イができませんが、先日、夜中の
二時半を過ぎた頃、妻の親指だけ
を後手に縛り、全裸の上にコート
をかけて、私は右手に革ベルト、
左手に大きなバスタオルを持って
寝静まった道を歩き廻り、妻のコ
ートをはいて、背中、腰、足など

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめ	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえ	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひ	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあ	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆも	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆに	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほ	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみ	股間縛り悶える 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆらう	全裸縛りに羞らう 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへ	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆわ	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆよ
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆぬ	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆる	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれ	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそ	全裸高小手の麗身 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よの	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よや	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よい	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふ	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえ	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬ	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあ	イルリの浣腸責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よた

めがけて鞭打ったところ、初めは声を殺していた妻も、我慢ができなくなったのか、遂に大きな声をあげましたので、いつ人がくるかと気をつかい、スリリングな満足感を味わいました。しかし、家へ帰るまで心臓の音が激しくなり、帰りつくとき、二人ともグッタリしてしまいました。

(東京・梅野秀雄)

兵庫県の坪井満子さんへ。貴女のお便り一月号で拝見いたしました。ぼくは神戸の船会社に勤務する二十三才の青年です。奇くは五年ほど前からの愛読者で、バックナンバーも七十冊ぐらい、たまりました。貴女のお便りにあった、貴女の靴とストッキングだけの裸の姿を、穴のあくほど拝見したく思います。その他、貴女の好きなプレイがありましたら、お知らせ下さい。ぼくは羞恥責めが好きで特に流腸に大変、興味を持っており、一〇〇CCの流腸器、エネマシリッジ、二リットルのイルリガートルなどのコレクションがあります。ぼくのコレクションを使つて貴女と素晴らしいプレイをしたく思います。(西宮市・河野一郎)

初めてお便りいたします。ぼくは二十二才の奇くのファンです。青森にMの女性がいけないものかなあと思ひまして、この手紙を出しました。もしおられましたらS・Mのことで話し合つて見たいと思います。ぼくは、まだ一回もプレイをしたことはありませんし、縄や紐を持ったこともありません。だからSMについてはヒヨコと同じです。けれど、ぼくは縄で縛られた女体には何とも言われない美しさを感じます。まだ見ぬM女性の方、よろしく。

(青森・長島信吾)

先日、新宿のスナック「ジェスパ」で、同店の宣伝をかねて、いささか男と女まじりのハレンチ・ムードの下半身ファッション・ショーなるものが開かれた。二十代の若い女性デザイナー椎名アニカ浜丘美美子らが、日本古来から伝統あるフンドシを実用化しようと女性用のスケスケ・フンドシ、パール製のフンドシ、イレズミ・ストッキング、皮製のフンドシ、など奇想天外な作品数十点を発表したもの。だが、下半身ものだけでなく、当節はやりのヘルメットもデザインにひと役、買ったファッ

〔緊縛女体美のシリーズ〕

大手札印画紙焼付	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
両手吊りに悶える女体	関谷富佐子	略号	八もえV
強烈なる甘いムチの洗礼	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
ムチに狂い哭く美貌の夫人	関谷富佐子	略号	八もゆV
半吊りでムチ打つ	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
逆エビの味に感泣する	関谷富佐子	略号	八もすV
ムチの一打に反りかえる	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷夫人の女体陳列	関谷富佐子	略号	八もれV
尻立ての鞭撻ポーズ	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
片足吊り挙げて喘ぐ	関谷富佐子	略号	八もてV
私をムチ打って頂戴ネ	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	関谷富佐子	略号	八もなV
大手札三枚一組	関谷富佐子	略号	四〇〇円
関谷富佐子	関谷富佐子	略号	八もねV
脂ぎった女体を縛る	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	関谷富佐子	略号	八もむV
鞭は柔肌に炸烈する	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	関谷富佐子	略号	八もうV
滑車吊りに甘い鞭	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	関谷富佐子	略号	八もきV
両手万才吊りに鞭打ち	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	関谷富佐子	略号	八もこV
狂う鞭に哀切表情の夫人	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	関谷富佐子	略号	八もみV
浴後の剃玉子縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	中河 恵子	略号	八はゆV
投げたす白い緊縛裸身	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河 恵子	中河 恵子	略号	八はよV
待望の脚挙げ緊縛姿態	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河 恵子	中河 恵子	略号	八はてV
二つ折り女体エビ責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	中河 恵子	略号	八はおV
柱の前に緊縛された全裸	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河 恵子	中河 恵子	略号	八はのV
神妙なプレイ寸前の女身	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	中河 恵子	略号	八はひV

ションもあった。今年の夏は、この種の水着がリゾートをカッポすることになるかもしれない。最近ではフンドシを再認識する時期になったようだ。去年の夏は、男性衣料メーカーが、白、赤、黄、水色、黒、と五色の六尺フンドシを、ずらりと揃えて、日本橋の三越デパートで売り出し、水着売り場で海水パンツを圧倒して嬉しかったんだ。フンドシ・マニヤの若者の皆さん。フンドシを通じて、かたい友情を結び、六尺フンドシの復活を叫ぼうじゃないか。

(東京・中田繁雄)

○ 美喜と真樹子両嬢へ。二人一緒に楽しめて良かったろう。Vネット等の軽装で辻村氏と一緒に撮った表情フォトは、物凄く美人だった。私は今まで何人かの美女の発泡酒を舐めてきた中年男だが、女性によって味が異なるから面白い。辻村氏は美喜の拭いている姿態を撮ってしまったが、美喜の体はムチムチと引きしまっていて最高だし、あの白い陶器に触れている太腿のあたりの美しさが眩しいほどだった。美喜の真下の白い陶器の中に美喜の発泡酒が泡立っているかと思うと、涎が出そうだった。

美喜さん、お願いだ。あのポーズで私が岩清水の掬い飲みする如くに両手で受けとめるから、もう一度、新鮮な発泡酒を出してくれ給え。それから真樹子も、次は西洋便器に跨れ。自分だけやらないのは、けしからん。辻村氏よ、白線が太すぎる。頑張れ。

(神戸市・野見鯛造)

○ 藤田さん。私は自分の住んでいる横浜から、あなたみたいなM女性の現われるのを長い間、待ち望んでいたのです。ぜひお会いして、思いきりプレイを楽しみたいと思います。近いことは何かと便利でもあり、意気が合えば息も合います。必ず満足のいくプレイができることを確信いたします。浣腸や除毛以外の激しいプレイをやつて、あなたをくたくたにして失神、悦楽の境に到達させて上げます。ぜひお便り下さい。

(横浜・植草春男)

○ 大島照代さん。初めてお便りを差し上げる方に一方的な要求で失礼だと思いますが、ぜひチャンスがほしいのです。照代さん。無理な要求だと思えますが、貴女とプレイをしたいのです。貴女を知っ

開股縛りに喜ぶする女

大手札四枚一組 略号△はわV
中河 恵子

全裸の女体立ち縛り
大手札三枚一組 略号△はふV
中河 恵子

黒縄は白肌を酷に彩る
大手札三枚一組 略号△はほV
中河 恵子

悦虚に身もたえる美女
大手札四枚一組 略号△はあV
中河 恵子

菱縄は白肌をくびる
大手札三枚一組 略号△はうV
中河 恵子

柱に立縛りでさらす
大手札四枚一組 略号△はさV
中河 恵子

卓上の開股羞恥責め
大手札四枚一組 略号△はめV
中河 恵子

無防備の女体を開陳
大手札四枚一組 略号△はしV
中河 恵子

遠山静子夫人の立縛り
大手札四枚一組 略号△はもV
中河 恵子

若妻の魅力を発散する
大手札三枚一組 略号△はむV
関谷富佐子

後手縛り全裸身の魅力
大手札三枚一組 略号△はめV
関谷富佐子

悶える狼番の裸身

大手札三枚一組 略号△へもV
関谷富佐子

ムチ打ちの陶酔境
大手札三枚一組 略号△へさV
関谷富佐子

両手吊りで痛める女身
大手札四枚一組 略号△へしV
大島 照代

後手縛りの竹棒責め
大手札四枚一組 略号△へすV
大島 照代

強烈開股強制縛り
大手札三枚一組 略号△へせV
大島 照代

両手吊りであえく女体
大手札四枚一組 略号△へゆV
大島 照代

竹棒強烈開股責め
大手札三枚一組 略号△へたV
大島 照代

厳しき緊縛の正坐責め
大手札四枚一組 略号△へちV
大島 照代

責めの魔手に屈伏する
大手札四枚一組 略号△へつV
大島 照代

竹棒の胸絞め責め
大手札四枚一組 略号△へてV
大島 照代

竹棒開股胸絞め縛り
大手札四枚一組 略号△へとV
大島 照代

たのは、最初に買い求めた奇クのカメラルポ「この女と」でした。多くの本を買い求めるうちに、SMプレイという言葉覚え、それからSMプレイそのものを実現したく、貴女にお便りを差し上げた次第です。一度お目にかかりたいのですが、どうか都合をつけていただけないでしょうか。後になつて失礼ですが河本光三様、照代さんとぼくとのSMプレイができるように温いご協力をおねがひいたします。ぼくは二十三才、身長一七五センチ。三人兄弟の一番下で子供っぽい顔です。

(豊中市・西川晴夫)

初めてお便り致します。奇ク愛読者の皆様、お元気ですか。小生は奇クを読みはじめて六年になります。お便りを出すのが、ついつい遅くなり、今回が初めてと相なつてしまいました。それと言うのも、横浜の藤田春枝様のお便りを拝見して、はからずも私と同趣味でしたので、小生一人で悩んでいたことが解消されたからです。奇ク愛読者の方で彼女と同じ剃毛等のプレイをお望みの方、ぜひお便り下さい。また小生はカメラに強い趣味を持ち、DPEも玄人並と

自負しています。各プレイフオトの処置にお困りの方、迷惑は掛けません。微力ながら皆様に協力申し上げます。

(静岡・中川)

一月号で同好の方の投稿が二つもあり、大変うれしく拝見いたしました。札幌の池田一夫様。小生と全く同じ趣向をお持ちのよう。本当に力強く思います。女性の巨大なおヒップの下に顔を敷かれ、息もできずギューギュー言わされたあげく嗅がされる強烈な臭気。私たちにとっては何ものにも代えがたい芳香です。残念ながら小生は、まだ直接に嗅がされたことはありません。女性のお尻の下に敷かれた座ぶとんや椅子などの移り香を嗅いだけだです。貴兄の貴重な体験があれば、おきかせ頂きたいと思ひます。つきに東京のマゾ狂男様。貴兄の女性のパンティになりたいたの通信、すばらしいですね。パンティの役目といえば、女性に穿かれ嗅がされ、汚されることにあるのです。真新しい真白なパンティが、二、三日も女性に穿かれると、どうでしょう、黄色くシミがつき、強烈な臭気を含むようになります。小生もパンティ

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号八てきV	後手裸身柱縛り 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八てかV	縄目にあえぐ裸女 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八てくV	豊麗な裸身をくびる縄目 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八てこV	後手高小手縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号八てまV	長襦袢の緊縛色模様 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てみV	緋の腰巻緊縛色模様 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てむV	猿ぐつわに呻く女 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てめV	柱宙吊り強烈縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てもV	ポリウムを縛りあげる 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てんV	縄に苦悶する裸女を狙う 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 東浦ひかる 略号八てろV	真紅の腰巻着用姿態 大手札二枚一組 略号八〇〇円 大塚 啓子 略号八うおV	縄に悶える緊縛色模様 大手札二枚一組 略号八〇〇円 東浦・大塚 略号八うてV	真紅の腰巻着用縛り 大手札四枚一組 略号一二〇〇円 大塚 啓子 略号八うこV	華麗なる緊縛裸身 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るむV	みだらな開股縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るのV	責めに疲れた諦観 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るおV	真紅の腰巻姿で緊縛 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るまV	羞らいの真正面縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るけV	若肌を喰い込む縄目 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るふV	高手小手後手縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 一宮百合子 略号八るやV	股間縛りの開股姿態 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 中河 恵子 略号八れよV	羞らいの股間縛り 大手札三枚一組 略号一〇〇〇円 中河 恵子 略号八れにV
--	--	---	--	--	--	--	---	---	---	--	---	--	--	---	---	---	--	--	--	---	--	---

になって女性の股の下にて嗅がされ、汚され、そしてやがては穿き破られる身になりたいものです。

(京都・藤川勉)

小妻容子様。誌上にて、あなた様のイメージ画に接するたびに、私の心は感激でうちふるえます。その強烈な印象は、私の心にくっきりと灼きついてはなれません。私のスクラップブックには、貴女様のイメージ画でうずまっています。これからもどしどし強烈なイメージ画を発表して下さいませ。私は小妻容子ファンの二十九才の人妻です。私どもは奇クのすばらしいアイデアを参考にし、夫婦プレイを行ない、青春をよみがえらせています。でも夫婦プレイも最近マンネリの傾向にあり、更に三人プレイ、四人プレイへと発展することができましたら、どんなにすばらしいことかと思えます。同好の方からのお便りをお待ちしています。(愛知・川村順子)

初めてお便りします。私は女性の苦しむ姿に喜びを感じる、まじめな学生です。二十才と二十三才ぐらいの女子大生、またはBGの方で、だれか私のパートナーにな

っていただけませんか。なるべく近頃の方がよいと思います。私の好きな責めは、尻打責め(力強く打って赤く腫れ上がる姿が好きです)浣腸責め(臀部から汚物の噴き出る姿を想像するだけで、たまらなくなります)また責められる女性の排泄物をその女性の体にかけたり、無理やりに食べさせたりする責めなどです。私は二年ほど前から奇ク誌を知り、一度投稿してみようと思っておりました。今度が初めての投稿です。私の探しているパートナーはM女性で関係ありませんが、どうも私にはM的傾向もあるのじゃないかと思っております。M男性は自分を男性として女性から責められたいという気持を持っているのが、私の知っている限りでは、もっとも普通だと思えます。しかし私の場合は、どうしても自分を女性として考え、責める女性を男性として考えてしまします。つまり私の考えるのは女ということなのでしょう。では、どこかから必ず素晴らしい女性の現われることを願って、拙文を終わります。(筑紫太郎)

始めてお便り致します。ぼくは

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあつた裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号天星社宛へ願います。

奇クを愛読して三年になる青年です。いつも奇クを手にするたびにいつか全裸で、あぐら縛り、股間縛り、テーパーの上に開股大の字縛りによる浣腸責めなど、恥しい責めができたらと、夢に描いています。けれど悲しいかなSMを理解してくれる人がいないため、プレイの経験はありません。一月号、横浜の藤田春枝さんの便りを読み、失礼かと思いますが、お便りします。貴女は羞恥責めをお好みとのことです。ぼくとお友達になつていただければ、失神するまで貴女を責めてあげます。良きご返事をお待ちしております。

(三重・立花恵一)

「花と蛇」は何かと文句をつけられたり、その他、種々の気苦労も多く、団先生にとつては大変にエネルギーの消耗の激しい作品だと思ひますが、やっと静子夫人がMに目覚め始め、ファンの夢の象形化が実現し始めたところなので、から、度重なる休載は恨めしくさえ思ひます。ぜひ頑張つて成長しかけた夫人を描き抜いて下さい。題名通りの「花と蛇」のシーンがもっと妖美に描き出されることを祈つております。

(兵庫県・三木逸郎)

十二月号のサロンの告白「輝・ビキニ・プレイ」小生のつたない文とともに、妻のダイヤビキニのお尻、そして縛りの写真を掲載していただき、私も夫婦は、その夜、最高にハッスルしてしまいました。妻は、全国の読者の皆様の目が、じつとお尻に集中しているような気がして、ムズムズすると言つておりました。ただ誌上発表のため股間に食い込んだ縄の写真が発表できず、その点が残念でした。これを機会に益々はりきつて、良いものを、ぜひ発表させていただきます。小生はDPEの技術が下手なので、次回は生フィルムのまま送ろうかと思つています。妻の六尺禪や小生の極小ビキニなど、いろいろと皆様に見ていただきたいものが、いっぱいあります。全部、自作の下着類です。渋谷にフンドシを作る店があるところですが週刊誌の写真を見たところでは、ゆる禪のようです。小生のは、キツチリと股間を締めつけるもので、SM的なビキニや禪です。息ができなくなるほど、きつくしります。分譲用でしたら、どの程度まで許されるでしょう

全裸後手柔肌縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こよ	△
乳房強烈膨隆責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こわ	△
海老責めに苦悶する	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こお	△
全裸の緊縛全身晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こる	△
煙草責めに喘ぐ女	大手札二枚一組	略号	三〇〇円
佐々木真弓	略号	△こぬ	△
緊縛麗姿に映えるライト	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こほ	△
臀部強調後手縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こる	△
羞恥に悶える全裸緊縛	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こに	△
ホステスの緊縛姿	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こち	△
二つ折りで責める女体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こへ	△
脈打つ全裸の臨月腹	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	略号	△こふ	△
臨月腹の革紐股間縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	略号	△こや	△
猿轡の臨月妊婦腹縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	略号	△この	△
卓上の股間縛り狂態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△こそ	△
羞恥の足挙げ責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△これ	△
悦虐責めの女体終着駅	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△こた	△
片足挙げの鞭打ち責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	略号	△こら	△
柔肌に弾ける惨酷な音	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	略号	△こな	△
あぐら縛りの女体鑑賞	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐近麻里子	略号	△こえ	△
対談用に縛られた女	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
左近麻里子	略号	△こて	△

か。本当はズバリ局所縛りのなフオトを皆様にお見せしたいのです。私ども、夫婦の露出趣味は、だんだんにエスカレートしてきます。でも、どのだれであるとい

うことを知られるのは、いやです。何人にも知られず、ただ誌上で皆様のさらし者になり、その羞恥が私ども夫婦に、たまらない悦虐的刺戟となつてプレイの興味が

増すのです。でも絶対に安心できる年配の御夫婦の方でしたら、御一緒にプレイをしても良いと思っ
ています。辻村先生のように社会的にも名の知られた方が、また辻村先生の御紹介される方でしたら、安心してプレイできるような気がいたします。読者の皆様の中にも私どもと同じような、お考えの方もおいでのことと思います。が、誌上で御意見を伺わさせて頂きませんでしょうか。この道のこと、誰に相談できるわけではなく、ある程度、進むと行きづまってしまうそうです。まだ一度も投稿されたことのない御夫婦の方、ぜひ、お考えをお聞かせ下さい。

(東京・村田良男)

○ 横浜の藤田春枝さん、浣腸好きな二十八才の会社員です。人に迷惑をかけず、二人だけの羞恥の世界を作りたいと思います。一たん浣腸プレイの世界に入りますと女性側は激情の余り、とんでもないことを要求しがちですが、プレイは飽くまでもプレイでありたいと、ぼくは願っています。SMカメラハントをなさっている辻村隆先生が、プレイの最中、あるいは最後に女性側から本能的に行方を

要求されても、それを拒否なさっているのは、一つには病気のせいもありましょうが、やはりSMの本筋を本当に理解しているためと思われまふ。春枝さんの御返事を期待しております。

(神奈川・村上信夫)

○ 拝啓、時下益々御清祥慶賀の至りです。小生は、よわい六拾を越す老体なれど、奇クを百薬の長として、未だに若き女体に心を慰め生命の充実に明け暮れる者。若き娘の尿を飲み、香ぐわしさを囁くことに興を得て既に参年有余。これ若返りの妙薬とする。小生、次々と品を変えて試飲する癖有り又直接、緊縛開脚の上、囁り飲まざれば興なく、清潔な美しい女体を求めるに多用なり。貴誌関係人にて次の方々に気持あれば、ご足労御来駕相煩度、お願い申し上げます。村田ゆう子夫人、松山真樹子嬢、左近麻里子夫人、小池美喜嬢それに当通信欄の小杉千恵嬢、岡本嬰子嬢、春川さと子嬢の温き神酒を愛飲致したく、若し御来駕無之節は御一報次第、御希望の御土産持参の上で、当方より出向候に付き、左様御承知被下度、特に申添えます。(豊中市・大隅熊吉)

○ 広島伊藤和登様、私も元気で日々を過ごしております。この度私を奴隷女に調教して下さる由、大変嬉しくお便り拝見しました。貴方の言われます様に首輪をはめられ、名札を下げ、鎖や手錠に拘束された姿態を想像するだけでも囚人の様で恥しく身のすくむ思いがします。その上、本格的な調教を甘受させられるなんて、ほんとに体験したいものです。しかし最初お知らせしましたように年令三十五才、容姿は肥満体で美の鑑賞価値のない女です。それでも飼育して下さるのでしょうか。けれど仮に飼育していただく場合、貴方を信頼して参りますものの、受身の女の弱さでしようか何となく不安です。お互いに語り合って、契約書を拝見させていただき、その上で心から信頼し得るとき、貴方のお気に召す様思存分、奴隷でも牝犬でも自由に調教を加えて下さい。

(直方市・緒方則子)

○ 神戸の磯部美加様御返事嬉しく拝見しました。小生は貴女のおっしゃるとおり直面目なSMプレイに終始、羞恥責めを主体とした純粋なプレイを行い、身体に傷をつ

けるようなものは好みません。秘密は絶対に守り、費用は全部小生が負担します。磯部様、どうか小生とお逢い下さるようお願いいたします。

(岡山・近藤次郎)

○ 奴隷志願の安沢達子さん。大それた立派なことを言っておられましたが、もし私のような冷酷な中年男が現われて緊縛され恥かしめられ責められると、たちまち音をあげてしまうのではありませんか。Mとして最も理想的な女奴隷は何といっても細っそりとした柔軟な身体をもった女性で今までの本誌のモデルでは梨花嬢が最高でしょうね。緊縛され痛々しうに悶える姿は最も美しいものです。安沢さんは、どんな身体をしておられますか、たとえ細っそりとしてなくても強烈な緊縛をうければ、たちまち五キロや六キロは瘠せてしまい、また身体も柔軟になることは受けあいです。別な見方をすれば、緊縛とは強烈な美容体操をしておるのと同じ原理で、身体中の筋肉全部を使うのですから、瘠せていくのは当たり前です。またそれだけに馴れるまでは身体中がバラバラになったようになります。ただ今までの経験で始めは痛がって

次号(四月号)は二月二十五日に発売いたします

も除々に馴れてくる女性と、全然、痛がらない女性とがありまして。後者の方がMかというところ、一がいには、そうではないらしいのです。鼻輪は奴隷が家畜と同一身分である以上、ぜひ必要なことは勿論ですが、本当の奴隷にすることができない以上は、まねごとです。すまし方法はないでしょうね。服装は、貴女は裸と言っておりました。裸が最上ではありませんが、たとえばブラジャーにしても乳房が兼用のブラジャーと調整により乳房を色々な方法で責めることができるようにすれば良いことで、リングをしめると乳房をしめつけ、ピスを廻す針が乳房をさし、スイッチを入れれば乾電池からイグニッションコイルを通じて乳房に電撃を与えようかというふうなものです。しかし実際では遊びとしての奴隷であれば、服装も裸と言わねばいけません。裸と云うわけにはゆかないでしょうね。奴隷と言うものは緊縛されたり、責められたりするだけではありませぬ。絶対、主人に服従するだけでなく奉仕しなければなりません。貴女も自分の性格に合った

男性を見つけ、幸福になれるようにして下さい。

(神戸市・村田季雄)

一月号の読者通信に出していただいた嬉しさで再びペンをとりました。「悩める妻より」の名で出していただき、皆様のお目にとまったことと思います。私たち夫婦は一月号のお便りのとおり、信頼でき、永遠におつき合ひできるご夫婦を求めています。その時のムードいかんによつては、相手の奥様とレスビアン・プレイに発展してしまふこともあります。夫が露出症で羞恥心をくすぐるようなプレイをお好みの女性を求めております。野外、映画館のトイレなどを利用するプレイの相手をしてやろうと思われ女性の方、夫が求めていきます。ご夫婦との電話プレイ、電話交際も希望致します。交換プレイや、その他、楽しいプレイの記念撮影をされ、その処置にお困りの方、夫がカメラ趣味なので、焼増しもネガ現像も自分で処理しておりますので、ご遠慮なくお申し出下さいませ。秘密厳守

にて、ご協力してさし上げます。皆様の便りをお待ちしております。(加古川市・小山真弓)

東京の留美子様。誌上での呼びかけ拝見。私の理想とする女性、いえ女王様と思いますので、奴隷としての名乗りをあげます。私は川崎に住み、東京の一流会社に勤務する二女の父親です。健全な家庭を営む身だけに、街頭に於けるプレイには応じられませんが、その他のことについては、貴女に満足以上のものを与え得ることに自信を持っております。痰つば、結構です。便器になることも厭いません。私の舌が女王様の雑巾の役目を果たし、あらゆる汚れを美しくするでしょう。後手に縛られ、女王様の尻の下で喘ぐ奴隷。「もっとしっかりなめるのよ」そんな命令がとび、そんな私の顔に、大きな音とともに一陣の風。「さあそのパンティにキスして……」そこよ、その一番汚れたところよ。御褒美に「ごちそうをあげる」と、足の指にはさまれた饅頭がつき出される。床の上に饅頭が投げられ「おあずけよ」その饅頭が女王様の足の裏でふみつけられる。女王様が口で噛み砕き、ドロドロにな

った饅頭が床の上に吐き出される。饅頭のアンは女王様の足の裏や、体の汚い部分にこすりつけられてある。そんなものを奴隷は喜々として食べる。お碗の中に、女王様のタンやツバが吐き込まれる。まだ見ぬ女王様の姿を胸に描き、女王様のそんな姿、そんなお言葉を想像しています。空想は果てしなく広がります。一度お逢いしたい。如何に忠実な奴隷であることを、ぜひお試し下さい。

(川崎市・亀井由夫)

梅川幸子様。新年の一暇を赤外線コタツにもぐり込み、貴女様のプレゼント? を繰り返し拝読しています。通信文中、特に末尾の五行に引きつけられ、はや私の心は貴女様の元へと走っています。京都と東京では地理的に遠く離れていますが、時間的には新幹線です。三時間たらず、東名、名神高速道路にて六時間と、身近に感じていきます。年二、三回、大阪支社出張するたびに素通りする京都。この町並のどこかでゴムプレイを楽しんでいる貴女様の勇姿に思いをはせ、そのやるせない空しさが残った過去の思い出に浸り、筆をはしらせています。今回、発

表した「雨の昼下り」のヒロインにしても、貴女様に憧憬の念を抱いている私が、貴女様との絆を求めるが故、京都と東京の京の字をとり京子と名づけたのであり、常に貴女様とのプレイを夢想している私の願望が実現することを欲してやまないのです。この夢が実現したときは、一世一代の迷演出？でプレイし、私流儀の恥ずかしいめを受難させてあげられると自負しています。レイ子さんとの三人でのプレイが初夢であり、正夢であることを祈りつつ筆を置くことにします。
(東京・菅原敏夫)

最近、書店でふと手にした奇くを読むうち、このような別世界を楽しんでおられる方の、あまりの多いのに感動し、いずれもほんとうにまじめに自己の主張を持ち、生活の糧としての趣味を満喫されておられるだろうと思ひ、その姿に敬意を表する次第です。実は私も以前よりS・M、流暢、縛り等には少なからず興味を抱きながらも、そう他人には話せる内容ではなく、ひとり夢の中で自から慰めることにしか満足を見いだせなかったのです。でも、これからは違います。少なくとも奇くの皆様

と共に愛読者の一員に加えさせていたいただいたのですから。しかし実際にこの目で見、経験できたら、今まで知りえなかった人生の活路を見いだせるような気がしてなりません。こんなたわいのない空想をめぐらせている私ですが、指導または交際していただける女性の方がおられたらと、思いがつのると共に、胸の高なりも、より一層、激しくなります。また趣味として自分でDPEをしております故、それが同好者のお役に立てばアマとして光栄です。お互いに誠意と誠実のもとに同好の志の極致

を深めようではありませんか。
(東京・加美山)

辻村隆氏へ。近頃、白線の乱用が目立ちすぎます。女の責めの美化を追求する意味において再考、反省願います。他誌に時たま見られるように、つぼや花瓶を当てがうことによって露出過じようを防ぎ、モデルに直接、手の平でおおわせたり、明暗を用いて、これにかくして頂きたい。羞恥責めの美しさを求め、新しい女体の美を捕えて下さい。
(三田市・辻村ファン)

本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少なものとありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送申し上げます。

昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)
昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)
昭和41年5月号	(送共三二〇円)

昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇円)
昭和42年3月号	(送共三二〇円)
昭和42年4月号	(送共三二〇円)
昭和42年5月号	(送共三二〇円)
昭和42年6月号	(送共三二〇円)
昭和42年7月号	(送共三二〇円)
昭和42年8月号	(送共三二〇円)
昭和42年9月号	(送共三二〇円)
昭和42年10月号	(送共三二〇円)
昭和42年11月号	(送共三二〇円)
昭和42年12月号	(送共三二〇円)
昭和43年1月号	(送共三二〇円)
昭和43年2月号	(送共三二〇円)
昭和43年3月号	(送共三二〇円)
昭和43年4月号	(送共三二〇円)
昭和43年5月号	(送共三二〇円)
昭和43年6月号	(送共三二〇円)
昭和43年7月号	(送共三二〇円)
昭和43年8月号	(送共三二〇円)
昭和43年9月号	(送共三二〇円)
昭和43年10月号	(送共三二〇円)
昭和43年11月号	(送共三二〇円)
昭和43年12月号	(送共三二〇円)
昭和44年1月号	(送共三二〇円)
昭和44年2月号	(送共三二〇円)
昭和44年3月号	(送共三二〇円)
昭和44年4月号	(送共三二〇円)
昭和44年5月号	(送共三二〇円)
昭和44年6月号	(送共三二〇円)
昭和44年7月号	(送共三二〇円)
昭和44年8月号	(送共三二〇円)
昭和44年9月号	(送共三二〇円)
昭和44年10月号	(送共三二〇円)
昭和44年11月号	(送共三二〇円)
昭和44年12月号	(送共三二〇円)
昭和45年1月号	(送共三二〇円)
昭和45年2月号	(送共三二〇円)
昭和45年3月号	(送共三二〇円)
昭和45年4月号	(送共三二〇円)
昭和45年5月号	(送共三二〇円)
昭和45年6月号	(送共三二〇円)
昭和45年7月号	(送共三二〇円)
昭和45年8月号	(送共三二〇円)
昭和45年9月号	(送共三二〇円)
昭和45年10月号	(送共三二〇円)
昭和45年11月号	(送共三二〇円)
昭和45年12月号	(送共三二〇円)

昭和43年7月号	(送共三七〇円)
昭和43年8月号	(送共三七〇円)
昭和43年9月号	(送共三七〇円)
昭和43年10月号	(送共三七〇円)
昭和43年11月号	(送共三七〇円)
昭和43年12月号	(送共三七〇円)
昭和44年1月号	(送共三七〇円)
昭和44年2月号	(送共三七〇円)
昭和44年3月号	(送共三七〇円)
昭和44年4月号	(送共三七〇円)
昭和44年5月号	(送共三七〇円)
昭和44年6月号	(送共三七〇円)
昭和44年7月号	(送共三七〇円)
昭和44年8月号	(送共三七〇円)
昭和44年9月号	(送共三七〇円)
昭和44年10月号	(送共三七〇円)
昭和44年11月号	(送共三七〇円)
昭和44年12月号	(送共三七〇円)
昭和45年1月号	(送共三七〇円)
昭和45年2月号	(送共三七〇円)
昭和45年3月号	(送共三七〇円)
昭和45年4月号	(送共三七〇円)
昭和45年5月号	(送共三七〇円)
昭和45年6月号	(送共三七〇円)
昭和45年7月号	(送共三七〇円)
昭和45年8月号	(送共三七〇円)
昭和45年9月号	(送共三七〇円)
昭和45年10月号	(送共三七〇円)
昭和45年11月号	(送共三七〇円)
昭和45年12月号	(送共三七〇円)

編集後記

○世の中で、マジメなことほど面白くないものはない……と、何かで読んだ覚えがありますが、いい得ているでしょう。マア、その「マジメ」の意味も、いろいろと状況によって変化ある結果を生むでしょうが、本誌として歓迎したい。「告白」「体験」記は、本来の意味でもマジメなものをお願いしたい。

○告白ものを「貴重な発言」として重視していることは、たびたび強調してきたつもりですが、「実際の状況で、そうそう変わったことがあるものか」との配慮からかどうか、折角の告白を「創作的情景」設置のために力を入れすぎて、真実味をフキ消してしまわれているようなのが案外に多いようです。

○チクロがどうの、色つき食品がどうのと喧ましい時ですが、「読ませるに足らしめるための努力」と好感につとめても、余りにも色鮮やかな甘さは、ガンの心配まではともかく、ゲップぐらいの副作用はもたらすのではないでしょう。わが田に水を引きたいのも人情でしょうが、引き過ぎは苗の溺死を呼ぶおそれもあるのではと思うのですがいかが？

○人間の勝手な都合主義から、悪夢ばかりを喰わされているらしいバクはいいツラの皮だが、艶夢ばかりをムシヤムシヤやってフン詰り、出るのはラッパとネシヨンペンだけなんてサマに……なる？　なるほど、愛好者は多いんだっけ、「流腸」「オネシヨ」のネ……でも、都合のよいノロケばかり聞いてられるかってえ人も多いのヨ、存外に……。

懸賞原稿募集

体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはとて作品は必ず誌上に取上げてます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万元返贈呈。

感想、論評、批判

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

映画、雑誌、通信

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

読者通信原稿

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の栞 ☆

に限り 予約

一月分(1冊)	三五〇円	送20円
三月分(3冊)	一〇五〇円	送共
半年分(6冊)	二一〇〇円	送共

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

三月号 (第二十四巻第三号)

昭和四十五年二月二十日 印刷
昭和四十五年三月一日 発行

編集人 杉原 虹児
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

大阪住吉郵便局私書函第四十一号
発行所 暁出版株式会社

郵便番号558
振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別取扱雑誌第二一〇号

☆ 書店の皆様方へお願い ☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、健全なる育成に努める各条例に指定されないうような充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、十八才未満の方には絶対販売下さらさないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。